幻化

梅崎春生

附やぶちゃん注

［やぶちゃん注：梅崎春生の遺作となった本作は昭和四〇（一九六五）年六月号及び八月号『新潮』に掲載されたが、春生はその間の、七月十九日午後四時五分に東大病院上田内科にて肝硬変のために急逝している（逝去については以下の底本の「別巻」年譜に拠る）。

底本（以下に記載）の文芸評論家古林尚（ふるばやしたかし）氏の「解題」によれば、雑誌『新潮』に掲載された際には、本篇の小見出しの、

「同行者」「白い花」「砂浜」にあたる前半の題名が「幻化」

「町」「火」にあたる後半の題名が「火」

であった、と記されてある。私は初出を確認していないが、この『あたる』というのは、古林氏の表現で、初出の際にはこの小見出しはなかったようにも見えるが、底本の「解題」の後に続く、山本健吉氏の「解説」を読む限りでは、この小見出し類は総て附いていたように記されてある。ともかくも、何時か初出誌を確認したいとは考えている。

底本は昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊「梅崎春生全集　第六巻」を用いた。注は春生が一行空けを行っているパート単位に直後に配し、その後は三行空隙を設けた。

因みに、本作品名は「げんか」と読む。根拠とその出典などの詳細は最初の本文注で示した。

最後に。「幻化」は私の最初の梅崎春生体験であった。そうしてそれは実は原作ではなく、ＮＨＫによってドラマ化されたものであった。放映は昭和四六（一九七一）年八月七日（土）の二二時一〇分～二三時四〇分（九十分ドラマ）で、演出・岡崎栄／制作・遠藤利男／脚本・早坂暁／撮影・野口篤太郎、出演は「久住五郎」が高橋幸治、「丹尾章次」が伊丹十三、「白い花」の章の女が渡辺美佐子、他であった。私は中学三年であったが、そのストーリーと映像の鮮烈さとに非常に強い衝撃を受け、直ちに文庫本（新潮社だったように思う。教員なってすぐに生徒にプレゼントしてしまったので今は持っていない）を買ってむさぼるように読んだのを覚えている（「ＮＨＫアーカイブス」公式サイトのここで三分半だけ見られる）。もう――四十四年も前のこと――である。

因みに、私は本電子化注と同時に、本作の世界と驚くべき円環を閉じるところの、春生の戦後新鋭作家としての実質的なデビュー作「桜島」の電子化附オリジナル注をブログ・カテ

ゴリ『梅崎春生「桜島」附やぶちゃん注』で手掛けた（二〇一六年一月六日完結）。出来ればそちらも合わせてお読み戴きたい。

本ＰＤＦ版はブログ版後、再度、全体の誤字を訂してルビ化、拗音化の漏れ及びルビの漏れを一度点検した上で、ＰＤＦ化したものであるが、それでも誤字の残っている虞れを捨てきれない。誤字と思われるものを認められた場合は、御連絡戴けると、幸いである。

●二〇一六年一月一日〇〇：〇八――電子化注始動

●二〇一六年一月九日――ブログ版完結

●二〇一六年一月二十一日――ＰＤＦ縦書β版公開

●二〇二〇年十一月二十二日――本ＰＤＦ縦書完全版公開（表記の不全を一部訂正。一部の消失したリンクは消したものもあるが、引用元を残すために、そのままにした部分もある）

藪野直史】]

やぶちゃんの電子テクスト集：小説・戯曲・評論・随筆・短歌篇へ戻る

幻化

同行者

五郎は背を伸ばして、下界を見た。やはり灰白色の雲海だけである。雲の層に厚薄があるらしく、時々それがちぎれて、納豆(なっとう)の糸を引いたような切れ目から、丘や雑木林や畠や人家などが見える。しかしすぐ雲が来て、見えなくなる。機の高度は、五百米くらいだろう。見おろした農家の大きさから推定出来る。

五郎は視線を右のエンジンに移した。

〈まだ這(は)っているな〉

と思う。

それが這っているのを見つけたのは、大分(おおいた)空港を発って、やがてであった。豆粒のような楕円形のものが、エンジンから翼の方に、すこしずつ動いていた。眺めているとパッと見えなくなり、またすこし離れたところに同じ形のものがあらわれ、じりじりと動き出す。さっきのと同じ虫(?)なのか、別のものなのか、よく判らない。幻覚なのかも知れないという懸念もあった。

病院に入る前、五郎にはしばしばその経験があった。白い壁に蟻(あり)が這っている。どう見直しても蟻が這(は)っている。近づいて指で押えようとすると、何もさわらない。翼の虫も触れてみれば判るわけだが、窓がしまっているのでさわれない。仮に窓をあけたとしても、手が届かない。

五郎は機内を見廻した。乗客は五人しかいない。

羽田を発つ時には、四十人近く乗っていた。高松で半分ぐらいが降り、すこし乗って来た。大分でごそりと降り、五人だけになってしまった。羽田から大分までは、いい天気であった。海の皺(しわ)や漁舟(いさりぶね)、白い街道や動いている自動車、そんなものがはっきり見えた。大分空港に着いた頃から、薄い雲が空に張り始めた。離陸するとすぐ雲に入った。

航空機が滑走を開始した時の五人の乗客の配置。五郎と並んで三十四、五の男。斜めうしろに若い男と女。そのうしろの席に男が一人。それだけであった。四十ぐらい座席があるので、ばらばらに乗って手足を伸ばせばいい。そう思うが、実際には固まってしまう。立って席を変えたいけれども、五郎の席は外側で、通路に出るには隣客の膝をまたがねばならない。それが面倒くさかった。

隣の客はいつ乗り込んで来たのか知らない。五郎は飛行機旅行は初めてなので、ずっと景色ばかりを眺めていた。

「乗ると不安を感じるかな?」

羽田で待っている時、ちらとそう考えたが、乗ってみるとそうでなかった。不安がなかったが、別に驚きもなかった。下方の風景を、見るだけの眼で、ぼんやりと見おろしていた。

隣の男が週刊誌から頭を上げた。髪油のにおいがただよい揺れた。男は窓外に眼を動かした。じっと発動機を見ている。黒い点を見つけたらしい。五郎は黙って煙草をふかしていた。

二分ほど経った。

「へんだね」

男はひとりごとのように言った。そして五郎の膝頭をつついた。

「ねえ。ちょっと見て下さい」

「さっきから見ているよ」

五郎は答えた。

「次々に這い出して来るんだ」

「這い出す?」

男は短い笑い声を立てた。

「まるで虫か鼠みたいですね」

「では、虫じゃないのかな」
「そうじゃないでしょう。虫があんなところに棲(す)んでる筈がない。おや？」
五郎はエンジンを見た。急にその粒々が殖えて来た。粒粒ではなくて、くっついて筋になって来る。翼の表面からフラップにつながり、果ては風圧でちりぢりに吹飛ぶらしい。虫でないことはそれで判った。また幻覚でないことも。
二人はしばらくその黒い筋に、視線を固定させていた。やがて男はごそごそと動いて、不安げな口調で名刺をさし出した。
「僕はこういうもんです」
名刺には『丹尾章次』とあった。肩書はある映画会社の営業部になっている。五郎は自分の名刺をさがしたが、ポケットのどこにもなかった。
「そうですか」
五郎は名刺をしげしげと見ながら言った。
「何と読むんです？　この姓は？」
「ニオ」
「めずらしい名前ですね」
「めずらしいですか。僕は福井県の武生(たけふ)に生れたけれど、あそこらは丹尾姓は多いのです。そうめずらしくない」
「わたしは名刺を持ってない」
五郎はいった。口で名乗った。
「散歩に出たついでに、飛行機に乗りたくなったんで、何も持っていない」
外出を許されたわけではない。こっそりと背広に着換え、入院費に予定した金を内ポケットに入れ、マスクをかけて病院を出た。外来患者や見舞人にまぎれて気付かれなかった。煙草を買い、喫茶店に入り、濃いコーヒーを飲んだ。久しぶりのコーヒーは彼の眠ったような情緒を刺戟し、亢奮(こうふん)させた。
〈そうだ。あそこに行こう〉
前から考えていたことなのか、今思いついたのか、五郎にはよく判らなかった。

「そうのようですね」
丹尾は合点合点をした。
「ぶらりと乗ったんですね」
「なぜ判る？」
「あんたは身の廻り品を全然持っていない。髪や鬚(ひげ)も伸び過ぎている。よほど旅慣れた人か、ふと思いついて旅に出たのか、どちらかと考えていたんですよ。飛行横には度々？」
「いえ。初めて」
「この航空路は、割に危険なんですよ」
丹尾はエンジンに眼を据えながら言った。
「この間大分空港で、土手にぶつかったのかな、人死にが出たし、また鹿児島空港でも事故を起した」
「ああ。知っている。新聞で読んだ」
五郎はうなずいた。
「着陸する時があぶないんだね。で、あんたはなぜ鹿児島に行くんです？」
「映画を売りに。おや。だんだん殖えて来る」
五郎もエンジンを見た。細い黒筋がだんだん太くなる。太くなるだけでなく、途中で支流をつくって、二筋になっている。五郎は眼を細めて、その動きを見極めようとした。しかし飛行機の知識がないので、それが何であるか、何を意味するのか、判断が出来かねた。五郎はつぶやいた。
「あれは流体だね。たしか」
「油ですよ」
丹尾はへんに乾いた声で言った。
「こわいですか？」
五郎は少時(しばらく)自分の心の中を探った。恐怖感はなかった。恐怖感は眠っていた。
「いや。別に」
五郎は答えた。

「映画を売りに？　映画って売れるもんですか？」
「売れなきゃ商売になりませんよ」
丹尾はまた短い笑い声を立てた。
「映画をつくるのには金がかかる。売って儲けなきゃ、製造元はつぶれてしまう」
「なるほどね」
そう言ったけれども、納得したわけではない。フィルムなんてものは、鉄道便か何かで直送するものであって、行商人のように売り歩くものではなかろう。そんな感じがする。五郎は丹尾の顔を見た。この顔には見覚えはない。髪にはポマードをべったりつけている。チョビ髭を生やして、蝶ネクタイをつけている。太ってはいるが、顔色はあまり良くない。頬から顎にかけて、毛細血管がちりちりと浮いている。暑いのに、かなりくたびれたレインコートを着ている。五郎は訊ねた。
「映画というと、やはり、ブルーフィルムか何か――」
「冗談じゃないですよ。そんな男に僕が見えますか？」
その時傍の窓ガラスの面に、音もなく黒い斑点が出来た。つづいて二つ、三つ。翼を流れるものが、風向きの関係か何かで、粒のまま窓ガラスにまっすぐ飛んで来るらしい。爆音のため聞えないけれども、粒はヤッと懸声をかけて、飛びついて来るように見えた。二人は黙ってそれを眺めていた。やがて最後尾から、スチュワーデスが気付いたらしく、急ぎ足で近づいていた。丹尾は顔を上げて訊ねた。
「これ、何だね？」
「潤滑油、のようですね」
「このままで、いいのかい？」
スチュワーデスは返事をしなかった。じっとエンジンの方を見詰めていた。その真剣な横顔に、五郎はふと魅力を感じた。やがてエンジンの形も見にくくなった。黒い飛沫が窓ガラスの半分ぐらいをおおってしまったのである。斜めうしろの乗客たちも、異変に気付いて、ざわめき始めた。
スチュワーデスは何も言わないで、足早に前方に歩いた。操縦席の中に入って行った。そ

の脚や揺れる腰を、五郎はじっと見ていた。病院のことがよみがえって来た。

〈今頃騒いでいるだろうな〉

五郎は病室を想像しながら、そう思った。病室には彼を入れて、四人の患者がいた、それに付添婦が二人。騒ぎ出すのはまず付添婦だろう。患者たちは会話や勝負ごとはするけれども、お互いの身柄については責任を持たない。精神科病院だけれども、凶暴なのはいない。一番古顔は四十がらみの男で、電信柱から落っこちて頭をいためた。この男はもう直っているにもかかわらず、退院しない。会社の給料か保険かの関係で、入院している方が得なのだと、付添婦が教えて呉れた。電信柱というあだ名がついている。

「図々しい男だよ。この人は」

「うそだよ。そんなこたぁないよ」

その男はにやにやしながら弁明した。

その次は爺さん。チンドン屋に会うと、気持が変になって入って来る。何度も入って来るから、延時間にすればこちらの方が古顔ともいえる。もう一人は若い男。テンプラ屋の次男で、病名はアルコール中毒。皆おとなしい。

〈騒いでももう遅い。おれはあそこから数百里離れたところにいる〉

喫茶店でコーヒーを飲む前から、淀んで変化のない、喜びもない病室に戻りたくないという気分はあった。

スチュワーデスが操縦室から、つかつかと出て来た。彼等に背をかがめて言った。

「もう直ぐ鹿児島空港ですから、このまま飛びます。御安心下さい」

そして次の客の方に歩いて行った。窓ガラスはほとんど油だらけになっていた。丹尾が言った。

「席を変えましょうか」

「そうだね」

五郎は素直に応じて、二人は通路の反対の座席に移動した。その方の窓ガラスは透明であった。突然雲が切れる。前方に海が見える。きらきらと光っていた。

「あんたはいくつです?」

座席バンドをしめながら、丹尾が言った。手が震(ふる)えていると見え、なかなか入らなかった。
「ぼくは三十四です」
「四十五」
五郎は答えた。
「潤滑油って、燃えるものかね」
「ええ。燃えますよ。しかしよほどの熱を与えないと、燃えにくい。バンドはきつくしめといた方がいいですよ」
丹尾はポケットから洋酒の小瓶を取出して栓をあけ、一気に半分ほどあおった。五郎に差出した。
「どうです?」
五郎は頭を振った。丹尾は瓶を引込め、ポケットにしまった。機は洋上に出た。
「こわいですか。顔色が悪い」
「いや。くたびれたんだろう」
こわくはなかったが、体のどこかが震えているのが判る。手や足でなく、内部のもの。気分と関係なく、何かが律動している。そんな感じがあった。
機は洋上に出た。速力がすこし鈍ったらしい。錦江湾の桜島をゆっくり半周して、高度を下げた。空港の滑走路がぐんぐん迫って来る。着地のショックが、高松や大分のとくらべて、かなり強く体に来た。しばらく滑走して、がたがたと停った。特別な形をしたトラックが二台、彼方から全速で走って来るのが見える。五郎はバンドを外した。爆音がなくなって、急に機内の空気がざわざわと泡立って来た。
外は明るかった。南国なので、光線がつよいのだ。タラップを降りる時、瞼がちかちかと痛かった。近くで話している人々の声が、へんに遠くから聞える。耳がバカになったようだ。
続いて丹尾が降りて来た。並んで待合室に入った。
「あんなこと、しょっちゅうあるんですか」
やや詰問的な口調で、丹尾は受付の女に言った。
「あんなことって、何でしょう?」

「あれを見なさい」

丹尾は滑走路をふり返った。しかし旅客機はそこになかった。乗客を全部おろした機体は、ゆるゆると引込線に移動しつつあった。丹尾はすこし拍子の抜けた表情になって言った。

「君に言ったって、しようのないことだが――」

［やぶちゃん注：「幻化」**「げんか」と読む**。単語としては仏教語「げんけ」があり、これは狭義には、「まぼろし」の意の「幻（げん）」と仏菩薩の神通力による変化身（へんげしん）である「化（け）」を意味するが、一般には「実体のない事物」「すべての事物には実体のないこと」の譬えとされる。但し、**春生の本作の読みは飽くまで「げんけ」ではなく「げんか」である**。それはこの標題は仏教教理などの抹香臭い束縛からは本篇は解き放たれたものであると私は信じて疑わないものだからである。因みに、**小学館の「大辞泉」には本作が見出し語として出るが、それは『げんか〔ゲンクワ〕【幻化】』である**。（なお、昔、テレビのＣＭで糞作家が、「幻化」という言葉は「げんか」じゃなく「げんけ」と読むんだ、と酒を飲みながら講釈するとてつもなく不快な厭らしいのがあった。そんなことは、こっちとら、百もご承知でい！　似非作家が！）。そもそもが、**この「幻化」は仏教用語のそれを元として春生は選んだのではなく、かの陶淵明の有名な「歸園田居　五首」（園田の居に歸る　五首）の「其四」の終りの方の一節に基づく**のである（**このことは底本の山本健吉氏の「解説」でも明記されてあり、春生は求められると、『「人生幻化に似たり」という詩句を、梅崎は好んで書き、薩摩の坊津に建てられた梅崎の文学碑にも、この詩句が刻まれている』とある**）。「其四」のみを引く。原詩は岩波中国詩人撰集一海知義注「陶淵明」（一九五八年刊）に拠ったが、訓読は必ずしもそれには従わず（そもそも底本のそれは新字現代仮名遣というとても従えない気持ちの悪いものだからでもある）、私の訓読文とした。

歸田園居　五首

其四

久去山澤游　久しく去る　山澤の游び
浪莽林野娛　浪莽たる林野の娛しみ
試携子姪輩　試みに子姪の輩を携へ
披榛歩荒墟　榛を披きて荒墟を歩む
徘徊丘隴間　徘徊す　丘隴の間
依依昔人居　依依たり昔人の居
井竈有遺處　井竈　遺れる處有り
桑竹殘朽株　桑竹　朽株を殘す
借問採薪者　借問す　採薪の者に
此人皆焉如　此の人　皆　焉くにか如くと
薪者向我言　薪者　我に向ひて言ふに
死沒無復餘　死沒して復た餘れるもの無しと
一世異朝市　一世　朝市を異にす
此語眞不虛　此の語　眞に虛ならず
人生似幻化　人生　幻化に似て
終當歸空無　終に當に空無に歸すべし

本詩「歸田園居五首」は淵明数え四十二の時の作で、前年四〇五年十一月に最後の官職であった彭沢県（現在の江西省北部の九江市の約九十キロメートル東方に同名の県として現存する）県令（この年の八月の着任で就任八十数日しか経っていなかった）を辞任して帰郷した際の詩篇である。人口に膾炙する「歸去來の辭」（勘違いしている人が多いが、これは「辞」、辞賦（楚辞の系統を引く漢文韻文の一体で押韻して朗誦に適した文）であって中国文学の狭義の意での「詩」ではない）とほぼ同時期の作とされ、「歸去來の辭」の序に辞職の理由は余すところなく記されてある。なお、これ以後、淵明は隠遁の生活を続けて二度と出仕しなかった。まさに「田園詩人」淵明の出発点にある詩篇と言えよう。

以下、原詩底本の注を参考に簡単に語注する。

・「浪莽」オノマトペイア（擬態語）で、果てしなく広いこと。一海氏は『広大なのは、林野であると共に娯しみでもあると考えてよかろう』と注しておられる。

・「子姪」自分の子や甥といった連中。

・「榛」狭義には落葉低木のブナ目カバノキ科ハシバミ属ハシバミ *Corylus heterophylla* var. *thunbergii* を指すが、低灌木群ととってよい。

・「荒墟」荒れ果てたもと村里だった跡地。

・「丘隴」他本では「壟」「壠」ともする。何れであって岡や畦（あぜ）や塚の謂いで、ここでは、小高い丘の上の墓地の謂いとなる。

・「依依」なんとなく慕わしく惹かれるさま。

・「居」かつて人の住んでいた家の跡。

・「井竈」井戸と竈（かまど）。

・「桑竹」前の「井竈」と対句であるから、その居の住人が嘗て植えたものである。

・「借問」試みに訊ねてみる。

・「復」は「再び」の意はなく、リズムを整えるための軽い添え字である。

・「一世異朝市」次句に「此語」とあることから当時の諺の類いで、「一世」は一世代で当時は三十年を指し、「朝」は王朝の宮廷、「市」は市場、市井の盛り場、即ち、民草（たみぐさ）の繁華街であるから、たった三十年ばかりで、それが入れ替わってしまうという凄まじい速さの有為転変を指す。

・「人生似幻化／終當歸空無」「人生　幻化（げんくわ）に似て／終（つひ）に當（まさ）に空無（くうむ）に歸（き）すべし」という読みである。まず「幻化（げんくわ）」という読みである。尊敬する漢文学者**一海先知義先生だけではない。岩波文庫版松枝茂夫・和田武司訳注「陶淵明全集」**でも、**その他でも何でもかんでも（私は中学生の頃から極端な淵明ファンである）、この「幻化」は「げんくわ（げんか）」と読まれ、「幻化」を「げんけ」なんどと訓じたものは――少なくとも私は――一度として見たことがない。「幻化」とは単に「儚（はかな）い　幻（まぼろし）」の謂い**である。陶淵明は廬山の僧俗文化人の集まりであった念仏集団「白蓮社（びやくれんしや）」グループと親しかったから、仏教臭と無縁であったとは言わない。が、私は寧ろ、**この「幻化」には道家的な匂いを強く感じる。「幻化」と云う文字を見る**

と私は即、「荘子」の「斉物論篇」に出る、万物が実に空しく下らなく変化することを指すところの「物化（ぶっか）」を連想するのである。即ち、この章句は、

＊

……いや、まさに、人生などというものは儚き夢幻（まぼろ）しに似て、結局は消え去って「無」となってゆくべきものなのだなぁ……

＊

という謂いである。それは仏教の辛気臭い「無常」なんかではない。それが――無為自然のあるがままの「人」の「生」なのだ――と陶淵明はすっきりと感懐しているのである。そうして――これを題名として選んだ梅崎春生もまた同じように――である。されば、永遠にこれを知ったかぶりして「げんけ」などとゆめゆめ読んではならない、と私は思うのである。大方の御批判を俟つものではある。

「五郎」本篇が三分の一ほど進行した、坊（坊津）でのシーンで、丹尾に絡んで、「久住五郎」という姓が、泊まることになる家（一応は宿屋らしい）の主人の台詞で、初めて出る。但し、すぐ後の最初に簡単に丹尾と挨拶を交わすシーンで『「わたしは名刺を持ってない」／五郎はいった。口で名乗った。』とあるので、ここで実際には姓名「久住五郎」を彼は丹尾に名乗っているのである。

「病院に入る前、五郎にはしばしばその経験があった。白い壁に蟻が這っている。どう見直しても蟻が這っている。近づいて指で押えようとすると、何もさわらない」虫を幻視するのは精神疾患としてはオーソドックスなもので、知られる一般的なものでは、統合失調症や常習的な酒の過飲（私は私を棚上げするつもりはないが、幸いにしてこうした幻視症状の体験は私にはない）によるアルコール依存症、及び、それが進行したアルコール性精神病では、実際のいない小動物・虫・蟹・蜘蛛・小人を見たり、パレイドリア（**pareidolia**：室内の壁の染みなどに明瞭な人の姿が見えたり、雲が巨大な人の顔に見えたりするシミュラクラを著しく超えた幻覚）は、かなり普通に見られる典型的幻視症状である。梅崎春生の場合、底本別巻の年譜にある精神的な病的記載及びそれと連関を持ちそうな重い疾患を拾ってみると、戦前では、

※　※　※

昭和一二（一九三七）年　二十一歳　『幻聴に拠る被害妄想から下宿の老婆をなぐ』って、警察に『一週間留置』される

＊

昭和一七（一九四二）年　二十七歳　一月に『召集を受け、対馬重砲隊に入隊する』も、『肺患のため即日帰郷。同年』末頃まで、『福岡県津屋崎療養所、のち自宅で療養』

※　※　※

とあり、戦後新人作家として本作で脚光を浴びた後では、

＊

昭和二八（一九五三）年　三十八歳　『先天的無力体質と診断され』『憂鬱症の兆候があらわれ』始める［やぶちゃん注：『先天的無力体質』という診断名は聴いたことがないが、これは所謂、やや古典的な病質性体型を指す〈habitus asthenicus〉（ハビトゥス・アステニクス：無力体質・無力性体質／ラテン語で〈habitus〉は「態度・外観・習慣・性質」、〈asthenicus〉は「無力の・衰弱した」の意と思われる。こちらはギリシャ語由来かも知れない）のことであろう。如何にも無力的な印象を受ける外見や体質を指す。皮膚が青白く、頬の紅色が限局しており、胸部が扁平、筋肉発達が不良で全体に痩せている。以前は結核に罹り易いとして結核性体質とも呼ばれたが、私は最早、印象表現に過ぎ、医療現場で使うべきでない語と考える。この診断も何科の医師が下したものか分からないが、如何にも病因不明で困った藪医者がつい口をついて言ってしまった怪しい診断名と読む。］

＊

昭和三三（一九五八）年　四十三歳　『秋ごろから心身の違和を覚えるようになる』（但し、この年の五月には妻恵津が心因反応というノイローゼにかか』って入院して六月に退院していることは注意しておく必要はある）

＊

昭和三四（一九五九）年　四十五歳　恐らくは前年からの精神的不調が昂まったために、五月に先の恵津が入院した同じ病院に『入院し、持続睡眠療法を受け』、七月に『退院し、蓼

科山荘にて身を養う』

＊

昭和三七（一九六二）年　四十七歳　十月、『子供とふざけて転倒、第十二胸椎圧迫骨折、さらにギックリ腰ともなり難渋』［やぶちゃん注：転倒理由と受傷後のストレスが問題である。］

＊

昭和三八（一九六三）年　四十八歳　八月、『蓼科山荘で吐血、養生不十分で苦しむが、やがて回復』したものの、十二月には『夏の吐血後の不養生がたたり』、『武蔵野日赤病院に入院』

＊

昭和三九（一九六四）年　四十九歳　一月には『肝臓ガンの疑いで東大病院に入院』

＊

昭和四〇（一九六五）年　満五十歳　七月十九日午後四時五分、『東大病院上田内科にて肝硬変で急逝』

※　※　※

とある。彼の主な作品（私は極めて珍しく沖積舎版全集全六巻・別巻一（但し、これは彼の作品総てではない。全集自体、「第一期」とする。但し、現時点でも第二期は刊行されていない。ずっと以前に私は同社に電話を入れて確認したことあるが、刊行は未定というけんもほろろの答えであった）は総て読んでいる。所持する全集類で総て読んでいるものはすこぶる少ないので恥を曝すところの特異点ではある）では、作者をモデルとしてとしか思えない主人公や分身的登場人物が、中高度のアルコール性依存症症状やアルコール過飲を主原因の一つとする肝臓病を患っている様子が極めてリアルに頻繁に描かれており、梅崎春生自身も、上記の症状や病態からアルコール過飲が強く疑われる。主人公の久住五郎は自分の精神疾患をあまり具体に語っておらず、病名も病因も特に記していないが、この虫幻覚は、彼がアルコール性精神病或いは強迫神経症、さらには統合失調症の前駆様症状に近いことを強く示唆しているように私には読める。作中の現在時制の久住がアルコール依存を示していないよう

に描き、それを今一人の重要な登場人物たる丹尾章次に顕在的に外化させて描いているのは、寧ろ、そこに作者梅崎春生の深刻なアルコール依存（死因の肝硬変の原因の有力な一つも過飲であり、それがまた、精神病との相互増幅関係にある）の可能性とその病態心理が透けて見えるようにも私には思われるのである。以下で語られることになる主人公五郎の症状を考える上でも、こうした作者春生自身の精神病様の病歴は非常に重要であり、春生の病跡学に於いても頗る興味深いものである。

「丹尾章次」謎めいた影のある怪しい副主人公で、エンディングまで五郎と絡まる。読み進めるうちに特殊な不思議な波を持ちながら、漸層的にその怪しい彼の内実が開示されるようになっているが、ネタバレになるので、今、ここでは細かくは注さない。ただ、山本健吉氏が底本の「解説」で述べているように『彼は主人公』五郎の『分身である』というのは至当である。まさに丹尾章次は久住五郎自身のトリック・スターであるということは言っておいてよかろうと思う。また、山本氏は、『梅崎はかつて丹尾鷹一という筆名を持っていたことがあ』り、昭和一七（一九四二）年二十七の時、『この筆名を用いて「生産人」という雑誌に小説『防波堤』を発表し、それは選ばれて『新進小説撰集』昭和十七年度後期版（赤塚書房）に載せられている』（この「防波堤」という小説は沖積舎版全集には所収されておらず、私も未読である）が、これは後の梅崎の小説「突堤にて」（昭和二九（一九五四）年発表）『の原型のような作品であ』り、この「幻化」の奇妙な登場人物である「丹尾章次」『という名前には、丹治鷹一の弟といった感じがあ』って、『作者が赤の他人と考えている人物に付けた名前ではない』と断言されておられることを言い添えておく。

「映画会社の営業部」彼は映画会社所属の営業マン、映画セールスマンである。斜陽化する以前の映画産業では「封切館」の上映から一～二週遅れて新作上映をする「二番館」、更に遅れて上映する「三番館」、その下にさらに「四番館」「五番館」「名画座」という低料金の上映館が数多く存在した。二番館以下では二本立・三本立興行が一般的であって、映画会社も特定の一社ではなく、複数の会社の作品を取り混ぜて興行することも多かった（ここは主にウィキの「映画館」に拠った）ことから、膨大な製作費のかかる映画で、しかも中小の映画会社にとっては、地方を回ってはこうした中低級の上映館に映画を売り歩くことが極め

て重要な営業であったのである。次のパートでその仕事を具体に丹尾が語っている。

「僕は福井県の武生に生れたけれど、あそこらは丹尾姓は多いのです」これは正しい。サイト苗字由来net」の「丹尾」で調べてみると、福井県と秋田県に特異的に多いようである。同解説には『現福井県東部である越前国丹生郡起源とも言われるが、はっきりとした出自は不明。近年、福井市など現福井県東部である越前地域に多数みられる。「尾」は接頭語か、小さい開発地の意味』とある。「武生」は当時、福井県中部にあった市で、福井市に次いで福井県第二の都市であったが、二〇〇五年に今立町（いまだてちょう）と合併した際に越前市となった。

「〈そうだ。あそこに行こう〉」場所をここでは示さない。読者を誘惑する上手い手法である。読者はしかし、このパートの「大分」から「鹿児島」で、鹿児島以南であることは了解出来る。「桜島」の既読者なら、これはもうピンとくる台詞である。**但し、そこは「桜島」では、ない。しかし、この「久住五郎」が「桜島」の「村上兵曹」であったとしたら、〈あそこ〉であろうことは、やはり春生フリークなら――『きっと小説「桜島」の〈あそこ〉の〈あの〉場所だ!』と分かる――**のである。

「この間大分空港で、土手にぶつかったのかな、人死にが出たし、また鹿児島空港でも事故を起した」前者は恐らく、**本作発表の前年の昭和三九（一九六四）年二月二十七日に旧大分空港（国東市にある現在の空港ではなく大分市内にあったもの）で発生した「富士航空機墜落事故」**である。ウィキの「富士航空機墜落事故」によれば（アラビア数字の一部を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した）、同日、『富士航空九〇二便はコンベア二四〇（レシプロ双発旅客機、機体記号ＪＡ５０９８・１９４８年製造）に乗員五名・乗客三十五名を乗せ、鹿児島から大分へ向けて運航していた。しかし、十五時二十分頃、大分空港への着陸に失敗し、空港東側の大分川支流の裏川の河原に墜落し炎上した』。『この事故で、乗客十八名と客室乗務員二名の、合わせて二十人が焼死し、犠牲となった。犠牲者の中には、鹿児島市内にある履物店が招待し別府温泉に向かっていた団体客や、新婚旅行の帰りだった愛媛県宇和島市の夫婦二名などがいた。操縦乗員二名・客室乗務員一名及び乗客十九名は重軽傷を負ったが救出された。いずれも機体前方にいたため生存できたとみられる』とあり、『事故調査委員会の事故調査報告書によれば、九〇二便は大分空港への着陸アプローチまでは正

常に飛行していたが、着陸後に行うプロペラのリバース（プロペラの角度を変えて推進力を逆にして機体を減速させる機能）もしくは非常ブレーキ操作のいずれかに、不適切な操作または機械の欠陥があったと推定された。しかしながら、事故原因が人的ミスであるか機体の欠陥のいずれであるかは断定されなかった』。『なお、富士航空は主に西日本のローカル路線を中心に運航していた航空会社であったが、規模的には中小企業であり経営難に陥っていた。そのため、事故後の一九六四年四月一日には、他の弱小航空会社であった日東航空、北日本航空と合併し、日本国内航空になることが決定していた。本事故はその矢先に発生したものである』。『この事故により、旧大分空港の構造的欠陥が浮き彫りとなり、本格的な移転の構想が持ち上がった』とある。**後者はやはり、この直後の同昭和三十九年の、翌三月十六日に、やはり同じ富士航空機が鹿児島空港で離陸事故を起こして乗客四人が負傷した事故**であろう。ネット上のキャッシュから拾ったデータであるが（従ってリンクはしない）、富士航空の旅客機ビーチクラフトＣ１８型機（小型の双発型レシプロ旅客機）が、この日、鹿児島空港で滑走中に突風に煽られて離陸に失敗、滑走路外の草原に突っ込んだ事故である。

「頬から顎にかけて、毛細血管がちりちりと浮いている」これは梅崎春生の小説にしばしば登場する（それらから春生にもこの症状が発現していたらしいことが判る。因みに春生の死因は肝硬変である）、肝炎や肝硬変などの肝疾患にしばしば見られる、ヴァスキュラー・スパイダー、クモ状血管腫（vascular spider）である。顔面や前胸部などの上大静脈領域に発現し、見た目が蜘蛛が足を広げたように血管が拡張している上、中心部分の血管が拍動するのが視認出来ることから、かく呼称される。さりげなく、ここで既にして丹尾の身体状況が示されているのである。

「ブルーフィルム」英語〈blue film〉。現在のピンク映画・ポルノ映画で、広義には男女の性行為をあからさまに描いた猥褻な映画を広く指し、アメリカでのこの手の低級映画がフィルムを青く着色していたことによる呼び名である。但し、本邦で「ブルーフィルム」と呼ぶ場合、狭義には、温泉街などで秘密裏の上映会に提供されていた、八ミリ又は十六ミリ・フィルムによる、短編の性行為実写か擬似的性行為を専ら写したところの非合法映画（その多くは無修正）を指すことが多い（ここはウィキの「ピンク映画」を主に参考にし、私見を加

えた)。

「その次は爺さん。チンドン屋に会うと、気持が変になって入って来る」この人物設定は実は以前の小説「仮象(かしょう)」(昭和三八(一九六三)年十二月号『群像』初出し、作品集『幻化』に「幻化」と併載された。山本健吉氏は底本「解説」でこれは春生がこの短篇「仮象」を「幻化」の『衛星的作品と考えていたからである』と述べておられる。私にはブログ版、及びPDF縦書版がある)に登場する「内山」という老人の精神疾患の設定と同じである(以下、同作の「神経科病室」から引用)。「仮象」の「内山老」は、『チンドン屋と会ったり、家の前をチンドン屋が通ったりすると、急に亢奮(こうふん)してそれを見に行く。時にはチンドン屋のあとをくっついて、一時間ぐらい戻ってこないこともある。戻って来た老人は、夢に浮かされたように朗らかになっている。上機嫌になって』いわば躁状態にあるのであるが、『しかしこの御機嫌な状態は、三日と続か』ず、『三日目あたりから、深い鬱(うつ)状態におちい』り、『逼塞(ひっそく)して自分の殻に閉じこもってしま』い、『ほとんど行動もしないで、食慾もなくな』って、不眠も併発する。『夜中にぶつぶつと何か呟いていたり、泣いてい』ることもある。『その状態が五日か六日か続き、だんだんと元の状態になる』。といっても『心身健康という』様子になるのではなく、『むっつりとして笑わない、あまり感動のないような老人に戻るのである』とその病態を記している。「幻化」では後で再び、このチンドン老人のエピソードが出る。

「もう一人は若い男。テンプラ屋の次男で、病名はアルコール中毒」ここと、すぐ後の『丹尾はポケットから洋酒の小瓶を取出して栓をあけ、一気に半分ほどあおった。五郎に差出した。/「どうです?」/五郎は頭を振った』など、こうしたそっけない、やや軽いもの謂いや演出が――五郎の精神疾患はアル中などとは無縁である――的な如何にも説明的な雰囲気を持っており、作者が――五郎は心因性精神病である――飲酒とは関係ない――とかたくなにもって行こうとしているかのように私には読めてしまい、やや不自然に感じられる部分なのである。

「数百里離れたところ」百里は約三百九十三キロメートルだが、東京―鹿児島間は単純直線距離で九百六十六キロメートルほどである。「数百里」というのは実数値的にはちょっと大

袈裟にも見えるが、実際、日本語の「数軒・数日・数人・数里」等は漠然とした不定数を示し、「いくらかの」で、「二」及び「三」以上で概ね「五」及び「六」程度の数値幅を持つ。実距離を「百里」で割ると二・七ほどであるから、確かに「数百里」でおかしくなく、意識的距離としてはもっと腑には落ちる表現と言える。

『「ぼくは三十四です」／「四十五」／五郎は答えた』これを検証するには、作品内時間を是が非でも措定する必要が発生する。そしてそれには先の私の注が有効に作用すると思うのである。即ち、前の丹尾の台詞「この間大分空港で、土手にぶつかったのかな、人死にが出たし、また鹿児島空港でも事故を起した」である。これが私が注した通り、昭和三九（一九六四）年二月二十七日の旧大分空港で発生した富士航空機墜落事故と、その翌月三月十六日の同じ富士航空機による鹿児島空港で発生した離陸事故とするならば（この仮定は私はかなり確度が高いと考えている）、翌年のことならば丹尾は「この間」という近日指示はせず、「去年」と言うであろうこと、両方の事故を五郎が「ああ。知っている。新聞で読んだ」と受けているのは、やはり直近の事故記事で、記憶が明確に新しく鮮明であることを意味している（事故当時、五郎が精神疾患を病んで入院していた可能性が高いことも判断材料とされたい）。

即ち、私は、

本篇の作品内時間は昭和三九（一九六四）年の夏の終った――さらに限定的に言うなら九月上旬

ではないかと推定している。その具体な根拠は後半の「町」の中に、『めずらしくかき氷屋があった。東京ならもう店仕舞をしている筈だが、ここは南国なので商売がなり立っているのであろう』と叙述が出現するからである。「八月」末とはしないのは、「九月」本州でのかき氷屋の営業は一つ、子供らの夏休みが切れ目とも私には思われるからである。但し、五郎が〈あそこ〉を再訪するシンクロニティを考えた時には、これは「八月二十日頃」（本篇の「白い花」に出る日附である）が相応しいが、そこまで合わせるのは却ってやらせっぽく不自然である気がするからでもある。さて、これに従うなら、

昭和三九（一九六四）年当時三十四歳の丹尾章次は凡そ昭和五（一九三〇）年生まれ
昭和三九（一九六四）年当時四十五歳の久住五郎は凡そ大正八（一九一九）年生まれ

ということになる（二人の年齢差は十一）。丹尾が嘘をつく必要は普通に考えると、ない。彼自身から自発的に告げた年齢であることからも信じてよいであろう。しかし、五郎は後にも出るような追跡妄想などの有意な精神不安を抱えており、自らの素性を隠そうとする傾向が顕著であるから、この年齢も鵜呑みには出来ない気はまずはしてしまう。しかし、実は――五郎のそれもほぼ正しい――のである。それは、後の「白い花」の、印象的な敗戦時の経験述懐で判明する。そこで五郎は『坊津の海軍基地が解散したのは、八月二十日頃かと思う。五郎はまだ二十五歳。体力も気力も充実していた。』と出るからである。されば、先に示した通り、

久住五郎が大正八（一九一九）年生まれと仮定するなら、昭和二〇（一九四五）年の夏敗戦直後には満で二十五か二十六歳

であったことになるからである。因みに、作者

梅崎春生は大正四（一九一五）年二月十五日生まれで、敗戦時は満で二十九歳

で、作者自身がモデルである五郎は作中では四、五歳若く設定されてある。

「潤滑油って、燃えるものかね」「潤滑通信社」公式サイト内の「潤滑油も自然発火するか」によれば、潤滑油の引火点（対象試料を規定条件で加熱し続け、試料容器上部空間に蒸気と空気の混合物が滞留し、点火源となる小さな炎を油面上に近づけて引火する温度）は摂氏一二〇度から三五〇度、自然発火温度（対象可燃物を空気中で加熱して他から点火されることなく、自ら発火する最低温度で、対象可燃物の周囲の状況と圧力によって異なってくる）は

摂氏二五〇度から三五〇度とある。このページのグラフを見ると航空機のように圧力が著しく低い高空では自然発火の可能性は著しく低くなるものの、潤滑油の漏れが外部のみでなく、エンジン内部にも及んでいる場合には、これだと容易に引火しそうな気はする。

「機は洋上に出た」の後に二人の台詞のやり取りがあって二文からなる短い五郎の心気症様の不安描写の段落の後、再び「機は洋上に出た。速力がすこし鈍ったらしい。錦江湾の桜島をゆっくり半周して、高度を下げた」と続く。この前の「機は洋上に出た」は、どう読んでみても表現の重複であり、しかも後者のような、論理的整合性がなく、挟まれ方が不自然である。これは山本健吉氏も底本「解説」で「幻化」について、『彼の自信の作であり、自分でも満足できる出来ばえだったのだと思う。ただ、も少し生きていたら、推敲を加えたかも知れない。たとえば』この『「機は洋上に出た」という不注意な重複など、一方を削除したであろう』と記しておられる。

「近くで話している人々の声が、へんに遠くから聞える。耳がバカになったようだ」中耳の圧調整障害が急速に起きた場合に生じる症状で、重いものは「航空性中耳炎」と呼ぶ。私は九年前の二〇〇六年十二月に、風邪をひいている状態でベトナムに旅した際、行きの空路で重い航空性中耳炎に罹患した。特に左耳はエウスタキオ管（耳管）のみでなく、外耳部まで炎症が真っ赤に広がっていた（到着後に現地の病院で診察を受けて妻が内視鏡で視認、点耳剤の投薬を受けた。保険がきかないので小さな水薬一瓶で一万円三千円ほどした）、帰国後も左右ともに聴力が不可逆的に悪くなり（特に左は高音部が有意に減衰）、現在も常時左右ともに耳鳴りが聴こえる。航空性中耳炎は、特に鼻や耳に炎症がある状態で罹患すると、重い症状を呈し、しかもやっかいなことに再発を繰り返し易くなる。……侮ると大変なことになるので、一言附言しておきますよ、五郎さん……」

「枕崎の方に行くんですか？」

車で航空会社の事務所まで送られた。その前の食堂に入り、丹尾は酒を注文し、五郎はう

どんを頼んだ。あまりきれいな食堂ではなかった。機上でサンドイッチを食べたので、食慾はほとんどない。

「そうだよ」

五郎はうどんを一筋つまんで、口に入れた。耳の具合はすでに直っていた。

「どうです。一杯」

空いた盃（さかずき）に丹尾は酒を注ぎ入れた。五郎は一口含んだ。特別のにおいと味が口の中に広がった。ごくんと飲み下して五郎は言った。

「これはただの酒じゃないね」

「芋焼酎（いもじょうちゅう）ですよ。しかし割ってある」

「もう一杯呉れ」

五郎は所望して、また味わってみた。

「ああ。これは戦争中、二、三度飲んだことがある。どこで飲んだのかな。思い出せない。もっと強かったような気がするが――」

「割らないで、生（き）で飲んだんでしょう」

丹尾はまた注いだ。盃は大ぶりで、縁もたっぷり厚かった。

「ぼくも枕崎に行こうかな」

丹尾はまっすぐ彼を見て言った。五郎の顔は瞬間ややこわばった。ごまかすために、またうどんを一筋つまんだ。

「なぜわたしについて来るんだね？」

「ついて行くんじゃない。あそこあたりから商売を始めようと思って」

「商売って、映画の？」

そろそろ警戒し始めながら、五郎は丸椅子をがたがたとずらした。

「そうですよ」

丹尾は手をたたいて、また酒を注文した。

「直営館なら問題はないけどね、田舎には系統のない小屋があるでしょう。面白くて安けりゃ、どの社のでも買う。そこに売込みに行くわけだ。解説書やプログラムを持って、これは

ここ向きの作品だ。値段はいくらいくらだとね。すると向うは値切って来る。折合いがつけば、交渉成立です。そこがセールスマンの腕だ。各社の競争が烈しいんですよ」

「いい商売だね」

「なぜ？」

「あちこち歩けてさ」

五郎は盃をあけながら答えた。

「わたしはこの一箇月余り、一つ部屋の中に閉じこもっていた。一歩も外に出なかったんだよ。いや。出なかったんじゃなく、出られなかったんだ」

「なぜ？」

丹尾はきつい眼付きになった。

「なぜって、そうなっているんだ。二階だったし――」

病室は二階にあったし、窓の外にはヒマラヤ杉がそびえて、外界をさえぎっていた。別に逃げ出す気持も理由もなかった。友人のはからいで、初めは個室に入ったが、入った日から睡眠治療が始まったらしい。日に三回、白い散薬を服(の)まされる。三日目に回診に来た医師が、五郎に聞いた。

「気分はどうですか。落着きましたか？」

「いいえ」

と五郎は答えた。

「まだ治療は始めないんですか？」

まだ憂欝と悲哀の情緒が、彼の中に続いていた。牙をむいて、闘いを求めていた。情緒が彼に闘いを求めているのか、彼が闘いを求めているのか、明らかでなかった。その状況を半年ほど前から、五郎は気付いていた。ある友人と碁を打っている時、急に気分が悪くなった。何とも言えないイヤな気分になり、痙攣(けいれん)のようなものが、しきりに顔面を走る。それでも彼はしばらく我慢して、石をおろしていた。痙攣は去らなかった。彼は石を持ち上げて、そのまま畳にぼろりと落した。友人は驚いて顔を上げた。

「へんだぜ。顔色が悪いぞ」

「気分がおかしいんだ」

座布団を二つに折って横になった。やがて医者が来る。血圧がすこし高かった。根をつめて碁を打ったせいだろうと医師は言い、注射をして帰る。痙攣は間もなく治った。それに似た発作が、それから何度か起きた。街歩きしている中に起きると、タクシーで早速帰宅する。タクシーがつかまらない時は、店にでも何でも飛び込んで休ませてもらう。しばらく安静にすると元に戻る。コップ酒をあおると回復が早いことを、五郎は間もなく知った。

いつ発作が起きるかという不安と緊張があった。常住ではなく、波のように時々押し寄せて来る。押し寄せるきっかけは、別にない。気分や体調と関係なくやって来た。すると五郎は酒を飲む。ベッドの中で、あるいはテレビを見ながら。ふっと気がつくと、考えていることは『死』であった。死といっても、死について哲学的省察をしているわけでない。自殺を考えているのでもない。ただぼんやりと死を考えているだけだ。酒を飲み、卓に肱(ひじ)をついて、歌を口遊(ずさ)んでいる。よく出て来るのは、軍歌の一節であった。

「……北風寒き千早城」

それにつづいて、

「楠公父子の真心に、鬼神もいかで泣かざらん」

楠公父子が『暗号符字』に、いつか彼の中ですり変えられている。暗号符字の真心に鬼神もいかで泣かざらん。彼は苦笑いとともに思う。これがおれの正体じゃないか。今まで不安を忘れたり、避けたりして、ごまかして来たんじゃないか。おれだけじゃなく、みんな。

「もう始まっていますよ。今日はすこし血を採りましょう」

医師がそう言った。注射管の中にたまる血の色を見ながら、五郎は同じようなことを考えていた。しかし、幻覚のことは、どうなるのか？

［やぶちゃん注：「枕崎」鹿児島県の薩摩半島南西部にあり、南方で東シナ海に臨む。当時は既に現在同様に枕崎市であるが、後述場面の述懐で主人公五郎が若き日に向かって歩いた時は枕崎町であった。昭和二四（一九四九）年九月一日で市制を施行、枕崎市となっている。ここで五郎の向かおうとする先が一応、読者に具体的に示されてくる（但し、これは丹

尾との会話であるから、目的地が本当に枕崎方向かどうかは、この時点では明確ではない。如何にも胡散臭い相手に嘘をついた可能性もないとはいえないと読者は読むからである。

『「空いた盃に丹尾は酒を注ぎ入れた。五郎は一口含んだ。特別のにおいと味が口の中に広がった。ごくんと飲み下して五郎は言った。／「これはただの酒じゃないね」／「芋焼酎ですよ。しかし割ってある」／「もう一杯呉れ」』ここと、本パートで以下に語られる症状に対してそれを落ち着かせるのにコップ酒が効果があったと記す部分を読むに、五郎はアルコール依存ではないことが判る。但し、以下、最初の発症シークエンスの軽い痙攣様発作や麻痺の病態は、寧ろ、突発的であって、先行する心理不安が示されていないことからは（わかり切ったことだが、あったが書かなかった可能性をまず置いて、である）、寧ろ一見、脳疾患のようにも見える。無論、**本篇の五郎の過去への回帰と自分探しの「生と死の再生の旅」といった雰囲気の主題性からは、五郎の精神疾患は完全な心因性ではあるように一見、見える**。但し、**これは、梅崎春生自身がそうであったと読み換えてはいけない。病跡学的には私は、梅崎春生は心因性或いは内因性の抑鬱性疾患に加え、それによって引き起こされたとも言えるアルコール依存症でもあり、実際の彼の精神変調の主因の少なくとも大きな一つは外因性アルコール性精神病であった**と考えている。因みに私はズブの素人ではあるが、物心ついて以来、精神分析や精神医学に色気を持ち続けており（私は実際には大学では心理学を専攻したかったのであるが、心理学で受けた大学は総て落ちた）、文学専攻であったが故にパトグラフィ（病跡学）にも強い関心を持ち続けており、教師時代の授業でも特異的にそうした解析をよくやった（例えば、私の『梶井基次郎「檸檬」授業ノート』の主人公の心理分析や、最後の「檸檬に暗示される性的象徴性の匂い」などの箇所を参照されたい）。私の分析に疑義を持たれる向きは、金剛出版昭和五〇（一九七五）年刊の春原千秋・梶谷哲男共著「パトグラフィ叢書　別巻　昭和の作家」の「梅崎春生」（梶谷哲男氏担当）をお読みになられることをお薦めする。そこで梶谷氏は『その執拗な死への想い、ややもすれば憂欝に傾いた基本的気分などからみて、内因性のうつ周期の波があったように思われる』とされ、本「幻化」を『書きはじめる半年位前から、不安に襲われたり、玄関のベルの音を』幻聴しており、『恵津夫人は、アルコール中毒を否定しているが、やはりアルコール中毒症状とみるべきで

あろう』と分析しておられる。なお、精神疾患に於ける外因性・内因性・心因性について附言しておくと、「外因性精神病」は脳梗塞や脳腫瘍などの脳自体の損傷や脳に影響を及ぼす疾患及び脳以外の身体疾患が明らかな原因と診断出来る場合を指す（脳以外の身体疾患とは甲状腺機能低下や中枢神経変性を起こすアルツハイマー病・パーキンソン病・ハンチントン病、感染症のインフルエンザ脳症などで、ここで問題と私がしているアルコール過飲、ステロイド・インターフェロンなどの治療用の投薬、そして違法な麻薬・覚醒剤、毒物などによって引き起こされる物質誘発性精神病性障害をも含まれる）。「心因性」は所謂、ストレスによって生じるそれを指し、「内因性」は以上の外因性でも心因性でもないものを指すが、実際には脳の機能異常が疑われる。但し、脳変性や異常部位が不明で解明されていない精神病を安易に投げ込んでいる傾向があるものである。これは概ね、何らかの遺伝的背景とそれに伴う発症を想定したものであって、代表的なものは先天的な脆弱性から発症するとされる統合失調症及び、内因も心因も想定出来ない抑鬱障害である双極性障害である。

「直営館」各大手映画会社によって築かれた全国規模のネットワークの各地方の拠点映画館である封切館。原則、ネット元である各映画会社が選択した映画を上映する映画館。

「系統のない小屋」直営館のようなネットワークに縛られないか、ややその拘束から脱している、前のパートで説明した二番館以下の、複数の映画会社の作品を数本立てで、安く上映するところの中小の映画上映館。

「ヒマラヤ杉」裸子植物の球果植物門マツ綱マツ目マツ科ヒマラヤスギ属ヒマラヤスギ *Cedrus deodara* 。

「睡眠治療」一九世紀末から二〇世紀初頭における精神医療の一般的治療法の一つである持続睡眠療法（continuous sleep treatment）である。現行のような精神治療薬が生まれる以前は所謂、精神分析による会話療法（心理療法）と神経障害や異常昏睡の死亡リスクを副作用として持つブロム剤・バルビツール酸系睡眠薬による強制持続催眠法（及びその併用）が主流であった（付け加えておくと、特に重い統合失調症（旧精神分裂病）の中で、激しい加虐性被虐性を示す興奮・錯乱異常の場合には、専らこの強力で危険な睡眠剤による治療法一つしかなかった。言っておくが、私は梅崎春生がそうだったと言っているのではない。あくま

で「持続催眠法」の実態を述べているので間違われぬようにされたい)。持続催眠法は一週間から二十日間を一クルーとし、一日凡そ十五時間から二十時間も薬物によって人為的持続的に睡眠させて安静を保たせるという治療法で、薬剤としてはブロム剤・バルビツール酸・モルヒネ・抱水クロラール・アトロピン・スコポラミン等が用いられた。一九六〇年代に入って、効果の高い抗精神薬治療薬が相次いで開発されて以降はほとんど用いられていない。梅崎春生には悪いが、持続催眠療法は実は無理矢理ひたすら眠らせておけば脳が沈静して精神不安が軽快除去されるであろうぐらいな素人考えに等しいものであって、**精神科療法としては客観的科学的な根拠は全くなかった**というのが真相である。前に注したように、**梅崎春生は実際に、本作公開に先立つ五年前の昭和三四(一九五九)年五月、四十五歳の時、前年からの(推定)精神的不調が昂まったために入院し、持続睡眠療法を受けている**(七月に退院し、蓼科山荘にて療養)。

「碁を打っていると」梅崎春生は囲碁を殊の外、好んだ。

「いつ発作が起きるかという不安と緊張があった。常住ではなく、波のように時々押し寄せて来る。押し寄せるきっかけは、別にない。気分や体調と関係なくやって来た。すると五郎は酒を飲む。ベッドの中で、あるいはテレビを見ながら。ふっと気がつくと、考えていることは『死』であった。死といっても、死について哲学的省察をしているわけでない。自殺を考えているのでもない。ただぼんやりと死を考えているだけだ」典型的な抑鬱症状による不定愁訴である。但し、それ自体は必ずしも病的状態とは言い難い。いや、何より、今の私でさえこの五郎と全く同じである。寧ろ、五郎の――というよりも作者梅崎春生の「死といっても、死について哲学的省察をしているわけでな」く、「自殺を考えているのでもな」く、漠然とした『『死』考えている」深い沈鬱状態が襲ってくるのであるという自己観察はすこぶる醒めて冷静であることに着目しておく必要がある。「いつ発作が起きるかという不安と緊張が」突然前触れもなく(「押し寄せるきっかけは、別にな」く、「気分や体調と」も「関係な」いと言っている)襲ってくることが、寧ろ当たり前に狂気とその持続そして精神の「死」、実際の「死」へと至る恐怖と直結するというのは関係妄想でさえない、ごく普通の反応でさえある。――私は昨年八月の前頭葉の一部挫滅以降、その後遺症としての人格変容

や腕や足の不可逆的麻痺や劇しい発作の突発的発症不安と、その彼方にある「死」の虞れを――この「五郎」と全く同じように――どこかで何時も感じているからである。但し、この五郎がその不安を常習的に飲酒によって鎮静させ、紛らわしているというの状況が、ひいては重いアルコール性抑鬱状態を惹き起こしたとも言えるのではないかと思うし、春生が彼の死因となった肝硬変になった主因もそれであるように思われるのである。

『ただぼんやりと死を考えているだけだ。酒を飲み、卓に肱をついて、歌を口遊(ずさ)んでいる。よく出て来るのは、軍歌の一節であった。／「……北風寒き千早城」／それにつづいて、／「楠公父子の真心に、鬼神もいかで泣かざらん」』これは、大正三（一九一四）年作の**海軍軍歌**で、所謂、「桜井の別れ」、河内の武将で後醍醐天皇の名臣楠木正成は湊川の戦いに赴いて戦死したが、その今生の別れとなった正成・正行父子が訣別する西国街道桜井駅（櫻井の驛）での逸話に基づく「楠公父子(なんこうふし)」（作詞・大和田健樹／作曲・瀬戸口藤吉。著作権は詞曲ともに消滅している）の二番の末尾の一節であるが、実は「旗風高き千早城」で、「北風」ではない。これは五郎（或いは梅崎春生自身）の記憶違いか、それとも確信犯（両者の）かは定かでない。天翔氏のサイト「天翔艦隊」の軍歌のデータベースの「楠公父子」から全歌詞を引くが、恣意的に漢字を正字化した。仮名遣も歴史的仮名遣にしようとしたが、実際の歌曲として詠んでもらうために特異的に現代仮名遣のままとした（リンク先ではミディで曲もダウロード出来る）。

＊

楠公父子

一、

天に溢(あふ)るるその誠

地にみなぎれるその節義

楠公父子(なんこうふし)の精忠(まごころ)に

鬼神(きじん)もいかで泣かざらん

二、

天皇(すめらみかど)の御夢(おんゆめ)に
入るも畏(かしこ)き笠置山(かさぎやま)
百萬の敵滅ぼして
旗風高き千早城

三、

七度(ななたび)人と生まれ出で
殲(つく)さで止まじ君の仇(あだ)
誓いの詞(ことば)雄雄しくも
千古(せんこ)朽ちせぬ湊川(みなとがわ)

四、

その名もかおる櫻井の
父の遺訓(おしえ)を守りつつ
葉はその陰に生い立ちし
楠の若葉のかぐわしさ

五、

再び生きて還らじと
かねて思いし合戰に
四條畷(しじょうなわて)の白露(しろつゆ)と
消えても玉の光あり

六、

忠勇義烈萬代(よろずよ)の
青史を照らす眞心は
死せず滅びず永久(とこしえ)に
日本男兒の胸の血に

＊

なお、「千早城」は現在の大阪府南河内郡千早赤阪村大字千早に鎌倉末から南北朝期にあった楠木正成の城で、元弘二／正慶元（一三三二）年の正成の奇策防衛戦で知られる「千早城の戦い」で名高い。

「楠公父子が『暗号符字』に、いつか彼の中ですり変えられている。暗号符字の真心に鬼神もいかで泣かざらん」**「暗号符字」暗号コード。**戦中の換字暗号に於いて原語を換字するために配当する数字文字若しくは記号を総称して「暗語」と称したが、特に**海軍では「符字」と呼んだ**（二〇一三年紫峰出版刊の保坂廣志「日本軍暗号辞典」に拠る）。「すり変えられている」というのは無論替え歌ということであるが、同時に「暗号に変換されている」ことをも暗示し、ここで初めて**主人公五郎が戦中の海軍の暗号通信兵であったらしいことがほぼ明確に示される**ところである。

「彼は苦笑いとともに思う。これがおれの正体じゃないか。今まで不安を忘れたり、避けたりして、ごまかして来たんじゃないか。おれだけじゃなく、みんな」**戦中の海軍暗号通信兵であった五郎の現在の精神変調の根っこが、遡ること二十年前の海軍暗号通信兵時代の体験に存在すること、その秘められた異常な体験の変成物こそ「がおれの正体じゃないか」？**「今まで」上辺ばかりが小平和になったと幻想し、過去を忘れる中で、かつて「生」そのものが揺るがされ、存在そのものが全否定されたような記憶に基づく、「不安を忘れたり、避けたりして、ごまかして来たんじゃないか」？　いや！「おれだけじゃなく、みんな」だ！　と「彼は苦笑いとともに思う」のである。ここに本作の怨念と執念が垣間見えるのである。

「幻覚のことは、どうなるのか？」先に示された五郎の見る、「虫」の「幻覚」である。」

「さあ。そろそろ出かけましょうか」
丹尾は盃を伏せて立ち上った。徳利の三分の一は、五郎が飲んだ。勘定は丹尾が払った。その勘定を払う手付き、札入れの厚さなどを、五郎はじっと見ていた。丹尾は腕時計をちらと見た。
「汽車の時間はどうかな。駅で待たせられるかな」
「おれは車で行くよ」
五郎はそっけなく答えた。
「待たせられるのは、いやだ」
五郎は先に外に出た。航空事務所の隣が、ハイヤーの営業所になっていた。そこに入って行った。空港から乗って来た車の運転手が、車体をぼろ布で掃除していた。五郎の姿を見て、細い眼で笑いかけた。
「枕崎まで行くかね」
「行きますよ。どうぞ」
運転手はドアをあけた。五郎は座席に腰をおろした。丹尾は店からまだ出て来ない。運転手が乗り込んで来た。
「一人ですか？」
うなずこうとしたとたん、のれんを分けて丹尾があたふたと出て来て、五郎の傍にころがり込んだ。
「ぼくも乗せてもらいますよ。汽車は時間的に都合が悪いらしい」
丹尾は運転手の横にトランクを投げ込んだ。運転手が答えた。
「あれは開通したばかりで、日に何本も出ないのです」
抑揚に訛(なま)りめいたものがあるが、一応標準語であった。運転手という職業の関係もあるが、ラジオやテレビのせいもあるらしい。さっきの空港の受付の女の口調もそうであった。
〈戻るのか〉

と五郎は思った。車はさっき乗って来た街衢(がいく)を、逆にしごいて走る。五郎は忙しく地図の形を頭に浮べていた。二十年前のここらは、すっかり爆撃にやられて、骨組みだけの建物と瓦礫だけの町であった。電線は地に垂れ、水道栓が音を立てて水を吹き上げていた。人通りは――暗闇で長いこと据(す)え放しにしたカメラの影像のように、動かないものだけが残り、人間の姿は全然消失していた。今自動車が押し分けて行く風景は、人がぞろぞろと通り、建物も整然として、道はきちんと舗装してある。あの時も人通りはあったのだろう。しかしそれは五郎の印象に残っていない。廃墟(はいきょ)の姿だけだ。五郎は背をもたせたまま、窓に移る風物を眺めていた。

「さっきね、何か這い出していると言いましたね」

丹尾が言った。

「ほんとにそう思ったんですか?」

「そう」

「ふしぎだとは思わなかったんですか?」

「ふしぎ?　いや」

五郎は居心地悪く答えた。

「見違いかと思ってたんだ。君が気がついたから、見違いじゃないと判ったけれどね」

丹尾は黙っていた。

「もっともあそこから虫が這い出しても、ふしぎだとは思わない。世の中にそんなことは、ざらにあると思う」

車は市街を通り抜けた。しだいに家並がまばらになり、海岸通りに出た。桜島が青い海に浮び、頂上から白い煙をはいていた。

「ところで――」

五郎は視線を前路に戻しながら言った。

「君は東京から飛行機に乗ったのかね?」

「そうですよ。気がつかなかったんですか?」

丹尾は答えた。

「羽田からずっとあんたの横に坐っていましたよ。二度話しかけたけれど、あんたは返事しなかった」
「二度も？」
「ええ。初めは瀬戸内海の上空で、二度目は大分空港の待合室で。待合室では煙草の火を借りた。あんたは肩布をかけた代議士らしい男の方を見ていたね」
「ああ。そんなのがいたね。迎え人がたくさん来ていた。あれ、代議士か」
「そうでしょうね。大分からは、五人になってしまった」
待てよ、と五郎は考えた。五人ならもう座席指定でなく、どこにも腰かけられる筈だ。それなのに横の座席に執（しゅう）したのは、何故だろうか。
「たかが五人乗せて、商売になるもんですかねえ」
「わたしはぼんやりしてたんだ。久しぶりに娑婆（しゃば）に出たんで、感覚が働かない。話しかけられても、聞えなかったんだよ。きっと」
「娑婆？　するとあんたは――」
丹尾は言いにくそうに発音した。
「それまで留置場かどこかに、入ってたんだね」
「留置場？」
五郎は丹尾の顔を見た。
「留置場、じゃないさ。君は知っているんだろ」
丹尾は首を振った。
「何も知らないよ。ちょっと様子がへんなんで、注意していただけです。いけないですか？」
五郎は急に頭に痛みを覚えた。痛みというより、たがのようなものでしめつけられるような感じであった。彼は両手をこめかみに当てて、揉みほぐすような仕種（しぐさ）をした。痛みは三十秒ほどでおさまった。
「ひどく頭が痛いことがありますか？」
入院する前に医師が訊ねたことがある。その医者は三田村（碁を打っていた友人だ）の知己で、彼に伴われて私宅を訪ねたのである。面談した応接間はこぢんまりして、壁には風景

画がかけられ、隅の卓には花が飾られていた。壁は布張りで、特殊の加工がしてあるらしく、声は壁に吸い取られて反響がなかった。

「いいえ」

五郎は答えた。

「痛くはないけれど、悲しいような憂欝な感じがあるんです」

「ずっと続けてですか？」

「いえ。続けてじゃない。時々強く浪のように盛り上って来るのです。いや、やはり続いているのかな」

五郎は首をかしげて、ぽつりぽつりと発言した。

「漠然とした不安感がありましてね、外出するのがいやになる。顔が震えそうだし、皆がぼくを見張っているようで、うちに閉じこもってばかりいます」

「閉じこもって、何をしているんですか」

「寝ころんで本を読んだり、テレビを見たり、歌をうたったり——」

「歌を？」

医者は手帳を出して、何か書き込んだ。

「どんな本を読むんです？」

「おもに旅行記とか週刊誌のたぐいです。むずかしいのはだめですね」

「旅行記ね」

医者は探るような眼をした。

「テレビはあまり見ない方がいいですよ。眼が疲れるから。眼が疲れると、精神もいらいらして疲れます」

「そうですか。そう見たくもないんです」

五郎はテレビを見る。おかしい場面が出て来る。五郎は笑わない。おかしくないからだ。感情が動かないのではない。むしろ動きやすくなっているのだが、それは悲哀の方にであって、笑いの方には鈍麻している。五郎から笑いはなくなった。妙に涙もろくなって来た。テレビはスタジオから電波で送られ、映像となる。そう頭では判っているが、実感としては

そらごととしか思えない。影が動いているだけじゃないか。耐えがたくなってスイッチを切り、酒を飲む。そして歌をうたう。三田村が傍から口を出した。

「幻覚があるんじゃないか」

「幻覚？　テレビのことか？」

「いや。ブザーのことだ」

「ブザーのことって、何ですか？」

医者が質問した。

「いや。時々、時ならぬ時に、玄関のブザーが鳴るのです。出て行っても誰もいない」

「時ならぬ時というと？」

「真夜中なんかです。どうも誰かがいたずらをするらしい」

五郎は幻覚のことを、たとえばブザーのことや壁に這う蟻（あり）のことを、あまり語りたくなかった。自分は正常である。その方に話を持って行きたかった。医師の門をくぐるのと、それは矛盾しているようであったが、本能的な自己防禦（ぼうぎょ）が働く。自分の症状を軽く見せたいという気持が強かった。

それにもう一つの疑念があった。

〈この男は贋（にせ）医者じゃないのか〉

実際に病院の中で、白い診察衣を着て、聴診器でも持っていれば、一応信用出来る。でも今の場合、この医師は和服を着て、ゆったりとソファに腰をおろしている。医者らしくない。医者であるという証拠は、何もない。ここに来るまでは、医者の家に行くんだと思っていたが、応接間で応対している中に、その疑念がきざし、だんだんふくれ上ってくる。

〈あなたはほんものの医者ですか？〉

と聞きたい衝動が起きる。しかしもしほんものだった場合、こちらがほんものの気違いだと思われるおそれがある。それではまずいので言葉にしない。

医者の質問はなおも続いた。そして結論みたいに言った。

「やはり抑圧があるようですな」

「抑圧と言いますと？」

「いろんなものが、重いものが、頭にかぶさっているのです。それを取除かねばならない」
「重いものがね」
美容院の前を通ると、女たちが白い兜(かぶと)のようなドライヤーをかぶっている。五郎はすぐにそれを連想した。
「ああ。つまり脱げばいいんですね」
「まあそういうことです」
「なるほど。しかし――」
兜をかぶっているのが常人で、今のおれの場合は兜を脱ぎ捨てた状態じゃないのか。頭がむき出しになっているから、普通人が持たない感覚を持ち、感じないものを感じているのではないか。生きているつらさが、直接肌身に迫って来るのではないか。その点おれが正常人の筈だ。瞬間そう考えたけれども、五郎は口に出さなかった。
「健康と不健康との境目は――」
「健康といいますとね、緊張と弛緩(しかん)、亢奮と抑制などのバランスがとれている状態です」
医者は自信ありげに、煙草に火をつけた。
「大体人間というものはね、自分の心の尺度をもって物事をおしはかるもんです。疲れた時の心に写る世界と、活気に充ちた時のでは、同じ対象に接しても、まったく感じ方が異なるんですな。それにまたその人の性格がからんで来る。ますます複雑になって来るんですよ」
「すると抑圧をとるには？」
「いろいろ方法があるわけですね。電気ショックとか持続睡眠療法とか――」
「電気ショック？」
五郎は思わず声を高くした。
「やはり椅子に腰かけてやるんですか？」
「死刑台じゃないんだよ」
三田村が横から口を出して笑った。
「こいつはね、電気をこわがるんだ。昔から」
「いや。こわいとか、こわくないとかは、関係がない」

五郎は抗弁した。

「電流は体には作用する。しかし、心や感情に作用するかどうか――」

「じゃ酒はどうだね。酒はただの物質だが、感情を左右するよ」

「では睡眠療法の方がいいでしょう」

医者は煙草を揉(も)み消しながら、とりなすように言った。

「いつでもいいですよ。病室の用意をしておきます」

［やぶちゃん注：「あれは開通したばかりで、日に何本も出ないのです」これは当時の日本国有鉄道指宿(いぶすき)枕崎線で（昭和六二（一九八七）年四月一日附で国鉄が分割民営化されて九州旅客鉄道に変更）、本作発表（昭和四〇（一九六五）年六月・八月）の二年前の一九六三年十月三十一日に開聞岳の西方海岸線の西頴娃(にしえい)駅から枕崎駅までが延伸開業している。既に考証した通り、私は本作の作品内時間を昭和三九（一九六四）年の九月上旬と推定しているから、措定時間が正しいとすれば、枕崎までの延伸開業から一年弱で、本数も少ない以上、運転手自身も走行する車両を見ることが少なく、運転手の言葉は如何にも自然である。

「〈戻るのか〉」この心内語によって読者は、**五郎の目的地が正しく枕崎方面であることを認知する**。そしてそれは**直ちに梅崎春生の「桜島」の始まりのロケーションをフラッシュ・バックさせる効果を持つ**。そうして梅崎は読者のその感じをぐいと摑んで、ダイレクトに直ちに次のシーンに繋げてゆくのである。

「街衢(がいく)」「衢」は「ちまた」と訓じ、辻・四方に分岐した道や、そのように人為的に整序された市中の路の意で、人家などの立ち並ぶ町、市街の意である。

「しごいて走る」長いものを片方の手に握り締めて持ち、もう一方の手でそれを引き抜くように強く手前に引いて布などの皺を伸ばしてパンとさせる謂いの「扱(しご)く」で、ここは街路を相当なスピードでストレートに走り抜ける感じを示す隠喩(メタファー)である。

「二十年前のここらは、すっかり爆撃にやられて、骨組みだけの建物と瓦礫だけの町であった。電線は地に垂れ、水道栓が音を立てて水を吹き上げていた。人通りは――暗闇で長いこと据(す)え放しにしたカメラの影像のように、動かないものだけが残り、人間の姿は全然消失し

ていた。今自動車が押し分けて行く風景は、人がぞろぞろと通り、建物も整然として、道はきちんと舗装してある。あの時も人通りはあったのだろう。しかしそれは五郎の印象に残っていない。廃墟の姿だけだ」、前掲通り、私は本作の作品内時間を昭和三九（一九六四）年の九月上旬と推定しているから、その措定時間が正しいとすれば、その「二十年前」で、厳密には昭和十九年となる。但し、ここでは寧ろ、厳密な意味での措定逆算時間よりも、読者は反射的に読んでいる現在時間から二十年遡るはずであるから、発表された昭和四〇（一九六五）年から「二十年前」、即ち敗戦の昭和二十年の同季（作品内では九月上旬の夏の終り）の夏へと自ずと戻ってゆくことになると私は思う。それにしてもこのシークエンスの映像的鮮烈さは譬えようもない。タクシーの中からハンディ・カメラで揺れもそのままに今の枕崎の賑やかな平和な街路や道行く人々を映している。そこにフラッシュ・バックする焼け落ちた鹿児島市街の映像。春生が確信犯でそうした映画的効果を確かに狙っている証拠は「暗闇で長いこと据え放しにしたカメラの影像のように」という直喩が図らずも証明していると言えよう。そうして、これはかの昭和二一（一九四六）年九月発表の「桜島」で村上兵曹が、この枕崎を経て、谷山海軍基地（薩摩半島東側の旧谷山市内。現在は新制鹿児島市谷山地区で市南部に位置する）に寄り、鹿児島市街を抜けて桜島へ向かう船の波止場に向かうシークエンスで、村上が見る焼け崩れたその市街の描写（以下、太字化はやぶちゃん）、

＊

鹿児島市は、半ば廃墟となっていた。鉄筋混凝土（コンクリート）の建物だけが、外郭だけその形を止め、あとは瓦礫（がれき）の散乱する巷（ちまた）であった。ところどころこわれた水道の栓が白く水をふき上げていた。電柱がたおれ、電線が低く舗道を這（は）っていた。灰を吹き散らしたような雨が、そこにも落ちていた。

＊

と完全にオーバー・ラップするようになっていることに気づくのである。

「代議士」衆議院議員の俗称。これは旧帝国議会に於いて、非公選の貴族院議員に対して、国民から直接選ばれた公選の議員の謂いで用いられた語であるが、その名残りとして現在も衆議院議員だけを「代議士」と通称する。

「肩布」肩の線に沿って装着される細長い布或はモール紐等で出来た肩章、エポレット(Epaulette)のことではあるまいか？　九月でエポレット附きのコートというのもおかしいと思うが、この印象はこれ、私が、とあるおぞましい古い映像がフラッシュ・バックしてしまったせいである。戦後すぐのことではあるが、あろうことか、エポレット附きの旧海軍将校服で国会に初登院した衆議院議員がいたのを思い出したのである。昭和二二(一九四七)年の第二十三回衆議院議員総選挙で立候補し、初当選した、終戦時に海軍主計少佐であった中曽根康弘である。

「幻覚？　テレビのことか？」精神変調をきたしている場合にありがちな、チグハグな応答である。五郎は、三田村にはそれ以前に雑談の中で、直後に出る「玄関のブザーが鳴る」ことを語っていたのであり、恐らくは「蟻」のことも、である。ブザーは幻覚ではないと言い張ることは可能だが(今風に言うなら、ピンポン・ダッシュである)、「蟻」は話の様子から三田村は間違いなく幻視と断じたに違いない。そこで三田村は日常の中で最近、「幻覚があるんじゃないか」とそれとなく水を向けたのだが、五郎は医師の「テレビはあまり見ない方がいい」という言葉から頭の中で俄然、テレビというメディアの虚妄性幻影性を解析始めてそれに集中してしまっていて、「テレビはスタジオから電波で送られ、映像となる。そう頭では判っているが、実感としてはそらごととしか思えない。影が動いているだけじゃないか」などと考えていた瞬間、三田村から突如、「幻覚があるんじゃないか」と言い掛けられたの対し、反射的のその思考のままに反応してしまって、かく答えているのである。

「いや。時々、時ならぬ時に、玄関のブザーが鳴るのです。出て行っても誰もいない」「真夜中なんかです。どうも誰かがいたずらをするらしい」「五郎は幻覚のことを、たとえばブザーのことや壁に這う蟻(あり)のことを、あまり語りたくなかった。自分は正常である。その方に話を持って行きたかった。医師の門をくぐるのと、それは矛盾しているようであったが、本能的な自己防禦が働く。自分の症状を軽く見せたいという気持が強かった」「それにもう一つの疑念があった」「〈この男は贋(にせ)医者じゃないのか〉」病的な関係妄想の片鱗が見えるようにも思われる。ただ、ここで三田村が精神科医の私邸で五郎を診察させたのは寧ろ、間違いだった。精神科医に対する「〈この男は贋(にせ)医者じゃないのか〉」といった初期妄想疑念は精神

疾患に罹患した患者でなくとも、健常者でも初診時に概ね感ずる印象である。それが、このシチュエーションではより疑惑度を増してしまうからであり、五郎の疑念も必ずしも病的と言えなくなるからである（実際の患者の場合は病院で白衣を着ていても贋医師だということがしばしばある）。幻聴・幻視は精神疾患でなくとも発生するものであり、これを以って病気だとは断定出来ない（但し、「蟻」の方は前に述べた通り、多くの精神疾患の初期中期症状にはしばしば見られるものではある）。因みに、私は精神科を受診したことが残念なことにないのであるが、若い頃、とある精神科医と知り合い、よく酒を飲んだことがあるけれども、そのとき、普通の他の科の医師とは印象が異なり（正直、医師の一般的イメージからは微妙ずれる）、会話のキャッチボールも何かどこか異様に軽いものを感じた。これは私に対して彼が不快感情を持ったからかとも思ったのであるが、後に複数の精神科医のエッセイ等で、精神科医自身の精神状態について書かれた内容を見るにつけ、精神科医はやはり精神疾患を病む患者との接触や治療に於ける患者とのラポートの経験などによって、ちょっと普通の人とは対人接触の感じがかなり違ってきてしまうと彼等自身が語っているのを読んで大いに腑に落ちたことがある（いや、やはりその彼は実は単に私が嫌いなだけだったのかもしれないが）。また、「医師の門をくぐるのと、それは矛盾しているようであったが、本能的な自己防禦が働く。自分の症状を軽く見せたいという気持が強かった」というのも、少しも異常ではない。精神疾患ではなく、明らかに病気であるのに、明らかに身体が不自由で不都合があるのに、医師に対した途端、健康を装い、不具合を語らず、若ぶり、知能明晰であることを語らんとして医師の質問とは無関係なことを滔々と語る患者や老人をよく知っている。また、「五郎は幻覚のことを、たとえばブザーのことや壁に這う蟻のことを、あまり語りたくなかった」というところにも注意されたい。彼は実は心の中でどうもブザーは「幻聴」であるようであり、蟻は確かに潰そうとしてもいないのだから「幻視」であると認識していることを示している、即ち、彼には「ブザー」の音は「幻覚」である可能性が高い、「蟻」は「幻覚」であるという**「病識」があるという**ことを示している。一般に「病識」のある精神疾患は決して重篤なものではない。因みに、**この「時ならぬ時に、玄関のブザーが鳴る」「出て行っても誰もいない」「真夜中」で「どうも誰かがいたずらをするらしい」とい**

う幻聴は、既に注しているが、春原・梶谷共著「パトグラフィ叢書　別巻　昭和の作家」の「梅崎春生」（梶谷氏担当）によって、本「幻化」を『書きはじめる半年位前から、不安に襲われたり、玄関のベルの音を聞いている』と明記されており、梅崎春生自身の共時症状であったことが判る。

「いろんなものが、重いものが、頭にかぶさっているのです。それを取除かねばならない」「重いものがね」「美容院の前を通ると、女たちが白い兜のようなドライヤーをかぶっている。五郎はすぐにそれを連想した」「ああ。つまり脱げばいいんですね」「まあそういうことです」「なるほど。しかし――」「兜をかぶっているのが常人で、今のおれの場合は兜を脱ぎ捨てた状態じゃないのか。頭がむき出しになっているから、普通人が持たない感覚を持ち、感じないものを感じているのではないか。生きているつらさが、直接肌身に迫って来るのではないか。その点おれが正常人の筈だ。瞬間そう考えたけれども、五郎は口に出さなかった」この一連の会話と描写は、梅崎春生の他の多くのユーモラスな小品群の一場面をも想起させるような、往年の春生節が美事に成功している部分である。しかもこの軽快な思考のフット・ワークを読者に示すことで五郎は実は精神病ではないのではないか、抑鬱気分は濃いけれども、所謂、軽いノイローゼ程度のものではなかろうか、という印象を読者の半数以上は持つように私には思われ、春生のここの筆致もそうした狙いを感じさせる。

「電気ショック」頭部（両前頭葉上の皮膚に電極をあてる）に通電することで人為的に痙攣発作を誘発させる、精神科の現在も行われている治療法で、「電気痙攣療法（ＥＣＴ electroconvulsive therapy）「電撃療法」「電気ショック療法」（ＥＳ）などと呼称する。ウィキの「電気けいれん療法」から引く。『ＥＣＴには大きく分けて、四肢や体幹の筋にけいれんを実際に起こすもの（有けいれんＥＣＴ）と、筋弛緩剤を用いて筋のけいれんを起こさせないもの（修正型ＥＣＴ、無けいれんＥＣＴ）に分類され、用いる電流も「サイン波」型と「パルス波」型に分類できる』。一九三八年に『イタリア・ローマのウーゴ・チェルレッティとルシオ・ビニ（Lucio Bini）によって創始された、元々精神分裂病（現在のほぼ統合失調症に当たる）に対する特殊療法として考案されたものである。日本では』昭和一四（一九三九）年に『九州大学の安河内五郎と向笠広次によって創始された。その後、他の疾患にも広く応

用されて急速に普及し、精神科領域における特殊療法中、最も一般化した治療法である』が、『作用機序は不明である』。『多くの場合、ECT はインフォームド・コンセントを得たうえで』大鬱病（現行の「大鬱病性障害」（Major depressive disorder）のこと。一般に言う鬱病（Clinical Depression）と基本的に同じい）・躁病（Mania：気分が異常に高揚して支離滅裂な言動を発したりする病態を主症状とする精神病であるが、躁状態は他の精神疾患でも見られるため、鬱状態やこの躁状態を含む広範な気分障害は現行では「双極性障害」で括られている）・統合失調症の『最終治療手段として用いられている』。『日本国内では、うつ病、躁うつ病、統合失調症などの精神疾患（まれにパーキンソン病などにも）の治療に用いられて』おり、鬱病では『重症で自殺の危険が高く緊急を要する場合や、薬物療法を充分行っても症状が改善しない場合、薬物療法の副作用が強い場合など』に、「躁うつ病」では『うつ状態で上記したような問題がある場合や、躁状態で興奮が強く緊急を要する場合など』に、「統合失調症」では『難治性の場合や、抑うつを伴い自殺の危険が強い場合、緊張型の昏迷状態など』に、「パーキンソン病」の場合は、『気分症状と運動症状の両方にしばしば効果が認められる。薬物抵抗性がある場合、あるいは抗パーキンソン病薬が副作用により使えない場合など、疾患の末期に用いられるのが典型的である』とある。「副作用」の項。『術前の全身状態の評価を適切に行い、電気けいれん療法を行った場合、安全で有効な治療法である。死亡または重度障害の危険は』五万回に一回程度『であり、出産に伴う危険よりもはるかに低いと報告されている』。『米国精神医学会タスクフォースレポートによれば、絶対的な医学的禁忌といったものも存在しない』とするが、『ドイツのゲルト・フーバーによると器質性の脳傷害と重傷の一般的な身体疾患』（特に心臓及び循環器疾患）『を禁忌としている』。『水野昭夫によれば絶対的禁忌として頭蓋内圧亢進症を挙げている』が、それでも『心血管系の障害』や『認知障害』（『通電直後に生じ、見当識障害、前向性健忘（以前の記憶はあるが、ＥＣＴ後の出来事などが覚えられなくなる）や逆行性健忘（新しいことは覚えられるが、以前の記憶、特にＥＣＴ施行直前の記憶がなくなっている）が見られることがある』。『老人に頻度が高い。多くは時間とともに回復する。失見当識・前向性健忘は比較的短時間に回復し、逆行性健忘は回復が緩徐である。また、そのまま認知機能の低下が遷延するという例も少数だが

報告されている』・『躁転』（『時に多幸的・脱抑制・易刺激性を伴う。双極性障害患者において特に躁転する頻度が高い）』・『頭痛』（四十五％程度の『患者が自覚するとされている。拍動を伴う前頭部痛を示す事が多い。電極配置や刺激強度などとは関連しない』）とあり、『妊娠女性、高齢者、若年者については合併症リスクがより高い』『ため、注意深くＥＣＴを実施すべきだ』と言われている。二〇〇一年には、年間で世界では約一千万人が『ＥＣＴを受けたと推測されている』。『事前に処方薬の調整を行う。リチウムは脳内濃度が上昇する可能性があるので中止、抗てんかん薬はけいれんを生じにくくするので中止、ベンゾジアゼピン系薬物もけいれんを生じにくくさせるので減量、抗うつ薬は術中不整脈を起こす危険性を高める可能性があるので中止。なお抗精神病薬は原則として中止する必要はない』。『患者が短時間麻酔剤の注射により入眠すると、筋弛緩剤が注射され』、約三十秒から一分後に九百ミリアンペア、パルス幅〇・二五から一・五ミリセコンド（一ミリセコンドは一千分の一秒）のパルス波電流を一秒から八秒間『こめかみまたは前額部などに通電する。通電条件は、従来までは投与電気量を指定する以外は装置の内蔵プログラムに従っていたが、最近では患者個々の生物物理学的な特性にあわせて設定を変更する試みもなされるようになった』。『なお、一般にＥＣＴを繰り返し行うとけいれん波は生じにくくなり（しばしば「けいれん閾値が上昇した」と表現される）、投与電気量を多くしなければならないと考えられている』。少数の患者は六セッション以下でも治療に反応するが、大部分の患者は六～十二セッションの範囲である。大抵は週に二セッションが実施される。『各セッションの終了後には、毎回必ず再アセスメントを実施すべきで』、『副作用が発生した場合、または患者が治療離脱を申し出た場合には、ただちに治療を中止すべきである』とある。但し、この療法自体を勧めない、或いは『廃止を訴える精神科医もいる。時間の流れに沿った治療プロセスを省略し、または薬物療法で行き詰まり、その内容の是非を医療者として検証しないうちに安易にこの療法を選択する可能性がありえる。それが医療現場の荒廃につながり、結果として治療を受ける者を苦しめるからとの理由で勧めていない場合がある』。『薬物療法との比較する形でこの療法を治療手段として行わない理由が「懲りない精神医療電パチはあかん！！（前進友の会　２００５）」にて中井久夫の論文を抜粋する形で光愛病院の黒川能孝によっ

て紹介されている』（以下、改行部を全部繋げた）。

『真に必要な症例に出会わなかった。体験の連続性を破壊する。服薬はそれ自体が体験であり、しばしば好ましい体験であり、関与的に観察できる電撃は当人の体験とはなりえない。薬物は納得ずくで服用し、治療者が微調整でき、患者が異議を申し立て、両者間に相互のフィードバックができる。患者と治療者も進歩しうる。電撃は悉無律（しつむりつ：全か無かの法則）に従い、かつ患者からのフィードバックは通常無い。薬物は本人および家族に治療への参加感を与える。電撃は彼らを蚊帳の外に置く。電撃は精神科医の人格に影響を与える。無感覚になるか神経衰弱になるかは別として。看護師についても同様。創始者自身であるはずのウーゴ・ツェルレッティも廃止を訴えた』『こうした見解は一般化できるものではないが、ＥＣＴは頻回の全身麻酔を伴うリスクもあり費用も高い。昏迷状態やがん末期の抑うつ状態で経口服用できない場合など、重症例や緊急性の高い症例に適応を限定している医師は多い』『アメリカの例を出せば』、２０００年代になっても年間十一万人に施術され、実に三十億ドルもの『多額の費用が税金や保険会社から精神科医へ支払われている。その割には治療法支持者のハロルド・Ａ・サッケイム博士の研究をみても』三百四十万人の鬱病患者のうち、『この治療法で継続的効果が得られた人が一人もいなかった。これらの治療を施された患者に実際に効果があったという証拠はない。アメリカ人精神科医の中には「（副作用である）知能の減衰は治療の重要な要素である」という者までいる』『患者の一部は「電パチ」と隠語で呼んでいる。拷問とされている』とあるが、実際に精神病院内では古くから懲罰として、電気ショックが日常的に行われていたことは、種々のルポルタージュによって知られている（ここは私の附言）。ただ、実は近年、精神科では『薬物療法に対して電気けいれん療法の利点（比較的即効性であることなど）が徐々に明らかになり、また無けいれん電気けいれん療法の開発、パルス波通電装置の開発などの電気けいれん療法自体の改良が行われたことにより、現在では再び治療において重要な地位を占めるようになっている』とあって、現行のそれは『電気けいれん療法は、脳内でてんかん発作の電気活動を起こすことによって効果を得るのが本質である。それに伴って起こる全身の筋のけいれんは、患者の状態によっては血圧を上昇させるなどの循環状態への影響、骨折の危険を伴うことがある。その

ため、循環器に疾患のある患者や、高齢その他の理由で骨折する虞がある患者には筋弛緩剤で筋を弛緩させて、麻酔科医が人工呼吸等を含めた呼吸管理、循環動態の観察を行いながら頭部に通電する「無けいれん電気けいれん療法」が行われることもある』。『ただし、精神科だけの単科の病院では、麻酔科医の確保が不可能に近いので、現在のところ実施が困難である。だが、例えば東京都の成仁病院は麻酔科医からトレーニングを受けた精神科医が麻酔を施行することでこの問題を解消することを提案している』。『一方、大学病院など総合病院では、各診療科医がいてすぐに緊急時の対処が可能な条件下で、手術に準じて手術室もしくは専用の処置室で行われている。薬剤や人員が必要になるため通常の電気けいれん療法よりもコストが高くなる欠点がある』。また、『以前より、日本においては「サイン波」（送電線を流れている電流を変圧しただけのもの）による通電が行われていたが、これは日本国外で用いられていた「パルス波」の電流に比べて認知障害などの副作用が大きいことが知られている。そのため』、二〇〇二年に『パルス波型の通電装置「サイマトロン」が日本でも認可された。パルス波の方が必要なエネルギーが少なくて済むため、認知障害などの副作用が少なく安全性も高い。なお、現在、サイン波刺激装置は本邦では生産中止となっている。その後もメーカーによるサポートは継続していたが、近々、打ち切りになることが確定している。これまで、副作用の点ではパルス波に軍配があがるが、けいれん誘発性の点ではサイン波の方が勝っているとされてきた。ガイドラインでもパルス波でけいれん誘発に失敗したとき、サイン波を使うというアルゴリズムになっていた。現状でいくとこのアルゴリズム自体が破綻することになるが、これを回避する方法論が本邦の精神科医によって提案されている』。さてもこの記載を見る限り、電気ショックによる機序やその効果の論理的解明は今も全く不明で、対症療法で、最後は如何にも怪しさがプンプンするのは私だけであろうか？　少なくともこれらを読む限り、私は受けたくない治療法だ。なお、昭和三九（一九六一）年『当時の厚生省保険局通知「精神科の治療指針」によると適応症として『精神分裂病、躁うつ病、心因反応、反応性精神病。神経症、神経衰弱、麻薬中毒、覚せい剤中毒、酒精中毒性、精神病等』があげられていた』（途中の句読点はママ）とある。本作の発表年は昭和四十年である（下線やぶちゃん）。これを見る限り、**梅崎春生もこの電気ショック療法を勧められた或い**

は受けさせられた可能性は十分にある。

「じゃ酒はどうだね。酒はただの物質だが、感情を左右するよ」五郎はこれに答えていない。答えたのかも知れないが、春生は記していない。これが気になる。何故なら、既に述べた通り、私は梅崎春生はまず間違いなく、アルコール依存症であり、しかもそれは死因の肝硬変の原因の有力な一つであり、それがアルコール性精神病或いは抑鬱症状を引き起こしたとも考えられると認識しているからである。但し、ここで五郎が述べるように、酒の過飲以前に春生に何らかの別な精神疾患があった可能性は否定は出来ないものの、私は春生の精神変調の主因はアルコール性精神病様の病態と考えているのである。されば、このシーンは春生自身が是が非でも心理的に否定したい、無視したい部分である。だから、ここで会話が途切れているのだと私は思うのである。「パトグラフィ叢書　別巻　昭和の作家」の「梅崎春生」（梶谷氏担当）には『恵津夫人は、アルコール中毒を否定しているが、やはりアルコール中毒症状とみるべきであろう』（下線やぶちゃん）とあるが、私は恵津夫人の否定は、ある意味、夫春生から繰り返し、アルコール中毒ではない、俺の心の不安や変調は酒によるものなんかではない、という絶対否定を何度も語られたことによる発言のように思われるのである。」

「様子がへんかね？」

五郎は丹尾に言った。ハイヤーは海岸道から折れて、山間に入っていた。折れたところから道がでこぼこになり、車は揺れた。

「どんな風にへんなのか」

「ええ。足がふらふらしているようだし、初めは酔っぱらってるのかと思いましたよ。話しかけても返事をしないしね」

「ああ。まだ薬が体に残ってんだ。それにしばらく歩かなかったもんだから、足がもつれる」

「病院ですか。留置場じゃなかったのか？」

「うん、病院で寝ていた。睡眠剤を服（の）んでね」

丹尾はしばらくして言った。
「自殺をくわだてたんですか？」
「いや。病院に入ってから、毎日服んだ。治療のために服まされたんだ。毎日のことだから、だんだん蓄積して、酩酊（めいてい）状態になるんだね」
さっき飲んだ焼酎が、車体の震動につれて、体のすみずみまで廻って来る。しゃべり過ぎると思いながら、五郎はしゃべっていた。
「なぜ酩酊させるんですか？」
「不安や緊張を取除くためさ」
「なるほど。酔っぱらうと、そんなのがなくなるね」
丹尾は合点合点をした。
「それでもう醒めたんですか？」
五郎は首を振った。睡眠薬の供給は中止されたと、五郎は思う。白い散薬、ズルフォナールという名だが、それが全然来なくなった。しかし服用中の昏迷状態は、だんだん弱まりながらも続いているようだ。退院しても半年ぐらいは正常に戻らないだろうと、医者も言っていた。しかもまだ正式に退院したわけではない。途中でふっと飛び出して来たのだ。朝そっと背広に着換えていた時、大正エビが彼に言った。大正エビというのは、テンプラ屋の息子のあだ名である。
「どうかしたんですか？」
「いや。何でもない」
五郎はネクタイを結ぼうと努力しながら答えた。ネクタイの結び方を忘れて、すぐにずっこける。抑圧がとれると、物忘れしやすくなるのだ。と同時に、色情的になる。酔っぱらいが酒場で醜態を見せると同じことだ。その点ではズルフォナールは酒よりも強く作用する。やっとネクタイが結べて、彼は脱出した。
「いや。まだ醒めていないんだ」
五郎は丹尾に答えた。
「しかし不安や緊張は幾分解けたようだ。飛行機に乗る時、気分がへんになりやしないかと

思ったんだが、別にその徴候はなかったね」
飛行中はぼんやりした無為しかなかった。潤滑油が洩(も)れ始めた時も、不安も驚愕もなかった。この旅客機に乗っている目的は自分にも判っているつもりだったが、それが墜(お)ちるとか炎上するという実感は全然なかった。
「へんな病院ですね」
丹尾がいった。
「そんな療法、聞いたことがない。どこの病院です？」
「もうここらが知覧(ちらん)です」
運転手がぽつんと言った。
「葉煙草の産地でね、昔は陸軍特攻隊の基地でした」
それきり会話が跡絶えて、車内はしんとなった。丹尾は洋酒の小瓶をポケットから出して、残りを一息にあおった。窓ガラスをあけて、道端にぽいと放る。ちらと見た丹尾の掌は異常に赤かった。
「ぼくは昔、戦時中に知覧に来たことがある」
レインコートの袖で口を拭きながら、丹尾は誰にともなくいった。
「おやじと兄嫁に連れられてね」
「なぜ知覧に来たのかね？」
五郎は訊ねた。
「兵隊としてか？」
「いえ。兄貴がね、飛行機乗りとして、ここにいた。別れを告げに来たのさ」
丹尾は眼を据えて、窓外の景色を眺めていた。いぶかしげに言った。
「運転手君。これが飛行場か？」
舗装されたかなり広い道が、まっすぐに伸びている。両側は一面の畠で、陽光がうらうらと射し、遠くに豆粒ほどの人々が働いていた。
「ええ。そうです」
運転手は車を徐行させながら答えた。

「この道が昔の滑走路だったそうですよ。私は戦争中のことは知らないが」
「もっともうっと広かった。畠などなかった」
丹尾は両手を拡げた。あまり拡げ過ぎたために、丹尾の右腕は五郎の胸に触れ、圧迫した。それから両手を元におさめた。
「こんな畠なんか、なかった。一面の平地だった！」
丹尾の声は怒っているように聞えた。五郎も漠(ぼく)たる平蕪(へいぶ)や並んでいる模型じみた飛行機が想像出来た。それは古ぼけたフィルムのように、色褪(あ)せている。しかし丹尾の風貌を、うまくそこにはめ込むことが出来なかった。やがて五郎は言った。
「その時、君はいくつだった？」
「十三、いや、十四だった」
「義姉(ねえ)さんはきれいなひとだっただろう」
まだ若い、化粧もしない顔、もんぺに包まれたすべすべした姿体、それだけが幻の風景の中に動いて、五郎の内部の病的な情念を刺戟(しげき)した。丹尾はそれに答えず、運転手に声をかけた。
「ちょっとここらで停めて呉れないか」
車が停って、二人は降りた。つづいて運転手も。丹尾は掌をかざして、あちこちを見廻した。やがてカメラを取出した。映画などで見た特攻隊の若い未亡人の姿を想像しながら、五郎は訊ねた。
「その時義姉(ねえ)さんは、いくつだった？」

［やぶちゃん注：「ズルフォナール」持続性熟眠剤スルホナール（Sulfonal）であろう。この綴りだと、近年まで医事で使用されたドイツ語では発音が「ズルフォナール」に酷似すると思う。平凡社「世界大百科事典」（第二版二〇〇六年刊）の「催眠薬 hypnotics」には「スルホナール」を挙げ（コンマを読点に代えた）、『バルビツレート以前に使用されているが、現在は特殊な場合以外には使わない。安全域が小さく、排出が遅い。精神科疾患に一回』〇・五グラムとある（この「バルビツレート」（barbiturate）は不眠症や痙攣の治療、手術前の不

安や緊張の緩和のために用いられる中枢神経系抑制薬物で、向精神薬群を総称する「バルビツール酸系」薬物とは同義同語である。ウィキの「バルビツール酸系」によれば、『構造は、尿素と脂肪族ジカルボン酸とが結合した環状の化合物で』、『それぞれの物質の薬理特性から適応用途が異なる』。『バルビツール酸系の薬は治療指数が低いものが多く、過剰摂取の危険性を常に念頭に置かなければならない』。一九六〇年代には、『危険性が改良されたベンゾジアゼピン系が登場し用いられている。抗てんかん薬としてのフェノバルビタールを除き、あまり使用は推奨されていない』。『乱用薬物としての危険性を持ち、向精神薬に関する条約にて国際的な管理下にある。そのため日本でも同様に麻薬及び向精神薬取締法にて管理されている』とあり、以下にチオペンタール・ペントバルビタール・アモバルビタール・フェノバルビタールといった薬剤名が示されている)。また、同じく「世界大百科事典」の、五郎が受けたところの「持続睡眠療法 continuous sleep treatment」の項に、『鎮静・催眠性の薬物を投与して持続的な傾眠ないし睡眠状態にすることによって精神障害を治療する方法。ウォルフ O. Wolff』(一九〇一年)『がトリオナールを用いたことに始まるが，さらにクレージ J.Kläsi』(一九二一年)『がソムニフェンを使用して早発性痴呆や錯乱状態の患者を治療したことで精神病に対する一つの治療手段となった。日本でも下田光造』(一九二二年)『によって躁鬱(そううつ)病患者の治療にスルホナールが用いられ，これが盛んに行われた時期がある。治療期間は』十日から二十日前後で、『主として鬱病や躁病，精神分裂病の興奮状態などがその治療対象となった。しかし，精神障害の治療に向精神薬が導入されてからは定式的なこの療法が行われることはなくなっている』ともある(下線やぶちゃん)。ネット上の信頼出来る現在の精神医学・薬学系サイトなどでは、スルホナールは睡眠導入剤(睡眠薬)としては現在は全く使用されていないと断言している記載が多い。因みに、梅崎春生の小説を読んでいると、こうした「ズルフォナール」のような薬剤名や、前に注した「ヴァスキュラー・スパイダー」(vascular spider：クモ状血管腫)、「ハビバット」(halibut：ハリバット。春生は確か「鰈」の英語としているが、これは厳密には北洋産の超巨大(全長一〜二メートル、大きい個体では三メートルを越えるものもざらである)カレイである条鰭綱新鰭亜綱棘鰭上目カレイ目カレイ科オヒョウ属 *Hippoglossus* のオヒョウ類を指す)等の、一般的

でない外来語の特定単語の発音に対する、一種のフェティシズムを私は強く感じる。これは彼を病跡学的に検証する際の特異点であるように思う。

「大正エビ」甲殻亜門軟甲（エビ）綱十脚（エビ）目根鰓（クルマエビ）亜目クルマエビ上科クルマエビ科コウライエビ属コウライエビ *Fenneropenaeus chinensis* の別名。高級食材であるクルマエビ科クルマエビ属クルマエビ *Marsupenaeus japonicus* に似るが、クルマエビの成体が概ね体長十五センチメートル程度（但し、クルマエビの♀の中には三十センチメートルに達する個体もいる）であるのに対し、コウライエビは二十センチメートルほどで大きい。クルマエビには黒い縞が頭胸甲には斜めに、腹部には横に入るが（これは概ねクルマエビのみに見られる特徴であって多種との識別は容易である）、コウライエビの体には模様はなく、尾だけが黒みを帯びる。かつては日本でも多く漁獲されたが、主に黄海・渤海・東シナ海の朝鮮半島沿岸に分布し、秋から冬にかけて獲られ、現在はその殆んどが輸入物である。安価なためにクルマエビの代用品として人気が高かったが、近年は高めに推移している。この「大正海老」という異名は、以上で主に参照したウィキの「クルマエビ」の中の、近縁種「コウライエビ」の項には、『日本では大正時代から多く漁獲されるようになったが、当時は商品名が複数あったため、主な水産会社が協議して「タイショウエビ」の商品名となった』とするが、ウィキの単独ページの「コウライエビ」の方には、輸入物が増えた頃の『輸入業者である林兼商店（後の大洋漁業）と日鮮組（後の日本水産）の共同事業「大正組」に由来する』とある。後者の方が真相らしく読める。

「知覧」「葉煙草の産地」鹿児島県薩摩半島の南部中央の当時の鹿児島県知覧町（ちらんちょう）。現在は合併して南九州市内で、武家屋敷が残っていることから「薩摩の小京都」と呼ばれる。茶の名産地として認識しているものの、現在の知覧は調べて見ても国産葉タバコの名産地ではないように思われる。しかし、国産の葉タバコ（ナス目ナス科タバコ属タバコ *Nicotiana tabacum*）の買入実績では、一位が熊本県、二位が宮崎県、三位が青森県、四位が岩手県、そして五位に鹿児島県がランクしており、知られた「鹿児島おはら節」では、「花は霧島　煙草は国分　燃えて上がるは　オハラハー　桜島」とあるぐらいだから（国分は鹿児島県の薩摩地方と大隅地方の中間にあった旧市で現在は合併して霧島市となった）、禁煙、基、「葉煙

草」がここまで嫌われる近年までは知覧も名「産地」であったものとは思われる。

「陸軍特攻隊の基地」これは亡き母からもよく聴いた。ウィキの「知覧特攻平和会館」によれば、太平洋戦争直前の昭和一六（一九四一）年十二月に『知覧町に陸軍の飛行場が完成。飛行場は直ちに太刀洗陸軍飛行学校の分教所』が設けられた。『当初こそ九州島内や朝鮮（現・韓国）の各地に設けられた分校と同じく少飛や特幹の教育・訓練を行うことが目的とされていたが』、昭和一九（一九四四）年『夏以降、陸軍航空隊の戦術が艦船への体当たりを柱とする特攻を主軸とするものに転換。この過程で近い将来の本土決戦（決号作戦）に備えた航空関連軍学校の軍隊組織化が進められた』。以下、ウィキの「特別攻撃隊」から引くと、特攻作戦は『知覧・都城などを基点に作戦が遂行され』、『陸軍航空隊の特攻隊「振武隊」の知覧基地では知覧高等女学校の女生徒が勤労奉仕隊として振武隊員の寝床作りから食事、掃除、洗濯、裁縫、などで身の回りの面倒を見ていた』。『彼女らは「なでしこ隊」と呼ばれ、当初は』十八人で『あったが、振武隊員が増えるに従って順次増員され延べ人数は』百人に『なったという。打ち解けるに従って隊員は彼女らを妹の様にかわいがり、彼女らも隊員と一緒に談笑したり、手作りのマスコットを送ったりと隊員の心の支えになっていた。彼女らに家族への遺書を託したり、自分の夢や本心を打ち明けたりする隊員もいたという』。『海軍にはなでしこ隊の様な女性の勤労奉仕隊はいなかった為、特攻出撃しながら機体の不調で知覧基地に不時着した海軍の江名武彦少尉は、なでしこ隊ら女性が知覧基地で働いているのを見て部下と「陸軍はいいな」と驚いたと言う』。『知覧には鳥濱トメが営む陸軍指定の食堂「富屋食堂」があり、多くの特攻隊員が食事に来店していた。トメはできうる限り特攻隊員の面倒を見ようと思い、家財を処分してまで食材を仕入れて隊員のどのような注文にも応えようとし、多くの隊員も足繁く富屋食堂に通っていた』。『また隊員もそんなトメを慕っており、いつしか「特攻の母」と呼ばれる様になった。特攻隊員は富屋食堂で出撃の数日前から盛大な酒宴を催したが、トメに家族への遺書や言付けを預ける隊員も多かった』。『トメは、戦後に放棄された知覧基地跡に知覧特攻平和観音堂の建立の旗振り役となったり、遺族へ特攻隊員の言付けを伝えたり、生前の姿を聞かせたり、知覧を訪れる遺族の為に旅館を買い取って宿泊させたり、知覧基地の語り部になったりと特攻隊員の慰霊に尽力している』と

ある。

「ちらと見た丹尾の掌は異常に赤かった」手掌紅斑。掌全部、特に周辺部や親指の付け根の脹らみの部分に生ずる顕著な血管拡張性紅斑を言う。アルコール依存症や中毒症、肝臓病患者（中でも慢性肝炎や肝硬変）の顕在症状としてごく普通に現れ、しばしば先に掲げたクモ状血管腫（vascular spider：顔面や前胸部などの上大静脈領域等に、蜘蛛が足を広げたように、血管が拡張する症状。観察すると中心部の血管が拍動しているのが判る。肝硬変などの信仰した肝疾患で顕著に見られる。梅崎春生の小説にも、このヴァスキュラー・スパイダーのことがたびたび登場する）を合併する。肝臓障害や不全によって血中のエストロゲン（卵胞ホルモン・雌性ホルモン・発情ホルモンとも呼ぶ）が増えるために毛細血管が拡張して起こると考えられている。丹尾はすでにアルコール中毒者風に描かれており、何度も述べる通り、春生もアルコール依存症であったと推定され、春生の死（本作はその直前に書き上げられた）も肝硬変であった。**トリック・スターたる丹尾の明示部分**と言える。

「十三、いや、十四だった」既に私は丹尾章次の生年を昭和三九（一九六四）年当時三十四歳の丹尾章次は凡そ昭和五（一九三〇）年とした。満で十四ならば昭和十九年である。この丹尾の兄訪問が夏以降と想定するならば、前注にある通り、「別れを告げに来た」彼の兄は特攻隊員であった可能性がすこぶる高くなり、五郎の推測もそれであり、次の段で直ちにそれが事実としても正しいことが明らかにされる。**ところが**、そこでは鮮やかに、五郎もそして我々も、あっさりすくい投げを喰らわされることになる。

「もっともうっと広かった。畠などなかった」「丹尾は両手を拡げた。あまり拡げ過ぎたために、丹尾の右腕は五郎の胸に触れ、圧迫した。それから両手を元におさめた」「こんな畠なんか、なかった。一面の平地だった！」「丹尾の声は怒っているように聞えた」老婆心乍ら、最初の台詞は「もっと／／も／うっと（！）／広かった（！）」で、梅崎春生のシナリオ的な演出の上手さが台詞書きによく出ている。丹尾の生（なま）の凄絶なキャラクターが初めて読者に初めて開示される。ここで読者は五郎などよりも、**この丹尾――五郎のトリック・スターとしての丹尾――に異様に惹かれてゆくようにセットされてある**。そうして、その――**人生の痛々しい聖痕（スティグマ：stigma）に相当するもの――が丹尾に「ある」**ことは確か

に事実であった。がしかし、それは――五郎も我々も推し測りも、想像もし得なかった全く別な事実――であることが、次の段で突如、明らかにされ、その意外性に読者はまたしても驚愕させられるのである。

「平蕪」雑草の生い茂った野原。

「義姉(ねえ)さんはきれいなひとだっただろう」「まだ若い、化粧もしない顔、もんぺに包まれたすべすべした姿体、それだけが幻の風景の中に動いて、五郎の内部の病的な情念を刺戟した」

「映画などで見た特攻隊の若い未亡人の姿を想像しながら、五郎は訊ねた」「その時義姉さんは、いくつだった？」梅崎春生の強烈な確信犯の伏線構造が見て取れる。これらは明らかに前のエズルフォナールは酒よりも強く作用」し、「抑圧がとれる」と同時に、色情的になる」部分に明らかにフィード・バックするように、一見、五郎の病的な猥雑性を執拗に強調するように描かれてある。春生は一見、意地悪く読者に問いかけているように見えはしないか？

――あなたは五郎を正常だと思っていますね……

――そうです。無論、彼は正常なのです……

――そうです。正常な人間なら「性欲」を持ちますね……

――そうして、「性」への欲求は同時に……

――「生」への欲求なんですよ……

――「性」的な執拗な想像は治療薬物による妄想なんかではないんだ……

――「生」の欲求なんだ……

と、でも。……しかしそれも実は次の段で体(てい)よくひっくり返されてしまうのである（こうした一見滑稽などんでん返しは春生の他作品で極めてよく見られる手法ではある）。――いや！　実は核心はそんなところにあるのではあるまい。ここで五郎が、殊更にかくも性的なイメージの妄想的再現に拘るのは、「五郎も漠たる平蕪や並んでいる模型じみた飛行機が想像出来た」が、しかし、「それは古ぼけたフィルムのように、色褪せて」おり、しかも当の、怪しくもどこか自分の世界と、あるのっぴきならない共有部分を持っているかも知れぬと無意識に感じ始めたところの、当の「丹尾の風貌を、うまくそこにはめ込むことが出来なかっ

た」からこそ、異様な感覚的共時性を強引に創り出すために、ここで妄想しているのだと私は思うのである（しかも、その性的妄想は次段で極点を示す）。そうして「うまくそこにはめ込むことが出来なかった」予感は、前の注何度も仄めかした通り、次の段で五郎と読者を裏切りつつ、べろりと明らかにされるのである。]

病院の二階の突き当りに、付添婦たちの詰所があり、炊事所や粗末な寝所があった。その手前に梯子段（はしご）があって、物干台に通じている。五郎が入院して一週間後、梯子を登ろうとすると、台上に二人の姿が見えた。一人は大正エビで、片手を頬に当てて泣いていた。夕方なので、逆光の中の輪郭だけが見える。二重に見える。大正エビをなぐさめているのは、看護婦であった。すすり泣きは断絶して聞えて来たが、会話の内容は判らなかった。五郎は高い台での展望を求めて来たのだが、段の途中で足が動かなくなる。なぜ大正エビが泣いているのか。家に戻りたいとでも言っているのか。

逆光線のために看護婦の白衣が透けて、体の形が見えた。女体の輪郭が黒く浮き上っている。それが突然五郎の情感をこすり上げる。眺めるのに絶好の位置だったし、女が体軀を動かすにつれて、肉や皮膚のすれ合いが、自分自身の感触のようになまなましく感じられた。そういう情の動きは、この一年ほどの間、全然五郎にはなかった。

〈これだな。医者が言ってたのは〉

抑圧がとれると、押えたものが露出して来る。入院して日が浅いから、どの看護婦か判らない。五郎は気持を押えようとした。医者の予言した通りに、あるいは薬の言うままになってたまるか！　入院の時から、五郎は心の片隅で決心していたのだ。

〈おれはそこらの人間とは違う。ふつうの人間と同じ反応は示してやらないぞ！〉

五郎は力んでいた。無用の力みで入院して来た。やがて気持をもて余しながらも、ねじ伏せるようにして、そろそろと梯子段を降りた。部屋に戻ると、古い週刊誌を読んでいた中年の付添婦が、五郎の顔を見て言った。

「どうしたんです。眼がへんですよ」
「今朝からものが二重に見えるんだ」
五郎はベッドにもぐり込みながら答えた。
「お薬のせいですよ」
付添婦はふつうの声で言った。
「もっとちらちらして来ますよ」
五郎は毛布を額まで引き上げて、眼をつむっていた。欲情と嫉妬が、しきりに胸に突き上げて来た。彼は毛布の耳をつかみながら、低くうめいた。瞬間、彼は瀆(けが)れた。——その後もっとひどいことがあった。ほとんど昏迷の域にあったので、詳細の記憶はない。
「ぼくの写真をとって呉れませんか」
畠を背景にして立って、丹尾はカメラを五郎に手渡した。
「ただそのポッチを押せばいいんです」
五郎はカメラを眼に持って行き、ファインダーの真中に丹尾の姿を置いた。そして姿を片隅にずらした。ポッチを押す。丹尾の顔の半分と、広漠たる畠が写ったと思う。それから位置をかえて三枚とる。丹尾はあまり面白くなさそうにカメラを取り戻した。
「あんたも写して上げよう」
「御免だね」
五郎ははっきりと断った。
「こんなとこで写してもらいたくない。君はこんなとこを写して、どうするんだ?」
「兄貴にやるんですよ」
「兄貴?　生きているのかい?」
「ええ」
丹尾が先に車に這い込んだ。
「何だか運よく他の基地に廻されてね、その中戦争が終ってしまった。今は武生(たけふ)でペンキ屋をやっています」
車が動き出した。特攻隊からペンキ屋か。ふん、という気持がある。でも誰にもそれをと

がめ立てする権利はない。そうと知ってはいるが、五郎はかすかに舌打ちをした。
「幸福かね？」
ぎょっとしたように、丹尾は五郎の方を見た。
「幸福に見えますか？」
丹尾は表情を歪(ゆが)めていた。
「一箇月前にね、妻子を交通事故でうしなってしまった。都電の安全地帯にいたのに、トラックの端っこが引っかけたんだ」
丹尾は笑おうとしたが、声が震えて笑いにはならなかった。
「それで元のもくあみさ。以来酒びたりだよ。それで会社に頼んで、本社勤めをやめ、南九州のセールスマンに廻してもらった。いや。廻されたんだ。なぜぼくが羽田で、あんたに興味を持ったか、知らせてやろうか？」
「誰のことを言ってんだね？」
「あんたのことさ。あんたは自殺をする気じゃなかったのかい？」
「おれが？」
五郎は座席の隅に身体を押しつけた。丹尾の眼は凶暴に血走っていた。
「そんな風に見えたのか」
しばらく五郎は丹尾の眼を見返していた。
「おれは自殺しようとは全然思っていない。おれとは関係がない何かを確めようと思ってはいるけどね。しかし、奥さんを死なしたのは、君のことか？」
丹尾は怪訝(けげん)な表情になった。
「ぼくのことじゃなかったのか？」
「そうだよ。君のことなんか聞いてやしない」
五郎は警戒の姿勢を解かなかった。他人の気分に巻き込まれるのは、今のところ心が重かった。
「武生のペンキ屋さんのことだ」
「ああ。あれか」

がっくりと肩を落した。

「あれは幸福ですよ。兄嫁との間に四人も子供をつくってさ。しかし兄貴が幸福であろうとなかろうと、今のぼくには関係ない」

「誰だって他の人とは関係ないさ」

五郎はなぐさめるように言った。四人も子供を産んだ中年の女を考えたが、索漠として想像までには結ばなかった。

「他の人と何か関係があると思い込む。そこから誤解が始まるんだ」

運転手は会話を耳にしているのかどうか、黙ってハンドルを動かしている。赤い両掌で丹尾は顔をおおった。十分ほどそうしていた。五郎は窓外を眺めていた。丹尾は掌を離した。

「鹿児島一円を廻ったら、熊本に行く。阿蘇に登るつもりです」

「阿蘇にも映画館があるのかい？」

「阿蘇にはありませんよ。山だから」

丹尾は言った。

「あんな雄大な風景を見たら、ぼくの気分も変るかも知れない。そうぼくは思う」

「うまく行けばいいがね」

［やぶちゃん注：「二重に見える」複視である。付添婦が後で言うように、使用薬剤の副作用である。ただ、ここで「五郎は高い台での展望を求めて来た」とあり、大正エビが泣いており、それを看護婦が慰めているのを垣間見て、「段の途中で足が動かなくな」っている。寧ろ、外的理由からそこで止まって、そっと彼らに気づかれないように音を立てずにゆっくりと病室へ戻ったのは寧ろ幸いであったと言える。複視が発生すると、遠近や段差の目測が出来なくなり、階段の昇降やただの段差であっても歩行困難に陥り、転倒の危険性が頗る高まるからである。直後に病室で付添婦が五郎に「眼がへんですよ」と言いかけ、「お薬のせいですよ」と述べているところから、付添婦も多くの患者で見慣れていることが知れる。ただ、付添婦の「眼がへんですよ」というのは、見た目の左右或いは片方の眼球位置が激しい斜視を起していることを意味しており、これは眼を動かす各種神経の麻痺症状である。現在、

スルホナールは薬剤として使用されることが少ないようで、薬学サイトの詳細データをダウンロードして確かめたが、副作用の「複視」の記載はない。但し、古い資料に「眩暈(めまい)」を明記しており、催眠療法に用いたスルホナールの一般的副作用と考えてよいであろう。

「逆光線のために看護婦の白衣が透けて、体の形が見えた。女体の輪郭が黒く浮き上っている。それが突然五郎の情感をこすり上げる。眺めるのに絶好の位置だったし、女が体軀を動かすにつれて、肉や皮膚のすれ合いが、自分自身の感触のようになまなましく感じられた」夕方なので、逆光の中の輪郭だけが見える」ここは直接には前段の丹尾の特攻兵であった兄の妻の妄想にによってフラッシュ・バックしたものであるが、**私はこれが「白衣」の「看護婦」、白衣の天使、であることから、実は次の章「白い花」に出る「エンゼルズトランペット」――それを示す女――への秘かな伏線である**と強く感じている。

「これだな。医者が言ってたのは」これは直後の「抑圧がとれると、押えたものが露出して来る」というのを直接には指すが、寧ろ、前段で五郎の言葉として語られた、恐らくの医師のインフォームド・コンセントであったろう、「抑圧がとれると、物忘れしやすくなるのだ。と同時に、色情的になる。酔っぱらいが酒場で醜態を見せると同じことだ。その点ではズルフォナールは酒よりも強く作用する」を指すと考えた方が「色情的になる」とあって遙かに具体で腑に落ちる。

「おれはそこらの人間とは違う。ふつうの人間と同じ反応は示してやらないぞ!」私は九年前の夏、真鶴で総合学習の海岸生物観察の指導中、岩場で転倒して右手首の骨を粉砕（右橈骨遠位端骨折）し、二度の全身麻酔の手術を受けた（一回目は失敗）。麻酔をかけられる際、『俺はそう簡単にゃ眠らせられないぞ!』と思ったものだが、「三つ、数えて下さい。」と言われ、二度の手術とも「三」を数える前に図らずも口惜しくも――眠っていた。

「瀆(けが)れた」「そういう」性的欲情「は、この一年ほどの間、全然五郎にはなかった」のに、ここで突然、図らずも口惜しくも――エレクトして射精してしまった――のである。

「五郎はカメラを眼に持って行き、ファインダーの真中に丹尾の姿を置いた。そして姿を片隅にずらした。ポッチを押す。丹尾の顔の半分と、広漠たる畠が写ったと思う」このシーン、実に映像的である。太宰なんかより、遙かに映画芸術的で慄っとするほど素敵な、五郎のフ

アインダーの中の構図ではないか！

「武生」丹尾の出身地として既出既注。

『「幸福かね？」／ぎょっとしたように、丹尾は五郎の方を見た。／「幸福に見えますか？」』この以下のやり取りでは五郎が健常者で、丹尾の反応が奇異であることが読者によく判るように描写されている。しかし直後にチグハグな応答をした丹尾の地獄が明示されることで、読者はそちらに吃驚する（それによって丹尾への読者の違和感は寧ろ急激に緩められ、五郎に対するのと同等或いはそれ以上の同情や憐憫が人によっては五郎の分身である丹尾には齎されるように、作者によって仕組まれているのである。

「一箇月前にね、妻子を交通事故でうしなってしまった」丹尾の挙動の不審さがここで初めて理解される。**五郎同様、丹尾もやはり聖痕（スティグマ）――心傷（トラウマ：trauma）としての「死」のスティグマを持っている**のである。

「おれは自殺しようとは全然思っていない。おれとは関係がない何かを確めようと思ってはいるけどね」「おれは自殺しようとは全然思っていない」これは言葉通りにとってよい。彼は精神変調を起して始めた初期も「ふっと気がつくと、考えていることは『死』であった。死といっても、死について哲学的省察をしているわけでない。自殺を考えているのでもない。ただぼんやりと死を考えているだけだ」と述べており、**自殺願望を匂わせるようなものは、ここまで一ヶ所もない**と言ってよい。但し、**「おれとは関係がない何かを確めようと思ってはいる」というのは丹尾への警戒心が負荷としてかかっている慎重な隠蔽である。五郎は自分の精神の変調の濫觴にあるものを捜し求めに来たのであって、謂わば今の「おれ」という、惨めに狂人のレッテルを貼られ、人間扱いされていない「おれ」という存在の、正当な真実を、明らかにして呉れるはずの、あるもの――ある記憶を――「確めようと思ってはいる」**のである。

「誰だって他の人とは関係ないさ」「他の人と何か関係があると思い込む。そこから誤解が始まるんだ」五郎の名言集の一つである。

『「阿蘇にも映画館があるのかい？」／「阿蘇にはありませんよ。山だから」』面白い会話である確かに阿蘇「山」には映画館はないに決まってる。私は「元炭鉱があったから、阿蘇「周

辺」には映画館はそれなりにあったろうに?」と呟いたのだが、その「元炭鉱があった」というのは、実は大好きな「空の大怪獣ラドン」（東宝昭和三一（一九五六）年公開）の設定が阿蘇山にある大規模な炭鉱だったからであった。ところが！　阿蘇に炭鉱はなかった！　江島達也氏の「アトリエ隼　仕事日記」の『「空の大怪獣ラドン」のロケ地だった鹿町炭鉱』に『阿蘇の近くにある鉱山から、ラドンが孵化するという設定なのですが、実際には阿蘇近郊に炭鉱等がなかった為、ロケ地として、長崎県北松浦郡の鹿町炭鉱がロケ地として選ばれています』とある！　なお、同炭鉱があった北松浦郡鹿町（しかまちちょう）町はもとは「ししまち」と読み、「しかまち」と読みを変えたのはこの「ラドン」公開の二年後であるから、厳密には鹿町（ししまち）炭鉱と読むべきと思われる、なお、江島氏によれば同炭鉱は昭和三八（一九五三）年に閉山、町からは映画のような賑わいは失われたとある。なんとなく淋しい。なお、「FORBIDDEN KYUSHU」の「佐世保市：日鉄鉱業鹿町炭鉱　＃３［ラドンに見る鹿町炭鉱の風景］」も必見！（すまないが私は特撮オタクなんである）]

枕崎で車を降りた。五郎は空腹を感じた。機上食と、鹿児島でうどんを少量。口にしたのはそれだけで、車で長いこと揺られて来た。日はまだ高い。緯度の関係で、日没は東京より一時間ほど遅いのだ。しかし空腹はそのためだけでない。病院の安静の一日と違って、今日は大幅に動き廻った。何か食べましょうや、と丹尾は話しかけた。さっきの激情から、やっと自分を取戻したらしい。

「宿屋の飯を食うほど、ばかげたことはない。それがセールスマンの心がけですよ」

トランクを提げて、先に歩き出した。後姿はずんぐりして、いかにもこのなまぐさい街の風物にぴったりだ。トランクだけが独立した生物のように上下動する。

〈ＳＮ氏のトランク、か〉

五郎の頬に隠微な笑いが上って来る。何もかも間違いだらけだ。おれも、あのトランクも、ここに来るべきじゃなかったのではないか。しかしすぐに笑いは消えてしまう。

今まで車で眺めて来たいくつかの小部落は、緑の樹々の間に沈んでいた。小川がそばを流れていた。今見る枕崎の街は、ほとんど木がない。むき出しにした木造家屋だけである。かろうじて柳の街路樹があるが、幹の太さが手首ぐらいで、潮風にいためられてか葉もしなびている。ふり返ると町並の向うに、開聞岳の山容が見える。魚の臭いでいっぱいだ。庭内にむしろを敷いて、一面に茶褐色の鰹節（かつおぶし）を干した家がある。そのそばに猫が丸くなって眠っている。バー。パチンコ屋。食堂。特製チャンポン。空気は湿っていた。

「ここに入ろうよ」

食堂に入る。チャンポンと割焼酎を注文する。焼酎の方が先に来た。

「割焼酎というのはね」

丹尾が五郎の盃（さかずき）に注いだ。盃というより、小ぶりの湯呑みに近い。黒褐色の厚手のやきものだ。

「水で割るんじゃない」

「何で割るのかね？」

「清酒。いや、合成酒でしょう。水で割ると、かえってにおいが鼻につく」

つまみの塩辛を掌に受けて、丹尾は焼酎とともに口に放り込む。盃を傾けながら、五郎はその赤い掌を見ていた。

「君。肝臓が相当いかれているようだね」

「そうですか」

丹尾は平気な顔で答えた。

「そうでしょうな。あれから毎日酒ばかりで、アル中気味だ」

「酒で悲しさが減るかい？」

「いや。やはりだめだね。やけをおこして、いっそのこと死のうかと思うけれど――」

チャンポンが来た。丹尾は箸を割って、先をこすり合わせた。

「さっき飛行機で、油が流れ始めたでしょう。ぎょっとしたね。あの航空機はあぶないんでね」

「あぶないことは知ってたんだろ」

「知ってたよ。墜落するかも知れない。墜落したらしたで、それもいいじゃないか。そう思って乗ったんですが、やはりだめだ。こわかったね。だからぼくはあんたに名刺を渡した」
「名刺をね。どうして？」
「海に墜(お)ちて、死体が流れて判らなくなってしまう。あんたの死体だけでも見付かりゃ、ぼくの名刺を持っているから、ぼくが乗っていたことが判る」
五郎はポケットから丹尾の名刺を出して、裏表を眺めた。
「判ってどうなるんだ？」
「あとで考えてみると、どうもなりゃしない。恐怖で動転してたんだね。あんたはほんとにこわくなかったんですか？」
五郎はしばらく返事をしなかった。チャンポンの具のイカの脚をつまんで食べていた。イカは新鮮で、しこしこしてうまかった。
「こわくはなかった。いや、こわいということは感じなかった。第一墜ちることを、考えもしなかった。ぼんやりしてたんだな」
「そうですか」
丹尾はまた盃をあおった。
「あんたはなぜ東京から、枕崎くんだりまでやって来たんです」
「そりゃ君と関係ないことだよ」
彼はつっぱねて、チャンポンに箸をつけた。豚脂(ぶたあぶら)をふんだんに使って、ぎとぎとし過ぎていたけれども、空腹には案外うまかった。二十年前は物資が乏しく、こんな店もなかったし、鰹節も干してなかった。貧寒な漁村であった。しかし彼はその頃鮮烈な生のまっただ中にいた。丹尾も箸を動かしながら言った。
「今日はここに泊るんでしょう」
「多分ね」
「ぼくと同宿しませんか」
丹尾は五郎を上目で見た。
「立神館という宿屋があった。あれがよさそうです。出ましょうか」

丹尾はチャンポンを、半分ほど食べ残し、立ち上った。
「ぼくはその前に、映画館を一廻りして来ます。あんたは？」
「そうだな」
五郎は答えた。
「海でも見て来ようかな。いや、その前に床屋にでも――」
五郎はそう言いながら、丹尾の顔を見た。
「君もその鼻髭（ひげ）、剃ったらどうだい。あまり似合わないよ」
「あの日から剃らないんですよ」
左の人差指でチョビ髭をなで、丹尾は沈んだ声で言った。
「髭を立てたんじゃない。その部分だけ剃らなかっただけだ。記念というわけじゃないけどね」

［やぶちゃん注：これを以って「幻化」の第一章「同行者」が終わる。
「緯度の関係で、日没は東京より一時間ほど遅い」枕崎の緯度は、
北緯三十一度　十六分
で、東京は、
北緯三十五度四十一分
で、四度程度ずれる（孰れも市役所・都庁の数値）。但し、ここで五郎が「一時間ほど」というのは季節からみておかしい。例えば、これをブログ公開した
二〇一六年一一月一日の日没
で計算すると（多分、私が何かと最もお世話になっている「こよみのページ」に拠った）、
東京では十六時三十八分
であるのに対し、枕崎西方にある、
野間岬では十七時二十七分
と確かに一時間四十九分も遅くなるのであるが、さても、私が作品内時間と推定する昭和三九（一九六四）年の九月の、例えば一日で見ると、

東京では十八時　九分

であるのに対し、

野間岬では十八時四十四分

であるから三十五分だけ遅いことになる。

「ＳＮ氏のトランク」これ直後に「五郎の頬に隠微な笑いが上って来」、「何もかも間違いだらけだ。おれも、あのトランクも、ここに来るべきじゃなかったのではないか」という叙述から、恐らくは一九三一年（昭和六年相当）に製作されたドイツ映画「Ｏ・Ｆ氏のトランク」（原題：*Die Koffer des Herrn O.F*）を意識した台詞と思われる。私は残念なことに本作を観ていないが、「Movie Walker」の「Ｏ・Ｆ氏のトランク」によれば、『処女作「人生謳歌」で認められた、元モスコーユダヤ劇場の主脳者アレクシス・グラノフスキー』(Alexis Granowsky)『の第二回トーキー作品で、ドイツの風刺作家として聞えているレオ・ラニア』(Leo Rania)『と監督グラノフスキーが共同して書卸したもので、自ら大人の為のお伽噺と断ってある。出演者は「メトロポリス」』(*Metropolis*：ドイツ一九二六年製作)『のアルフレッド・アベル』(Alfred Abel)、「Ｍ」（一九三一年）『のペーター・ローレ』(Peter Lorre) 他。『キャメラは』私の好きな、かの名作「制服の処女」（一九三一年）『のライマール・クンツェ』(Reimar Kuntze)『及びハインリヒ・バラッシュ』(Heinrich Balasch)『で、作曲は「カラマゾフの兄弟」』(*Der Mörder Dimitri Karamasoff*：ドイツ一九三一年公開)『のカロル・ラトハウス』(Karol Rathaus) 他である。シノプシスはリンク先に詳しい。お読みになると、私がこれだと思ったことを「なるほど！」と合点して頂けるものと思う。

「鰹節」枕崎水産加工業協同組合公式サイトによれば、枕崎の鰹節は国内最高品質を誇り、製法伝来三百年を迎えたとある。

「開聞岳」薩摩半島南端に位置する標高九百二十四メートルの火山で、美しい円錐形の山容から「薩摩富士」とも呼ばれる名山である。私が二十五年前、結婚直後の、まだ足の悪くなる前の新妻と二人っきりで登頂した唯一の山である。

「チャンポン」ウイキの「ちゃんぽん」によれば（記号の一部を変更・省略した）、『豚肉・野菜・魚肉生産品（場合によっては魚貝類そのもの）を具とした日本の郷土料理。長崎の麺

料理が有名』『長崎ちゃんぽんの語源については、諸説ある。福建語の挨拶「吃飯」もしくは「吃飯了」（直訳するなら「飯は食ったか？」）から来ているとの説、同じく福建語の「混ぜる」を意味する語「掺混」から来ているとする説が存在する。また、沖縄のチャンプルーと関連があるともいわれる。マレー語およびインドネシア語の「campur（チャンプル）」、「ちゃんぽん」、「チャンプルー」はともに「混ぜる、ごちゃ混ぜにする」という意味があり、同一語源の可能性がある。後述の沖縄のちゃんぽんはおかず載せごはんであるが、その形態はインドネシアのナシチャンプル（nasi campur ナシはご飯の意味）と一致する』『語源事典では「異なるものを混ぜること」の語源として、鉦の音（ちゃん）と鼓の音（ぽん）という擬音としてつなげた近世（江戸時代）の造語であるとしている。これらの語源事典では、「混ぜること」より発生が遅い料理名の「ちゃんぽん」について、中国語説を取り上げながらも、「混ぜること」の意味から影響された名前としている』が、『いずれも根拠が乏しく単なる連想による民間語源の可能性が強い』とある。鹿児島でもチャンポンを扱う店は多く、私は枕崎には行ったことはないが、推察するに鹿児島は豚料理が有名で（豚骨料理は絶品である）、背脂をふんだんに用いた豚骨スープに、枕崎のそれは、ここに出る烏賊などの自前特産の海産物を入れたものが供されているのであろう。

「合成酒」ウィキの「合成清酒」から引く。『アルコールに糖類、有機酸、アミノ酸などを加えて、清酒のような風味にしたアルコール飲料で』、『清酒に比べて酒税の税率が低く、価格が安いことから、清酒の代用として普及しており、料理酒としてもよく使われている。風味付けのために、醸造された日本酒の成分を数％添加した製品が多い』。『日本の酒税法では合成清酒のアルコール度数は』「十六度未満」であることが求められているとある。

「君。肝臓が相当いかれているようだね」「そうでしょうな。あれから毎日酒ばかりで、アル中気味だ」「酒で悲しさが減るかい？」「いや。やはりだめだね。やけをおこして、いっそのこと死のうかと思うけれど――」**丹尾がアルコール依存症であることを自ら表明するシーン**である。

「箸を割って、先をこすり合わせた」私は今年で五十九になるが、こういう割り箸を箸同士で擦り合わせて割った際の木屑を取る習慣を、全く持たない。一度もやったことがない。た

だ、それをやる人を見たことはある。小さな頃は、なんであんなことするんだろ？　と思った。大人になってやる意味は判った。でも、昔も今も、私はやらない。ネットを調べてみると、この割った箸同士を「こすり合わせ」る行為は、その割り箸が粗末で質の悪い品であることを示すことになるので、通常、普通の店舗などでこれをやるというのは、失礼に当たるからやってはいけないとあった。ふーん、と思った。ただ、ふーん、と思っただけである。ともかくも、裂けて口を怪我しそうな状態ならば手で毟ればよい。ささくれがひどければ取り替えて貰えばよい。私は向後も、これをやろうとは、思わないのである。

「二十年前は物資が乏しく、こんな店もなかったし、鰹節も干してなかった。貧寒な漁村であった。しかし彼はその頃鮮烈な生のまっただ中にいた」「二十年前」は昭和二十（一九四五）年、敗戦の年である。五郎の秘められた確かな過去と当時の心境が読者に漸層的に具体に示される重要な一場面である。

「立神館」現実にあった旅館かどうかは不詳（現在は少なくともない模様）で「たてがみかん」か「りつじんかん」かもわからないが、枕崎市には現在も立神本町（たてがみほんまち）があるから、「たてがみかん」の読みが第一候補とはなろう。

『「君もその鼻髭、剃ったらどうだい。あまり似合わないよ」／「あの日から剃らないんですよ」／左の人差指でチョビ髭をなで、丹尾は沈んだ声で言った。／「髭を立てたんじゃない。その部分だけ剃らなかっただけだ。記念というわけじゃないけどね」』「あの日」は言わずもがな、「一箇月前に」「妻子を交通事故でうしなってしまった」日から、である。丹尾なりの亡き妻子への哀傷の印、彼の聖痕（スティグマ）なのである。無論、こんな分かり切ったことを注しようとしたのではない。何故、五郎はここで丹尾の自分で「立てた」ように見える「チョビ髭」を嫌ったのかが私には気になるからである。ウィキの「口髭」に以下のようにある。『近代では、口髭は軍人に好まれた。多くの国々において、部隊や階級ごとに様々なスタイルやバリエーションが見られた。一般的に、若い下級の兵士は、比較的小さな、あまり手の込んでいない口髭を立てる。やがて昇進していくと、口髭はより分厚くなり、さらには全てのひげを伸ばすことが許されるようになる』と。**五郎は丹尾の髭に戦時中のおぞましい軍人らの髭を思い出したからではなかろうか？**」

白い花

床屋に行く気持は、初めから全然なかった。丹尾の後姿がかなたに遠ざかると、五郎は身をひるがえして酒屋に入り、万一の用にそなえて、酒の二合瓶と紙コップを買う。途中で発作がおきると困るのだ。それからバスの発着場に歩き、休憩中の女車掌に声をかけた。

「坊に行くには、たしかあの道を、まっすぐ行けばいいんだね」

「はい。一筋道です」

車掌は壁時計を見上げた。

「あと二十五分でバスが出ます」

五郎も見上げてうなずいた。そしてそこらを五、六歩動き廻って外に出た。何気ないふりで、バス道を歩く。すこしずつ急ぎ足になった。

〈誰かがおれを追っている〉

そんな感じが背中にある。その〈誰〉には実体がなかった。入院の前に、外出すると、いつもその感じにとらわれ、振向き振向きしながら歩いた。その時にくらべると、感じとしては淡いけれども、つけられている気配はたしかにある。

家並の切れる頃から、人通りはだんだん少くなって来た。おおかたはバスを利用するのであろう。道に沿って、ぽつんぽつんと農家がある。納屋(なや)の土床で子供が遊んでいたり、跣(はだし)の農婦とすれ違ったりする。ふと振り返ると、農婦が足をとめて、じっとこちらを見詰めている。道はだんだん上り坂になる。

〈おれを見張っているのではない〉

五郎は自分に言い聞かせる。不精髭を生やした背広姿の男が、バスにも乗らず、酒瓶を提(さ)げて歩いている。それを異様に思っているに違いない。

やがて小さなバスが砂煙を立てて、五郎を追い越した。彼は切通しの崖にくっつき、顔を

かくしていた。おそらく乗っていたのは、先刻の女車掌だろう。それに顔を見せたくなかった。砂塵がおさまって、五郎はまた歩き出した。バス代を惜しんだわけではない。この道は、彼にとって、足で歩かねばならなかったのだ。しだいに呼吸が荒くなる。

忽然(こつぜん)として、視界がぱっと開けた。左側の下に海が見える。すさまじい青さで広がっている。右側はそそり立つ急坂となり、雑木雑草が茂っている。その間を白い道が、曲りながら一筋通っている。甘美な衝撃と感動が、一瞬五郎の全身をつらぬいた。

「あ！」

彼は思わず立ちすくんだ。

「これだ。これだったんだな」

数年前、五郎は信州に旅行したことがある。貸馬に乗って、ある高原を横断した時、視界の悪い山径(やまみち)から、突然ひらけた場所に出た。そこは右側が草山になり、左側は低く谷底となり、盆地がひろがり、彼方に小さな湖が見える。

〈何時か、どこかで、こんなところを通ったことがある〉

頭のしびれるような恍惚(こうこつ)を感じながら、彼はその時思った。場所はどこだか判らない。おそらく子供の時だろう。少年の時にこんな風景の中を通り、何かの理由で感動した。五郎の故郷には、これに似た地形がいくつかある。その体験がよみがえったのだと、恍惚がおさまって彼は考えたのだが――

「そうじゃない。ここだったのだ」

五郎は海に面した路肩に腰をおろし、紙コップに酒を充たした。信州の場合とくらべると、山と谷底の関係は逆になっている。それは当然なのだ。二十年前の夏、五郎は坊津を出発して、枕崎へ歩いた。枕崎から坊津行きでは、風景が逆になる。五郎は紙コップの酒を一口含んだ。

「ああ。あの時は嬉しかったなあ。あらゆるものから解放されて、この峠にさしかかった時は、気が遠くなるようだった」

その頃もバスはあったが、木炭燃料の不足のために、日に一度か二度しか往復していなかった。坊津の海軍基地が解散したのは、八月二十日頃かと思う。五郎はまだ二十五歳。体力

も気力も充実していた。重い衣嚢(いのう)をかついで、この峠にたどりついた時、海が一面にひらけ、真昼の陽にきらきらと光り、遠くに竹島、硫黄島、黒島がかすんで見えた。体が無限にふくれ上って行くような解放が、初めて実感として彼にやって来たのだ。

〈なぜこの風景を、おれは忘れてしまったんだろう〉

感動と恍惚のこの原型を、意識からうしなっていた。いや、うしなったのではない。いつの間にか意識の底に沈んでしまったのだろう。今朝コーヒーを飲んだ時、突如として坊津行きを思い立ったのではない。ずっと前から、意識の底のものが、五郎をそそのかしていたのだ。それを今五郎はやっと悟った。彼はコップの残りをあおって、立ち上った。

しばらく歩く。

やっと風景が切れ、林の中に入る。道はだんだん下り坂になる。すこし疲れが出て来た。一杯の酒のために、体を動かすことがもの憂(う)くなって来た。高揚された気分が、しだいに重苦しく沈んで来る。彼は低い声で、かつての軍歌を口遊(ずさ)んでいた。歌おうという意志はなく、自然に口に出て来た。

『天にあふるるその誠
地にみなぎれるその正義
暗号符字のまごつきに
鬼神もいかで泣かざらむ』

替歌をつくったのは、福という名の兵長である。福は奄美大島の出身だが、昭和十八年に一家は沖縄島に移住をした。才気のある男で、いろいろと替歌をつくった。この歌も、

〈天にあふるるこの錯誤。仁にみなぎれるその戦死……〉

天(てん)も仁(に)も暗号書の名で、天は普通暗号、仁は人事に関する暗号である。しかし五郎の口にのぼって来るのは〈暗号符字のまごつきに〉という部分だけであって、あとは元歌通りだ。五郎は暗号の下士官で、福は彼の部下であった。この替歌をつくった数日後、福は死んだ。

やがて家がぽつぽつと見え始めたと思うと、その屋根のかなたに海の色があった。さきほどの広闊(こうかつ)とした海でなく、湾であり入江である。その入江を抱く左手の山から、鴉(からす)の声が聞えて来る。それも一羽ではなく、数十数百羽の鴉が、空に飛び交いながら鳴いていた。

――冥府(めいふ)。

町に足を踏み入れながら、ふっとそんな言葉が浮んで来た。湾に沿った一筋町である。家々の屋根は総じて低い。昔は島津藩の密貿易の港であったので、展望のきく建物は禁じられていた。その風習が今でも残っている。戦災にはあわなかったせいで、町のたたずまいは古ぼけている。彼はふと戸惑う。

〈これがおれの軍務に服していた町なのか?〉

五郎はこの基地に、三週間ほどしかいなかった。吹上浜のある基地からここに移って来て、すぐに戦いは終ったのである。今見る町の様相は、見覚えがあるようでもあったし、ないようでもあった。しかし五郎はたしかにここにいたのだ。二十年前、気力も体力も充実した青年として、ひりひりと生を感じながら生きていた。今は蓬髪(ほうはつ)の、病んだ精神のうらぶれた中年男として、町を歩いている。彼は眼をあちこちに動かしながら、浦島太郎の歌を考えていた。

――道に行き交う人々は、名をも知らない者ばかり。

頭に荷物を乗せた女が通る。女学生、小学生が通る。長い釣竿をかついだ男が通る。夕方になったので、磯釣りを終った土地の男だろう。芭蕉(ばしょう)、フェニックスが生えている。町を通り抜けると、まただらだら坂となる。高くなるにつれて、風景はいよいよ鮮明に立体化して来る。湾内に小島がいくつか見える。島々のために港の入口がせまい。大きな船は出入り出来ない。しかし水路の複雑さのために、密貿易には好適の港だったのだろう。五郎は足を止めた。そして道から斜面に降りて行く。首を傾けた。

〈たしかここらに松林があった筈だが――〉

あの頃松林の中に、海軍航空用一号アルコールのドラム罐が、三十本ぐらい転がっていた。隠匿(いんとく)されていたのだ。松林なので空からは見えない。ここに来た二、三日後、そのドラム罐のひとつに小さな穴があいていることを、福兵長が発見した。そして五郎に報告した。五郎は笑いながら言った。

「お前があけたんだろう」

「冗談でしょう」

福も笑いながら答えた。
「自然にあいたんです」
「それ、飲めるのかい？」
「ええ、原料はたしか芋です。水で割れば多分飲めますよ」
「そうか。飲みに行くか」
五郎は福兵長と、興梠（こうろぎ）という酒好きの二等兵曹をつれて、しばしば宿舎を抜け出て、酒宴を開いた。アルミの食器に一号アルコールを半分ほど入れ、マッチで火をつける。アルコールの毒性は上澄みにあるというのが、宮崎県出身の興梠二曹の説で、いい加減燃えると吹き消し、水で割る。味もにおいもない。ただ酔うだけである。肴が必要だったが、そこはうまいこと烹炊所（ほうすいじょ）にわたりをつけて、罐詰などをもらって来る。味はないが、意外に強く、すぐに酔いが廻った。
もちろん航空用のアルコールを飲むのは、不逞（ふてい）の仕業であり、見付かれば懲罰（ちょうばつ）ものであった。だから宴は夜に限られていた。
〈あれはどこに行ったのか？〉
十本ばかりの木がばらばら生えているだけで、昔の松林の面影はほとんどない。その木に交って、白い大きな花をぶら下げた、南国風の木がある。その花の名は忘れたが、色や形にはたしかに見覚えがあった。日はすでに入り、あたり一面は黄昏（たそがれ）である。その花は、冥府の花のように、白く垂れ下っていた。彼はその木に近づき、指で花びらをさわって見た。花はゆらゆらと揺れた。声がした。
「こんばんは」
五郎は道を見上げた。道には女が立っていた。軽装で、手に団扇（うちわ）を持っている。ちょっと涼みに出たという恰好（かっこう）であった。
「こんばんは」
五郎もあいさつを返した。女はスカートの裾を押えるようにして、斜面を降りて来た。
「何をしているの？」
女は人慣れた口調で言った。香料のにおいがただよった。

「さっきから見てたんですよ。あなたはここの人じゃないね」
五郎はうなずいた。
「遠くからやって来たんだよ。時にこの花、何という名前だったかな」
「ダチュラ」
女はすぐに答えた。唇には濃めに口紅を塗ってある。商売女かな、と彼は一瞬考えた。
「原名は、エンゼルズトランペット」
「エンゼルズトランペット？」
五郎は花に視線を据(す)えて、考え込む顔付きになった。入院前に読んだ旅行記、たしか北杜夫という作家の種子島紀行の一節に、
『ダスラ（この土地ではゼンソクタバコと呼ぶ）の白い花などが目につく』
と書いてあったと思う。
「ダスラじゃないのかね？」
「いいえ。ダチュラ」
五郎はまだ考えていた。口の中で言ってみた。
「エンゼルズトランペット」
「ゼンソクタバコ」
音(おん)が似ているじゃないか。彼はもう一度、二つの言葉を発音してみた。たしかに舌の廻り具合が似ている。ゼンソクタバコの方が、原音から訛(なま)ったのだろう。
「なにをぶつぶつ言ってるの？」
「いや。何でもない」
「遠くからあんたは、何のためにやって来たのよ？」
それは君と関係ないと、いつもならつっぱねる筈だが、時は黄昏だし、女の言葉や態度が開放的だったので、つい五郎は応じる気になった。
「まあ、見物かな」
五郎は湾の方を指差した。
「あの岩の島の名は、何だったかしら」

「雙剣石よ」
二つの岩がするどくそそり立ち、大きい方の岩のてっぺんに松の木が一本生えていた。その形は二十年前と同じである。忘れようとしても、忘れられない。
「君はここの生れかい。戦時中、どこにいた？」
「ここにいました」
「じゃ戦争の終りに、この湾で溺れて死んだ水兵のことを、覚えてるかね。覚えてないだろうね」
「覚えてる。覚えているわ」
女は遠くを見る眼付きになった。
「あたしが小学校の五年の時だった。いや、国民学校だったわね。体は見なかったけれど、棺に入れて運ばれるのを見た。うちの校舎でお通夜があった筈よ」
「そうだ。その棺をかついだ一人が、おれだよ」
「まあ。あんたもあの時の海軍さん？」
五郎はうなずいた。女は五郎の頭から足まで、確めるように眺めた。
「あの棺の中に、このダチュラの花を、いっぱい詰めてやった。この花は摘(つ)むとすぐにしおれたけれど、匂いは強かった。棺の中で、いつまでも匂っていたよ」
「そういう花なのよ。これは」
「しかしなぜ死体を国民学校なんかに運んだんだろう」
「あそこはもともとお寺だったのよ。一乗寺と言ってね。明治の初めに廃寺になったの。その後に石造の仁王像が二つ、海から引上げられて、校庭に並んでるわ」
「それは気が付かなかった。もっともここには三週間しかいなかったし、学校内に入ったのも、その時だけだからね。二十年ぶりにやって来ると、おれはまったく旅人だ」
「そうねえ。あの頃の海軍さんとは、とても見えないわ」
女は憐れむような、また切ないような眼で、五郎を見た。
「でも、あたしも小学生じゃない。三十を過ぎちまった」
「君の家は、坊にあるのかね？」

「いいえ。泊(とまり)よ。あの峠を越えて向うの部落なの」
女はその方向を指した。
「谷崎潤一郎の『台所太平記』を読んだことがある？」
「いや」
「あそこに出て来る女中さんたちは、みんな泊の出身なのよ」
「ほう。女中さんの産地なのか？」
「あたしも行ったわ。学校を卒業して、すぐ東京へ」
女は両掌で自分の頬をはさんだ。
「ある家に奉公して、そこの世話である男といっしょになって、それからその男と生活がいやになって――」
「戻って来たのか？」
「そう」
女は笑おうとしたが、声にはならなかった。
「一箇月前にね。出戻りというのは、どうも具合が悪くって。夕方になるとここに来て、ぶらぶらと時間をつぶしてるの。案内して上げましょうか」
「泊にかい？」
「いえ。小学校へよ。あなたはそんなことを確めに来たんじゃない？　二十年前の思い出なんかを」
「思い出？」
五郎ははき捨てるように言った。
「思い出なんてもんじゃない。そんな感傷は、おれは嫌いだよ。でも、折角のお申出だから、案内していただこうかな」
「ずいぶんもったいぶるわね」
今度は声に出して笑った。
「じゃ参りましょう」
五郎は女のうしろについて、道へ上った。夕焼が色褪(あ)せ、薄暗さがあちこちの隅にたまり

始めている。しばらく歩くと石段があった。それを一歩一歩登る時、五郎は膝頭や踵（かかと）にぶい痛みを感じた。石段を登り切ると、校庭になる。石像が二つ、十米ほど離れて立っている。その間に一本の大樹がそびえている。その像も樹も、彼の記憶には全然なかった。五郎は言った。

「見覚えないな」

「これ、ミツギという樹なのよ」

女は説明した。

「あたしの小学校の時も、同じ大きさで、同じ形で立っていた。ずいぶん古くから生えてるわけね。何百年も」

「そうだろうな。別におれと関係ないことだけど」

五郎はその樹の下に腰をおろした。女も団扇（うちわ）を敷いて腰をおろす。さっきのダチュラの樹が眼下にあり、湾がそこからひろがっていた。彼は紙コップに酒を充たし、女の方に差出した。

「飲まないか」

「ええ。いただきます」

女は素直に受取った。五郎は指差した。

「あそこの林は、松の木がもっともっと生えていた。そしてアルコール罐が、いくつも転がっていたよ」

「そう。十年ぐらい前に切り倒して、キャンプ場にしたらしいの」

女は酒に口をつけた。

「ところがいっぺんあそこにキャンプを張った人は、翌年は絶対に来ないのよ」

「なぜ？　景色もいいし、水もきれいで泳げるのに」

「やぶ蚊（か）が夜出て来て、チクチク刺すのよ」

「ああ。やぶ蚊か。おれたちもずいぶん刺された」

「おれたちって？」

「うん。暗くなるとあそこに行って、アルコールを水で割って、こっそり飲んだんだ。仲間

三人だったけれど、福が一番強かった」

「福って、人の名？」

「そう。奄美大島出身の兵長でね。器用な男だった。芭蕉の葉で芭蕉扇をつくって呉れた。それでばたばたあおぎながら、アルコールを飲んだ。皆若かったね。あの頃は」

五郎は酒瓶を直接口に持って行って、残りを飲み干し、崖下（がけ）に瓶を放り投げた。

「死んだ水兵というのは、福のことだよ」

「そうなの」

女もコップ酒を飲み干した。

「どうしてその人が溺れたの？」

「うん。アルコールを飲んだ揚句――」

五郎は指差した。

「あの雙剣石まで、泳ごうとしたんだ」

「雙剣石まで？」

わずかな明るさを背にして、雙剣石はくろぐろとそびえ立っていた。それは墓標の形に似ていた。鴉声（あせい）は静まり、波の音だけがかすかに聞えて来る。

［やぶちゃん注：「坊」「ぼう」と読む。現在の鹿児島県南さつま市坊津町坊。旧地名を坊津（ぼうのつ）と言い、古代に栄えた港であった。参照したウィキの「坊津」より引く。『古代から薩摩藩政の中盤頃』の享保年間（一七一六年から一七三五年）『の長期に渡って、海上交通上の要地であった。遣唐使船の寄港地としての他、倭寇や遣明船、薩摩藩の密貿易の拠点として栄えた』。『中国明代の文書『武備志』では主要港として、安濃津』（あのうつ／あのつ／あのつ：伊勢国安濃郡（現在の三重県津市）にあった港湾。「安乃津」「阿野津」とも書き、「洞津（あなつ）」とも称した）・『博多津と共に日本三津（さんしん）に挙げられている』。『日本での仏教黎明期の』五三八年に『百済に仕えていた日本人の日羅が、龍厳寺（後の一乗院）を建てる。その後も坊舎や坊主といった仏教と密接な地であったため、「坊津」と呼ばれるようになったと考えられている』。『飛鳥時代から、遣唐使船の寄港地となり、「唐（から）の港」、「入唐

道（にっとうどう）」とも呼ばれるようになった』。奈良時代の天平勝宝五（七五三）年十二月二十日にはかの名僧鑑真が渡日六回目にして、近くの『秋妻屋浦（現在の秋目地区）に上陸している』。『室町時代、倭寇や遣明船の寄港地となり、大陸をはじめ、琉球や南方諸国とも貿易が活発化した。この頃、先の一乗院も大いに栄えるようになる。また、島津氏の中国（明）・琉球貿易の根拠地ともなっていた』。『伝来したキリスト教とも縁があ』って、天文一八（一五四九）年に『フランシスコ・ザビエルが日本でまず最初に上陸したのはこの地であ』り、『江戸幕府のキリシタン追放令で国を出て、ローマで司祭となって戻ってきたペトロ・カスイ・岐部が』寛永七（一六三〇）年に『上陸したのも同地である』とある。「松岡正剛の千夜千冊」の第一一六一夜「『幻化』梅崎春生」に拠れば、実際、梅崎はこの坊津に配属されたのであったが、彼は『自分の任務が何か、ほとんど理解していなかった。行き先に何があるかも知っていなかった。着任してみると、ところが坊津には「震洋」特別攻撃隊の発進基地があったのだ』。『当時すでに艦隊の主力の大半を失っていた海軍軍令部は、アメリカ軍の本土侵攻に備えて、上陸予想地点での魚雷艇部隊の緊急配備に必死になっていた。軍令部のシナリオでは、アメリカ軍は数百隻の輸送船団で大規模な上陸作戦を敢行してくるだろうというものだった。これを迎え撃つには、残る手段は二つしかない』。『ひとつは神風特攻隊が空から体当たりしていくこと、もうひとつは乗員1人か2人の魚雷艇で海から突っ込んでいくことである。この魚雷艇の特攻兵器として考案されたのが「震洋」だった（他に「回天」が別の基地で用意されていた）』。『「震洋」はトヨタのトラック・エンジンを搭載した小型船艇で、ベニヤ板でまわりを固め、艇首に２５０キロの黒色火薬をつめこんだというだけの自爆兵器である。ちょっとした波にあっというまに横転するような代物だったが、敗戦時まで６０００隻が急造された（「回天」も似たようなものだ）。その「震洋」の本土上陸最重要反攻拠点のひとつが、坊津にあったのである』。『梅崎は坊津で異様な日々を体験したあと、谷山基地に戻ったのち、桜島の通信隊に転属していった』のであった、とある。春生が敢えて『消去』したおぞましい、搭乗員が乗り込んで操縦して目標艦艇に体当たり攻撃を敢行するモーター・ボート特攻兵器「震洋」や最初の特攻兵器である人間魚雷「回天」については、春生が少なくとも本篇では完全に『消去』している以上、ここで注するこ

とは控え、ウィキのそれぞれをリンクさせるに止めおく（私の『梅崎春生「桜島」附やぶちゃん注（3）』では注しておいたのでそちらを参照されたい）。なお、梅崎は本作を執筆する二年前の昭和三八（一九六三）年の十月に実際に雑誌『旅』の取材旅行でここ坊津を妻恵津を伴って訪れており、これが「幻化」執筆の機縁となったと底本全集別巻年譜にあり、また『読売新聞』のネット上の二〇一五年十一月二十四日附の山内則史記者の記事『梅崎春生「今はうしなったもの、二十年前には…」』には（ここでは再訪を十一月としている）、未亡人恵津さん（取材当時九十二歳）の回想として、『「きれいな所だから一緒に行かないか、カメラマン代わりで、と誘われました。坊津の海があまり美しく、船の陰でもいいから1泊したいと私が言ったら、役場に聞いて宿を見つけてきた。梅崎にとって戦争が終わった解放感と自然の美しさは、一つになっていたのでしょう」』と記し、『坊津の港、沖の島々、東シナ海まで見晴らせる坊津歴史資料センター輝津館で、恵津さんの描いた日本画と出会った。ダチュラの白に照り映える、花の下の乙女。件くだんの紀行文で梅崎は、宿の主人に請われて一筆書いたと記している』。『〈坊ノ津二十年を憶へば／年々歳々／花相似たれども／我れのみ／老いたるが如し〉』。ふと思った。……『船の陰でもいいから1泊したいと私が言った』――この肉声はある意味とても妖艶はないか？！……そうして……実は本篇に出る――ダチュラの女（と私は勝手に呼んでいる）――というのは……実はこの、春生の愛した恵津さんへの、秘やかなオマージュだったのではなかったろうか？　逆算すると恵津さんは大正一二（一九二三）年生まれで、敗戦時の年齢は二十三、ここに五郎の前に幻のように立ち現われるのは、実は「敗戦」の頃の若き日の恵津さんの幻影なのではあるまいか？（春生が女性雑誌『令嬢界』『若草』の編集者であった恵津さんと結婚したのは昭和二二（一九四七）年一月で、この年、彼は三十二、恵津さんは二十五であった）　なお、同じく東京本社写真部林陽一撮影になる動画「名言巡礼　梅崎春生「幻化」から　坊津界隈」は必見！　本パートに出るランドマークを殆んど視認出来る（私は普段、消滅が予想される新聞社の記事はリンクしないことにしているが、これは是非見て頂きたいので特に張っておいた。直近の記事でもあり、暫くは残っているであろう）。

「〈誰かがおれを追っている〉／そんな感じが背中にある。その〈誰〉には実体がなかった。

入院の前に、外出すると、いつもその感じにとらわれ、振向き振向きしながら歩いた。その時にくらべると、感じとしては淡いけれども、つけられている気配はたしかにある」ストレスが高まったり、アルコール性精神病や統合失調症などの精神疾患に顕著に見られるところの、所謂、常に誰かから追われているという妄想が働く被害妄想の一種の「追跡妄想」である。但し、五郎の場合は、入院前も現在も、自律的に外出しており、友人と碁なども打っている点を考えると軽度である。統合失調症などのそれでは精神的に激しく追い込まれてゆき、「自分が何者かから命を狙われている」という妄想へと発展して、それを絶対の事実として他者に訴えたり、警察に通報したりする。遂には一切の交流を遮断するという方向に向かって、外出することが不能な状態に陥る（私は高校教師時代、生徒やその保護者から、そうした妄想の愁訴を延々聴かされた体験が実際に複数回ある）。因みに、酷似した症状に、自分が常に監視されているという妄想にとらわれる場合があり、それは「注察妄想」と呼ぶ。五郎は直後に「〈おれを見張っているのではない〉」と思うシーンが描かれており、かくも気のせいだと割り切ることが出来るというのは寧ろ、正常であって、彼が難治性の精神疾患ではない可能性を示唆するものとも言える。

『やがて小さなバスが砂煙を立てて、五郎を追い越した。彼は切通しの崖にくっつき、顔をかくしていた。おそらく乗っていたのは、先刻の女車掌だろう。それに顔を見せたくなかった。砂塵がおさまって、五郎はまた歩き出した。バス代を惜しんだわけではない。この道は、彼にとって、足で歩かねばならなかったのだ。しだいに呼吸が荒くなる。／忽然（こつぜん）として、視界がぱっと開けた。左側の下に海が見える。すさまじい青さで広がっている。右側はそそり立つ急坂となり、雑木雑草が茂っている。その間を白い道が、曲りながら一筋通っている。甘美な衝撃と感動が、一瞬五郎の全身をつらぬいた。／「あ！」／彼は思わず立ちすくんだ。／「これだ。これだったんだな」／数年前、五郎は信州に旅行したことがある。貸馬に乗って、ある高原を横断した時、視界の悪い山径（やまみち）から、突然ひらけた場所に出た。そこは右側が草山になり、左側は低く谷底となり、盆地がひろがり、彼方に小さな湖が見える。／〈何時か、どこかで、こんなところを通ったことがある〉／頭のしびれるような恍惚（こうこつ）を感じながら、彼はその時思った。場所はどこだか判らない。おそらく子供の時だろう。少年の時にこんな

風景の中を通り、何かの理由で感動した。五郎の故郷には、これに似た地形がいくつかある。その体験がよみがえったのだと、恍惚がおさまって彼は考えたのだが――／「そうじゃない。ここだったのだ」／五郎は海に面した路肩に腰をおろし、紙コップに酒を充たした。信州の場合とくらべると、山と谷底の関係は逆になっている。それは当然なのだ。二十年前の夏、五郎は坊津を出発して、枕崎へ歩いた。枕崎から坊津行きでは、風景が逆になる。五郎は紙コップの酒を一口含んだ。／「ああ。あの時は嬉しかったなあ。あらゆるものから解放されて、この峠にさしかかった時は、気が遠くなるようだった」『**「幻化」最初の圧巻のシークエンス**である。そうして梅崎春生の「桜島」を読んだことのある者ならば、直ちにここがあの冒頭に出るシークエンスと対応することを痛感する。冒頭パート全文を引く。

＊

七月初、坊津にいた。往昔、遣唐使が船出をしたところである。その小さな美しい港を見下ろす峠で、基地隊の基地通信に当たっていた。私は暗号員であった。毎日、崖を滑り降りて魚釣りに行ったり、山に楊梅を取りに行ったり、朝夕峠を通る坊津郵便局の女事務員と仲良くなったり、よそめにはのんびりと日を過した。電報は少なかった。日に一通か二通。無い時もあった。此のような生活をしながらも、目に見えぬ何物かが次第に輪を狭めて身体を緊めつけて来るのを、私は痛いほど感じ始めた。歯ぎしりするような気持で、私は連日遊び呆けた。日に一度は必ず、米軍の飛行機が鋭い音を響かせながら、峠の上を翔った。ふり仰ぐと、初夏の光を吸った翼のいろが、ナイフのように不気味に光った。

或る朝、一通の電報が来た。

海軍暗号書、「勇」を取り出して、私が翻訳した。

「村上兵曹桜島ニ転勤ニ付至急谷山本部ニ帰投サレ度」

午後、交替の田上兵長が到着した。

その夜、私はアルコールに水を割って、ひとり痛飲した。泥酔して峠の道を踏んだ時、よろめいて一間ほど崖を滑り落ちた。瞼が切れて、血が随分流れた。窪地に仰向きになったまま、凄まじい程冴えた月のいろを見た。酔って断れ断れになった意識の中で、私は必死になって荒涼たる何物かを追っかけていた。

翌朝、医務室で瞼を簡単に治療して貰い、そして峠を出発した。徒歩で枕崎に出るのである。生涯再びは見る事もない此の坊津の風景は、おそろしいほど新鮮であった。私は何度も振り返り振り返り、その度の展望に目を見張った。何故此のように風景が活き活きしているのであろう。胸を噛むにがいものを感じながら、私は思った。此の基地でいろいろ考え、また感じたことのうちで、此の思いだけが真実ではないのか。たといその中に、訣別という感傷が私の肉眼を多分に歪めていたとしても――

＊

私の細かな注釈は『梅崎春生「桜島」附やぶちゃん注（1）』を参照されたいが、この部分は強烈にして鮮烈な映像を読者に残す。それが遺作「幻化」で再現される時、私はグレン・グールドがバッハの「ゴルトベルグ変奏曲」で円環を閉じた数奇と一見、同じものを感じたものである。「そして峠を出発した。徒歩で枕崎に出るのである。生涯再びは見る事もない此の坊津の風景は、おそろしいほど新鮮であった。私は何度も振り返り振り返り、その度の展望に目を見張った。何故此のように風景が活き活きしているのであろう。胸を噛むにがいものを感じながら、私は思った。此の基地でいろいろ考え、また感じたことのうちで、此の思いだけが真実ではないのか。たといその中に、訣別という感傷が私の肉眼を多分に歪めていたとしても――」というこの最後の箇所の主人公村上兵曹の感懐が「生涯再びは見る事もない」「訣別」「の坊津の風景」という心象であること、即ち、末期、「死」を強烈に意識した村上の眼に映った時、それは「おそろしいほど新鮮であった」、末期の覚悟の眼で見るからこそ、「私は何度も振り返り振り返り、その度の展望に目を見張った」のであり、だからこそ「風景が活き活きして」見えたのであるとは言えよう。しかし、と、すれば、この、**呪われた「死」の実感に捕えられた「桜島」の主人公村上兵曹の、その老いた姿を髣髴させるところの、この「幻化」の、精神を病んで、漠然と「死」の観念に憑りつかれている主人公久住五郎**（最初に注した通り、彼の姓は次の次のパートで初めて出る）の、**その五郎の「病い」の根を明らかにする或いは治癒させる可能性を開示するに違いない場所として、この坊津の風景が五郎の無意識にあった**からこそ五郎はここまで「足で歩かねばならなかったのだ」と感じたのであるとも言い得るであろう。それは、**その風景が、「忽然として」「ぱっと開け」**

るのも、あたかも悟達か禪機のように立ち現われてくることからも判る。それは少し後で「〈なぜこの風景を、おれは忘れてしまったんだろう〉」「感動と恍惚のこの原型を、意識からうしなっていた。いや、うしなったのではない。いつの間にか意識の底に沈んでしまったのだろう。今朝コーヒーを飲んだ時、突如として坊津行きを思い立ったのではない。ずっと前から、意識の底のものが、五郎をそそのかしていたのだ。それを今五郎はやっと悟った」という自己分析からも明らかである。さても、「左側の下に海が」「すさまじい青さで広がってい」て、「右側はそそり立つ急坂とな」って、「その間を白い道が、曲りながら一筋通っている」。この「白い道」こそが、実は青春の「生」の真っただ中にありながら、惨めな「死」を予感し、翁むさい諦念の中に沈潜していた「村上兵曹」＝若き日の「久住五郎」が辿った本当の人生としての、瞬間のエクスタシーとしての「生」の「白い道」であったのであると読めてくる。とすれば、ここで五郎の「全身を」「甘美な衝撃と感動が、一瞬」にして「つらぬいた」もの、『「あ！」』と「彼」が「思わず立ちすくん」で『「これだ。これだったんだな」』！　『「そうじゃない。ここだったのだ」』！　そうして遂には『「ああ。あの時は嬉しかったなあ。あらゆるものから解放されて、この峠にさしかかった時は、気が遠くなるようだった」』と叫ぶ（実際に叫んだとは記されてはいないが）。更に少し後の「体が無限にふくれ上って行くような解放が、初めて実感として彼にやって来たのだ」という五郎の畳みかけられた感懐が意味するものは――「生」＝「性」のエクスタシー――である。この「白い道」こそが久住五郎の――再生への道――強烈なエクスタシーを孕んだ「生」の道――であると言える。「桜島」と「幻化」は円環なのでは――ない。「桜島」は確かに「みじめな」若者村上兵曹の人間の実体としての「みじめな死」の「物語」である。そうして「幻化」の久住五郎は、その「桜島」の村上兵曹が、「死」を実感したはずの自らをさえ欺き、「みじめに」戦後をうまうまと生き抜いてゆくうちに、ふと気がついたら、自身が亡霊のような存在となり、精神を病んでしまった存在として冒頭に立ち現われてきたのではあった。ところがそれが、この坊津のランドマークを境に、最後の阿蘇の噴火口に至るまで、漸層的に灼けるような内なるパトスが膨れ上がり続ける。即ち、「幻化」とは「みじめな生」＝「みじめな性」／されど「生」でありしかも「性」であるようなものの、再生と昇華が行われる「物語」なのであ

る。事実、梅崎春生（没時満五十歳）はこれが遺作になるという意識は微塵もなかったのではないかと私は思っているのである。なお、ここに出る「峠」とは坊津の東南東一・八キロメートルにある現在の鹿児島県川辺郡坊津町坊の耳取峠（みみとりとうげ）（標高百五十メートル）と思われる。『かつては遣唐使船の発着港として「唐の湊」と呼ばれ、藩政時代には琉球を介して行なわれた密貿易の湊として栄えた坊津』『と鹿児島城下を最短距離で結んだ』峠である。明治四二（一九〇九）年に『県道枕崎―坊津線ができ、その峠を耳取峠と呼ぶが、古くは約』五百メートル『北の番屋山山麓を越えるものだった。峠を坊津側に越えると』、宣化天皇三（五三八）年に『開かれ、明治初期まで密教寺院として栄えた一乗院がある』『耳取という名前の由来は』三つあって、『一つは峠道からの開聞岳の眺めが素晴らしく、「みとれ」てしまうことからという説。一つは海からの風を正面に受けるので「耳がとれるほど寒い」。今一つは密貿易にかかわった罪人の「耳を切り取り追放」したという説があるという』（以上引用は「峠データベース」の「耳取峠」に拠った）。ここまで枕崎駅から実測で測ってみると、六キロメートルはある。上り坂があるので病院から逃げ出してきた五郎の足では最低でも二時間はかかったものと思われる。

「その頃もバスはあったが、木炭燃料の不足のために、日に一度か二度しか往復していなかった」木炭バス。後部に積載した木炭ガス発生装置で不完全燃焼に発生する一酸化炭素ガスと僅かに発生する水素の合成ガスを内燃機関の燃料として走ったバスで、一九二〇年代（大正九年～）から戦後の一九四〇年代（～昭和二十四年）にかけて普通に存在したガソリンや軽油を使わないバスである。参照したウィキの「木炭自動車」によれば、特に第二次世界大戦の『戦時体制にあって正規の液体燃料』が軍用に優先されて『供給事情が悪化』したのに伴い、盛んに奨励された。具体には、昭和一二（一九三七）年以降、『日中戦争激化で燃料統制が始まると民間自動車の木炭燃料へのシフトは避けられなくなり、各種のガス発生炉開発推進とも相まって導入例が急増した（商工省補助申請は』前年昭和十一年度十八件であったのに対し、この年には実に五十件を超え、『以後は急速に増加した）』。昭和一三（一九三八）年には『東京都でバスに初導入され』翌昭和十四年には『民間普及促進のため木炭車の全国キャラバンが実施され』、昭和十六年には『民間普及促進のため歌とレコード』さえ

も作られた。『戦時中は、軍需関連業務でガソリンの特配を受けられる特殊な例外や、地元産の天然ガスを燃料に使用できるガス産地のような例を除けば、日本全国で木炭車が多用された。国産供給可能とはいえ、まとまった量の木炭を入手することは容易でなく、自社で木炭生産の炭焼きを行うバス会社や、木炭に加工されていない薪をそのまま使用する例も見られた』とある。なお、『木炭ガス発生装置を使用する車両の正式名称は「石油代用燃料使用装置設置自動車」と言い、略して「代用燃料車」あるいは「代燃車」と言うが、バスの場合は専ら木炭バスや薪バスと呼ばれていた。木炭以外に、薪や石炭（無煙炭）を用いる事例もあり、いずれも固形燃料を使用して内燃機関動力用のガスを確保するシステムである』とある。

「坊津の海軍基地が解散したのは、八月二十日頃かと思う」本パートのこの後で「五郎はこの基地に、三週間ほどしかいなかった。吹上浜のある基地からここに移って来て、すぐに戦いは終ったのである」とあり、ダチュラの女との会話の中で「ここには三週間しかいなかった」と語るシーンがあるので、五郎がこの坊津にあった海軍の秘密基地に転任してきたのは昭和二〇（一九四五）年の七月三十日前後となる。また「桜島」の村上兵曹は終戦を桜島の海軍秘密基地で迎えたが、「幻化」の久住五郎はこの坊津の海軍秘密基地で迎えたとなっていて、見た目では村上兵曹と久住五郎を全く別人として描いてはいる。また、先に注しておくと、吹上浜は鹿児島県西部の薩摩半島西岸で東シナ海に面した、現在のいちき串木野市・日置市・南さつま市にかけての砂丘海岸で、その長さは凡そ四十七キロメートルに及んでおり、一つの砂丘としての長さでは日本一である。

「五郎はまだ二十五歳」梅崎春生は敗戦時、満二十九歳であった。「桜島」の村上兵曹は「生まれて三十年間」とあり、ほぼ一致していたが、ここでは四歳若く設定して、やはり村上兵曹とのオーバー・ラップを意識的に避けている。

「衣嚢（いのう）」海軍下士官兵が衣類を整理して入れておくキャンパス製の布袋。底のサイズは約四十センチメートル、長さは一メートル二十、三十センチメートルにも及び、重さは三十キロ以上あった。中には軍服・事業服・作業服・軍靴（ぐんか）に至る主要携帯品総てを納め、転勤などの移動の際に肩に担いで持ち運んだ。黒色の外嚢（がいのう）と白い内嚢（うちのう）があり、普段は内嚢を外嚢の中に

格納しておく。ここは、ルビー氏のブログ「太平洋戦争史と死後の世界を考える」の『衣嚢（いのう）と制裁「蜂の巣」』を参照させて貰った。

「竹島」薩摩半島のこの耳取峠から凡そ五十キロメートル南南西に位置する有人島。以下の硫黄島・黒島と合わせて現在、鹿児島郡三島村を構成し、行政上は鹿児島県鹿児島郡三島村大字竹島である。

「硫黄島」「いおうじま」と読む。同峠からほぼ南に凡そ五十一キロメートルの位置ある有人島。嘗ては硫黄鉱山（昭和三九（一九六四）年閉山）があった。「平家物語」で俊寛らが流されたとする鬼界ヶ島（きかいがしま）の一候補地とされる。

「黒島」同峠から南西凡そ五十四・五キロメートルの位置ある有人島。ウィキの「黒島」によれば、『太平洋戦争末期には、鹿児島などから出撃した特別攻撃隊が時として緊急避難することがあった』とあり、また『島全体が樹木で覆われており、沖から見ると黒ずんで見えることから黒島の名が付いたという。壇ノ浦の戦いに敗れた平家一族が築いたと伝わる平家城跡があり、島民は平家落人の子孫といわれ、民俗芸能「なぎなた踊り」、「矢踊り」などが伝わる。また旧暦の』六月二十三日に島内の十五歳から十六歳までの『女性が祠の掃除をして歌と踊りを奉納する射場どんと呼ばれる行事があるが、別名「処女ためしの神」とも呼ばれており、祠にある』十三段の『階段を「私こそが処女なり」と思う者だけが最上段に登ることができ、男性と交わりの少ない者ほど上段に進めるという奇祭である』とある。ウヘェ！　スゴ過ぎ！

彼はコップの残りをあおって、立ち上った。

「軍歌」既注の「楠公父子（なんこうふし）」。

「天にあふるるその誠／地にみなぎれるその正義／暗号符字のまごつきに／鬼神もいかで泣かざらむ」「楠公父子」の一番の替え歌。元は、

「天に溢（あふ）るるその誠／地にみなぎれるその節義／楠公父子の精忠（まごころ）に／鬼神（きじん）もいかで泣かざらん」

である（相異箇所に下線を附した）。

「福という名の兵長」「福は奄美大島の出身」「苗字由来net」の「【名字】福」によれば、読

みは「ふく」「とみ」「たからだ」とあるが、ここでは「ふく」であろう。以下、『鹿児島県南部奄美諸島、大阪府、兵庫県に多数みられる。福井県、富山県尚度に地名もあるが、幸福招来の姓。他にも風の強い地域が語源。福井氏、福田氏、冨久氏など「ふく」の関連姓は全国に多い。清和天皇の子孫で源姓を賜った氏（清和源氏）、桓武天皇の子孫で平の姓を賜った家系である平氏（桓武平氏）、中臣鎌足が天智天皇より賜ったことに始まる氏（藤原氏）などにもみられる』とある（下線やぶちゃん）。「兵長」大日本帝国海軍は最下層の「兵」の最上位。

「沖縄島」これも勝手して悪いのであるが、**私は「縄」という字が生理的に嫌いである。特異的に本篇では「縄」を「縄」に変えさせて戴く**（注でも引用以外は「縄」とする）。私の電子データを剽窃せんとする者はくれぐれも「縄」を「縄」に戻すのを忘れぬように。自分が打ったように盗んだもの発見した場合は、死ぬまで糾弾し続けるので注意されたい。

福兵長の家族は沖縄戦（昭和二〇（一九四五）年三月二十六日から開始されて組織的な戦闘は六月二十日乃至六月二十三日に終ったとされる。以下の回想シーンの時間はまさにそのたった沖縄戦終了か、ら約一ヶ月後以降で敗戦の前、八月の初旬頃のこととなろう）戦禍を受けている可能性が極めて高いことが読者に知れる。それは後に事実として記されることになる。

「天にあふるるこの錯誤。仁にみなぎれるその戦死」「仁」は直後の五郎の解説にから「ジン」ではなく「に」と読むことが知れる。やはり前掲の一番の、

「天に溢るるその誠／地にみなぎれるその節義」

の替え歌。

「天（てん）も仁（に）も暗号書の名で、天は普通暗号、仁は人事に関する暗号である」当時の海軍暗号書は複数あった。特に「呂（ろ）」が主な暗号書であったがそれ以外にも、「伊」・「波」・「登」・「天」（部外）・「忠」・「勇」・「雑」・「略語」・「呼出し符号」・「部外暗号書」が存在したと、原勝洋・北村新三「暗号に敗れた日本　太平洋戦争の明暗を分けた米軍の暗号解読」（二〇一四年ＰＨＰ刊）にある。「仁」は人事関連暗号であるから「戦死」とくるのである。

「五郎は暗号の下士官」始めて軍人であったことが具体に明示される。**因みに梅崎春生も通**

信科二等兵曹の下士官であり、「桜島」の主人公の村上兵曹も全く同じ設定である。されば、「桜島」の村上兵曹とこの久住兵曹（「兵曹」とは具体に記されないがそう考えてよい）を別人と意識する方が遙かに不自然である。

「島津藩の密貿易」薩摩藩（＝島津藩）慶長一四（一六〇九）年に藩の独断で琉球に出兵し、琉球王国を服属させ、苛烈に実質支配した。その琉球を通して清との密貿易（幕府には琉球支配も何もかも隠蔽していた）が莫大な利益を藩に齎した。Tsubu 氏の「西郷隆盛のホームページ　敬天愛人」「薩摩旅行記」の『薩摩旅行記（3）「大陸への玄関口・坊津（ぼうのつ）」』が非常に参考になる。「幻化」のこの後に登場する坊津の豪商森吉兵衛の密貿易屋敷である「倉浜荘」の写真も見られる。必見必読。

「吹上浜」前の「坊津の海軍基地が解散したのは、八月二十日頃かと思う」に既注。

「二十年前、気力も体力も充実した青年として、ひりひりと生を感じながら生きていた。今は蓬髪（ほうはつ）の、病んだ精神のうらぶれた中年男として、町を歩いている」本篇の主題への鍵である。「蓬髪」は長く伸びてくしゃくしゃに乱れた髪、蓬（よもぎ）（キク目キク科キク亜科ヨモギ属変種ヨモギ *Artemisia indica* var. *maximowiczii*）のようにぼうぼうに伸びた髪の謂い。

「浦島太郎の歌」「――道に行き交う人々は、名をも知らない者ばかり」明治四四（一九一一）年の「尋常小学唱歌」に掲載された方の唱歌「浦島太郎」（作詞・乙骨（おつこつ）三郎／作曲者不明）の四番の一節（下線を引いた）であるが、「名をも」ではなく「顔も」である。以下の引く（複数のデータを校合し、やぶちゃんオリジナル正字正仮名版として作成した）。なお、唱歌には先行する別な一曲「うらしまたらう」がある。

＊

一、

昔、昔、浦島は、
助けた亀に連れられて、
龍宮城へ來て見れば、
繪（ゑ）にもかけない美しさ。

二、

乙姫様の御馳走に、
鯛や比目魚の舞踊、
ただ珍しく面白く、
月日のたつのも夢の中。

三、

遊にあきて氣がついて、
お暇乞もそこそこに、
歸る途中の樂しみは、
みやげに貰つた玉手箱。

四、

歸つて見れば、こは如何に、
元居た家も村も無く、
路に行きあふ人人は、
顔も知らない者ばかり。

五、

心細さに蓋取れば、
あけて悔しき玉手箱、
中からぱつと白煙、
たちまち太郎はお爺さん。

＊

この相違は梅崎春生が「かほも」を「なをも」と誤って覚えていた可能性が強いように私には思われる。意味上の不自然さもなく、第一が発音してみると、これは唄だけを聴いていると誤認し易い部類であると私は感ずるからである。

「頭に荷物を乗せた女が通る」頭上運搬は本邦の民俗学で古くから考証されてきた。昭和五〇（一九七五）年東京堂出版刊（四十七版／初版は昭和二六（一九五一）年刊。この版でも漢字が正字であるのは、本文が殆んど初版時から書き直されていないトンデモ辞典であることが判る。この辞書、大学一年の春、生協の売り子に「国学院に入ったらこれは買わないと」と騙されて買った。それから四十年経った今の野人になってからやっと使い始めた点でも私の中のトンデモ本である）の柳田國男監修「民俗学辞典」の「頭上運搬」によれば、『北は宮城縣江の島から南は沖縄の島々まで點々として廣い分布を示している』が、『今日伝承されているところの大部分は海村である。いずれも男性にはなく、女性のおこなうものである』。『以前家々の水汲み場所が遠く離れ、手桶という便利な道具の普及しなかったころは、頭上運搬が最も便利な運搬法であつた』。それ以外の多様なものや重い物を乗せ、『肥桶までも頭上にのせるところがある。こうして米一俵を運ばねば一人前の女でないと言われるところが多い』ともある（因みに、昔の米一俵は何と六十キログラムある）。

「芭蕉」単子葉植物綱ショウガ亜綱ショウガ目バショウ科バショウ属バショウ *Musa basjoo*。

「フェニックス」単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科ナツメヤシ属カナリーヤシ *Phoenix canariensis* の本邦での通称。アフリカ西海岸のカナリア諸島原産。日本では東京以南で植生し、弓状に下垂する葉先は五メートルにも及ぶ。陽樹で耐潮性に富むが、寒さには弱く、摂氏零下十度が枯死限界。樹高は最大で十二メートルにも達し、幹周りも三メートル程まで生育する。葉は羽状複葉で基部の小葉は非常に鋭い棘となる。鹿児島の隣りの宮崎県の県の木である（以上はウィキの「カナリーヤシ」に拠る）。

「湾内」坊浦。博多浦とも呼ぶらしい。後者は密貿易時代に博多のように栄えたことに由来するらしい。

「海軍航空用一号アルコール」航空用ガソリンの不足を補うために開発された代用燃料であるが詳細は不詳。後の飲用の場面から見ると、サツマイモから作られたエチル・アルコー

ルに飲用を防止するためにガソリンや灯油などを混ぜたものかと思われる。高校時代に戦争経験のある社会科の先生（バタン半島死の行進の話が大好きな先生であった）から聴いた記憶がある。識者の御教授を乞う。

「隠匿」後に「松林なので空からは見えない」とあるから、アメリカ軍の艦載機から見えぬように、の謂いでの「隠匿」である。

「興梠（こうろぎ）という酒好きの二等兵曹」「宮崎県出身の興梠二曹」ウィキの「興梠」によれば、宮崎県の高千穂や五ヶ瀬（ごかせ）、熊本県の阿蘇では比較的多く見られる姓で、「梠」（音は「ロ」）とは「軒」の意味であり、「興梠」とは「軒のあがった家（立派な家）」を指すとされる。また、日本神話に由来するとも言われるとある。私の教え子にも同姓の者がいた。なお、「二等兵曹」である興梠は五郎とこれより後のシーンでタメ口をきいており、五郎は福兵長を「部下」と呼んでいるから、**五郎も「桜島」の村上二曹や梅崎春生と全く同様に二等兵曹である**ことが判る。更に実は、**これは梅崎春生自身の桜島の海軍秘密基地での体験に基づくものである**ことが判る。彼の日記が底本全集の第七巻にあるが、その昭和二〇（一九四五）年七月二十三日の条に以下のようにあるからである。この日記は敗戦直前の梅崎春生自身の心境と驚くべき予言を含むので、全文を示しておく。但し、これに限っては戦前の記載であるので恣意的に漢字を正字化して歴史的仮名遣に改めたので注意されたい。

＊

七月二十三日

朝六度六分　夕七度一分

白い粉藥を貰ふ。原因は不判。（昨夜は八度五分）

看護科に蟋蟀（こおろぎ）兵曹といふ人がいる。

來てから、病氣つづきで、當直に立たないから、谷山に歸そうかと司令部の掌暗号長が言つた由。

芳賀檀のかいたもの、ドイツは古代人のやうな、單純な、偉大な文化を志してゐた由。そのやうなものが一朝にして滅びたことは、まことに悲愴である。

都市は燒かれ、その廢墟の中から、日本が新しい文化を産み出せるかと言ふと、それは判

らない。

しかし、たとへば東京、江戸からのこる狹苦しい低徊的な習俗が亡びただけでもさばさばする。

平和が來て、先づ外國映畫が來れば、又、日本人は劇場を幾重にも取圍むだらうとふと考へた。

何か、明治以来の宿命のやうなものが日本人の胸に巣くつてゐる。戰爭に勝つても、此の影は歴然としてつきまとふだらう。それは、つきつめれば東西文化の本質といふ點まで行つてしまふ。

極言すれば日本には文化といふものはなかつたのだ。

（奈良時代や平安時代、そのやうな古代をのぞいて）あるのは、習俗と風習にすぎない。新しい文化を産み出さねばならぬ。

＊

この「蟋蟀兵曹（こおろぎ）」という名の漢字表記が本当に「蟋蟀」であったのかどうかは、やや疑問ではある。「興梠（こうろぎ）」を「こおろぎ」と誤認した可能性を捨てきれない（但し、ネットを調べると、サイト「エンタメハウス」の『日本に現在5世帯以下しかいない絶滅寸前の「珍しい名字」２０選』という記事中に現在、一世帯しかない「蟋蟀」という姓が存在するともある）。

孰れにせよ、この「興梠二曹」のモデルはこの人物と考えてよいであろう。日記中に出る「芳賀檀」（明治三六（一九〇三）年～平成三（一九九一）年）は「はがまゆみ」と読む、ドイツ文学者（文学博士）で評論家。京都生まれ。国文学者芳賀矢一の子。東京帝大文学部独文科昭和三（一九二八）年卒。ドイツに留学した後、第三高等学校（現在の京都大学総合人間学部及び岡山大学医学部の前身）教授に就任、昭和一七（一九四二）年退官後、関西学院大学、東洋大学、創価大学教授。『コギト』『日本浪曼派』『四季』同人としてドイツ文学に関する評論を発表、昭和一二（一九三七）年の「古典の親衛隊」が代表作。以後、「民族と友情」「祝祭と法則」などを刊行し、次第にナチス礼賛に傾斜した。他の著書に「リルケ」「芳賀檀戯曲集　レオナルド・ダ・ヴィンチ」「千利休と秀吉」、詩集「背徳の花束」、訳書にヘッセ「帰郷」「青春時代」、フルトヴェングラー「音と言葉」など（ここまでは日外アソシエ

ーツ「２０世紀日本人名事典」を概ね参照した)。ウィキの「芳賀檀」には、戦後は『父矢一の顕彰に努めたり、『日本浪漫派』復興を唱えたりしつつ、日本ペンクラブの仕事に精を出していたが』、昭和三二(一九五七)年、『国際ペンクラブ大会の日本招致について批判され、雑誌で、自分が東大教授になれなかった憤懣をぶちまけ』、『その道化じみた様子は、高田里惠子の『文学部をめぐる病い』で揶揄され』たとある。因みに、詩人立原道造の晩年の詩に影響を与えた一人とされる。梅崎春生より十二年上である。「ドイツ」「が一朝にして滅びたこと」という箇所はナチス・ドイツが先立つ二ヶ月前の一九四五年五月に連合国軍によって敗北し、消滅したことを指している。孰れにせよ、**海軍二等兵曹であった梅崎春生が桜島の海軍秘密基地で敗戦の二十四日前にこんな感懐を日記に記していることに、少なくとも私は驚嘆せざるを得ないのである。**

「烹炊所」兵員烹炊所。一般には軍艦の台所を、かく呼称する。

「不逞(ふてい)」自分勝手な行いをすること。道義に反すること。この「逞」は漢和辞典を見ると「快い」「満足する」の謂いで、「快からざる」輩、「満足せざる」輩が「不逞の輩」ということらしい。

「懲罰」海軍懲罰令第九条に海軍軍人の一定の犯行に対して謹慎・拘禁・禁足の規定がある。

『彼はその木に近づき、指で花びらをさわって見た。花はゆらゆらと揺れた。声がした。／「こんばんは」／五郎は道を見上げた。道には女が立っていた。軽装で、手に団扇(うちわ)を持っている。ちょっと涼みに出たという恰好(かっこう)であった。／「こんばんは」／五郎もあいさつを返した。女はスカートの裾を押えるようにして、斜面を降りて来た。／「何をしているの?」／女は人慣れた口調で言った。香料のにおいがただよった』本作の忘れられない妖艶な、ダチュラの女の登場シーンである。非常に映像的で素晴らしい。

「ダチュラ」「エンゼルズトランペット」ナス目ナス科チョウセンアサガオ属 *Datura* の一年草或いは多年草の有毒植物。英名で〈Angel's trumpet〉とも呼ぶ。ウィキの「チョウセンアサガオ属」から引く。『学名のカタカナ表記でダチュラ属、ダチュラと呼ぶことも多い。ただし、園芸上「ダチュラ」と呼ぶときは、近縁種のナス科キダチチョウセンアサガオ属を指す場合がある。チョウセンの名は特定の地域を表すものではなく、単に海外から入ってき

たものの意味とされる。極東では曼陀羅華と呼ばれ、鎮静麻酔薬として使われていたこともある』『茎は二叉分枝し、大柄な単葉の葉をつける。花は大柄なラッパ型、果実は、大型でトゲが密生し、成熟すると4裂して扁平な種子を多数散布する』『世界の熱帯に産し、特にアメリカ大陸に多い。日本には本来は分布しないが、数種類が見られ、それらは江戸時代から明治時代にかけて日本に入ってきた帰化植物である。庭先などに自生する高さ約1メートルの大柄な草である。夏から初秋にかけて白く長いロート状の花を咲かせる』『花が美しく香りが甘美で香水に使われることもあるため、エンゼルトランペットなどとともに園芸用として一般に出回っているが、スコポラミンやヒオスチアミン、アトロピンなどのアルカロイドを全草に含有し、有毒なので注意を要する。それについては後述する』『チョウセンアサガオをはじめとする本属の植物は同じナス科のハシリドコロ、ヒヨス、ベラドンナと同様にスコポラミン、ヒヨスチアミンなどのアルカロイドを含む。ヒヨスチアミンは抽出するとラセミ化してアトロピンになる。アルカロイドは全草に含まれるが、特に種子の含有量が多い。これらのアルカロイドは抗コリン作用を有するため、分泌腺や平滑筋を抑制し、摂取すると口渇、散瞳、心悸亢進、尿閉、消化管運動の減少などが起こる。過って摂取すると、全身の筋肉が弛緩して脱力感を覚えたり、胃運動が低下して嘔吐を催す。眼球の虹彩括約筋や毛様体筋が弛緩して、瞳孔を散大させる。摂取量が多い場合には、意識混濁、言語障害、見当識障害、譫妄状態、昏睡、記憶喪失などの諸症状をもたらす』『意識障害が発生すると、一時的に外界からの刺激に対する反応が失われて、他人とのコミュニケーションが取れなくなる。興奮状態になって、過去の出来事や、夢や、未来の願望など、内面から湧き上がるものをもとに、自覚のないまま行動する。その後昏睡状態が十数時間続くことがあり、これらの症状が収まったときには、譫妄状態に陥っていた間の記憶が失われる逆行性健忘症を引き起こすことが知られている』『この性質を用いて、全身麻酔や自白剤として用いられたことがある。古くは、インドではダツラを用いて相手を酩酊状態にしたうえで強盗などを働く、ダツレアスという犯罪組織が存在した。西洋中世の魔法使いの世界では、無意識のうちに抑圧されている深層心理の世界を探索できる性質が着目され、人格形成に有益であるとして使用されていた』『スコポラミンには緩和な中枢抑制作用があり』、享和四・文化元（一

八〇四）年に『華岡青洲がこの植物から通仙散と命名した麻酔薬を作り、世界初とも言われる全身麻酔下で、乳癌の摘出手術をしたことで有名である。しかし青洲の妻は麻酔薬を完成させる過程で失明している。多量に摂取すると、意識喪失、呼吸停止を起こし死亡することもあるが、消化機能の抑制のため致死量を摂取するに至ることはまず無いといわれている。経口致死量は』四～五グラムとされている。『生薬としてはハシリドコロの根（ロート根）やベラドンナの根が使われ、チョウセンアサガオはあまり用いられない。根をゴボウ、葉をモロヘイヤ、つぼみをオクラやシシトウ、種子をゴマと間違えて食べて食中毒になることがある。根を水に漬けて置くだけでも成分が溶出して、その液体を飲んで食中毒が発生することがある。花を活けた花びんの水を子供が誤って飲む危険性も指摘されている。また全身の粘膜からも成分が摂取されるので、たとえば草の汁が飛び散って目に入ったり、汁が付着した手で目を擦るなどした場合にも、散瞳や調節障害などが起こる。チョウセンアサガオに接ぎ木をした茄子の実を食べて記憶障害を伴う食中毒を起こした事例』もある。また、一九八〇年代には『チョウセンアサガオのアルカロイドの生理作用を麻薬的な酩酊・多幸感作用を持つものと誤解した中学生が、友人等と炊いた白米に種子を降りかけて摂取し、集団中毒事件を起こしたこともあった。日本テレビの伊東家の食卓でもヒルガオの調理法を紹介する際に類似の危険を警告しなかったことから主婦が中毒を起こした例がある』。以下、「主な種」から少し整序して示す。

・チョウセンアサガオ *Datura metel*（『葉は全縁か、たまに大きな鋸歯があり、花色は白の他に黄、紫、青がある。別名をマンダラゲ（曼陀羅華）、キチガイナスビともいう』。）

・ケチョウセンアサガオ（アメリカチョウセンアサガオ） *Datura inoxia*（『チョウセンアサガオと類似するが枝と茎、葉の上面などに軟毛がある』。）

・シロバナヨウシュチョウセンアサガオ *Datura stramonium*（『枝と茎、葉の上面などに軟毛があり、葉に欠刻状の切れ込みをもつ』。）

「北杜夫」「種子島紀行」この書名、ネット検索に掛からない。私は実は北杜夫は生理的に嫌いで、何も読んだことがない。識者の御教授を乞う。

「ダスラ（この土地ではゼンソクタバコと呼ぶ）」ネットで調べると、「ゼンソクタバコ」は

ダチュラの別称とある。後で五郎は「エンゼルズトランペット」が訛って「ゼンソクタバコ」になったという面白い語源説を示しているが、実は調べて見ると、千葉大学医学部呼吸器内科巽浩一郎氏の「生活習慣病としての呼吸器疾患」という小論（ＰＤＦ）に、『タバコは呼吸器疾患を含む様々な病態の治療として推奨され』、十七世紀には『抗コリン物質を含有している *Datura stramonium*（タバコ）』（とあるが、これは上記の「シロバナヨウシュチョウセンアサガオ」の学名である。真正の「タバコ」は同じナス目ナス科のタバコ属タバコ *Nicotiana tabacum* である）『の葉と根は、喘息の治療として使用。以後、喘息のタバコによる治療は』、一九三〇年代の『アドレナリンの作用機序の解明まで、一般的に行われていた』。二十世紀後半に『なりようやく、タバコは喘息病態の進展・増悪に悪影響を与えることが認識されるようになった。近年の研究により、喫煙は喘息の臨床的悪化をもたらし、喘息治療に対する影響があり、喘息における病態生理的影響もあり、喘息における病理学的影響もあることが判明している』とあるから（下線やぶちゃん）、五郎の推理はハズレのようである。因みに「ダスラ」は「ダチュラ」の別名にある。なお、底本全集の山本健吉氏の解説中に、この「エンゼルズトランペット」について以下の興味深い記載がある。

《引用開始》

こんなハイカラな名を、どうしてこの田舎の女に言わせたのか？　この名前には私も思い出がある。長崎の大浦天主堂の司祭館前の花園に、この花があって、私を案内したＡ女史が「エンゼルズトランペット」の名をささやいた。Ａ女史の家は天主堂前の石畳の坂の中腹にあり、梅崎家の親戚筋で、高校時代の夏休みに梅崎兄弟が泊ったことがあった。おそらく彼女は、大浦居留地の庭に多いこの花の名を、梅崎にささやいたこともあったかと思う。その記憶があって、泊の女にこんな花の名を口ずさませたのではなかったか。誰か特定の人にしか分らないいたずらを、作品の中に、ひそかに仕掛けておく茶目っ気が彼にはあった。この花は、ナス科の有毒植物で、蔓陀羅花（まんだらげ）、また朝鮮朝顔と言い、北杜夫氏の言う通り、ゼンソクタバコという俗名もあるらしい。

《引用終了》

大変、面白いではないか。

「雙剣石」坊津公式サイトと思われる「坊津へようこそ」の「坊津の景勝地」の冒頭に国指定名勝「双剣石」として掲げられてある。一幅の『絵のような絶景を望む坊津の海岸、中でも坊浦の双剣石一帯は国の名勝に指定されています。坊浦の入江に穏やかな波間に対峙するようにそそり立つ鋭く尖った二つの岩が双剣石です。雌雄があり、大小の剣を立てた姿に似ていることからその名がつけられたと云われています』とある。安藤広重の「六十余州名所圖會」に「薩摩　坊ノ浦　雙剣石」の絵がある（shusen 氏のブログ「shusen の鳥日記」の「坊津双剣石のミサゴ」記事の中の拡大画像）。

「大きい方の岩のてっぺんに松の木が一本生えていた」前注の「坊津双剣石のミサゴ」記事中に松喰い虫にやられて消失してしまったとある。松が健在だった折りの写真は必見！

その形は二十年前と同じである。忘れようとしても、忘れられない。

「あたしが小学校の五年の時」満十か十一歳であるから（次注参照）、この――ダチュラの女――の生年は昭和九（一九三四）年か十年となる。

「国民学校」昭和一六（一九四一）年三月公布の国民学校令によって、同年四月よりそれ以前の小学校が国民学校という名称に改められた。初等科六年・高等科二年で、他に国民学校の高等科二年の修了者を対象とする特修科一年を置くことも出来た。因みに国民学校初等科五年はそれまでの尋常小学校五年で、現在の小学校五年と同じく、十歳（修了時十一歳）である。後で女は「三十を過ぎちまった」と言っているから遅生まれであろう。

「一乗寺」廃寺（女は「明治の初め」と言っており、これもまたしても例のおぞましい廃仏毀釈による可能性が頗る高い）で記載が少ない。「一乗院」とも。跡が現在の南さつま市坊津町坊の市立坊泊（ぼうとまり）小学校跡（二〇一〇年に旧坊津町内の小学校が統合され、ここが南さつま市立坊津学園小学校となり廃校となったが、その三年後の二〇一三年には坊津町泊の高太朗（こうたろう）公園内に新校舎を建設、南さつま市立坊津学園中学校との鹿児島県内初の施設一体型小中一貫校となった）に隣接する。「やさしい鹿児島スイスイなび」の「一乗院跡・仁王像」によれば、敏達天皇一二（五八三）年百済の僧日羅が仏教弘布のため建立したもので、その末寺は薩摩大隅の国内四十七ヶ寺、坊津だけでも十八ヶ寺もあったと言われ、日羅上人は自ら仏像三体を刻んで、上中下の三坊舎を設け、安置した。それがこの「坊津」とする。

他のデータや写真から、勅願寺であって当時の礎石や山門が残るらしいことが判った。

「その後に石造の仁王像が二つ、海から引上げられて、校庭に並んでるわ」先の『読売新聞』の動画で現存することが判る。

「もっともここには三週間しかいなかった」「二十年ぶりにやって来る」既にこれらは私の注で検証済みであるが、春生のこうした時制の確認は非常に懇切丁寧である。そこにこそ梅崎春生自身の戦争体験への拘りが感じられる。

「泊(とまり)よ。あの峠を越えて向うの部落なの」現在の南さつま市坊津町泊、旧川辺郡坊津町(ぼうのつちょう)泊。同町は明治二二（一八八九）年に町村制が施行されたのに伴い、南方郷（外城）の内、明治二年以前の久志秋目郷(くしあきめ)及び坊泊郷(ぼうどまり)に当たる久志村・秋目村・坊村・泊村の四村の区域によって西南方村(にしみなかたむら)として発足、昭和二八（一九五三）年十月に坊津村に改称、一九五五年十一月に町制施行されたが、二〇〇五年十一月七日に加世田市・大浦町・笠沙町・金峰町と合併、南さつま市となって自治体としての坊津町は消滅した（以上はウィキの「坊津町」に拠った）。現在の小学校校区から見ると、小泊(おどまり)・宇都(うと)・町(まち)・本珠院という地区を現認出来、これらを地図で見ると、女が言うように、坊浦の北で突出している峰ケ崎の根の部分の山を越えた向こう側の泊浦(とまりうら)の海岸域にあることが判る。

「谷崎潤一郎の『台所太平記』」「あそこに出て来る女中さんたちは、みんな泊の出身なのよ」「台所太平記」は昭和三七（一九六二）年十月末から翌年三月上旬まで『サンデー毎日』に連載され、後に単行本として中央公論社から刊行された。私は読んだことがなく、読みたくもないので（私は幾つかの作品（例えば「蘆刈」）を評価はするものの、人間としての谷崎個人は虫唾が走るほど嫌いである）、「キネマ写真館　日本映画写真データベース」の「台所太平記」の記載から引く。『谷崎自身の家で働く歴代のお手伝いさんをモデルに、時代の変遷とともに顔ぶれが変わる』九人の『お手伝いさんの行状や生態を通して、作者の分身である千倉磊吉の家庭をリレー式に描く』もの、だそうである。ホメロス氏のサイト「Homer's 玉手箱」内の「鹿児島県南さつま市坊津町」の「谷崎潤一郎の碑」の項に『この小説は』『西南方村泊出身の谷崎の自宅のお手伝いさんをモデルにして書かれている。谷崎家では』、昭和一一（一九三六）年頃から『泊出身のお手伝いさんが十数名仕えていたと言う。谷崎家で

は』同年の夏にここ泊(とまり)『出身の「初」がお手伝いさんになってから次々に彼女をたよっての沢山の女性が谷崎家で青春を過ごしている。特に谷崎（千倉）は』凡そ二十年に亙って『谷崎家で過ごした初がとてもお気に入りで』、『この小説の中でも女中の中心人物として一番紙幅を割いて書かれている。そして「梅」は酒が好きで癲癇もちで、初の弟に嫁いだ。泊まりの裕福な家の出の「銀」はとても美人で結婚した後湯河原のお土産売屋「春吟堂」の女将として活躍し、結婚した後の付き合いまで細かく書かれている。また坊津出身の乙女は学校は出ていないものの』、『料理にしても裁縫にしても金銭感覚、責任感なども』、『とてもよくできた乙女として谷崎夫妻の深い愛情と共に描かれている。谷崎は本の最後に年老いて坊津を訪ねることはできなかったことが残念であると書いている。そして谷崎が彼女たちから聞いた坊津の位置や風俗、歴史、生活、カツオの釣り方など詳細にかかれており、読んでいて懐かしくなった。坊津出身者は是非「台所太平記（中央公論）」は読んでほしい』と記しておられる。

「ミツギ」不詳。このような名の高木木本類は知らない。しかし、巨木であることと、分布域と発音の酷似性から、**これはミズキ目ミズキ科ミズキ属ミズキ *Cornus controversa* ではなかろうか**、と私は踏んでいる。先の『読売新聞』の動画の仁王像（現在はこの木の下に直近で並んでいる）の中央に現存する様子である。識者の御教授を乞う。

「芭蕉扇」老婆心乍ら、「ばしょうせん」と読む。唐扇の一種で、バショウ（既注）の葉鞘(ようしょう)（稲などの一部の植物で見られる、葉の基部が鞘状になって茎を包む形態になっている箇所を指す）で作った円形のものを指す。」

泳ごうと言い出したのは、福であった。どんなきっかけだか、五郎は覚えていない。泳ぎの話になった。福は自慢した。

「泳ぎならうまいですよ。今は沖縄だが、生れは奄美(あまみ)大島だからね。子供の時から水もぐりにゃ慣れている」

「お前んちは漁師なのかい？」
「漁師じゃないけれども、五キロや十キロぐらいなら、今でもらくに泳いで見せますよ」
「五キロなら、おれだって泳げそうだな」
五郎は答えた。五郎も海辺の町で育ったので、水泳には自信があった。
「じゃやりましょうか。あの雙剣石まで」
五郎はアルコールを含みながら、その方角を見た。彼等の宴の場所は、松林をすこし離れた大きな岩かげで、すぐ下から暗い海がひろがっている。時々思い出したように、しずかな波がやって来て、砂を洗う。海のところどころ、筋になったりかたまったり、ぼんやりと明るいのは、夜光虫のせいだろう。
「泳いでもいいな」
五郎は答えた。
「あそこまで六、七百米あるかな。一キロはない」
「やめなよ」
興梠二曹が傍から言った。
「泳いだって、どうなるものでなし。くたびれるだけの話だ」
「泳ぎたいんですよ。興梠二曹」
福は呂律の乱れた声で言いながら、もう上衣を脱いでいた。福は相当に酔っていた。五郎も立ち上った。
「おれも泳ぐよ」
福に張り合う気持は毛頭なかった。ただその暗い海に身をひたし、抱かれたいという気持だけがあった。興梠は投げ出すように言った。
「じゃ行きな。海行かば水漬く屍、てなことにはなるなよ」
「大丈夫ですよ」
福は五郎に白い歯を見せて笑った。それからよろよろと砂浜に降り、海へ入った。彼もつづいて足を水に踏み入れた。
しばらく海の浅さがつづき、急に深くなった。五郎は平泳で前進し、そして背泳ぎに移り、

やがて手足の動きを中止した。顔だけを空気にさらし、全身から力を抜く。水はつめたくなかった。生ぬるくねっとりとして、彼の体を包んだ。彼は『母胎』という言葉に似たものを感じながら、十分間ほどゆらゆらと海月(くらげ)のようにただよっていた。空には雲がなく、一面に星が光っていた。福がどこにいるか、もう判らなかった。

〈何ならここで死んでもいいな〉

倦怠と虚脱感がそこまで進んだ時、五郎は突然ある危険を感じて、姿勢を元に戻した。岬(みさき)や岩のたたずまいから、十分間の中に、体がいくらか潮に流されていることを知った。五郎は振切るようにしぶきを立て、元の岸に向って泳いだ。やがて足が砂についた。水をかき分けながら浜へ上る。岩かげから興梠(こうろぎ)の声がした。

「もう戻って来たのか？」

「うん。途中まで行ったんだが――」

五郎は片足飛びで、耳の内の水を出した。

「戻って来たよ」

「福は？」

「見うしなった。先に行ったんだろう」

やはり体が冷え、酔いも醒めていた。五郎は衣服をつけ、掌をこすり合わせた後、食器のアルコールを飲んだ。三十分経っても、福は戻って来なかった。

「もう帰ろうや」

興梠(こうろぎ)が言った。おそらく福は雙剣石に泳ぎ着き、ここに戻らずに近くの岸へ上り、陸路を歩いて宿舎に戻ったんじゃないか。そんな想像を興梠は立てたが、五郎は黙っていた。へんな予感があった。

罐詰類を水に放り、二人は宿舎に戻ったが、福の姿は見えなかった。海水のため体がべたべたするので、五郎はまた外に出て、真水で全身を拭う。海を眺めながら、さっきの危懼(きく)感を思い出していた。

翌朝、福の死体が波打際で発見され、早速医務室に運ばれた。水を飲んでいる様子がないところから、心臓麻痺と診断された。福の戦病死は、暗号『仁』によって、本隊に報告され

た。暗号文は五郎がつくった。

『仁にみなぎれるその戦死――』

福がつくった替歌の文句は、福にとって真実となった。

［やぶちゃん注：「五郎も海辺の町で育ったので、水泳には自信があった」梅崎春生の生地である福岡県福岡市簀子は博多湾の直近であり、また霜多正次氏の「学生時代の梅崎春生」によれば、『旧制の第五高等学校（熊本市）で、私は梅崎春生と同じクラスだった。そしていっしょに水泳部に入り、同じ平泳ぎをやり、タイムもふしぎに五分五分だった』と記されていると、江藤正顕氏の論文「梅崎春生『幻化』論――「幻化」と「火」をつなぐもの――」（ＰＤＦ）にある。

「夜光虫」海洋性のプランクトンのアルベオラータ Alveolata 上門渦鞭毛植物門ヤコウチュウ綱ヤコウチュウ目ヤコウチュウ科ヤコウチュウ属ヤコウチュウ *Noctiluca scintillans* 。なお、「桜島」では後半の皮肉で重要な「からくり」となる生物である。以下、ウィキの「ヤコウチュウ」より引く。『大発生すると夜に光り輝いて見える事からこの名』（ラテン語の〈noctis〉「夜」＋〈lucens〉「光る」）『が付いたが、昼には赤潮として姿を見せる。赤潮原因生物としては属名カナ書きでノクチルカと表記されることが多い。動物分類学では古くは植物性鞭毛虫綱渦鞭毛虫目、最近では渦鞭毛虫門に、植物分類学では渦鞭毛植物門に所属させる。一般的な渦鞭毛藻とは異なり葉緑体は持たず、専ら他の生物を捕食する従属栄養性の生物である』『原生生物としては非常に大きく、巨大な液胞』（或いは水嚢：pusulen）『で満たされた細胞は直径』一、二ミリメートルで、『外形はほぼ球形』であるが、一ヶ所『くぼんだ部分がある。くぼんだ部分の近くには細胞質が集中していて、むしろそれ以外の丸い部分が細胞としては膨張した姿と見ていい。くぼんだ部分の細胞質からは、放射状に原形質の糸が伸び、網目状に周辺に広がるのが見える。くぼんだ部分からは』一本の『触手が伸びる。細胞内に共生藻として緑藻の仲間を保持している場合もあるが、緑藻の葉緑体は消滅しており、光合成産物の宿主への還流は無い。細胞は触手（tentacle）を備え、それを用いて他の原生生物や藻類を捕食する。触手とは別に』、二本の『鞭毛を持つが、目立たない』『この

ように、およそ渦鞭毛虫とは思えない姿である。一般に渦鞭毛虫は体に縦と横の溝を持ち、縦溝には後方への鞭毛を、横溝にはそれに沿うように横鞭毛を這わせる。ヤコウチュウの場合、横溝は痕跡程度にまで退化し、横鞭毛もほぼ消失している。しかし、縦溝は触手のある中心部にあり、ここに鞭毛もちゃんと存在する。ただし、それ以外の細胞が大きく膨らんでいるため、これらの構造は目立たなくなってしまっているのである』。『特異な点としては、他の渦鞭毛藻と異なり、細胞核が渦鞭毛藻核ではない（間期に染色体が凝集しない）普通の真核であるとともに、通常の細胞は核相が2nである。複相の細胞が特徴的である一方、単相の細胞はごく一般的な渦鞭毛藻の形である』。『他の生物発光と同様、発光はルシフェリン―ルシフェラーゼ反応による。ヤコウチュウは物理的な刺激に応答して光る特徴があるため、波打ち際で特に明るく光る様子を見る事ができる。または、ヤコウチュウのいる水面に石を投げても発光を促すことが可能である』。『海産で沿岸域に普通、代表的な赤潮形成種である。大発生時には海水を鉄錆色に変え、時にトマトジュースと形容されるほど濃く毒々しい赤茶色を呈する。春～夏の水温上昇期に大発生するが、海水中の栄養塩濃度との因果関係は小さく、ヤコウチュウの赤潮発生が即ち富栄養化を意味する訳ではない。比較的頻繁に見られるが、規模も小さく毒性もないため、被害はあまり問題にならないことが多い』。『ヤコウチュウは大型で軽く、海水面付近に多く分布する。そのため風の影響を受けやすく、湾や沿岸部に容易に吹き溜まる。この特徴が海水面の局所的な変色を促すと共に、夜間に見られる発光を強く美しいものにしている。発光は、細胞内に散在する脂質性の顆粒によるものであるが、なんらかの適応的意義が論じられたことはなく、単なる代謝産物とも言われる』。『通常は二分裂による無性生殖を行う。有性生殖時には遊走細胞が放出されるが、これは一般的な渦鞭毛藻の形態をしており、核も渦鞭毛藻核である』。

「呂律（ろれつ）」本来は「りょりつ」と読んだ。「呂（りょ）」も「律」も雅楽の音階名で、雅楽合奏の際に呂の音階と律の音階が上手く合わないことを「呂律（りょりつ）が回らぬ」と言っていたものが、訛化して「ろれつ」となり、しかも物を言うときの調子や言葉の調子の謂いに広がったものである。

「海行かば水漬（みづ）く屍（かばね）」軍歌「海行かば」。まず、ウィキの「海行かば」から引く（アラビア数字を漢数字に代えた）。『当時の大日本帝国政府が国民精神総動員強調週間を制定した際

のテーマ曲。信時潔がＮＨＫの嘱託を受けて一九三七年（昭和十二年）に作曲した。信時の自筆譜では「海ゆかば」である』。『放送は一九三七年（昭和十二年）十月十三日から十月十六日の国民精神総動員強調週間に「新しい種目として」行われたとの記録がある』。『本曲への国民一般の印象を決定したのは、大東亜戦争（太平洋戦争）期、ラジオ放送の戦果発表（大本営発表）が玉砕を伝える際に、必ず冒頭曲として流されたことである（ただし真珠湾攻撃成功を伝える際は勝戦でも流された）。ちなみに、勝戦を発表する場合は、「敵は幾万」、陸軍分列行進曲「抜刀隊」、行進曲『軍艦』などが用いられた』。『敗戦までの間、「第二国歌」「準国歌」扱いされ、盛んに愛唱された』。歌『詞は、『万葉集』巻十八「賀陸奥国出金詔書歌」（『国歌大観』番号四〇九四番。『新編国歌大観』番号四一一九番。大伴家持作）の長歌から採られている。作曲された歌詞の部分は、「陸奥国出金詔書」（『続日本紀』第十三詔）の引用部分にほぼ相当する』とある。以下、歌詞。歌詞は二種ある。

＊

海行かば　水漬（みづ）く屍（かばね）
山行かば　草生（くさむ）す屍
大君（おほきみ）の　邊（へ）にこそ死なめ
かへりみはせじ

＊

海行かば　水漬く屍
山行かば　草生むす屍
大君の　邊にこそ死なめ
長閑（のど）には死なじ

＊

『「かえりみはせじ」は、前述の』通り、「賀陸奥国出金詔書歌」によるものであるが、一方が『「長閑には死なじ」となっているのは、「陸奥国出金詔書」（『続日本紀』第十三詔）によ』り、『万葉学者の中西進は、大伴家が伝えた言挙げの歌詞の終句に「かへりみはせじ」「長閑には死なじ」の二つがあり、かけあって唱えたものではないか、と推測している』とある。

最後に家持の「万葉集」の原歌を引いておく。底本は中西進氏の講談社文庫版「万葉集」を参考にしたが、恣意的に漢字を正字化した。読みは私が必要と判断したものを独自に附けた（中西氏には必ずしも従っていない。下線はやぶちゃん）。

＊

葦原の　瑞穂の國を　天降り　領らしめしける　皇祖の　神の命の　御代重ね　天の日繼と　領らし來る　君の御代御代　敷きませる　四方の國には　山川を　廣み厚みと　奉る御調寶は　數へ得ず　盡しもかねつ　然れども　わご大君の　諸人を　誘ひ給ひ　善き事を　始め給ひて　黄金かも　たしけくあらむと　思ほして　下惱ますに　鷄が鳴く　東の國の　陸奥の　小田なる山に　黄金ありと　申し給へれ　御心を　明らめ給ひ　天地の神相珍なひ　皇祖の　御靈助けて　遠き代よに　かかりし事を　朕が御代に　顯はしてあれば　食國は　榮えむものと　神ながら　思ほしめして　物部の　八十伴の緒を　服從の向けのまにまに　老人も　女童も　其が願ふ　心足ひに　撫で給ひ　治め給へば　此をしも　あやに貴み　嬉しけく　いよよ思ひて　大伴の　遠つ神祖の　その名をば大久米主と　負ひ持ちて　仕へし官　海行かば　水漬く屍　山行かば　草生す屍　大君の邊へにこそ死なめ　顧みは　せじと言立て　ますらをの　清きその名を　古よ　今の現に　流さへる　祖の子等そ　大伴と　佐伯の氏は　人の祖の　立つる言立て　人の子は祖の名絶たず　大君に　奉仕ふものと　言ひ繼げる　言の官そ　梓弓　手に取り持ちて劍大刀　腰に取り佩き　朝守り　夕の守りに　大君の　御門の守り　われをおきて　人はあらじと　いや立て　思ひし增る　大君の　命御言の幸の　聞けば貴み

＊

やや読みに違いがあるが、私がその附近（但し、当時はこの歴史館はなかった）で青春の六年を過ごした、「高岡市万葉歴史館」公式サイト内の「web 万葉集」の「読んでみよう越中万葉」の本歌の全訳が載るページをリンクさせておく。

「危懼」危惧に同じい。危ぶんで懼れること。]

「溺れたんじゃなく、心臓麻痺だった」
五郎は女に言った。
「強い酒を飲んで水に入るのは、一番危険なことなんだ」
「そう知ってて、どうして泳いだの？」
「悪いとは知ってたさ。しかしもっと悪いことだってした。若かったからね。若さで押し切れると思ったし、そして生命のすれすれまで行ってみたいという気持もあった。要するに荒れてたんだな」
福兵長はその年の三月頃から、五郎と行動を共にしていた。沖縄から『仁』の電文が届く。それを翻訳する。仁は次のような文章から始まる。
『本日ノ戦死者氏名左ノ通リ』
そして兵籍番号と名前が出て来る。福が翻訳した名前の一人に、彼の弟の名があった。ずいぶん後になって、福は告白した。
「いやな気持でしたねえ。しばらく暗号書を引く気にもなれなかった」
「可哀そうだなあ」
死んだ福の弟が可哀そうか、それを翻訳した福が可哀そうなのか、はっきりしないまま五郎は同感した。福は他のさまざまの電文で、彼の一家のある地帯がやられたこと、守備隊が全滅したことなどを知っていたらしい。あぶり字があぶられて出て来るように、自らの翻訳によって故郷の実況が出て来るのだから、つらい思いがしたに違いない。五郎もその頃しばしば、ト連送の電文を見た。
『トトトト』
ワレ突撃ス、という意味で、特攻隊から発信されるのである。ト連送が終った時が、一つの命がうしなわれた時なのだ。福の通夜の時、五郎はじっと考えていた。
〈あいつ、自殺するつもりじゃなかったのか〉
積極的に自殺を願ったのではないかも知れないが、五郎が感じたように、ここらで死んでもいいな、という気分は動いただろうと思う。それに福は酔い過ぎていた。気持が放漫にな

って、泳ぎ着ければそれでいいし、途中でだめならそれでもいい。泳ぎ出すことだけが自分の意志で、あとは運命に任せる。その気分の動き。

女が舌たるく聞いた。

「あんた、それで責任を感じたの？」

「責任？　いや。福は自分から言い出したんだから、死んだのは彼の責任さ。しかしおれはとめなかった。一緒に泳いだ」

五郎は空を見上げながら、何気なく左手を女の肩に廻した。女は体をびくと震わせたが、拒否の気配は見せなかった。

「おれたちは同じ汽車に乗り合わせたようなものさ。前に乗り込んだ人が次々に降りて行く。新しいのが次々乗り込んで来る。途中下車をするやつもいるしさ。福なんかは途中下車じゃない。窓をあけて飛び降りたようなものだ。同行者としての責任感は、たしかにある。いや。同行者の責任なんて、一体あるものかな。連帯感はあるが――」

押えていた歪んだ情念が、しだいに彼の体の中で高まって来た。女の肩の丸みやあたたかさが、彼を刺戟（しげき）した。

「その後、同行者としての連帯感が、だんだん信じられなくなって来た。酒を飲んでも、勝負ごとにふけってもだめだった。それでとうとう病院に入って、治療を受けた。おれの体、薬くさいだろ。今朝まで病院にいたんだ」

「今朝退院したの？」

「そうだ」

五郎は腕に力を入れて、女を抱き寄せた。女はすこしあらがった。

「そんなことをしてもいいの？」

唇が離れた後、女はすこし怒ったような声を出した。

「いいんだよ。おれたちは同行者なんだから。二十年前、君はおれを見た筈だし、おれは君の姿を見た筈だ。どんな姿だったか、覚えていない。モンペ姿で、可愛らしいお下げ髪だったんだろう」

「そうよ。可愛らしかったかどうか、知らないけれど」

女は自分の頬に掌を当てた。
「すこし酔って来たわ」
「どうしてもこの土地を見たい。ずっと前から、考えていたんだ。今はうしなったもの、二十年前には確かにあったもの、それを確めたかったんだ。入院するよりも、直接ここに来ればよかった。その方が先だったかも知れない」
ずいぶん身勝手な理屈をこねている。その自覚は五郎にはあった。枕崎で飲んだ焼酎、峠であおったコップ酒が、彼の厚顔な言説をささえていた。それに相手が出戻り女で、気分的にもかなり荒れているという計算も、心の底に動いていた。
「おれは今、何かにすがりたいんだ」
五郎は女にささやいた。その言葉は、全然うそではない。四分の一ぐらいはほんとであった。彼はさらに腕に力をこめた。
「つながりを確めたいんだ。死んだ福や、雙剣石や、その他いろんなものとの――」
「ああ」
女は胸を反らしながら、かすかにうめいた。それはやや絶望的な響きを帯びた。
「いいだろ」
相手をもどろどろしたものの中に引きずり入れたい。今はその嗜欲(しょく)だけしか五郎にはなかった。
時間が泡立ち、揺れながら過ぎた。やがて静かな流れに戻った。五郎は立ち上り、ミツギのざらざらした幹に、しばらく背をもたせ、暗い海を見ていた。
「今夜、君の家に泊めて呉れないか」
かすれた声で五郎は言った。
「行き当りばったりで、泊るところがないんだ」
「うちはだめ！」
身づくろいをしながら、女は答えた。
「あたしだけでも、いづらいんだから」
「そうだろうね」

その返事は予期していた。ただ訊ねてみただけであった。
「では枕崎の宿屋に戻ろうかな。まだバスはあるだろう」
「坊にも宿屋があってよ。宿屋と言えるかしら。そこの小父さん、あたし小さい時から、よく知ってるから。案内しましょうか」
女は立ち上った。地も空も蒼然と昏(く)れ、時々坊岬燈台の光の束が、空を薙(な)いで走る。石段も暗く、手をつなぎ合って、そろそろと降りた。しめった掌を離すと、女は道を降り、ダチュラの花を四つ五つ摘んで来た。
「寝る部屋に置いとくといいわよ」
花を五郎に手渡した。
「部屋が匂いでいっぱいになるわ」
その口調に残酷さがあった。福の通夜のことを実感として思い出せというのか。しかし五郎は素直に返事した。
「ありがとう。きっと君の夢を見るよ」
そのまま町の方に歩いた。すでに戸を立てた家も多い。すべて屋根が低いので、町は暗がりの底に、へばりついているようだ。ラジオの音や話声が、家の中から聞えて来る。
「この町の人は、ずいぶん早寝だね」
「不景気だからよ」
女は言った。なぜ不景気なのかは説明しなかった。
女が案内した家は、宿屋らしくなかった。他の家と違うのは、ここだけが二階家である。中二階みたいな妙な構造で、一見平屋風(ふう)のように見える。玄関の板の間に、古ぼけたオルガンが置いてある。案内を乞うと、主人らしい老人が出て来た。
「この人、泊めて上げて」
女が言った。
「二十年前、海軍でここにいた人よ」
主人はするどい眼付きで五郎を見た。五郎が靴を脱いでいる間に、女はいなくなった。主人が言った。

「あんた。久住五郎というひとじゃなかか」
言葉は電撃のように、五郎の背中を撲(う)った。五郎は顔色を変えて、思わず立ち上った。
「ど、どうしてそれを知っているんだ？」
五郎はどもった。
「二十年前――」
「いや。いや」
主人は視線をやわらげて、空気を両手で押えつけるようにした。
「いまさっき枕崎の立神館から電話がありもしてな。あなたの人相風体など説明して――」
「丹尾という男ですね」
「はあ。着いたら電話を呉れと――」
「電話なんかしなくてもいいんですよ」
やっと動悸がおさまって、五郎は答えた。
「風呂に入れますか。ああ。この花をぼくの部屋に――」
ダチュラはもう萎(しな)び始めていた。一体丹尾は何で五郎をつけ廻すのか。つけ廻す理由があるのか。五郎はもう考えたくなかった。いちいち心配していては、気分の方で参ってしまう。

［やぶちゃん注：「ト連送の電文を見た」『トトトト』「ワレ突撃ス、という意味で、特攻隊から発信される」「ト連送」を一般空軍機の突撃開始命令の暗号電信とのみ記す記載が多いが、これはそれとは違う。特攻兵が機体を敵艦船に向けて体当攻撃に入ったことを意味し、兵は同時に電鍵で短点（モールス符号の短点「・」で「ト」或いは「トン」と呼び、長点「―」は通称「ツー」と呼ぶ）を打ち続けることを指す。その「トトトト」（・・・・）――が途絶えた時刻が――特攻兵の死亡時刻――とされたのであった。
「舌たたるく」物の言い方が甘えたようなさま、また、態度が馴れ馴れしくべたべたしている感じを言うが、近世以降に生じた形容詞である。
『「おれたちは同じ汽車に乗り合わせたようなものさ。前に乗り込んだ人が次々に降りて行く。新しいのが次々乗り込んで来る。途中下車をするやつもいるしさ。福なんかは途中下車

じゃない。窓をあけて飛び降りたようなものだ。同行者としての責任感は、たしかにある。いや。同行者の責任なんて、一体あるものかな。連帯感はあるが――」』『「その後、同行者としての連帯感が、だんだん信じられなくなって来た。酒を飲んでも、勝負ごとにふけってもだめだった。それでとうとう病院に入って、治療を受けた。おれの体、薬くさいだろ。今朝まで病院にいたんだ」』五郎が初めて語る、「戦中」から「戦後」を生き続けた彼の外界との掛かり方の暗く沈んだ、一種の「死んだ魂」の哲学である。……その虚構の国家や虚構の平和の中には、「連帯感はあ」ったし、そして「同行者」たる他者という存在には「責任感はあ」った……がしかし、待てよ?……本当の意味で「同行者」たる他者に「責任なんて」あるんだろうか? あるはずないさ! そもそも何の、誰に対する「責任」があるっていうんだ?!……そうさ! ぐるぐるをやって過ぎてゆくうち、おれは、「同行者としての連帯感が、だんだん信じられなくなって来た」んだ!――「酒を飲んでも、勝負ごとにふけってもだめだった」……全く以ってこの疑念は、おそるべき大きさに膨張し続け、遂には自分の魂をはじけさせんばかりにまでなったのだ! 「それでとうとう病院に入って、治療を受けた」という訳さ!……何てったって、「今朝まで」気違いにされて「病院にいたんだ」からな!……と五郎は、ここでは取り敢えず、訴えている、ととってよかろう。

「嗜欲(しょく)」思うままに、思いっきり飲んだり、見たり、聞いたりしたいという貪るような欲求。

「坊岬燈台」「ぼうのみさきとうだい」と読む。坊津の南西端に位置する坊ノ岬にある。個人サイト『日本の宝島「あまくさ」』の「九州・山口県の灯台編」の中の「坊ノ岬灯台」が地図もあって画像もよい。そこに大正一一(一九二三)年七月の点灯とある。無論、先の昭和二〇(一九四五)年のシークエンスでは防空管制のために点灯されていない(と考えてよいだろう)。なお、昭和二十年四月七日に戦艦大和は海上特攻によって凄絶な沈没をしたが、それはこの坊ノ岬から西南約四百キロメートル沖合の東シナ海上であった。

「女が案内した家は、宿屋らしくなかった。他の家と違うのは、ここだけが二階家である。中二階みたいな妙な構造で、一見平屋風(ふう)のように見える」既注の Tsubu 氏の「西郷隆盛のホームページ 敬天愛人」「薩摩旅行記」の『薩摩旅行記(3)「大陸への玄関口・坊津(ぼうのつ)」』にある、豪商森吉兵衛の密貿易屋敷「倉浜荘」がモデルである。ワシモ(WaShimo)

氏のサイト内の「写真旅紀行　坊津―鹿児島県南さつま市坊津町」に、三代目森吉兵衛が万延元（一八六〇）年に建てたもので五代目吉兵衛まで住んでいた、とある。

『「主人が言った。／「あんた。久住五郎というひとじゃなかか」／言葉は電撃のように、五郎の背中を撲（う）った。五郎は顔色を変えて、思わず立ち上った。／「ど、どうしてそれを知っているんだ？」／五郎はどもった。／「二十年前――」』ここは**非常に興味深いシーン**である。まず、ここで**初対面であるはずの他者によって主人公の姓名が「名指される」**ことになる。しかもそれが、**五郎自身が自分の意識の中で封印していた坊津の記憶を蘇らせた直後である**ことに気づく。そうしてまた、**ここでの五郎の反応は極めて特異である**ことに注目したいのである。普通ならば、病院や五郎の親族などから捜索願が警察に出され、そうした関連で紹介があったのではないかと思うのが普通であるのに、五郎は鼻っから――自分の記憶からは消去されているのかも知れないが――この老人と「二十年前」に「ここ」で逢ったことがあり、「何らかの」五郎の忘れている「重大な事実を知っている」人物なのではないか――と考えたからこそ、五郎の「背中」を「電撃」が「撲った」のであり、「顔色を変えて、思わず立ち上」って「ど、どうしてそれを知っているんだ？」と「どもっ」て小さく叫び、『ま、まさか……あ、あんたは「二十年前――」の、あの敗戦の前後、こ、ここにたったの、さ、三週間しかいなかったはずの、お、おれのことを、お、覚えているのかッッ？！』と驚愕しているのである。これこそ、**この坊津での体験が彼の自分探しの正統な場所の一つであったことを、図らずもこの五郎の狼狽そのものが表わしていると言える**のではあるまいか？　さらに言うなら、この場所が妖しげで奇体な構造（次のパートを参照）をした密貿易屋敷であること、ダチュラの女が幻しの如く消え去ってしまうことなどなど、サスペンスや伝奇的浪漫性を盛り上げる効果も忘れずに配されてあるのである。」

五郎の注文で、湯はぬるめにしてもらった。福のようなことになったら、たいへんだ。その危懼からだ。それに旅先で脳貧血でも起したら、みっともない。しかし五右衛門風呂なの

で、少しずつじりじりと熱くなる。水道のホースから、水をがぼがぼ入れてさます。主人に借りた剃刀(かみそり)で、髭を剃る。体を丹念に洗う。ついでに下着も洗う。ふたたび体を湯に沈める。誰かが耳のすぐ近くでささやいた。

「恥知らず！」

五郎は周囲を見廻した。誰もいない。壁だけだ。壁が口をきくわけがない。

〈また幻聴が出て来たな〉

と思う。聞き慣れた声だが、誰のでもない。抑揚も感情もない声である。

「なるほどね」

しばらくして五郎はつぶやいた。

「言葉を使ったからな。使わねばただの痴漢で済んだが、屁理屈をこねたばかりに、恥知らずか」

五郎は今日一日の重さをどっと感じながら、背中を鉄の壁に押しつけていた。熱さがじんじんと伝わって来る。今朝の病院脱出のことを考えていた。あれは恣意(しい)ではなく、いたたまれなく飛び出したという感じであった。

〈正常人が異常心理になるのを恐怖するように、異常心理者は正常に戻るのをおそれるんじゃないか？〉

そんな考えが浮んで来た。正常と異常は、紙一重の差に過ぎないだろう。しかしその差を乗り越える時、性格や感情ががらりと変ってしまう。おれにとって、それがこわかったのではないのか。それで東京を出て、数百里もある薩摩半島につっ走り、今ひっそりかんと五右衛門風呂に沈んでいる。

鉄の壁につけた背中が、やがて耐えがたく熱くなって来た。背を引き剝がして立ち上り、流し場に出る。やはり貧血を起したらしく、眼がくらくらとする。しやがんでじっとしていた。やがて浴衣(ゆかた)をつけ、部屋に戻る。部屋は二階であった。階段の登り口で、主人がどこからともなく出て来て、声をかけた。

「夕食はどげんしもすか」

「ええ」

五郎は考えて答えた。
「軽いものを。酒もすこし」
部屋に上る。へんな感じの部屋だ。天井は低く、舟底型だ。下着を海に面した手すりに乾し、部屋の真中に坐る。どうも感じがへんだ。宿屋の造りではない。第一がらんとし過ぎる。他に泊り客もないようだし、いるのは老人夫妻だけのようだ。真中にちゃぶ台があり、ダチュラの花が瓶にさしてある。ちょっと棺桶みたいな感じの部屋だ。それが五郎の居心地を悪くさせていた。五郎が坐った左側、つまり海と反対側に、明り障子が立ててある。五郎は膝でにじり寄り、そっとあけてみて驚いた。
そこには部屋がないのである。
部屋がなくて、ぽかんと空間(くうかん)だけがあった。見おろすと一階の部屋の畳が見える。今風呂からことに来た時、通った部屋だ。居間とも納戸ともつかぬ、独立していないつなぎの部屋で、隅に布団が積み重ねてある。台所の方角から誰かが膳を持って出て来たので、五郎はあわてて障子をしめ、ちゃぶ台に戻った。階段をのぼる足音がして、老婦人が姿をあらわした。
「いらっしゃいませ」
膳を置き、老婦人はていねいに頭を下げた。
「お疲れでございましたろ。只今主人も参じます」
老婦人が階段を降りて行くと、入れ違いに、主人が登って来た。手に土瓶のようなものを持っている。カラカラだと五郎は思い出した。特殊の形をした酒器で、二十年前に福がどこからか仕入れて来て、アルコール入れに使ったのと、同じ型のものだ。
「どら。晩酌(だいやめ)にあずかりもすか」
主人はカラカラから薩摩焼の器に注ぎ分けた。聞くまでもなく、甘ったるい匂いで、芋焼酎と知れた。食膳は割に豊富である。三種類の刺身を次々箸にはさんだ。
「もう、しおれましたな」
主人はダチュラを指でつついた。
「こいじゃから活花(いけばな)になりもさん」
「何だか陰気な感じのする花ですな」

五郎は水いかを食べながら、相槌を打った。
「二十年前もそう思った。葬式花みたいだとね」
二十年前の話になった。主人の言では、この家屋は軍に接収され、泊へ疎開していた。だから戦中の坊のことは、あまり知らない。
「妙な造りの部屋でしょう」
主人は立って説明した。一見壁に見えるところを開くと、かくし部屋がある。そして障子をあける。
「階段から敵がのぼって来ると、ここから飛び降りて逃げる」
「なぜ逃げるんです？」
五郎は冗談めかして言った。
「わたしには逃げる必要はないですよ」
「いや。密貿易の時代の名残りですよ」
主人は笑いながら、座に戻って来た。
「ここが島津藩の密貿易港では、最大のものでしてな。大陸に行ったり、沖縄や南西諸島に行ったり、ああ、このダチュラも、種子が船に乗ってやって来たんでしょう。どこで摘(つ)んで来やした？」
「わたしが摘んだんじゃない。さっきの女のひとが――」
「ああ」
主人はうなずいて酒盃をあけた。
「どこで知合いやした？」
「キャンプ場の近くでね」
「あいも勝気過ぎって、不幸な女(おなご)でな」
「泊って、女中の産地らしいですね」
「そや昔の話ですよ。あしこは近頃鰹(かつお)の不漁のために人口が減る一方でね、そこに紡織工場が眼をつけち、娘さんたちをごっそりと雇って行く。その勧誘係りたちが何組もここに泊るが、聞いてみると、今の娘たちは女中になりたがらん。みんな工場を希望するらしいです

な。泊だけじゃなく、この坊の若者たちも――」

主人はふたたび立って、海にむかう窓を開いた。五郎も傍に立った。

「この坊の家々も、全部が舟子屋敷でな。みんな鰹漁によりかかって、生活していた。それがだめになったから、さびれる一方ですな」

だんだんさびれて、峠を隔てた二つの部落は人口が減り、ついに消失してしまう。五郎はそんなことを考えていた。しかし主人の語調は淡々として、感傷の気配は微塵もなかった。

「鴉だけが殖ゆる一方です」

「どのくらいいるんですか？」

「約二千羽。あそこに棲んどる」

主人は右の方の山を指した。

「今は少し減っておるかも知れん。魚の量が減っていますでのう」

主人は窓をしめ、座に戻った。盃を手にして、じっと五郎の顔を見た。

「あんた、誰かに追われとるのじゃなかか。眠が血走っちょる」

「さっきの電話のことですか。ありや何でもない。途中で知合いになった男です」

五郎はわらった。

「疲れているんですよ」

「そうですか。相当お疲れのようですな」

主人は盃をあけた。

「明日はお早えかな」

「いや。寝たいだけ寝かしてもらいますよ」

五郎は答えながら、刺身のツマの大根を食べていた。千六本は適当に甘くからく、水気があってうまかった。主人は笑った。

「よほど大根がお好ッなようじゃな。で、枕崎に――」

「ええ。二十年前にはね」

五郎は箸をおろし、盃に手をやった。

「ここで部隊は解散してね、わたしは復員荷物を背負って、枕崎へ歩いた。峠のだらだら坂

を登り切ると、いきなり海が見えた。海がぎらぎらと光っていた」
五郎は盃を一気にあおり、口をつぐんだ。すこし経って主人がうながした。
「そいで？」
「あ」
五郎は放心から醒(さ)めた。にが笑いをして、盃を置いた。
「それから枕崎に出て、故郷に戻りましたよ。汽車のダイヤがめちゃめちゃで、家に着くのに、二日二晩かかった」
「苦労しやしたな。明日は苦労は要らん。バスがあっから」
「いや。明日は吹上浜(ふきあげはま)に行こうかと思っています。歩いて」
「歩って行くのは無理ですな」
主人ははっきり言った。
「明日そっちに行くトラックの便があっから、そいを利用しゃんせ。わしがとこの荷を取りに行くんだ」
主人は掌を叩いて、老妻を呼んだ。
「もうお寝みになったがええじゃろ。ひどく疲れておらるるようだ」
老妻の手によって、食膳が下げられ、寝具の用意が出来た。淡い燈の光だけになった。ダチュラの匂いは、まだただよっている。彼は掛布団を顎まで引き上げる。女のことを思い出していた。熱い軀(からだ)や紅い唇、切ないあえぎなどを。それを忘れるために、彼は心で念じた。
〈便所に行く時に、あの障子をあけないこと〉
〈絶対にあけないこと。階段を利用すること〉
五郎の体は宙に浮いて、ただよい始めた。ゆるやかに、ゆるやかに、波打際の方に。――五郎は福の体になっている。すっかり福になって、しずかに流れている。そう感じたのも束の間で、次の瞬間に五郎は眠りに入っていた。
［やぶちゃん注：「カラカラ」銚子を大振りして注ぎ口を附けたような陶磁器製の瓶。薩摩というと、これと「黒ぢょか」（黒千代香）が焼酎を注す酒具として有名である。御存じな

い方はブログ「かごしま検定をめざす鹿児島案内」の「黒ヂョカ（黒千代香）とカラカラ」で写真が見られる。そこの記載によれば、『「カラカラ」の語源は、唐から伝わったからという説や、ビンが空になったものを振るとカラカラと鳴るためともいわれてい』るとあり、『よく、黒ヂョカは男性的な酒器といわれ、これに対してカラカラは優美な曲線を持った女性的な器であるといわれてい』るとし、一方の『黒ヂョカの形は、偏平な一番巾の広い所を海面に見立て、上半分が桜島で、下半分が錦江湾に映った桜島を形どったとも言われてい』るとある。私（以前に述べた通り、私は薩摩隼人の血を色濃く持つ人間である）は黒じょかが好きで、勿論、家に持っている。

「晩酌（だいやめ）」「鹿児島県酒造組合」公式サイトの「鹿児島弁（かごんま弁）講座の回。」に「ダイヤメ（ダレヤメ）」を挙げ、『「ダレ」は「疲れ」』を「ヤメ」（止める）『のことで、鹿児島では』、一日の『労働の疲れを癒す晩酌のことを方言で「ダイヤメ」と言います』。明治二〇（一八八七）年の『鹿児島の風俗を克明に書き記している資料「薩摩見聞記」によると、『凡そ薩摩程多く酒を飲む国はなし。彼地にて家々毎夜「おだいやめ」と称へ晩酌を為す。家族も皆主人の相手として一、二盃を傾く。随て、婦人、小児にても相応に飲むもの多し。』とあると記す。

「水いか」頭足綱閉眼目ヤリイカ科アオリイカ属アオリイカ *Sepioteuthis lessoniana* の九州での地方名。

「南西諸島」普通は、九州南端から台湾との間に弧状に連なる島嶼群全部を指す。東シナ海と太平洋を画し、鹿児島県に属する大隅諸島・吐噶喇（とから）列島・奄美諸島（与論島まで）などから構成される「薩南諸島」と、南西諸島凡そ南半分に当たる沖縄県に属する沖縄諸島（沖縄本島以南）とその先の先島（さきしま）諸島（与那国島まで）から成る「琉球諸島」とに大別されるが、ここで宿の主人は、前に「沖縄」を出して区別しているので、薩南諸島を指している。なお、本作の発表は昭和四〇（一九六五）年で、沖縄返還は昭和四七（一九七二）年五月十五日、未だアメリカの占領下にあった。

『「泊って、女中の産地らしいですね」／「そや昔の話ですよ。あしこは近頃鰹（かつお）の不漁のために人口が減る一方でね』ウィキの旧「坊津町」の記載の中に、『その後明治から昭和にかけては、鰹漁業や鰹製造の一大集積地として隆盛を誇った。特に昭和初年に隣りの枕崎市に

近代的な築港が完成するまではこちらが大きな力があり、その当時は今では考えられない程の多くの人が行きかっていた』とある。先に記した通り、「泊」は現在、南さつま市坊津町泊である。

「舟子屋敷」「かこ」の「か」は梶(かじ)の「か」で、「こ」は「人」の意で、広義には「水夫」「水手」「水主」と書いて、船乗り全般或いは下級の漁師を指す。ここでも船頭や網元の指揮の下にある漁師の謂いであろう。「屋敷」と言ったのは前注のように繁栄した頃に豪壮な屋敷を作ったからであろう。

「鰹漁(かつお)」ここは表記通り、「鰹漁」の二字に「かつお」とルビしている。現在でも枕崎は鰹漁が盛んで、先日のとある番組では、多い日には六百トンの水揚げがあると言っていた。

「だんだんさびれて、峠を隔てた二つの部落は人口が減り、ついに消失してしまう。五郎はそんなことを考えていた」梅崎春生の作品にしばしば現われる〈滅亡の予感とその幻視〉である。「しかし主人の語調は淡々として、感傷の気配は微塵もな」いところや、「鴉だけが殖ゆる一方です」という台詞、そしてこの密貿易屋敷の奇体な構造などなど、本作を物凄い力で妖しい幻想の異界へとすり替えてゆく妙味も味わいたい。

「千六本」「せんろっぽん」或いは「せろっぽう」と読み、「繊蘿蔔(センロウ)」の唐音「センロウポ」の音が変化したものの当て字。大根などを細長く刻んだ、千切りのこと。「蘿蔔」はアブラナ目アブラナ科ダイコン属ダイコン *Raphanus sativus* var. *longipinnatus* の中文名或いは別名で、これで「すずしろ」と当て読みもする。

『「いや。明日は吹上浜(ふきあげはま)に行こうかと思っています。歩いて」／「歩って行くのは無理ですな」』実際に現在の地図で最短コースを調べたが、坊津から吹上浜までは山越えで、最低でも二十キロメートル以上、実際に次章「砂浜」で辿りつく辺りを調べると三十キロメートルを有に越す。」

砂浜

薩摩の言葉は判りにくい。早口でしゃべられると、全然判らない。外国の言葉を聞いているようだ。小型トラックの荷台に腰をおろして、まわりの風景を眺めながら、五郎はそう考えた。空の荷台には、五郎の他に、もう一人若者が乗っている。それが運転手と話し合う。何の意味か、さっぱり理解出来ない。他国の人間や隠密(おんみつ)が這(は)入り込まないための、島津藩の言語政策だという説を聞いたが、それはうそだろう。言葉とはそんなものでなかろう。そう思ってはいるが、五郎はしだいに自分が隠密であるような気がして来る。

今朝、彼は密航者であった。

十時に朝食をとったが、眼が覚めたのは、ずっと以前である。やかましい音がする。五郎は掛布団を頭までかぶる。

〈うるさいじゃないか。病院だというのに!〉

布団の重さや感触の違うことに、すぐ気がつく。五郎は布団をはねて飛び起きた。窓をあけると、数え切れぬほどの鴉(からす)が高く低く飛び交い、鳴き交わし、その声が空をひっかき廻すようだ。彼はいささか動転して、鴉たちの動作をしばらく見上げていた。

〈これはまるで鴉の町じゃないか〉

乾いた下着を取入れ、五郎は窓をしめ、寝床にとって返した。しかしもう眠る気がしない。また窓を細めにあけ、外の様子をうかがう。こんなにかしましい鴉声は、記憶にない。二千羽いるとのことだが、戦後急に殖(ふ)えたわけではあるまい。戦争中にも啼いていた筈だ。どうして記憶から脱落したのか。戦争生活の荒々しさに紛れてしまったのか。

五郎は低い中二階の突上窓から顔をのぞかせ、しばらく外の様子をうかがっていた。この宿は坊のメインストリートから、すこし山手になっているので、家の屋根屋根が見える。瓦は関東などと違って、きめがこまかく、しつとりした微妙な美しさをたたえている。道が見えるが、人通りはほとんどない。まだ戸をしめている家さえある。五郎は眼を鷹(たか)のように光らせ、人や鳥の動きに注意を払っていた。

〈おれは密航者だ〉

だんだんそんな気分になって来る。この部屋だって、そうだ。あかずの間やかくれ納戸(なんど)や飛び降り障子や、ふしぎな造りになっている。何故そんな遣り方をしたのか。密航者のためのものだという以外には考えられない。五郎は眼を細くしたり太くしたり、顔を傾けたりして、約一時間外界の動きを観察していた。やがて鴉の数が少しずつ減り、喧声もおさまり始めた時、五郎はやっと腰を上げ、とんとんと階段を降りて行った。風呂場で顔を洗うと、階下に食事の用意がととのっていた。

庭に面した部屋で朝食をとる。庭にはサボテン、鶏頭、ゼラニューム、その他の花が咲いている。茶を飲みながら、五郎は主人に弁当を頼んだ。主人は承諾して言った。

「あんたはここで水死した兵隊さんの友達じゃそうですな」

「ええ」

あの女がしゃべったな、と思いながら五郎はうなずいた。主人はそれだけで、あとは追求しなかった。やがてトラックがやって来た。彼は弁当を受取り、主人の贈物のサイダー瓶に入った芋焼酎をかかえ、トラックの荷台に飛び乗る。宿賃は意外に安かった。手を振って、トラックは動き出した。

荷台の上のカンバスをたたんで腰掛け代りにする。しかし道が悪いので車は揺れ、時々ずしんと腰を突き上げて来る。昨夜は熟睡した筈だが、まだ瞼のあたりに疲労が残っている。荷台の若者と運転手は、意味の判らない早口の会話を交わし、笑い合う。五郎は訊ねてみる。

「この車、泊を通るのかね?」

「はい。通ります」

ちゃんとした標準語で答える。こちらの言葉を理解し、きちんと返事が出来るのだ。ふたたび若者同士の会話になると、駄舌(げきぜつ)のたぐいに戻る。五郎は疎外感を感じながら思った。

〈おれはあまりしゃべらない方がいいらしいな〉

泊の町に入った時、五郎は背を丸め、何かをねらう眼付きになって、町並や通行人の動きに注意を集中した。しかし町並は短く、あっという間に通り過ぎた。五郎は緊張を解き、背を伸ばした。

それからしばらく、五郎は膝を立てて手を組み、車の揺れに体を任していた。日がうらうらと照り、左手の方向に海が見えたりかくれたりする。右手はずっとシラス台地で、ところどころに部落があり、時には煙突が見え、合同焼酎製造工場という文字なども読めた。やがてトラックは橋を渡った。

「これが万瀬川です」

聞きもしないのに、若者が教えて呉れた。

「ここらから吹上浜になるんです」

「君はどこの生れかね？」

「わたくしの生家は伊作です」

若者は白い歯を見せて笑った。

「アメリカ軍が吹上浜に上陸して来るというので、あの頃は皆びくびくしていましたよ。二十年前ね」

「君はいくつ？」

「二十八歳です」

「じゃ国民学校の頃だね」

「はい。八歳の時です」

トラックを乗り捨て、まっすぐ浜へ歩く。防風林を抜けると砂丘となり、海浜植物が茂っている。植物の名は知らないが、浜木綿（はまゆう）とか浜防風とか呼ぶのだろう。砂丘にしがみつくようにして、群生している。そこらに腰をおろして、彼は海を見渡した。沖に大きな島かげが見えた。甑島（こしきじま）だ。空気がかすんでいるので、甑島はちょっと見には、九州本土につながった半島か岬のように見える。水平線は漠として見えない。あそこらが東シナ海になるのだ。

しんとしている。

いや、しんしんと、耳鳴りがしている。

鴉の声、トラックの振動音、それから一挙に解放され、耳がバカになったようだ。砂浜は大きく彎曲（わんきょく）して凹んでいる。海が長年かかって、浸蝕したのである。今眺める海は静かだが、石垣島あたりで発生した台風が、枕崎や佐多岬に上陸して荒れ狂い、鹿児島から北上す

る。そんな時に吹上浜の浪は砂丘まで襲いかかり、砂をごっそり持って行くのだ。五郎は戦争中、坊津に行く前に、吹上浜の基地を転転とした。それでこの海のこわさは知っている。

「隠密だの、密航者だのと――」

呟(つぶや)きながら立ち上る。

「おれもちょっと甘ったれているな」

波打際に出て、五郎は靴を脱いだ。靴と弁当を振り分けにして肩にかけ、ズボンをまくり上げる。サイダー瓶を下げたまま、海の中に歩み入る。脛(すね)までひたして、がばがばと歩き廻り、また波打際にとって返す。波打際で海に向って立っていると、波が静かに押し寄せて来て、蹠(あしうら)や踵(かかと)の下の砂をすこしずつ攫(さら)って行く。このくすぐったい感じは、何年ぶりのものだろう。

五郎は北に向って歩き出した。

歩くにつれて、右手の風景、防風林や砂丘の形は、次々に変化するが、左手の海はほとんど変らない。砂は白く粒がこまやかで、ところどころに貝殻が散らばっている。片貝や巻貝。砂や浪に磨き上げられ、真白に輝いている。五郎は時々立ち止り、珍しい形や美しいのを拾い上げて、ポケットに入れる。

約二キロ歩いた。

砂丘に上って、腰をおろす。ふり返ると、彼の足跡が浜に一筋つながっている。それを眺めていると、眼がまぶしく、すこし眠くなって来る。疲れて来たのだ。

「すこし飲むか」

まだ弁当を開くほど腹は減ってない。彼は上衣を脱いだ。背中がすこし汗ばんでいる。瓶が少々荷厄介になって来ている。折角の贈物だから、捨てるわけには行かない。五郎は栓を抜き、一口含んだ。甘ったるく強烈なものが、食道を伝って胃に降りて行くのが判る。

五郎はポケットから、貝殻をざくざくつかみ出して、そこに並べる。ついでにもう一口飲んだ。

風景が急に活き活きと、立体感を持ち始めて来た。ぼんやりと明るい風光が、むしろ蒼然と輪郭をはっきりして来る。背中が微風でひやりとする。

「何だかだと言いながら――」

考えが呟きになって出て来る。酔いがすこし廻って来たのだ。やっとその頃、手や足の先がじんとして来る。

「皆どうにかやってるじゃないか」

トランク男の丹尾や昨夜の女のことを思い出しながら、そう言ってみる。次に、ヒマラヤ杉に囲まれた精神科病室のことが、胸によみがえって来る。五郎は貝殻を掌に乗せて、しげしげと眺める。どうせおれもあの病室に戻らねばならないだろう。瞬間、五郎は眩暈（めまい）を感じた。

［やぶちゃん注：「他国の人間や隠密が這（は）入り込まないための、島津藩の言語政策だという説を聞いたが、それはうそだろう」私も母や母方の祖父・父方の祖母（これで私が薩摩隼人の血が濃いという理由がお分かり戴けるであろう。私の両親は従兄妹同士なのである）からそう聴かされ、確かに、そう信じ込んできた。しかし、ウィキの「薩隅方言」（さつぐうほうげん）によれば、『薩隅方言は、アクセント等が関東方言や関西方言と大きく異なっていることはもちろん、他の九州各地の方言と比較しても、語韻の踏み方や間の取り方、言い回しなどが大きく違っていて、耳にした者に強い印象を与える傾向がある』。『こうした印象を受け』、〈薩隅方言人工言語説〉が『まことしやかに語られることがある。中央の言葉とは全く異なる言葉を使うことで情報の漏れを防ぎ、幕府の隠密の侵入を難しくする、他国人を言葉で聞き分けるといったことを企図して、薩摩藩が意図的に自国の言葉を作り替えたのだ、というものである』。『たとえば横山光輝の漫画、「伊賀の影丸」の第一話では、服部半蔵が薩摩藩についてこのような発言をするなど、時代劇において薩摩藩の優れた戦略性、手強さを盛り上げるエピソードとして使われることがある』。『但し、この言説については、信頼できる言語学関連の学会で肯定的に取り上げられたことはない』とある。因みに、主人公五郎は梅崎春生と同じく、海軍の暗号兵であるから附記しておくと、同ウィキには、「暗号に使われた薩隅方言」という項があり、『第二次世界大戦中の』昭和一八（一九四三）年に『ドイツから日本へ寄贈された』二隻の『潜水艦のうちの』一隻、『U-511 には軍事代表委員の

野村直邦中将が便乗することになっていた。当時日本の外務省と在独大使館間の情報交換は、乱数表を用いた暗号電報を使用していた。ところが、戦況の悪化に伴い『使用が困難になった。そこで、重大機密事項である潜水艦 U-511 の出航に関する情報交換に採用した暗号が「早口の薩隅方言」だった』『出航前後に十数回、堂々と国際電話を使って話を伝えた。アメリカ海軍情報局は当然のことながらこの通話を盗聴し、さまざまな方法で暗号の解読に努めたものの、最初はどの国の言語かもわからなかった。世界中の部族の言語まで調べた挙句、加治木出身の日系二世・伊丹明の手により、ようやく薩隅方言だと特定された』（加治木は旧姶良郡加治木町現在は姶良市内）とある。

「ゼラニューム」フウロソウ目フウロソウ科テンジクアオイ属 *Pelargonium* の園芸品種の一般通称であるが、ウイキの「テンジクアオイ属」を見ると、『普通、園芸植物として栽培されるものはゼラニウムと総称されるが、紛らわしいことに、ゼラニウムとは同じ科の』本邦の民間治療で整腸生薬として用いられることで知られるフウロソウ科フウロソウ属ゲンノショウコ節ゲンノショウコ *Geranium thunbergii*)『などが含まれるフウロソウ属(*Geranium*)のことでもある。この』二つの『属に属する植物は元は *Geranium* 属にまとめられていたが』、一七八九年に『多肉質の *Pelargonium* 属を分離した。園芸植物として栽培されていたテンジクアオイ類はこのときに *Pelargonium* 属に入ったのであるが、古くから *Geranium* （ゼラニウム、ゲラニウム）の名で親しまれてきたために、園芸名としてはゼラニウムの呼び名が残ったのである。園芸店などでも、本属植物の一部をラテン名でペラルゴニウム(Pelargonium)で呼び、その一方で本属植物の一部を「ゼラニウム」と呼んでいることがあり、これらは全然別の植物のような印象を与えていることがある。ペラルゴニウムとゼラニウムを意識的に区別している場合は、ペラルゴニウム属のうち一季咲きのものをペラルゴニウム、四季咲きのものをゼラニウムとしているようである』であるとある。「ゼラニュームなんざ、知ってるから注なんぞいらねえ！」と言われる御仁、このこと知ってました？

「鴃舌」「鴃」は、秋から十一月頃にかけて「高鳴き」と呼ばれる激しい鳴き声を出して縄張り争いをすることから「百舌」とも書く、スズメ目スズメ亜目モズ科モズ属モズ *Lanius bucephalus* の「舌」＝「囀り」の意で、一般には、日本人でない外国人の話すところの意味

の分らない言葉を卑しめて言う差別語である。

「シラス台地」「シラス」は「白砂」「白州」のこと。主にウィキの「シラス（地質）」から引く。『九州南部一帯に厚い地層として分布する細粒の軽石や火山灰で』、『鮮新世から更新世にかけての火山活動による噴出物であるが、地質学においてはこのうち特に入戸火砕流』（「入戸」は「いと」或いは「いりと」と読む。約二万五千年前に現在の鹿児島湾と桜島を囲む巨大カルデラ姶良（あいら）カルデラの大噴火で発生した大規模な火砕流）『による堆積物を指す。古くは白い砂を意味する一般的な言葉であり、現代でも東北地方においてはこの意味で使われる』。『九州南部の平地を中心に分布しており、鹿児島湾北部を囲む地域において最も厚く、湾から遠ざかるに従って薄くなり熊本県人吉市や水俣市、宮崎県宮崎市にも分布している。鹿児島県内でおおむね』数十メートル程度、最大約百五十メートルもの『厚みがある。鹿児島市北西部から日置市にかけて広がる丘陵地や、鹿屋市を中心として広がる笠野原台地は、ほぼ全体がシラスで形成されている。また、霧島市付近に広がるテーブル状の丘陵群は別の地層の上にシラス層が重なるようにして形成されている。上面は平坦になっておりシラス台地と呼ばれる台地を構成している』とあり、ウィキの「シラス台地」によれば、鹿児島市の実に五十二％をシラス台地が占めるとある。**実は、実感としてそれを知る私自身にはこんなインキ臭い注は本来は不要である。私の母の実家（現在は消失）は鹿児島の大隅半島の曽（そお）於市大隅町岩川であったからである。**

「合同焼酎製造工場」これは所謂、狭義の社名等の固有名詞ではなく、単に幾つかの焼酎製造業者が協力して金を出しあって作った同一の工場で蒸留作業を行っているもののようである。

「万瀬川」現行では万之瀬川（まのせがわ）と表記する。薩摩半島中部を流れる河川で、鹿児島県鹿児島市下福元町錫山（すずやま）の鬼燈火谷（ふずつかだに）付近を水源とし、吹上浜南端部近くで東シナ海に注いでいる。参照したウィキの「万之瀬川」には、『万之瀬川の河口付近は古くから良好な自然の港として利用されて』おり、一九九六年に流域支流内になる『日置郡金峰町（現南さつま市）宮崎において発掘調査が行われ』、十一世紀後半から十五世紀前期までの『多くの陶磁器が発見されている。中国産のものと国産のものが両方見つかっており、中国からの輸入拠点であると同

時に国産陶磁器の流通拠点としても用いられていたことが分かっている。南さつま市においては唐仁原（とうじんばら）の地名が残っており、中国商人の拠点があったのではないかと想定されている』。『こうした港としての繁栄は』、大正二（一九一三）年に『南薩線が開通して以降は衰退した』とあり、また、海岸に自生する塩生植物で夏に黄色の花を咲かせる双子葉植物綱ビワモドキ亜綱アオイ目アオイ科フヨウ属ハマボウ（浜朴）*Hibiscus hamabo* の群落や節足動物門甲殻亜門軟甲綱十脚（エビ）目抱卵（エビ）亜目短尾（カニ）下目スナガニ上科スナガニ科シオマネキ属ハクセンシオマネキ *Uca lactea* などの干潟生物及び、越冬のために冬鳥として飛来する鳥綱コウノトリ目トキ科ヘラサギ属クロツラヘラサギ *Platalea minor* などの『水鳥が多く見られることから、万之瀬川河口域のハマボウ群落及び干潟生物群集として日本国の天然記念物に指定されている』ともある。

「伊作」旧鹿児島県日置郡伊作町大字中原、現在の日置市吹上町中原。先の万之瀬川河口から東北に直線で九キロメートル弱に位置する。

「浜木綿（はまゆう）」単子葉植物綱キジカクシ目ヒガンバナ科ハマオモト属ハマユウ *Crinum asiaticum* 。九月は本種の開花期に相当する。ウィキの「ハマユウ」によれば、『花は短い柄の先にあって白く細長い』六枚の花被を持ち、『花弁の根本の方は互いに接して筒状、先端部はバラバラに反り返る。花は日没前後から強い芳香を発するようになり、大型のスズメガ科のガが吸蜜に訪れて花粉を媒介する』とあり、本篇には相応しい花ではある。

「浜防風」海岸性の多年草で山菜として食用にする双子葉植物綱セリ目セリ科ハマボウフウ属ハマボウフウ *Glehnia littoralis* 。花は肉質の白色でカリフラワーに似ているが初夏で、これもこの時期には咲いていない。寧ろ、五郎の網膜に映っているのは、確実にこれと発音も似ている、ここに自生する現在希少種化しつつある先に示した双子葉植物綱ビワモドキ亜綱アオイ目アオイ科フヨウ属ハマボウ *Hibiscus hamabo* の美しい黄色の花の群落であって欲しい気も私はする（但し、ハマボウの花期は七～八月ではある）。

「甑島（こしきじま）」甑島列島（こしきしまれっとう）（現行は濁らないのを行政上で正式化してしまったが、島民からは反発があるという）。東シナ海上の鹿児島県薩摩川内市に属する列島で、上甑島（かみこしきしま）・中甑島（なかこしきしま）・下甑島（しもこしきしま）の有人島三島と多数の小規模な無人島から成る。名は中甑島北部にある「甑」（蒸籠（せいろ））

の形をした巨石を甑大明神として崇拝したことに由来するという（以上はウィキの「甑島列島」に拠った）。地図上での推測であるが、同列島は吹上浜から見るなら、三つの島が東北から南西にごく接近して入り込むようにあって完全な一つの島のように見え、しかも本土側の鹿児島県薩摩川内（せんだい）市の東部が、やはり長い吹上浜の南から見ると有意に半島状に著しく西へ出っ張って見えるに違いなく、しかも計測してみると、間の海峡上の箇所が二十二キロメートルほどしかないことから、五郎のいうように、「空気がかすんでい」て「水平線は漠として見えない」状態であればなおさらのこと、遠く遠望するそれは「九州本土につながった半島か岬のように見える」ものと思う。

「石垣島あたりで発生した台風」この言い方はちょっと気になる。石垣島が台風の直撃を受けるニュースはたびたび聴くが、石垣島付近で台風が発生するというのは、私はあまり聴いた記憶がないからである。台風はもっと東南方の太平洋上で発生するのではあるまいか？私の認識が誤っているというのであれば、御教授あられたい。

「佐多岬」鹿児島県肝属（きもつき）郡南大隅町佐多馬籠（さたまごめ）の大隅海峡に面する九州本島の最南端にある岬。

「五郎は戦争中、坊津に行く前に、吹上浜の基地を転転とした」底本全集第一巻（「桜島」所収）の本多秋五氏の「解題」には梅崎春生の軍歴が以下のように記されてあって、『佐世保海兵団に入り、そこから防府の海軍通信学校に派遣され、ふたたび佐世保へよび返されて、こんどは佐世保通信隊に配置』となった。昭和二〇（一九四五）年の初め頃に『最初の実施部隊として指宿（いぶすき）の航空隊の通信科に転勤』、同二十年『五月に海軍二等兵曹に任官』、その後、谷山基地（薩摩半島東側の旧谷山市内。現在は新制鹿児島市谷山地区で市南部に位置する）『からK基地へ、K基地』（小説「眼鏡の話」に出る）『から坊津へ派遣され、そこから谷山へ帰還を命ぜられ』て『桜島へ赴任したらしい』とある。何故、「らしい」なのかと言えば、実は春生は、この時の体験を後の本作や「幻化」に反映させているにも拘わらず、配属された坊津の海軍特別攻撃隊などについては生涯一切語ることがなかったからである（この部分はウィキの「梅崎春生」に拠る）。本多氏は、この謎の『K基地』については『どこかは不明だが、『眼鏡の話』に、そこが吹上浜の真正面にあたるとあるのが、『幻化』のなかで、

主人公は「坊津に行く前に、吹上浜の基地を転々とした」とあるのに符合する』と述べておられる（下線やぶちゃん）。

「片貝」「かたがい」であろう。斧足類、所謂、二枚貝の死貝の左右の貝殻の一方を指す。」

五郎は追われていた。いつの時か、どこの場所かも定かでない。青年の時だったような気がする。なぜ追われていたか、それもはっきりしない。そんな夢をある時見たのか、あるいは何かのきっかけで生じた贋（にせ）の記憶なのか。

追われて五郎は砂浜を歩いていた。追う者の正体は判らず、姿も見えなかった。しかし追われていることだけは、確かであった。その実感が五郎の全身にみなぎり、彼を足早にさせていた。

漁村があった。浜には網が干してあり、屋根の低い粗末な漁夫の家が並んでいる。磯には海藻が打ち上げられている。岩かげなどにとくにたまっている。大潮の時に打ち上げられ、そのまま浪に持って行かれなくなったのだろう。その藻の堆積は腐敗し、絶望的なにおいを放っていた。まことにそれは眩暈（めまい）のするようないやな臭気であった。

〈イヤだな。ああ、イヤだ〉

五郎はそう思いながら、漁家の方に近づいて行った。水汲場があり、中年の女がせっせと洗濯をしている。五郎はふと放心して、その傍に立ちどまり、洗濯の様子を眺めていた。盥（たらい）の中にあるのは、厚ぼったい刺子（さしこ）である。女は五郎を無視して、しきりに手を動かしていた。女の顔や手や足は、日焼けして黒かった。ぶつぶつ呟いている。

「だめだ。どうしてもだめだ。このままじゃ、だめになってしまう」

そんな風に聞えた。同じことを繰返し、繰返しして呟いている。砂浜には誰の姿も見えなかった。白い犬が一匹、網のそばに寝そべっているだけだ。

〈へんだな〉

五郎は思った。何がへんなのか、自分でもよく判らなかった。人気（ひとけ）のないのがへんなのか、

自分がここに立っているのがへんなのか、そこがぼんやりしている。やがて五郎は気がついた。彼が眺めているのは、腕や洗濯物でなく、女の脚であった。膝までしかない着物を着ているので、つやつやした浅黒い脚の全貌が見えた。五分ほど経って、五郎は耐えがたくなり、話しかけた。

「小母さん」

女はびっくりしたように呟きをやめ、五郎を見上げた。それまで五郎が傍に立っていることに、女はあきらかに気付いていなかった。

「何だね？」

女はとげのある声で答えた。

「あたしゃムシムシしてんだよ。あんまり気やすく話しかけないでお呉れ」

「ぼく、追っかけられているんです」

「誰に？　警察にかい？　悪いことをすれば、追っかけられるのは、あたりまえだよ」

「いいえ。違います」

五郎は懸命に弁解した。

「悪者に追っかけられているんです」

「悪い者なんか、この世にいるもんかね」

女はいらだたしげに言いながら、力んで脚をひろげるようにした。五郎はまぶしくて、思わず視線を海の方にそらした。水平線には黒い雲がおどろおどろと動いていた。そのために舟が出ないのだと、五郎は思った。

「いや」

女は言いそこないに気がついた。「悪くないやつなんて、この世にいてたまるもんかね」

「だから、かくまって下さい」

「だから？　だからだって？」

女はびっくりしたように立ち上って、眼を五郎に据(す)えたまま、刺子(さしこ)をしぼり始めた。刺子はまだ汚れはとれていなかった。厚ぼったい刺子は、しぼりにくそうなので、五郎が手伝おうとすると、女は邪慳にその手を払いのけた。

「余計なこと、しないどくれ」
「ぼくはかくれたいんです」
五郎は必死になって言った。その瞬間の気持に、うそいつわりはなかった。吹きさらしの、どこからでも見えるこの場所にいるのが、こわくてこわくて、たまらなかった。
女はじろりと五郎を見た。
「そんなにかくれたいのかい？」
五郎はうなずいた。とたんに涙がぽろぽろとこぼれて来た。女の声は少しやさしくなった。
「じゃそこらにかくれな。ああ、ムシムシする」
五郎は手で涙を押えながら、その傍の小屋によろよろと歩んだ。小屋の入口には縄筵（なわむしろ）がぶら下っている。それを排して内に入ると、六畳ぐらいの板の間があり、あとは土間になっていた。土間というより砂地に近く、礫（こいし）や貝殻などが散らばっている。五郎は板の間にずり上った。涙はもう乾いていた。
「まだまだ」
と五郎は呟いて、あたりを見廻した。
「油断出来ないぞ」
五部はごそごそと這い廻り、小屋の構造を調べ始めた。柱はわりに太かった。しかし砂地なので、土台がしっかりしていないらしく、押すとぐらぐら揺れる。柱は何の木か知らないが、長年の潮風にさらされ、材質のやわらかい部分は風化し、木目だけがくっきりと浮き上っている。板の間の一番奥に、簀子（すのこ）がしいてあり、そこに鏡台があった。鏡台の木質部にも、木目はきわ立っていた。潮風は家の中にまで吹き入るのか。鏡には布がかけてあった。布からはみ出た鏡面も、塩分で黒く腐蝕していた。
〈何が写るか判らない！〉
その恐怖で、五郎にはとてもその布をめくる勇気が出ない。鏡台には抽斗（ひきだし）がついている。
五郎はそれを引出した。
毛髪がへばりついた鬢付（びんつけ）。貝殻が数個。それにコッペパン一つ。彼はそのコッペパンを食べるつもりで手にとったが、古くて皮がこちこちになっている。口に持って行ったが、歯が

立たない。余儀なく元に戻す。貝殻は巻貝や小安貝のたぐい。それを一つ一つ調べていると、裏口から突然足音が入って来た。

「なにしてんだい！」

ぎくりとして振り返ると、先ほどの洗濯女が土間につっ立っていた。もう半分ほど眼がつり上っている。五郎は返事に窮して黙っていた。すると女は跣(はだし)のまま簀子の上にあがって来た。

「小探(こさが)ししているな。言わないでもわかってるぞ！」

女は立ったまま、両手で五郎を引きずり倒した。女の腕は太かった。筋肉がもりもりして、男の腕のようだ。五郎は押えつけられながら、あやまった。

「許して下さい。許して下さい。もう絶対に小探しはしませんから」

「許してやらない。許してやらない。絶対に許してやらない」

女は手をゆるめなかった。小荷物を扱うように、五郎を乱暴にとり扱った。それはまるで器械体操のようなものであった。観念して全身の力を抜いた時、裏山の方から大勢の歌声がかすかに聞えて来た。意味も何も判らない。一節歌い終る度に、はやし言葉のようなのが聞える。

「はん、はん、はん」

「はん、はん、はん」

そんな具合に五郎の耳には聞き取れた。その歌声がだんだん近づいて来る。――

「だめだ。どうしてもだめだ」

五郎を強引に処理し終って、女は立ち上り、いらだたしげに言った。

「このままじゃ、だめになってしまう」

そして五郎を振り返りもせず、せかせかと裏口から出て行った。独りになると、別の恐怖が彼にこみ上げて来た。

〈ここにいたら、たいへんだ〉

五郎は立ち上り、大急ぎで身づくろいをして、土間に降りた。表の入口の縄筵(なわむしろ)からのぞくと、やはり人影はひとつも見えなかった。沖から風が吹き、黒い雲がしだいに近づいて来

る。

「今だ！」

五郎は砂浜に飛び出した。浜に上げられた漁舟の艪臍（ろべそ）の上に飛び乗り、がたがた歩いて、舟板をめくった。中は小さな舟底になっている。そこに体をすべり込ませ、舟板を元に戻した。そして体を胎児のように縮める。濡れた腿がくっつき合う。低く呟いた。

「これで当分、安心だ」

舟底は暗かった。かすかな光が縞になって、さし入って来る。やがて眼が慣れて来る。船虫が何匹も這（は）い廻っている。長い触角をぴくぴく動かしながら、しきりに走る。その中の何匹かが五郎の体にとりついて、這い登ったり降ったりする。別に不快な感じではない。ただ顔を這われると、くすぐったい。額や額のは手ではらい落し、唇近くに来たのは、フッと呼吸で吹き飛ばす。しだいに五郎は眠くなって来た。ちぢこまった姿勢のまま、意識以前の状態に戻りかけていた。記憶はそこで跡切れる。――

[やぶちゃん注：このパートは「幻化」の中でもエンディングと「白い花」に次いで、私のすこぶる偏愛する部分である。読者の中には、安倍公房の諸作品やら、寺山修司や唐十郎の「前衛」演劇のあれこれを挙げて「その焼き直しじゃん！」などと、したり顔をする愚鈍な連中もあろう。或いは、つげ義春の「ねじ式」などの作品群を想起し、「あれとおんなじじゃん！」などとほざいては哄笑する救いがたいカルチャー・オタクの輩もあろうとは存ずる。しかし私は、それを対照検証する価値を、実は全く以って認めないのである。以上に出した彼らの「シュールレアリスム染みた」（私はそれら総てに対して実は「似非（えせ）シュールレアリスムだ」とはっきり指弾したいのであるが、それはこの注から逸脱するのでやめておこう）あの――意味あり気に見えて、その実、驚くべき虚しさしかない擬似芸術――とは全く異なるところの、久住五郎の――純粋にして正統唯一の真にシュールレアリスティクな「夢」――として揺るぎないシークエンスと、私は大真面目に大胆に確信しているのである。さても！　文句があるなら、永遠に戦おう！　こっちの反論材料は、多分、あんたよりは……豊富だ、ゼ！……♪ふふふ♪……

「刺子(さしこ)綿布を重ね合わせて、一面に細かく刺し縫いにして縫われたもの。保温力があり、非常に丈夫なので柔道着・剣道着の他、漁師の纏うものなどに用いた。

「毛髪がへばりついた鬢付(びんつけ)」鬢付け油の固形油と思われる。日本髪で髪を固めたり乱れを防いだりするのに用いる固練(かたね)りの油で、生蠟を植物油で練って香料を混ぜた容器に入れられた粘体の固形物であろう。

「小安貝」腹足綱直腹足亜綱 Orthogastropoda 下綱新生腹足上目吸腔目高腹足亜目タマキビ下目タカラガイ超科タカラガイ科 Cypraeidae に属する巻の極めて浅い丸みを帯びた、光沢の陶磁器のような質感の貝類の総称で、漢字の「貝」の字はこれを元に作られた象形文字と考えられており、貝殻の形状が妊婦の腹に似、また下面が女性生殖器を連想させることから、南洋や本邦では古えよりお守りとされた。強く握っても割れぬことからも妊婦出産時の安産のプラグマティクな呪的対象とされ、平時でも原初的な貨幣とされた。但し、普通は「子安貝」と漢字表記する。

「艪臍(ろべそ)」和船の櫓床に設けた小さな杭で、櫓の入子(いれこ)という孔部分をそこに嵌める、櫓を支えるための堅材の小さな突起を指す。

「濡れた腿がくっつき合う」前場面から大腿部が海水その他に濡れている描写はなく、あえて言うならば失禁が考えられるが、実はそんな現実的な整合性はここには全く無縁なのである。――これでいいんである。――次のパートを読めば、それは一目瞭然である。ともかくも――無心に――読み進まれよ。――♪ふふふふ♪……

「船虫」岩礁性海岸や人工性海浜護岸ではお馴染みである節足動物門甲殻綱等脚（ワラジムシ）目ワラジムシ亜目フナムシ科フナムシ属フナムシ *Ligia exotica*。」

五郎はふっと眩暈(めまい)からさめた。秋の強い日に照らされて、貧血を起したらしい。五郎は靴を穿(は)き、弁当と瓶を持って立ち上り、防風林の中にふらふらと入って行った。あたりに誰もいないということが、安心でもあり、また無気味である。松の木の露出した根の、適当なの

を選び、上衣をたたんで乗せた。それを枕にして、長々と横たわった。

眼をつむる。うとうとと眠りに入った。

どのくらい眠っていたか判らないが、何だか首筋や手の骨の痛さで眼が覚めた。

〈誰かがおれに理不尽なことをしている〉

不機嫌な感じがあって、しぶしぶ眼を見開いた。しばらく木の梢や空を眺めながら、ここはどこだろうと考えていた。そしてゆっくりと上半身を起した。

「ああ。ここで眠っていたんだな」

それが納得出来るまでに、三十秒ほどかかった。誰も理不尽なことをしたわけではない。木の根の固さと不自然な体位が、五郎の体に痛みをもたらしたのだ。彼は手を屈伸し、肩をたたき、体操の真似ごとをした。ふと見るとサイダー瓶は倒れ、栓のすき間からこぼれて砂にしみたらしく、内容は半分ぐらいになっていた。こぼれたって、別に惜しいとは思わない。五郎はそれを拾い上げ、また一口飲んで、もうこぼれないようにしっかり栓をした。そして立ち上る。

「昨日も今日も、昼酒を飲んだな」

五郎は歩き出しながら、大正エビのことを思い出した。大正エビはアル中患者だ。まだ若くて、すっきりした顔で、付添婦や看護婦によくもてた。アル中患者なんてものは、アルコールを断たれると、禁断症状を起してばたばたあばれるのかと思っていたが、そうではない。けろりとしている。

「酒、欲しくないか？」

五郎は聞いたことがある。入院して二、三日目のことだ。

「別にそれほど――」

大正エビは彼の眼をうかがいながら答えた。

「あれば飲みますがね」

朝から飲むとのことであった。つまり一日中酒の気（け）の切れる時がない。しかし大正エビの言葉がうそであることは、同室になってやっと判った。彼は付添婦を買収して、薬瓶（含漱（うがい）用の大瓶）に酒を買って運ばせていた。飲んでも顔には出ない。態度も変らない。ただ酒が

切れると不安になり、こわくなって来る。

〈今のおれとよく似ている〉

五郎は思う。歩きながら、左手の海のひろがりが何となく気になる。いったん波打際に行くが、歩いている中に、しだいに足が防風林の方に寄って行く。振り返ると、足跡がそうなっている。やがて川にぶつかった。川口は南方は彎曲(わんきょく)し、石で護岸工事がほどこしてある。岸はかなり高い。五郎は腰をおろした。また瓶の栓を抜いた。熱いものが咽喉(のど)をつらぬいた。

「さて」

五郎は岸壁がこわかった。生れて最初に水死人を見た所が、これによく似た岸であった。材木を三本、三脚式に立て、結合部から綱が数本水に垂れている。その綱で水死体をからめようとするのだが、なかなかひっかからない。浪は荒れていた。流れ込む淡水と海水が混り合って、三角波を立てている。五郎は小学生で、お下りの合羽を着ていた。早く登校しなければならないが、誰が水死したのか知りたくて、人だかりの中をうろうろしていた。引揚作業の男たちは、裸のもいたし、黒合羽のもいた。雨かしぶきか判らないが、水滴が絶え間なく飛んで来て、顔を濡らす。

「子供たちゃあ邪魔だから、あっちいけ！」

「ごそごそしていると蹴飛ばすぞ！」

皆気が立っているので、言葉も動作も荒い。そう罵られても放っとけない気がして、五郎はあちこちに頭や肩をぶつけながら、うろうろしていた。水死人が女であることは、作業の男たちの会話で判っていた。

〈お母さんじゃなかろうか〉

五郎はしきりにそんなことを考えていた。しかし五郎の母は、彼が家を出る時、台所でとかたづけをしていた。五郎は家を出てまっすぐここに来たのだから、母である筈がない。やがて死体がひっかかったと見え、作業員の動作が急に慎重になる。綱が引かれる。綱の先にぶら下った死体が見える。浴衣(ゆかた)を着ているのだが、岸壁や岩や浪にぶつかって切れ切れになり、海藻がまつわりついたように見える。綱は脇の下にかかっている。まだ若い女らしい。もうすぐ岸に上げられようとしたとたん、死体は綱から離れて、元の水に落ちて行った。嘆

声が人混みの中からおこった。――

〈なぜお母さんじゃないかと思ったんだろうな〉

五郎はゆっくりと立ち上った。川口を徒歩で渡る気持はなかった。防風林の方にのぼり、小さな木橋を渡り、また砂丘に戻って来た。眠っている中に陽が翳(かげ)り、沖の島影も濃くなっている。風が立ち始めた。浪はうねりながら浜に打ち寄せ、静かに、しかし大幅に引いて行く。五郎はかすかな悪感(おかん)を感じた。眠っている中に風邪をひいたのだろう。

「だんだん元に戻ってゆくようだ」

五郎は呟(つぶや)いた。睡眠療法でどうにか直りかけていたのに、脱走して思うままのことをした。やはりあのコーヒーを飲んで思ったことは、衝動的なものか、あるいは正常人に戻りたくない気持からだったのか。しかし予定していたことと、実際の行動は、ずいぶん食い違った。

「一体おれは、福の死を確めることで、何を得ようとしたのだろう？　おれの青春をか？」

結局おれは福の死をだしにして、女を口説(くど)いた。そして猥雑な中年男の旅人であることを確認しただけに過ぎない。しかし症状としては、昨日はまだよかった。不安や憂欝は、ほとんどなかった。今日はどうも具合が悪い。ぼんやりと『死』が彼の心に影をさしている。この長い砂浜に、独りでいるのがいけないのか。

橋を渡って、また二キロほど歩いた。疲労がやって来た。砂浜は足がぽくぽく入るので、ふつうの平地を歩くよりずっと疲れるのである。

大きな流木が打ち上げられていた。そこまでたどりつくと、五郎はほっとして腰をおろし、しばらく海を眺めていた。眺めていると言うより、にらんでいた。流木はずいぶん浪に揉(も)まれたらしく、皮は剝げ、枝もささらのようになり、地肌は白く乾いていた。

「このままで――」

と五郎は口に出して言った。

「振出しまで戻るか。それとも前非を悔いて病院に戻り――」

五郎は栓を歯でこじあけ、残りのすべてを咽喉(のど)の中に流し込んだ。飲んだらなお気持が荒れる。それはよく判っていたが、早くけりをつけてしまいたいという気分が先に立つ。この

まま服を脱いで裸になり、沖に泳ぎ出す。くたびれて手足も動かなくなるまで泳ぐ。するともう浜には戻れない。その想念が、さっきから彼を誘惑している。海がおいでおいでをしている。

〈まだ大丈夫だ〉

五郎は沖をにらみながら思う。

〈まだその手には乗らないぞ〉

彼はなおも福のことを考えていた。おれは福に友情を感じていたのか。いや。感じていなかった。あるとすれば、奴隷としての連帯感だけだ。それ以外には何もない。それはあの精神科病室の四人（五郎も含めて）のつながり方に似ている。神経が病んでいるという点だけが共通で、あとのつながりは何もない。たまたま同室に入れられ、会話したり遊んだりするが、それだけのことだ。

〈あのチンドン爺さんは面白いなあ〉

内山という六十ぐらいの太った爺さんで、街でチンドン屋に会うと気分が変になり、入院して来るのだ。チンドン屋を見ると、なぜ変になるのか。一歩踏み込むと判りそうな気がするのだが、その一歩が踏み込めない。爺さんにも判っていないらしい。一度訊ねたことがある。爺さんは答えた。

「わしにも判らんがね、なんか気分がおかしくなるんだ」

「おかしなもんだね」

「うん。おかしなもんだ」

ある日五郎は、大正エビと電信柱と共謀して、三人でチンドン屋の真似をしたことがある。爺さんがどんな反応を示すか、知りたかったのだ。思えば危険で残酷な試みであった。鐘のかわりに茶碗を、太鼓のかわりに足踏みして。——夕食が済んだあと、三人がいきなり立ち上り、茶碗を叩きながら、

「チンチンドンドン、チンドンドン」

口で囃して、床を踏み鳴らして歩いた。大正エビは頭に派手な手拭をかぶり、衣紋を抜いている。女形のつもりなのだ。

爺さんはきょとんとした表情で、しばらく五郎たちの動作を眺めていた。それからにやにや笑うと、自分も茶碗を持ってベッドから飛び降り、チンドン行列に参加した。病室は壁が厚いし、床も頑丈に出来ているので、音は外部に洩(も)れない。付添婦が入って来るまで、その騒ぎは続けられた。

叱られてベッドに這(は)い登っても、爺さんは愉快そうであった。首謀者の電信柱は口惜しがって、

「爺さん。気分がおかしくならないのかい」

「おかしくならないね」

「なぜ？」

「お前さんたちが本もののチンドン屋でないからさ」

と爺さんは答えた。

「初めわしは、お前さんたちが気が狂ったのか、可哀そうに、と思ったよ」

もちろんこの病室の四人は、自分が気が狂っているとは、夢にも思っていないのである。

電信柱が舌打ちをしてベッドに戻ると、爺さんは追打ちをかけるように言った。

「しかし、面白かったよ。またやろうや」

五郎はその会話を聞いていた。最後のその言葉には同感であった。自分が他の人間になることは、何とすばらしいことだろう。爺さんの言うように、恰好(かっこう)は本ものでないが、気持の上では五郎は完全にチンドン屋になり切っていた。

〈たとえばこんな風に――〉

五郎は今流木の傍に投げ捨てたサイダー瓶を拾い、ついでに流木の枝を折り取ろうとしたが、樹液をうしなった枝はしなうばかりで、幹から離れようとしない。そこらを捜して、細長い石を拾う。弁当は腰にくくりつける。

「それっ！」

足を斜めに踏み出しながら、瓶を石でたたく。ひょいひょいと飛び交いながら、

「チンチン、ドンドン」

「チン、ドンドン」

誰も見ていないでもいいのだ。ただ一人五郎は、踊りながら砂浜を行く。しかし三十メートルほど行くと、さすがにくたびれて、足がもつれる。彼は踊りやめた。そのまま腰をおろそうとして、砂丘に眼をやると、そこに見物人が一人いるのを見つけた。子供である。そちらに歩を踏み出すと、その子供はあわてたように、水の中に入った。そこは入洲みたいになっていて、細い水路で渚(なぎさ)から海につながっている。それを網でせきとめてあるので、入洲は百坪ばかりの池になっている。その中にいる魚を、子供はすくい網で獲ろうとしているのだ。

「これは何という魚かね？」

砂上のバケツをのぞこうとすると、子供はあわててじゃぶじゃぶとかけ寄り、バケツの位置を移そうとした。十二、三の男の子で、白い褌(ふんどし)をつけている。

「小父さんは気違いじゃないんだ。安心しなさい」

少年の眼の警戒の色を見ながら、五郎はやさしい声を出した。

「芋焼酎を飲んだら、踊りたくなったんだ」

少年は思い直したように、バケツから手を離した。五郎と並んで腰をおろした。

「これ、ボラだろう」

五郎は言った。少年は首を振った。しかし五郎にはボラとしか思えなかった。

「ボラだよ」

子供はまた首を振った。濡れた砂の上に指で、ズクラ、と書いた。口がきけないのかな、と五郎は思った。

「ズクラ、というのか。おいしいかね？」

また少年は砂に、ウマイ、と書いた。五郎は突然空腹を感じた。彼は腰にゆわえた弁当の風呂敷を解いた。大きな握り飯が二つ、豚の煮付け、それに縄のようなタクアン、切らずにそのまま入っている。

「君もお握りを食わないか」

「食う」

初めて口をきいた。立ち上ると自分の服を脱いだ場所にかけて行き、小さな平たい板と小

刀と、ビニールに包んだ味噌らしいものを持って戻って来た。何をするのかと五郎は少年の動作を見守っている。少年はバケツからつかみ出し、頭をはね鱗(うろこ)を落し、内臓を抜いた。あざやかな手付きで三枚におろす。骨は捨てる。四匹を調理し、ビニールの結び目を解く。五郎は驚きの眼で、それを眺めていた。

「それでもう食えるのかい？」

握り飯をひとつ少年に渡しながら、五郎は言った。少年はうなずいて、肉片に味噌をなすって、五郎に差出す。酢(す)味噌がよくきいて、案外うまかった。

「うまいな」

五郎もおかずを差出し、縄タクアンを板の上に乗せた。

「ついでにこれも切って呉れ」

ズクラの刺身と豚煮付けとタクアンで、五郎と少年は並んで食事をした。どれもうまい。野天の豪華な真昼の宴だ。縄タクアンの味は、二十年前の記憶にある。これは壺漬けと言うのだ。薩摩半島でつくられ、軍艦や潜水艦に搭載(とうさい)して、赤道を越えても腐らないので、海軍ではこれを全部買い占めてしまった。そんな話を当時五郎は聞いた。微妙な匂いと味を持つタクアンで、鹿児島の基地にいる時は、三度三度の食事にこれが出た。この味は敗戦の喜びに通じるところがある。食べ終ると彼はほっと息を吐き、煙草に火をつけた。お握りはもちろん、おかずも全部姿を消していた。

「君の家はここらかね？」

「うん」

少年はうなずいた。少年は日焼けして、肌も浅黒かった。眼が大きく、容貌はきりっと引きしまっていた。

「お父さんは、何してる？」

「町で自動車の運転手をしておる」

「町って、どこ？」

「伊作」

「お母さんは？」

「うちにおる」
「ふん」
彼はこの少年の一家のことを考えていた。
「も少しお酒が飲みたいな。君んちで飲ませて呉れないか」
少年は黙っていた。立って服の所に行き、服を着た。もうズクラ獲りはやめる気になったらしい。バケツの中に板と小刀を放り込んだ。五郎は性欲を感じた。少年に対してではない。海や雲や風の中で、自然発生的に浮んで来たのだ。酔いのせいもあった。流木のところでおった焼酎の酔いが、そのまま動かなきゃ暗く沈むところを、チンドン屋の真似をしたり、少年と話を交わしたばかりに、外に発散した。海からの誘惑は、もう消失していた。少年がぽつんと答えた。
「うちは困ッ」
「なぜ？」
「うちは酒屋じゃなか」
それは知っているが、と言いかけて、五郎は口をつぐんだ。少年の家に押しかけて行くべき理由は、何もないのだ。彼はサイダー瓶を防風林へ投げ、弁当の殻や包み紙はまとめて火をつけた。透き通った炎を上げ、すぐに焼け焦げた。物憂くて立ち上る気がしない。
「伊作って遠いのかい？」
「ちっと遠い」
「案内して呉れるかね？」
少年はうなずいた。立ち上らざるを得ない。懸声をかけて立ち上る。入洲に手をつけて、飯粒などをざぶざぶと洗い落す。少年の後について歩き出した。
松林に入る。しばらく歩くと、林の中に大きな縄が置いてある。長さ二十メートルばかり。立ち止って調べると、松根を芯にして、まわりを藁(わら)で巻いたもので、何のためにつくられ、何のためにここに置かれているか判らない。少年を呼びとめて聞いた。
「これで何をするんだね？」
「綱引き」

「綱引き？　両方から引っぱり合うのか」
少年はうなずく。
「なるほどね」
五郎は答えたが、納得（なっとく）したわけではない。納得したいとも思わない。納得したいという気持は、ずいぶん前から、彼の心の中で死んでいる。五郎は言った。
「ちょっとここで休憩しよう」
少年は不承不承（ふしょうぶしょう）、五郎に並んで綱に腰をおろした。五郎は内ポケットから金を取り出した。百円玉を少年に渡した。
「あそこに茶店があるだろう。ジュースを二本買って来て呉れ、咽喉が乾いた」
少年はちょっとためらったが、五郎は無理に掌に押しつけた。少年が立ち去ると、五郎は自分の在り金を全部つかみ出して勘定した。
「もし伊作に泊るとすると――」
その分をポケットに入れた。残りの金では、とても東京まで戻れない。しばらく掌に乗せたまま、考えていた。
「熊本まで行って、三田村に電報を打って、送金してもらうか」
三田村と言うのは、病院を紹介して呉れた友人のことだ。今は画廊を経営している。五郎は熊本で学生生活を四年送ったことがある。三田村はその時からの友人であった。熊本から電報を打つという思いつきは、そこから出た。三田村ならためらわず送金して呉れるだろう。学生時代にそば屋だった店があり、二人ともそこによく通い、酒を飲みそばを食べた。それが戦後旅館に転向して繁昌（はんじょう）していると聞いた。女主人とは顔なじみだし、そこから電報を打てばいい。
〈そうだ。丹尾も阿蘇に登ると言っていたな〉
五郎は枕崎までの同行者を思い出した。別に丹尾に再会したいとは思わないが、金が送られて来るまでに、時間がかかるだろう。阿蘇に登ってもいいな、と五郎は考えた。彼は学生時代、二度阿蘇に登ったことがある。しかし二度とも、眺望には失敗した。一度は雨で、火口はほとんど視界ゼロで、何も見えなかった。もう一度は晴天だったが、もう直ぐ火口に達

する時に小爆発が起きて、火口にいた何百という登山客が、算を乱して急坂をかけ降りた。まるで映画のロケーションみたいだと五郎は一瞬見とれたが、その間にも小さな火山弾が彼のまわりに落ちて来て、ジジッと煙を上げた。

〈しかしほとんど危険は感じなかった〉

と五郎は思う。まだ若くて、生命力にあふれていたのだろう。生命に対して自信があったのだ。今とは違う。

三田村は五郎の良友であると同時に、悪友でもあった。酒色を本格的に教えたのは三田村である。いつだったか、盛り場で酒を飲み、下宿に戻る途中、赤提燈（ちょうちん）を軒にぶら下げた売春宿があった。それを指して三田村は言った。

「この店にだけは泊るなよ。あとできっと後悔するから」

「なぜ？」

「理由はどうでもいい。泊るなというだけだ」

三田村は同年輩のくせに、へんに老成し、先輩ぶりたがるところがあった。五郎はそれがいやだったし、その時も心の中で反撥を感じた。

〈そこは私娼だから、病気を恐れろという意味なのか？〉

それならそうとはっきり言えばいい、と五郎は思った。しかしも一度聞き直すのは、彼の自尊心が許さなかった。それから一週間後、一人で酒を飲み、夜更（ふ）けて戻る時、赤提燈の前を通りかかった。ふと先夜の三田村のもったいぶった言い方を思い出した。一度は通り過ぎたが、ためらいながら元に戻り、油障子を張った引戸をそっと引きあける。寒い夜で、年老いたのと若いのと二人の妓（おんな）が、火鉢に当っていた。二人とも会話をやめ、ふしぎそうな顔付きで、制服姿の五郎を見た。五郎は若い方を指して言った。

「そのひと、あいてる？」

「はい」

女は娼婦らしくなく、小学生のように素直な声を出した。五郎は靴を脱いで、二階に上った。ここに勤め始めて二箇月だそうで、女の体はまだ未熟なように思えた。

「何でここに泊ってはいけないのだろう？」

そのわけは翌朝になって判った。七時過ぎに眼がさめ、服を着て窓をあけた。窓の下を人が通っている。五郎ははっとした。通行人のほとんどが学生であり、彼の同窓生であった。

「なるほど。これは困ったな」

五郎は窓をしめ、また細めにあけた。今朝の坊の宿と同じ姿勢で、妓の持って来た茶をすすりながら、道を見おろしていた。道を通る人は前方ばかり注意して、案外上を見ないことに彼は気がついた。背徳と疎外の感じはあったが、別に妙な優越感がやがて彼に湧き上って来た。お前たちはせっせと蟻のように登校して行くが、おれはこんなところで一夜を明かしたんだぞ。そんな謂れのない優越感で、彼は茶をすすり、煙草をふかしていた。と言っても、今直ぐ堂々と外に出て行く勇気はなかった。優越感といっても、それは若さが持つ虚勢に過ぎなかった。その時通行人の中の一人が、どんなはずみからか、ふっと顔を上にねじ向けた。五郎と視線がぴたりと合ってしまった。

それは五郎が教わっている松井というドイツ語の教授であった。中年にして頭の禿げた小太りの教授で、足をとめていぶかしげに五郎を見ている。今更五郎も顔を引込めるわけには行かない。眼を据えて、松井教授をにらみつけた。時間にすると、二、三秒だったかも知れない。感じからすると、十秒から十五秒くらいに思われた。教授は顔を元に戻すと、すたすたと歩き出した。五郎は荒々しく窓をしめた。

にらみ合いに勝った、という感じは全然なかった。打ちのめされたような敗北感だけがあった。彼は震えながら、女に酒を頼んだ。熱いコップ酒に口をつけながら呟いた。

「不潔なやつだな。あいつは！」

不潔なのは自分であることは、理屈では判っていた。しかし実感としては、教授の方が不潔でいやらしいと思う。教授が窓を見上げねば、不潔感は生じなかった。見上げたばかりに、穢らわしい感じになってしまった。しかも教授が表情を少しも動かさず、動物園の檻の中のけものでも見る眼付きだったことが、五郎を一層傷つけた。

〈やはりおれの負けだったんだ〉

太縄の藁のけばをむしりながら、今五郎は思う。少年がジュースを二本ぶら下げて戻って来た。五郎は受取りながら言った。

「栓抜きはないのか」
「忘れた」
「だめじゃないか。借りておいで」
そして五郎は言い直した。
「借りて来なくてもいい。向うであけてもらって来いよ」
「栓抜きがなくても、歯であける」

［やぶちゃん注：もう、お分かり戴けたと思うが――というよりも既にして前のパートの冒頭で「いつの時か、どこの場所かも定かでない。青年の時だったような気がする。なぜ追われていたか、それもはっきりしない。そんな夢をある時見たのか、あるいは何かのきっかけで生じた贋（にせ）の記憶なのか」と一人称で五郎が述べているので誤読された方は多分いないとは思うのであるが――前のパートは総て、前の前のパートの最後で起った「眩暈」の後、意識を喪失した久住五郎が見た非常に五感部分が優れてリアルな幻覚、というよりも「夢」なのである。すこぶる映像的感覚的で素晴らしい。私はこれにごく類似した夢を見たことがあるし、精神疾患の患者が見る夢としても整序されている。というよりも整序され過ぎている。見ている漁師の女の腕が脚に変わる場面、彼女のリフレインする苛立ちの台詞の意味不明性、前触れなしに五郎の大腿部が濡れている点（これは極めて性的な意味で解釈出来るし、それを狙っていることが顕在的である）以外は、夢としては特有の飛躍や非現実性・超現実性が殆んど見られないことから、これは確かに「久住五郎の夢」ではあるが、イコール、「作者梅崎春生が見た夢」である訳ではなく（実際の夢の断片を素材とした可能性は寧ろ高い）、全体は意識的に春生によって創作構成された「擬夢」の可能性が非常に高い。されば、この異様にインサートされた「夢」の分析は本作の秘鑰（ひやく）の確かな堆積とも考えられる。フロイト派やユング派の夢分析を行うよりもまず（それも全く無価値ではないとは思う）、作者の顕在意識が布置した顕在的なアイテムや言動・行動、音などを解析し、そこから伏線的象徴や暗示を引き出してみる価値は非常に高い。但し、私は今それをここでやらかす気は毛頭ない。しかし、何時かはやってみたい。ともかくも、すこぶる映画的なフラッシュ・バックする夢

幻シークエンス、まさに「幻化（げんか）」（書名ではない。一般名詞のそれである）のヴァーチャル・リアリティとして鮮烈であり、今以って新鮮であり続けている名場面である。――既に述べた通り、安倍公房の妙にインキ臭いくどくどしい解説的描出や、寺山修司の如何にもな陳腐極まりない（と実は私はずっと昔から思っている）シュールレアリスティクな異物による構成モンタージュ映像が最早、化石のように古びて見えるのとは全く違って――である。

「川口は南方に彎曲（わんきょく）し」これは地図上の推定から前に注した「万瀬川」万之瀬川の、現在でも非常に大きく南西方向に蛇行している河口部分、現在の鹿児島県南さつま市加世田（かせだ）益山（ますやま）一帯である。

「三角波」進む方向が異なる二つ以上の波が重なり合って出来る、波の峰が文字通り、三角状になる、波高の高い波のこと。

「衣紋を抜いている」抜衣紋（ぬきえもん）のこと。和服の着付け方の呼称の一つで、後ろ襟をずっと引き下げ、襟足があらわに出るように着ている、の謂い。

「女形（おやま）」歴史的仮名遣では「をやま」で、他に「女方」「御山」とも書く。江戸初期の承応年間（一六五二―一六五五）辺りに人形浄瑠璃の女役の人形遣い手として知られた小山次郎三郎に由来するとされ、文楽の女役の人形、現在は主に歌舞伎で女役を演ずる男性の役者を指す。また、上方では遊女のことをも、かく呼称した。

「百坪」畳二枚が一坪であるから百坪は二百畳。二十五メートルのプール一基分に相当するから、かなり広い砂浜海岸の半人工的な（網で閉鎖してあると描写がある）入り江である。

「ボラ」条鰭綱ボラ目ボラ科ボラ属ボラ *Mugil cephalus* 。出世魚として知られる。ウィキの「ボラ」には、

関東　オボコ→イナッコ→スバシリ→イナ→ボラ→トド

関西　ハク→オボコ→スバシリ→イナ→ボラ→トド

高知　イキナゴ→コボラ→イナ→ボラ→オオボラ

東北　コツブラ→ツボ→ミョウゲチ→ボラ

とあり、それとは別にボラの別名として『イセゴイ（関西地方）、ナタネボラ（愛媛県）、マボラ（広島県）、ツクラ（沖縄県）、クチメ、メジロ、エブナ、ハク、マクチ、クロメ、シロ

メなど』を挙げる（下線やぶちゃん。次注参照）。

「ズクラ」**少年は否定するが、前注のボラ *Mugil cephalus* の幼魚の地方名**である。トマト氏のブログ「トマトのいきいき人生日記」の「渚の足跡４―母なる万之瀬川―」（まさに当該の川！）に（下線やぶちゃん）、

《引用開始》

趣味娯楽のもう一つは万之瀬川での魚取りである。万之瀬川は薩摩半島最大の１級河川である。河口から2キロぐらいまでは川幅は１００メートルを越す。満潮時には満面に水を湛えさながら大河を趣きがあるが、干潮時には川の半分は干潟になる。私の集落はその川の畔に位置するので、まさに母なる川である。うなぎ・モクズガニ・鯉・フナ・エビ・ムツなど獲物は多い。が、父が獲るのはもっぱらズクラである。ズクラとは方言でボラの子のことで体長１０～１５センチのものをいう。１０センチ以下のものをギンゴロウといい美味なのだが資源保護のためにあまり獲らない。自然保護を心得ていたと思う。ボラは海水魚であるがズクラは真水と海水が混ざるところの集落辺りの川がちょうどいいすみかになっている。漁は投網を使う。投網はみな木綿糸の手編みである。１本編み上げるのに１ヶ月を要する、時間と根気の要る仕事だ。編みあがったら下辺に鉛の錘を付け、柿渋に漬けて天日で乾かしこれを繰り返す。柿渋の独特の匂いが沁み込み腰が強く糸がしゃんと突っ張り褐色に染まった網はまさに芸術品である。今はナイロンテグスで機械編みとなり、丈夫で長持ちする網に変わった。

《引用終了》

文中の「ムツ」は海水魚のスズキ目スズキ亜目ムツ科ムツ属ムツ *Scombrops boops* で、成魚は六〇センチメートルから一メートルを超える大型の深海（二〇〇～七〇〇メートル）ほどの深海の岩礁域に棲息するが、稚魚は海岸部の岩礁や内湾の藻場などでも見られ、タイドプールに入ることもある。さてもさても！　こういう記載に出逢えるのは醍醐味！　まさにネット世界のユビキタス（Ubiquitous）――どこにでも何でもそれぞれの神意は「在る」こと――であると私は思う。なお、少年はここで、そのズクラを手早く三枚に下ろして酢味噌をなすって五郎に供しているが、残念なことに私はボラを刺身で食ったことはないし、食え

るとも思っていなかった（因みに、青年の頃に富山で釣り上げたことは何度かあるが、総て母が「臭いから」と味噌汁に仕立てていた。味は嫌いではない。なお、私は臭いものが却って好きなくらいである）。ところが、ウィキの「ボラ」を見ると、『日本では高度経済成長以降、沿岸水域の汚染が進み、それに伴って「ボラの身は臭い」と嫌われるようにもなったが、それ以前は沿岸でまとまって漁獲される味のよい食用魚として広く親しまれ、高級魚として扱った地域も少なくなかった。そのため各地に様々な方言呼称がある』として、前に挙げた別名が挙げられている（別名を多く持つのは食用として持て囃され美味いからなのである）。また別に、『その食性から汚染した水域で採れるものは臭みが強いが、臭みは血によるものが多いため、伊勢志摩地方では釣り上げてすぐに首を折り、海水に浸して完全に血を抜き臭みの大部分を消した上で食用とする。水質の良い水域のものや外洋の回遊個体は臭みが少なく、特に冬に脂瞼の回りに脂肪が付き白濁した状態になる「寒ボラ」は美味とされる。身は歯ごたえのある白身で、血合が鮮やかな赤色をしている。刺身、洗い、味噌汁、唐揚げなど様々な料理で食べられる。刺身などの際は鱗と皮膚が厚く丈夫なので剥ぎ取った方がよい。臭みを消すには酢味噌や柚子胡椒が用いられる』とある（下線やぶちゃん）。眼から鱗、臍から鰡！　**なお、個人的に、この少年、大好き！**

「壺漬け」ウィキの「壺漬け」から引く。『杵でついた干し大根を壺で塩漬けにしてから、調味醤油で味付けした南九州の伝統的な漬物である。鹿児島県山川町（現・指宿市）付近で作られていたので山川（やまがわ）漬けとも言う』『たくあん漬け同様にべっこう色であるが粒が小さく、パリパリした歯ごたえのする漬物である。癖がなく万人受けし易いので最近では全国的に流通しており』、『和風の外食メニューや弁当類で口直しの香物として添えられることも多い』とある。私の母方の大隅町岩川の祖母のそれは今思い出しても、絶品であった。私は少し発酵が進んで、臭くなった方が美味いと思う。前頭葉挫滅で、もう、「臭い」という感覚は失われたけれど――。

「敗戦の喜び」**この「喜び」という叙述は梅崎春生の小説での表現としてはかなり特異点であるように思う。彼の日記などからも敗戦直後には、そのような積極的歓喜の印象は認められない。**

『「伊作って遠いのかい？」「ちっと遠い」』以下、少年に伴われて伊作（現在の日置市吹上町中原）まで歩くのであるが、このロケーションは実地に基づくものとはちょっと思われない。何故なら、万之瀬川河口付近から伊作の町までは（次の章の「町」で事実そうしたことが判る）、地図上試みに吹上浜に近い道を辿って見ても、十キロメートル近い距離になるからである。少年と病院を脱走して来た四十五歳の五郎のそれでは、最低でも二時間半はかかる。九月の夕方とはいえ、田舎の少年はまだしも、五郎にはかなりきつい距離で、第一、体が持ちそうもない。

「綱引き」後の「町」の章で語られる。そこで再注したい。

「五郎は熊本で学生生活を四年送ったことがある」梅崎春生は昭和七（一九三二）年四月に熊本第五高等学校文化甲類に十七歳で入学している（前年に卒業した修猷館中学の高等部（年譜には「福岡高校」とある）を受験するも不合格で一浪しているため）。

「算を乱し」「算」は「算木（さんぎ）」で、古えは占術や実用的な和算で数（かず）を数えるのに使った木製の棒を指し、その算木をばらばらに乱したようになる、の謂いから、「ちりぢりばらばらになる様子」の形容となった。」

あれは寒い夜で、たしか三学期の初めであった。九時過ぎに赤提燈（ちょうちん）の裏口から忍び出て、下宿に戻った。

松井教授に対する不潔感は、まだながく残っていた。どうしても教授の講義を聞く気がしない。で、その学期中、五郎は松井の講義に出席しなかった。学期末、五郎はとうとう落第した。実際に点数が足りなかったのか、松井教授が彼を憎んだのか、今もって判らない。もう教授も死んだ筈だし、問いただすすべはないのだ。赤提燈の一件は、三田村にも話さなかった。

少年が歯で抜いたジュースは、なまぬるかった。陽光にさらしていたのか、甘さに日向くささがある。半分ほど飲み、五郎は少年に話しかけた。

「伊作に床屋があるかい？」
「ある」
瓶から口を離して、少年は声を力ませた。
「床屋ぐらいはある！」
「ああ、そうだ」
トラックの荷台の若者との会話を思い出した。伊作の生れだと聞いた。
「近くに温泉があるそうだね」
「うん」
飲み干した瓶を、少年はていねいに松の根にもたせかけた。
「湯之浦温泉」
「近いのか」
「ちっと遠い」
少年は初めて笑いを見せた。
「自動車で行っと直ぐじゃ」
父親の職業を思い出したのだろう。陽を受けて額に汗の玉が出ている。
〈今夜はそこに泊ろうかな〉
五郎は海を見ながら考えた。立ち上ってジュースの残りを砂にぶちまける。
〈床屋に行って、さっぱりして――〉
五郎は流木の方を眺めていた。流木からの足跡がまだ残っている。きちんと並んでいるのでなく、じぐざぐに乱れている。チンドン屋の真似をしたためだ。流木の彼方の足跡は、もう定かではない。武蔵野の逃水（にげみず）のようにちらちらと、水がただよい動いているようだ。一帯を鈍い光が射している。太陽は薄い雲の中で、ことのほか巨大に見える。光が散乱するのだ。
「行こう」
五郎は瓶を捨て、少年をうながした。巨大な海と陽に背を向け、二人はゆっくりと歩き出す。

［やぶちゃん注：「学期末、五郎はとうとう落第した」梅崎春生も熊本五高で三年進級に落第してダブっている。

「湯之浦温泉」鹿児島県日置市吹上町湯之浦にある吹上（ふきあげ）温泉。別名、湯之浦温泉・伊作温泉とも呼ぶ。ウィキの「吹上温泉」によれば、単純硫黄泉で源泉温度は摂氏四十三度、『若干、硫化水素成分が含まれる』。『南薩地方、とりわけ西部の人に好まれてきた』出で湯で、『素朴な温泉街が情緒を醸し出して』おり、現在、共同浴場が七軒存在する。『詳しい歴史は分かっていないが、地元の人らは馬の洗い水としてこの湯を使っていたという。以前は伊作（いざく）温泉と呼ばれていた。多くの文人に好まれ、西郷隆盛、斎藤茂吉らが訪れたことがある。また、戦時中には特攻隊員らが最後に過ごした場所でもあり、遺品などを展示する旅館もある』とある。伊作からは西南西に当たるが、実測でも二キロメートルない。

「じぐざぐ」「稲妻形」「Z字形」を意味する英語〈zigzag〉（ズィグザグ）からの外来語であるので「ジグザグ」の表記が本来は正しい。英語〈zigzag〉は、フランス語に同義の〈zigzag〉（英語と同音）という言葉が一六八〇年に現われており、これに由来するとされるが、そのフランス語も恐らくは、同義のドイツ語の〈Zickzack〉（ツィックツァック）に由来するものではないかとも言われる（但し、このドイツ語が現われるのは一七〇三年からであるという。最古の使用のそれは「接近包囲」の軍事用語である）。ドイツ語由来説はドイツ語で「先端・角・櫛や鋸などの歯・ぎざぎざの刻み目・フォークなどの股の先、鹿の角の枝部分」を意味する〈Zacke〉（ツァック）の繰り返しに拠るという推測に基づくらしい（ここは英文の〈Online Etymology Dictionary〉のここの記載及び所持する各国語の辞典などに基づいた）。

「武蔵野の逃水（にげみず）のように」**ここで五郎（梅崎春生）が「武蔵野」、春生が東京の原風景を出すのが興味深い**（春生は人生（五十年）の五分の二近くを東京及びその近郊を住まいとした。但し、結構転々としており、底本年譜を見る限りでも、昭和二二（一九四七）年一月に恵津と結婚して最初に住んだのは豊島区要町であったが、同年十月には世田谷区松原町へ移り、昭和三十年四月には練馬区豊玉中（とよたまなか）の抽選の建売住宅に当選して転居している）。そして、**それは／そこは「逃げ水」のような幻化（げんか）だったのではあるまいか？**］

町

熊本の宿で、五郎は女指圧師に揉(も)まれていた。指圧師は二十前後の体格のいい女で、黒いスラックスと白い清潔なブラウスを着けていた。体操学校の生徒のような趣きがある。人なつこい性格なのか、揉みながらしきりに話しかけて来る。

部屋はあまりよくなかった。形ばかりの床の間のついた四畳半。窓をあけても展望はない。床の間には鷹を描いた宮本武蔵の軸がかけてある。もちろん複製品だ。女指圧師がまず口にしたのは、この部屋の悪口であった。

「ひどか部屋ね。物置のごたる。お客さん。よう辛抱出来なさるね」

「仕方がないんだ」

彼は答えた。

「おれはそんなことに、もう怒らないことにしている」

彼女は揉み始めた。

「お客さんの体は、妙なこり方をしとるとね」

「そうらしいな」

五郎は腹這(ば)いのまま答える。

「昨夜もそう言われたよ」

「誰から？」

「鹿児島の湯之浦温泉のあんまさんからだ。このあんまさんは、爺さんだったよ」

五郎があんまを頼んだのは、これが生れて初めてである。今まで彼は肩が凝(こ)ったという感じを持ったことがなかった。なぜあんまを呼ぶ気になったのか。ハイヤーの運転手に勧められたからだ。その運転手は、ズクラを獲っていた少年の父親だ。

［やぶちゃん注：最初に述べた通り、この「町」の章と最終章「火」は昭和四〇（一九六五）

年八月号『新潮』に発表されたが、梅崎春生はこの年の七月十九日午後四時五分に東大病院上田内科にて肝硬変のために急逝しており、狭義の遺作部分となった。再度述べておくと、六月号『新潮』には前半の総標題として「幻化」が掲げられ、「同行者」「白い花」「砂浜」が載り、この八月号ではこの「町」と「火」が総標題「火」として掲載されてある。

「熊本の宿」前夜に五郎が泊まった吹上温泉（鹿児島県日置市吹上町湯之浦）から熊本市までは直線でも百四十八キロメートルもある。途中のルートは示されていないが、鹿児島本線の串木野辺りまでバスで出、旧鹿児島本線を海岸沿いに北上したものと考えられる。

「宮本武蔵」二刀を用いる二天一流兵法開祖で水墨画や工芸品もよくした剣豪宮本武蔵（天正一二（一五八四）年？～正保二（一六四五）年）は美作（みまさか：現在の岡山県北東部）の生まれとされるが死没地は熊本であった。ウィキの「宮本武蔵」によれば、晩年の寛永一七（一六四〇）年に『熊本城主・細川忠利に客分として招かれ熊本に移』り、七人扶持十八石に合力米（こうりょくまい）（知行地の代わりの米の現物支給）三百石が『支給され、熊本城東部に隣接する千葉城に屋敷が与えられ、鷹狩り』『が許されるなど客分としては破格の待遇で迎えられ』、『重んじられている。翌年に忠利が急死したあとも』、第二代藩主『細川光尚によりこれまでと同じように毎年』三百石の『合力米が支給され』、『賓客として処遇された。『武公伝』は武蔵直弟子であった士水』『の直話として、こぞって武蔵門下に入ったことを伝えている』。『この頃余暇に製作した画や工芸などの作品が今に伝えられている』。寛永二十（一六四三）年には『熊本市近郊の金峰山にある岩戸の霊巌洞で『五輪書』の執筆を始める。また、亡くなる数日前には「自誓書」とも称される『独行道』とともに『五輪書』を兵法の弟子・寺尾孫之允に与えている』。『墓は熊本県熊本市北区龍田町弓削の武蔵塚公園内にある通称「武蔵塚」』とある（下線やぶちゃん）。熊本五高時代に春生もそうした武蔵の水墨画などを見たに違いない。

「五郎があんまを頼んだのは、これが生れて初めてである」細かいことをいうなら、この指示語は「これ」ではなく、「それ」とあるべきところである。そうでないと、この最後の段落は読んでいて違和感を感ずるはずである。」

昨日五郎と少年は吹上浜をあとにして、伊作の町の方に歩いた。自動車一台が通れるほどのせまい路で、両側に畠がひろがっている。少年はしだいに彼に親近感を深めるらしく、自分から進んで、あちこちの風景を説明したりした。いっしょに食事したことが、そんな変化を少年にもたらしたのか。やがて彼は少年を、少年が彼に持つ関心を、うるさく感じ始めていた。

しばらく歩くと、家並が見えて来る。床屋があった。だんだら模様の標識柱はなく、赤い旗が軒に出ているだけである。彼は少年に言った。

「おれはここで髪を刈る。君はもう帰りなさい」

「もっと先い行けば、きれいな床屋があっとに。そん方がよかよ」

「小父さんはここでいいんだ」

彼は強引に床屋に入る。少年は頬をふくらまし、彼につづいて土間に足を踏み入れた。どこまでもついて来る気か、と彼は思う。少年は理髪師に声をかけた。

「こんちゃ。漫画本を読ませって下さい」

五郎は理髪台に乗った。髪を刈っている間、少年は背を曲げるようにして、漫画本に見入っている。時々声を立てて笑う。鏡の中のその様子を、彼は警戒の眼色で見ていた。

散髪が終って、台の背が倒され、髭剃りが始まる。彼はすすけた天井をにらみながら、じつと辛抱していた。彼は床屋がきらいだ。一定時間拘束されるのが、いやなのである。剃刀(かみそり)がじゃりじゃりと音を立てた。剃り終って、背が立てられた。彼はひりひりする顎(あご)を撫(な)でながら、鏡を見る。少年の姿は見えなかった。やっと帰ったのか、と彼は思い、代金を払って外に出た。外には自動車が停っていた。前の座席から少年が顔を出した。

「小父さん。お父さんの車を呼ん来たど」

車？　車だって？　五郎は軽いめまいを感じ、そばの電柱につかまった。おれはハイヤーを頼んだ覚えはない。自動車で行けば直ぐだと、少年の口から聞いただけだ。何をかん違いしたのだろう。

「さあ。どうぞ」
実直そうな角刈りの父親が、既定の事実のように後部のドアを中から押す。彼は吸い込まれるように、ふらふらと乗ってしまった。
「湯之浦温泉でっね」
返事も待たず車は動き出した。五郎はだんだん腹が立って来た。うかうかと乗り込んだ自分自身に対してだ。
「お客さあ」
運転手がハンドルを切りながら言った。
「湯之浦に泊っとですか？」
「まだはっきり決めてない」
「泊ってあんまを呼んなら、佐土原ちいう爺さんを呼んでやって下さい」
「なぜ？」
「あたしの縁者（ひっぱり）でしてね」
五郎は黙っていた。間もなく湯之浦に着く。黙ったまま、代金を支払った。貧寒な温泉宿の一軒をえらび、部屋に入る。着換えして温泉につかると、あとはもう何もすることがない。焼酎を注文して部屋に坐り、じっと飲んでいる。その彼の心を、遠くから脅して来るものがある。
〈なぜおれが佐土原というあんまを呼ばなくちゃいけないのか？〉
あの少年と浜で出会った時から、妙な段取りがつけられて、うまくそれに乗せられたような気がする。自分の意志と関係のない、何か陰謀めいたものが、煙のように彼を取巻いている。彼はしばらく食膳のものをつつきながら考えていた。考えるというより、ともすればこみ上げて来る不安感を、つぶそうつぶそうとしていた。彼は呟いた。
「状態がどうもよくないな」
彼は決然と床柱から背を剥がし、呼鈴（よびりん）を押した。女中がやって来た。
「佐土原というあんまさんがいるそうだね」
「はい。おいもす」

「呼んで呉れ」
「はい」
女中は手早に布団をしき、出て行った。あんまはすぐにやって来た。痩せて背が高く、盲目のようである。かんはいいらしく、独りで手探りしながら、部屋に入って来た。五郎はあわてて膳を部屋の隅に押しやり、布団に寝そべりながら言った。
「ぼくはあんまをとるのは、初めてでね。あんまり無理な揉(も)み方をしないで呉れ」
「へ、へへえ」
あいまいな返事をして、老人の指は彼の頸(くび)筋にとりついた。背中を一応揉み終ると、あんまは彼の腕を揉み始めた。
「妙(スダコ)な凝い方をしておいやる」
「どんな具合に？」
あまり人が凝らないところが凝っていて、緊張している筈のところがだらんとゆるんでいる。あんまはくぐもった声でそう説明した。
「何(ない)か病気でんしやしたか」
「うん。いや」
あんまというやつは、どうもくすぐったい。くすぐったい反面に、いまいましい感じがある。向うが自由にこちらの体を動かす。こちらの自主的な姿勢は許されない。あんまに奉仕しているみたいだ。それが第一に癪(しやく)にさわっていた。
「病院にしばらく入っていたんだ。ほとんど寝たっきりでね」
心は癪にさわっているけれども、肉体はくすぐったく、笑いたがっている。口も肉体の一部だから、ふつうの声を出すのに苦労をした。笑い声になりそうなのだ。
「はあ。ないほどね」
ずっと寝たきりで、運動といえば病院の廊下を歩く程度で、外出は許されてなかった。それを昨日脱出して、警戒したり力んだりして旅行した。その力んだ部分が妙な凝り方をしたのだろう。全身を揉み終ったあと、老人はまた彼にうつ伏せの姿勢を命じた。彼は枕に顔を当てて、素直にそれにしたがった。背中と腰の間のところが、急に圧迫された。拳や肱(ひじ)でな

い。もっと大きく、ずしんとした重量感がある。
〈何で押しているんだろう〉
彼はいぶかしく思い、顔を横にして、さらに横眼を遣って見上げた。するとあんまの顔が、おそろしく高いところに見えた。
「おい、おい。あんまさん」
五郎はつぶれた声で言った。
「お前さん、どこに立ってんだね？」
「お客さあの背中いですよ」
「冗、冗談じゃないよ」
とたんに腹が立って来た。
「おれの背中を踏台にするなら、ちゃんと断ってからにして呉れ。無断でひとの背中に乗るなんて、それがサツマ流か」
「踏台じゃなか。こいも治療の一方法ござす」
あんまはかるく足踏みをした。肋骨（ろっこつ）がぐりぐり動くのが、自分でも判った。
「よか気持でしょう」
そう言いながら、あんまはそろそろと降りた。五郎は憤然と起き上って、寝具の上にあぐらをかいた。あんまは今度は頭の皮膚のマッサージに取りかかった。頭の皮はきゅとしごかれ、その度に眼が吊り上る。怒るな、怒るなと、五郎は自分に言い聞かせながら、我慢をしている。やっと全部が済んだ。
「揺り返しが来もんでな、明晩もあんまか指圧師にかかりやった方がよろしゅござんそ」
「揺り返し？」
「揉んほぐした凝いが、また元い戻ろうとすっとござすな。そいをも一度散らしてしも。何（ない）ならわたっが――」
「いや。明晩はここにいない」
「あ。そうござしたな。では次の旅先で――」
そう言いながら、あんまは手をうろうろさせた。

「お客さあ。灰皿をひとつ、貸して下さいもせ」
彼は灰皿を取ってやり、じっと老あんまの動作を見守っていた。あんまは煙草を出し、器用にマッチをつけた。彼は言った。
「あんたは全くのめくらじゃないね」
「はい。右の眼が少しは見えもす。ぼやっとね」
五郎も煙草を出して、気分を落着かせるために火をつけた。
「今日吹上浜に行ったらね、林の中に大きな縄が置いてあった」
「ああ。十五夜綱引のことですな」
「綱引？　やはり綱引をするのかい。誰が？」
「皆がです。町中総出で、夜中にエイヤエイヤと懸声をかけもしてな」
「どんな意味があるんだね？」
老若男女が綱をにぎって、エイヤエイヤと引っぱり合う。その夜の情景は髣髴（ほうふつ）と浮んで来たが、にぎやかな和気より、別のものがまず彼をおそって来た。あんまはしずかな口調で話題を変えた。
「お客さあは今日、浜で踊っておいやったそうでござすな」
「なに？」
同じ質問をあんまは繰り返した。
「誰にそんなことを聞いた？」
「運転の人いです。あや、わたっの知合いござしてな」
あんまは煙草をもみ消して、耳にはさんだ。
「踊いもやっとござす。町中総出で」
沈黙が来た。少年が彼の無意味な踊りを見る。髭剃りの途中に伊作まで走り、父親にそのことを報告する。父親があんまに告げ口をする。少年はどんな報告を父親にしたのだろう。父親を儲けさせるために、車ごと床屋につれて来たのか。
「もういい。いくらだね」
自然ととげの立った声になる。言われた通りの代金を支払う。あんまが出て行ったあと、

彼は膳を引寄せ、布団に腹這いになった。
「お節介(せっかい)め！」
彼は呟(つぶや)いた。
「踊ろうと踊るまいと、おれの勝手だ。他人から四の五の言われる筋合はない！」
少年が彼に親しみを見せたのは、いっしょに食事をしたせいではない。秘密を共有したという気持から、彼につきまとったのだ。共有。いや、共有でない。
〈おれの秘密を見たことで、あの子供は妙な優越感を持ったのだろう。おれという大人(おとな)と対等以上の位置に立ったつもりなんだ〉
彼は眼を閉じて、少年の風貌を思い浮べた。肌は浅黒く、眼が大きく、頭の鉢は開いていた。あの大きな眼で、どんな風に彼を眺めていたのだろうか。酔っぱらいと思ったのか、気違いだと判断したのか。とにかくそのおかげで、ハイヤーに乗せられ、あんまに背中を踏んづけられる羽目におちいった。すべてが誤解の上に成立っている。彼がチンドン屋の真似(まね)をして踊ったのは、秘密でも何でもない。
「なあ。子供よ」
茶碗の焼酎をぐっとあおり、彼は少年の顔を思い浮べながら呼びかけた。
「おれたちはあの時、判り合っていたんじゃないのか。お前は独りでズクラを獲り、おれは独りで踊っていた。それだけの話じゃなかったのか」
不安は怒りに移りつつあった。温泉に入ったこと、あんまをされたことで、彼の体はぐにゃりとなり、虚脱し始めていた。しかし感情は虚脱していない。むしろとがっている。彼はのろのろと寝巻に着換えた。膳を廊下に出すと、布団の中にもぐり込む。もぐり込んでも、彼はまだ怒っていた。
「おれは憐れまれたくないんだ」
怒りのあまり、布団の襟にかみつきながら思った。
「憐れむだけでなく、かまってもらいたくないんだ！」
[やぶちゃん注：時間が前日に捲き戻され、伊作と湯之浦にロケーションが戻っているので

注意されたい。

「だんだら模様の標識柱」「だんだら」は「段々（だんだん）」の音変化かと思われ、太い横縞状に幾つかの色が染め出されたり織り出されたりしていること。また、そのような模様を指す。ここは無論、お馴染みの理容店を示す細長い円柱形の看板で、赤・白・青の三色の縞模様がクルクルと回転するサインポール（signpole）を指す。ウィキの「サインポール」によれば、『理髪店であることを示すもので、三色のサインポールは世界共通のマークであるといわれ』、『日本のサインポールの模様は、右側に行くに従って上がる、いわゆる「Z巻き」が圧倒的に多い』。『ひねりを加えた形が、安土桃山時代にポルトガルから伝来した砂糖菓子有平糖とよく似ていたことから有平棒（あるへいぼう）（またはアルヘイ棒）ともいう。英語圏ではバーバーズポール（Barber's pole）と呼ばれる』。『サインポールの由来には諸説あり、かつ明文化された記録が存在しないため、由来の調査は困難である。よって内容が異なる説があったとしても一概に違うとは言いきれない場合も存在する』。十二世紀の『ヨーロッパで、当時の理容師が外科医を兼ねていた（「床屋外科」と称した）ため、赤は動脈、青は静脈、そして白は包帯を表しているという説』が良く知られ、定説の如く思われているが、血管に動脈と静脈の二種があることが発見されたのは十七世紀になってからのことで、十二世紀に『血管を赤と青で分けて表示したということは、歴史上考えられないという指摘がある』。別説としては『サインポールは元々中世のイギリスで、当時の理髪師が外科医も兼ねていたことから血液を表す赤と包帯を表す白の』二色で生まれたものの、『理髪師と外科医を別けるため理髪店は赤白に青を加える動きもあったが』、『定着せず』『その後アメリカで同国の国旗（星条旗）のカントン』（旗・紋章の向かって左上に配されることのある小区画を指す語。星条旗の青地に白星の部分である）『の色である青が加えられたものである』というものがあり、これを紹介したＴＶ番組では『全国理容衛生同業組合連合会の意見を根拠に、「赤は動脈、青は静脈、そして白は包帯というのはガセ」と結論付け』ていたとある。他には瀉血（しゃけつ）（血液を故意に外部に排出させることで諸病の症状の改善や予防が出来るとされた治療法。古くは中世ヨーロッパに始まり、近代ヨーロッパやアメリカの医師たちに熱心に信じられ、日本でも明治時代には盛んに行われたようだが、健常者が行うそれは医学的根拠は皆無と

言ってよい）の『際に使用した棒（患者の手に握らせる杖）が原型とする説』、一八一五年の『ワーテルローの戦いで、フランス国旗を巻き付けた棒が野戦病院に立てられたのが起源とする説』もあるとある。

「縁者（ひっぱり）」鶴田功氏のサイト「天草方言集」の「ひ」に『ひっぱり　ひっぱりこっぱり　親類縁者　縁続き』とある。天草諸島は熊本県と一部の鹿児島県に跨っており、全く意味を成さない引用とは私は思っていない。

「妙（スダこ）な凝い方をしておいやる」表記通り、「妙な」二字に「スダ」のルビ。個人サイト「おんじょどいの小屋」の「鹿児島弁辞典」の「す」に『すだ：妙な・変な』とあり、引用例文も載る。

「揺り返し」按摩やマッサージ・整体などの施術を受けた後に、施術の反動で起こる症状のことを指す。「揺り戻し」「揉み返し」などとも言う。整体サイトなどを見ると、良いそれと悪いそれがあり、悪いものというのは、要するに、合っていない施術、筋肉や関節を痛めて炎症起こすほどの施術が行われた結果、体が「拒否反応」を起こして、具体的には、動けなくなるほどの痛み、或いは施術前には痛くなかった箇所までが痛くなるような症状を指すという。逆に良いそれは、体に良い反応が返ってくる状態で「好転反応」と呼ぶ。よく見られる症状様状態は、施術後に体が重くなる、起き上がることが嫌になるほどだるくなる様態だそうである。これは感覚的には、施術によって逆に体に大きな負担がかかってしまった、施術は失敗だったのではないかとしばしば心配されるような様態ではあるが、それは悪化でない。適切な施療を受けた場合には、緊張状態になっていた身体が急激にリラックスし、体力レベルが一時的に一気に低下し、それが、体のだるさや重さとして感じられるのだそうである。

「十五夜綱引」鹿児島など南九州で広く旧暦八月十五夜に行われる祭事。「慶友社」公式サイト内の「小野重朗著「増補版　十五夜綱引の研究」」の「内容紹介」に以下のようにある。『綱引きは稲作の吉凶を占う行事であるとされてきたが、九州中南部の地域ごとに綱引の事例を集めた著者は、旧暦五月に山へ竜神を迎え水神祭をし、旧暦八月に竜神を送って十五夜綱引をするのが古い竜神の祭り方であり十五夜綱引の始まりではあるまいかと考えた。近年、

綱引を復活したところもあり、人々は、今も満月の夜に月に祈りをささげ、綱を引き、相撲に興じる』。『九州中南部の宮崎、熊本、鹿児島から南島にかけて』、旧暦八月十五日に『綱引を行う。もともと綱引きは日本、朝鮮、東南アジアの地域に多く見られ、主に稲作の吉凶を占う行事であるとされてきた。また旧暦五月に竜神を迎え水神祭をし、旧暦八月に竜神を送って十五夜綱引をするのが古い竜神の祭り方であり』、『十五夜綱引の始まりではあるまいか』。即ち、この「綱引」祭事は「竜神送り」の祭りであり、『今も満月の夜に月に祈りをささげ、綱を引き、相撲に興じる人々に日本の文化と精神の神髄を見る』とある。また、「鹿児島県薩摩半島民俗文化博物館」公式サイト「南さつま半島文化」の「薩摩半島における十五夜行事の構造」には非常に詳しい記載がある。必見！　特に、「4　十五夜ソラヨイとカヤ下ろし」の指宿地方の例として出る『十五夜の夜、ワラで作ったカサ・ミノ・ハカマを付けた子供たちが、「ソラヨイ、ソラヨイ」と唄いながら、地面を踏みしめ、月と大地に感謝する行事』というのは、祭りの苦手な私（私は祭りに行くと対位法的に気分が沈んでくる人間で、ディズニー・ランドなども鬼門中の鬼門なのである）でもちょっと見てみたくなった！　さらにサイト「鹿児島祭りの森」の「十五夜綱引き・綱練り」では祭りの動画も見られる。そこでは『十五夜の綱は、竜や蛇を表現しているとも考えられる。蛇は脱皮して生まれ』変われる。『また月も、満月と新月を繰り返す。つまり、蛇も月も、いわゆる「死と再生」を繰り返していると言える。そのことが、不老不死、ひいては健康祈願の願いにつながっている。川に綱を投げ入れるのも、「竜蛇に悪いモノを憑かせて、集落を清め、再生させる」と意味が込められている』。『また、月が出ると、夜露が降りる。露は、水をイメージさせ、水は農作物にとって大切なもの。このことから、豊作祈願の願いにつながっている』。『したがって、「健康祈願」と「豊作祈願」を祈るために、十五夜で、綱引きが行われる』と祭祀解釈が示されてある。

「〈おれの秘密を見たことで、あの子供は妙な優越感を持ったのだろう。おれという大人（おとな）と対等以上の位置に立ったつもりなんだ〉」「おれたちはあの時、判り合っていたんじゃないのか。お前は独りでズクラを獲り、おれは独りで踊っていた。それだけの話じゃなかったのか」「おれは憐れまれたくないんだ」「憐れむだけでなく、かまってもらいたくないん

だ！」このシークエンスを笑って読む読者も多いだろうが、私は笑っていられない。私にはこの五郎の心情と怒りが身に染みて解かるからである。それが分からない人物には――恐らく――「幻化」は――永遠に解からない――と断言出来るほどに、である。」

朝早く伊作を発ったので、昼前に熊本に着いた。駅は人の動きや汽笛やスピーカーで騒々しい。駅の構内に入ると、どうして人間はこのように足早になるのだろう。そう思いながら、五郎の足もしだいに早くなる。皆せき立てられた鶏のようだ。肩と肩とが時々ぶつかり合う。

改札を出ると、案内所に寄り、旅館の名を確める。次いで郵便局に寄り、東京の三田村に電報を打った。

『東京に戻るから旅費を送って呉れ』

という意味のもので、旅館の町番地を書き、そこの気付にした。東京に戻る気持は、昨日からきざしていた。この電報を打てば、決定してしまう。それが一瞬彼をためらわせた。

〈しかし電報を打たなきゃ、金はどうする？〉

エイという気合で、彼は窓口に頼信紙を差出した。その足で薬屋に寄り鎮痛剤を買い、駅前のレストランに歩み入る。ビールと料理を注文する。待っている間も、体を動かすとあちこちの筋肉が痛む。昨夜のあんまのせいだ。ビールが運ばれてくる。

「揺り返しか。地震みたいだな」

鎮痛剤を一錠、ビールとともに飲み下しながら、彼は呟（つぶや）いた。

「やはり怒ったのがいけなかったのかな」

怒ると筋肉が緊張する。それが凝（こ）りの原因になる。それに今朝から何時間も、汽車の座席に体を固定させて来た。そのせいもあるのだろう。昨夜の怒りはまだ完全に収まってはいなかった。レストランの椅子は小さく、安定感がなかった。彼は自分の怒りを確めるように、わざと体の重心を動かしてみる。椅子がそれにつれて、がたりと動く。卓もそうだ。三本脚で立ち、一本脚は浮いている。皆がたがただ。

「つまりおれは、怒りという媒体がないと、世の中に入って行けないのだな」

この論理は間違っていた。世の人間関係に巻き込まれたから怒ったのであって、彼が怒りを持って参加したのではない。五郎はうすうすとそれを知っていたが、前者には眼を閉じ耳をふさぎ、後者に執(しゅう)しようとしていた。

ポークカツを切り刻み、ソースをだぶだぶかける。ビールと交互に口に運びながら、大きな窓ガラス越しに、外を眺めていた。駅舎には相変らず人々が忙しげに出入りし、駅前にはタクシーやバスが着いたり、走り出したりしている。五郎は昔から、駅の雰囲気は好きであった。各人がお互いにつながりを持たず、自分の目的に向って、ばらばらに動き廻っている。総体的にはまとまりがない。盲目の意志とでも言ったものが、人間をちょこちょこと動かしている。それが彼の気に入っていた。

〈電報を打つのは、早過ぎたかな〉

その考えがちらと頭を通り過ぎる。フォークを皿に置き、コップの残りを飲み干す。ゆっくりと立ち上った。

広場を横切り、駅の前でタクシーを拾った。

「東京屋にやって呉れ」

今夜泊る予定の宿屋である。鎮痛剤がきいて来たのか、節々(ふしぶし)の痛みはよほどやわらいで来た。大通りからちょっと横町に入って、車は停る。降りて宿屋の門をくぐる。帳場に行って案内を乞う。四十前後の番頭らしい服装の男が出て来た。

「今夜泊りたいんだがね」

五郎は言った。

「お内儀(かみ)さん。元気かね？」

「お内儀さんって、何じゃろ？」

「そら。ここは昔、そば屋だっただろう。その時の女将(かみ)さんさ」

男は黙って、五郎の頭から足先まで眺めた。職業的な視線でなめ廻した。

「ぼくは久住五郎というものだ。お内儀さんに聞けば、判ると思うが――」

「そりゃムリたい」

「なぜ？」
「うちにゃこれまで何千何万のお客さんが、出入りしなさった。あんたが覚えとっても、お婆さんが覚えちょるとは限らんばい。そぎゃんじゃろ。あんたさんはいつ頃のお客さんな？」
「二十七、八年前、学生時代だ」
五郎はハンカチで額を拭いた。
「会えば判ると思うんだがね」
「そぎゃんいうち来るお客さんも、時々おらすばってん、なかなか会えんばい」
眺め廻すのをやめて、男はまっすぐ五郎の顔を見た。どの程度の客か、判定し終ったらしい。
「なぜ？　病気なのかい？」
「うんにゃ。死んなはった。十年ばかり前ですたい」
額をぐいと押された感じで、五郎は黙った。こめかみがびくびく動くのが判る。何で早くそれを言わないのか。やがて男が心配そうに言った。
「気分がわるかと？」
「いや。別に」
「そればってん、顔が――」
「この旅館気付に、東京からわたしに金が送って来る」
ハンカチをしまいながら、五郎はかすれた声を出した。
「それまでここに泊りたいんだ。泊れるだろうね」
「ん。まあね」
気のなさそうな返事をした。
「泊めんのが、商売だもん」
男は手を打って女中を呼んだ。
「お荷物は？」
「あ。今はいいんだ。市内見物をして来るから、部屋だけ取っといて呉れ」
「そぎゃんですか。そんならお待ちしとりますけん」

五郎は横町を出て、街路に出る。やはり顔がこわばっている。荷物は持たないし、服もきちんとしていないし、靴もよごれている。上客ではない。言われなくても、自分で知っている。しかしあの番頭の客あしらいは、横柄だ。まるで泊らせないために、応対しているようではないか。

〈金はいくら残っているのかな〉

五郎は感情を制しながら、ポケットに手をつっ込み、指先で勘定した。眼で見ないで、指で数えられるほどの少額である。老練な客引や番頭になると、顔や服装を見ただけで、客の持ち金をほぼ正確に言い当てるという。

「ふん」

五郎は肩を落し、三分間ほど曲り角に佇立し、街の様子をにらんでいた。昔よく出歩いた街だが、その頃の雰囲気が残っているような、また見覚えのないような感じがする。度の合わない眼鏡をかけた時の違和と不快がある。これが初めての風景なら、旅情もあるだろうが、過去に翳(かげ)を引いているので、具合が悪いのだ。

〈イヤだな。歩き廻るのはよそうか〉

と思っても、今宿屋に戻る気はしない。

天気はよかった。空気は乾いていた。光はあまねく街に降っていた。

ここを離れて、五郎は時々この土地のことを思い出し、また夢にまで見た。それはいつも青春の楽しさや愚行につながっていた。楽しさや愚行に都合のいいように、街の相は彼の頭の中で、修正されているかも知れない。その修正と、現実の街の変貌が一致しない。それが五郎には面白くない。

[やぶちゃん注：「東京屋」不詳。現存はしない。同名の「東京屋旅館」というのをアンティーク絵葉書販売サイトの写真で現認出来たが、それには『熊本　武雄町』とあり、現行の地名には「武雄町」はなく、位置を特定出来ない。

「これが初めての風景なら、旅情もあるだろうが、過去に翳(かげ)を引いているので、具合が悪いのだ」とあるが、これは直後の「ここを離れて、五郎は時々この土地のことを思い出し、ま

た夢にまで見た。それはいつも青春の楽しさや愚行につながっていた。楽しさや愚行に都合のいいように、街の相は彼の頭の中で、修正されているかも知れない」という部分と微妙な意識のズレを見せている。都合よく修正されているという仮定を真とするならば、その忌まわしい「翳を引いている」「過去」も都合よく修正されているはずであって、「具合が悪い」などと感ずるはずがないからである。但し、これは春生の文章構造の破綻と言うよりも、五郎のアンビバレントな意識構造の表出と見た方が腑には落ちる。なお、「翳を引いている」「過去」というのは顕在的にはここまでは、先に語られた女郎屋絡みの留年しか読者には提示されていないのであるが、実際には、この後でそうしたここでは読者に「修正」して隠してある「翳を引いている」「過去」が語られる仕掛けになっている。本作の妙は、アンドレイ・タルコフスキイの「鏡」のように、時系列を意識的にバラバラにし、しかもそれをパッチ・ワークのように綴り直し、カラーもモノクロームも時空間の識別にならぬように配されてあるところにこそある、と私は思っている。しかもそれを切り抜いて心の中で時系列通りに並べ換えて見ても、一向に作者の意図は見えてはこないよう、仕掛けが施されている。この**「幻化」とはまさに――「桜島」の村上兵曹――この久住五郎――実際の梅崎春生という三人の日本帝国海軍の暗号兵によって作成された解読が極めて困難な暗号文**――なのである。

「ここを離れて、五郎は時々この土地のことを思い出し、また夢にまで見た。それはいつも青春の楽しさや愚行につながっていた。楽しさや愚行に都合のいいように、街の相は彼の頭の中で、修正されているかも知れない。その修正と、現実の街の変貌が一致しない。それが五郎には面白くない」**梅崎春生の小説世界に頻繁に出現す**る、一つの偏執的特質であるところの、**外界と自分との間の膜が張ったような強い違和感の表出**である。精神疾患症状としては解離性障害なんどとカルテには記されてしまうのであろうが、梅崎春生にとってそれは、彼の「疾患」や「病的精神状態」なのではなく、**彼自身の小説家としての大きな表現対象としての「世界と自分との関係の感覚性」**に外ならなかった。それは常時、春生の意識の中心にあって、時に恐ろしいまでに苛烈な圧迫となり、時に囁くように甘い囁きにも変じた。そうしたものの中に多くの読者は**滑稽**と見た。面白いと読んだ。そういう裏切られた見当違い

の評価はしかし、彼の小説がもて囃される一つの大きな後押しともなった。なってしまった。そうして春生自身も意識的に、そうした売れるための滑稽のポーズを小説の中に、積極的に描こうとするようにもなってしまったのではなかったか？　しかしそれは同時に、彼の真摯な哲学的探求への彼自身の許すべからざる裏切り行為ではなかったか？　さればこそ、彼は憂鬱にならざるを得なかった、酒を飲まざるを得なかったのではなかろうか？」

五郎は歩いていた。時折立ち止り、ふり返り、周囲を見廻す。追われている感じからではない。町のたたずまいを確めるためだ。追われている、尾行されている感じがなくなったのは、症状が好転したわけではなく、三田村に電報を打ったことに関係あるらしい。自分の居場所を教えてしまった。そのことが不安感をいくらかやわらげている。

〈もうおれは浮浪者ではなく、ヒモつきの旅行者だ〉

入院中に見たテレビの一画面を、彼はふと思い出した。宇宙船から乗員が這い出して、空中を散歩するのである。アナウンサーの解説では、人間史上画期的な瞬間だそうだが、彼にはひどく醜悪なものに見えた。ぶよぶよした貝の肉のようなものから、畸形の獣めいたものが出て来る。這い出るのに苦労をするらしく、しきりにもがいている。やっと出て来ると、そいつはへんな動き方をしながら、宙に浮く。彼は視線を外らそうと思いながら、やはりその時眼が離せなかった。

〈病院からおれが脱出したのも、これと同じではないか。むりをして、もがいて、苦しんで――〉

しかも醜怪なものに変形するという犠牲まではらって、おれは何を得たのか。現実に角を突き合わして、手痛い反撃を受けただけの話だ。

歩いている町のところどころに、はっと記憶をつついて来るような眺めがあらわれる。神社の鳥居とか、質屋の白壁の土蔵とか。そこだけが昔の形のままで残っている。それを取巻く風景には馴染がない。彼は首を傾ける。道筋もすこし変化したらしい。たとえば昔は曲っ

ていた道が、今はまっすぐになっている。さびれていた道がにぎやかになり、魚屋や八百屋が店を開いている。

「たしかここらの――」

五郎は用心深く視線を動かした。

「この建物じゃないか？」

大きな赤提燈をぶら下げた売春宿である。もちろん眼の前にあるそのしもた屋風の二階建てには、提燈はぶら下っていない。でも歩いて来た感覚からして、ここらに建っている筈であった。

しかしそれがかつての宿とは、断定出来ない。彼の記憶に灼きついているのは、特異な提燈の色だけであって、あとは模糊としている。二階にはすりガラスの窓があった。その時彼は窓を細目にあけて、道を見おろしていた。そして視線がぴたりと松井教授に合ったのだ。どんなつもりで、教授はその窓を見上げたのだろう。

〈こんな具合に――〉

五郎は立ち止り、二階の窓を見上げる。するとそこに一つの顔があった。出窓に腰をおろして、一人の男が道を眺めている。とたんに視線が合った。すると五郎は呪術にかかったように、眼が動かせなくなった。顔を上に向けたまま、そろそろ横に動いて、電柱につかまった。

それは学生らしい。もちろん見知った顔ではない。頭髪を長めに伸ばし、上半身は裸である。その顔は初めいぶかしげな表情をたたえ、しだいにとがめるような顔に変って行く。視線をそらすきっかけをうしない、五郎はじっとその変化を見守っていた。

〈まずいな。これは意味ないな〉

こんなやり方で現実と結び合おうとしても、無駄だ。それは一昨日坊津で経験ずみのことである。結びつくわけがない。その時ふっと顔は、窓から消えた。

〈降りて来るかな〉

へんな中年男が仔細ありげに窓を見上げている。なぜ見上げているか、訊ねる権利は彼にあるだろう。こちらも応じなくてはならないが、何と答えたらいいのか、と思う。その瞬間、

窓にふたたび顔があらわれた。カメラを五郎に向け、シャッターを切った。シャッターの音は、あたりの雑音の間を縫って、まっすぐに彼の耳に届いた。彼はたじろいだ。

［やぶちゃん注：「宇宙船から乗員が這い出して、空中を散歩するのである」これは**一九六五（昭和四〇）年三月十八日、ソヴィエト連邦の宇宙飛行士アレクセイ・アルキポフヴィチ・レオーノフ（Алексей Архипович Леонов　ラテン文字転写：Alexey Arkhipovich Leonov　一九三四年～二〇一九年）がボスホート二号（Восход-2　ラテン文字転写：Voskhod 2）から人類初の宇宙遊泳を行った時の映像**である。長さ五メートルの命綱をつけて約二十分間、宇宙遊泳している。凡そ二ヶ月半遅れて同年六月三日にはアメリカの宇宙飛行士エドワード・ヒギンズ・ホワイト二世（Edward Higgins White, II　一九三〇年～一九六七年）はアメリカがジェミニ四号（Gemini IV）からアメリカ人初の宇宙遊泳を行っている（彼はアポロ一号の訓練中の火災事故によって三十六で亡くなっている）が、「人間史上画期的な瞬間」という表現と、春生の病態（同年七月十九日午後四時五分、東大病院上田内科にて肝硬変のため急逝）から見ても、アレクセイ・レオーノフの宇宙遊泳である。こちらで動画が見られるがカラーでかなり綺麗である。モノクロの映りの悪いブラウン管に映し出されるものとして見ると、五郎の気持ちがすっきり来るはずである。私は小学校四年生で、ジェミニ四号のエドワード・ホワイトの映像を見た（無論、白黒のテレビで）記憶が残るが、お化けにしか見えず、永くその映像がトラウマになったものだった（動画はこちら。こちらもカラーで綺麗過ぎ。私が五十年前に見たものと同じとは全く思われない）。

「カメラを五郎に向け、シャッターを切った」本作発表の昭和四〇（一九六五）年には新左翼勢力の内ゲバが既に始まっていた。ウイキの「内ゲバ」によれば、昭和三六（一九六一）年七月の全学連（全日本学生自治会総連合：昭和二三（一九四八）年結成）第十七回大会に於いて『革共同系学生（マル学同）とブント・解放派ら』『の間で乱闘衝突。学生運動史上初めての角材を使用した内ゲバであり、セクト間の武装部隊による本格的内ゲバの初めとなった』。二年後の一九六三年九月十一日には千代田区紀尾井町にある千代田区立清水谷公園で中核派・解放派ら連合四派二百五十名の集会に革マル派百五十名が『押し掛け、角材で

乱闘』する「清水谷公園乱闘事件」が起き、翌昭和三九（一九六四）年七月二日は『革マル派の拠点早大に、中核派・解放派・構改派の』三派が殴りこみをかけるという「七・二早大事件」が起きている。ここでこの学生が写真を撮るのも、そうした流れの中では、少しもおかしくない。こうした威嚇的な写真を撮られたことのない人間には、こういう時の気持ちは分からない。因みに、私は大学一年の時に、あった。その男は写真を撮ってニヤッと笑った。その男はそれより前、私を訪ねてきて、「あんたの弁論の内容はネ、とってもいいんだけど、サ……論文で使ってる、その単語ネ、それを、こっちの言う通りに変えてくんないとネェ……ウチの一部の言葉に敏感な連中がいてネ……突然、アンタを襲ってきて……角材で――ポカポカ！――ってヤラれちゃうかも、知んないヨ……言葉を変えるだけなんだから……いいでしょ？……命あっての何トカって言うじゃない？……」と言う、如何にも汚らしい卑劣な脅しまでかけていたのであった。言っとくが、私は学生運動とは無縁であった。これはさる弁論大会（私は大学では弁論部に所属していたのである）での出来事であった。」

めずらしくかき氷屋があった。東京ならもう店仕舞をしている筈だが、ここは南国なので商売がなり立っているのだろう。粒々のガラス玉をつらねたのれんがあり、それを押分けて五郎は入って行った。不機嫌な声で注文した。

「氷イチゴ！」

また背中のあちこちが痛み始めていた。

「それに、水一ぱい」

痛いというより、熱っぽく疼（うず）いている。水を少女が持って来た。薬を取り出して効能書を読む。（頭痛、歯痛、筋肉痛。一回一錠。一日三回まで）一錠をつまみ出して、水でのむ。そして上衣を脱いだ。やはり暑いのである。

「このすこし向うの――」

店番をしている婆さんに、彼は何気なく聞いた。

「雑貨屋の隣の二階家ね、あの二階に住んでいるのは誰だね？」
「学生さんでっしょ。二人兄弟で下宿しとんなさる」
「ああ。下宿屋か。それなら大したことはないな」
赤い氷を彼は口に入れた。さっきのにらみ合いは、二十秒ぐらいであった。松井教授のもそれくらいだっただろう。松井教授はあの時、あの窓に何を見たのか。もうそれを知るすべはない。ただその結果、五郎はきたないものを踏んづけた気分になり、きりきり舞いをして、落第した。
「お婆さん。ここら空襲を受けなかったのかい」
彼はまた呼びかけた。
「あの家は、昔から下宿屋だったのかい？」
「はい。大水が出ましたもんですけん。そるからあとはずっと変りましたたい」
「大水？　戦前に？」
「いいえ。それがあんた、戦後の昭和――」
「二十八年よ」
少女が補足した。
「六月二十六日」
「ああ。六月です。夜、水がやって来ましたですたい。いや、水じゃなか。泥ですたい。阿蘇ん方で大雨が降って、**よな**を溶かして流れち来たんですたいなあ。材木やら何やらを乗せて、戸口にあたる。戸が破れち、泥水がおどり込むとですたい。あれよあれよという暇もなかった。戸が破れたと一緒に、もう畳が浮き始めたとですたい。うちはこの子ば抱いち、飯櫃（びつ）といっしょに二階に這いあがりました。停電で電気はつきやせん。ラジオも鳴らんごとなった。まっくらやみの中で、ごうごうと水の流るる音、材木が家にぶつかる音」
今のおれには関係ないな、と思いながら、五郎は老女の話に聞き入っていた。老女の話し方には熱がこもっていて、彼の耳をひきつけた。
「そん都度に家が揺れ、梁（はり）がみしみし鳴っとですたい。生きた心地はなかったです。丁度（ちょうど）こん子が、小学校に入ったか入らん齢で――」

「旦那さんは？」
「はあ。つれ合いは夕方頃からパチンコに行っとりまして、パチンパチン弾(はじ)いとる中に流水がどかっと流れ込んで――」
「パチンコ屋にも？」
「そぎゃんですたい。あわてちパチンコ屋ん二階に避難して、そん夜から翌日にかけち、景品の罐詰ばっかり食べ、咽喉(のど)をからからにして帰って来ました。そんあと水ば五合ばっかり一息に飲みましたと」
「泥水を？」
「泥水が飲めるもんですか。こやし臭うして。水道ですたい」
「水道は菊池の方から来るとです」
少女が口を入れた。
「泥水がひいち、水道ん栓ばひねったら、きれか水がジャーッと出て来ち、あたしゃあぎゃんなうまか水ば、飲んだことはありまっせんと」
「どうしてそんな大洪水がおこつたんだろう？」
五郎は最後の一匙(さじ)を食べ終って、少女に訊ねた。少女は答えた。
「阿蘇ん大雨で流されち来た流木が、子飼橋の橋脚にせき止められち、水の行くとこがのうなって、横にはみ出したとです。大江へんは建物ごとごっそり削られたとです」
「ひどかでしたばい」
婆さんは口をとがらせた。口から泡を吹くような調子で、「あいからあたしゃリューマチにかかって、まだ直りきらんとです」
十年以上前のことを、老女は昨日の出来事のように熱っぽく語る。その情熱は、どこから来るのだろう。あの建物の二階にいる青年は何者か。それを調べて写されたネガを取戻したい。そう思ってこの店に入ったのだけれども、洪水話に巻き込まれて、その気はなくなってしまった。写したければ、勝手に写したらいいだろう。そんな気になっている。五郎の顔はあの青年にとって、意味も何もありゃしないのだ。
「そいから川幅も広うなりましたもんねえ、子飼橋も鉄骨でつくりかえられました。今度洪

水があってん、家は流されてん、橋だきゃ流れんちゅ皆の噂ですばい」

「そうかね」

彼はしばらく白川べりの素人下宿に住んでいたことがある。三十年前のことだ。そこを見る気持になって、彼は立ち上った。

「いくらだね？」

代金を払う。昼食べたのがソースにひたしたポークカツなので、まだ咽喉が乾いている。かき氷は咽喉を冷やしただけで、乾きはとめなかったようだ。彼は道端に赤い唾をはいた。

〈おれは早く取戻さねばならぬ。何かを！〉

西日が五郎の背中を照りつける。埃っぽい道を、上衣を肩にかけて歩いている。同じような道をいつか通ったことがある。両側は家並でなく、一面の唐黍畠だ。唐黍畠から犬が這い出して来る。彼の背後から、トラックがやって来て、彼を追い越す。道を横切ろうとする犬をいきなり轢く。犬の胴体を轢き、トラックはちょっと速度を落し、また元の速度に戻って走り去る。犬はじっと横たわっている。突然口から赤い血がかたまって流れ出る。手足が痙攣して、ぐっと突っ張る。血のにおいがして、もう彼は歩けない。……

［やぶちゃん注：「めずらしくかき氷屋があった。東京ならもう店仕舞をしている筈だが、ここは南国なので商売がなり立っているのだろう」これが私が最初に作品内時間を九月上旬とした大きな根拠である。

『「大水？　戦前に？」／「いいえ。それがあんた、戦後の昭和――」／「二十八年よ」／少女が補足した。／「六月二十六日」』これは昭和二八（一九五三）年六月二十六日発生した熊本の大水害を指す。ウィキの「昭和２８年西日本水害」によれば（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した）、同年六月二十五日から六月二十九日にかけて九州地方北部（福岡県・佐賀県・熊本県・大分県）を中心に発生した梅雨前線を原因とする集中豪雨による水害の一つである。水害全体は『阿蘇山・英彦山を中心に総降水量が』一〇〇〇ミリを『超える記録的な豪雨により、九州最大の河川である筑後川を始め』、白川（熊本県中北部を流れる一級河川で、阿蘇山の標高一四三三メートル根子岳に発し、阿蘇山カルデ

ラの南部「南郷谷」を西流、立野（南阿蘇村）でカルデラの北側「阿蘇谷」を流れる支流黒川と合流、急流の多い上中流域を抜けると、熊本市市街部を南北に分けて貫流した後、有明海に注ぐ。河口部では加藤清正以来の干拓が行われたことで知られる）など『九州北部を流れる河川がほぼ全て氾濫、流域に戦後最悪となる水害をひき起こし』、死者・行方不明者一千一名／浸水家屋四十五万棟／被災者数約百万人『という大災害となった。この水害により筑後川など九州北部の河川における治水対策が根本から改められることになり、現在においても基本高水流量の基準となっている』。『この九州北部を襲った水害は気象庁による明確な災害名が付けられておらず、熊本県では「白川大水害」または』「六・二六水害」と通称している。『最も被害が大きかったのは』この熊本県で、『降り始めからの雨量は鹿本郡山鹿町（山鹿市）で、この豪雨では最大の一五五〇・三ミリを記録したほか、阿蘇郡小国町宮原で一〇〇六・二ミリ、阿蘇郡黒川村（阿蘇市）で八八八・四ミリを記録するなど、過去最悪の豪雨災害となった。この豪雨で熊本市・玉名市・菊池郡・阿蘇郡など県北部を中心に甚大な被害が発生している。県内の被害の特徴としては後述する阿蘇山の火山灰を原因とする土砂災害や、家屋被害において床下浸水を上回る床上浸水の多さが挙げられる』。『なお、当時の被災状況については後に熊本県が県政ニュースとして映像を残しており、こちら（ただし凄惨な場面が含まれているので閲覧注意）で視聴可能である』。『県都・熊本市では市内を流れる白川が氾濫した。白川上流部では阿蘇郡黒川村で五日間の雨量が八八八・四ミリを記録するなど阿蘇地域一帯で猛烈な豪雨となった。白川水系流域面積の八〇％を占める阿蘇地域は阿蘇熔岩を主体とする岩盤の上に「ヨナ」と呼ばれる火山灰を多く含む土壌が堆積していた。鹿児島県大隅半島のシラス台地と同様に豪雨が降ると容易に崩壊する土壌であったため、一九五二年（昭和二十七年）には「特殊土壌地帯災害防除及び振興臨時措置法」、いわゆる特土法の規定する特殊土壌地帯に阿蘇地域は指定されていた。こうした土壌が堆積していた阿蘇地域で四月二十七日に阿蘇山が噴火して大量の火山灰が堆積、そこに大量の豪雨が降り注いだことで大量の火山灰や「ヨナ」が土石流となって広大な白川上流域から黒川合流点より下流の河川勾配が急な峡谷を一挙に下り、下流の熊本市内に流入した。さらに熊本市内の白川は天井川となっていて、熊本市役所庁舎をはじめ熊本市中心部は白川の

水面よりも低い位置に存在していた。こうした複合的な要因が熊本市内の被害を増幅させる結果をもたらした』『熊本市では京町や健軍といった高台を除く全市の七〇％が浸水し、熊本市中心部では平均で水深が二・五～三・〇メートルに達した。また白川の橋梁は十七箇所市内に架けられていたが、国道三号長六橋と大甲橋を除いて残らず流失し、』『上流・中流部でも七障子橋・代宮橋・赤瀬橋以外はことごとく流失した。特に子飼橋では至近距離にあった避難所で避難していた住民約四十名が橋もろとも白川に流され、死亡した。熊本市内は噴火した阿蘇山の火山灰が混ざった大量の泥や「ヨナ」で市街地などが埋まり、その総量は実に六百万トンにも及び熊本城の堀の一部を廃土で埋めることになった。また養老院が倒壊して五十二名が一度に圧死するなど、土砂災害による要因が死者を増加させている。熊本市の被害額は約百七十三億円（現在の金額で約千二百十九億円）にもおよぶ壊滅的被害となった。また上流の阿蘇郡長陽村（南阿蘇村）などでも土石流によって家屋や道路、鉄道への被害が大きく孤立した村落も発生、白川上流部のいわゆる「南郷谷」と呼ばれる阿蘇山カルデラ南部では土石流によって運ばれた巨大な岩石が一帯を覆い尽くし死者・行方不明者が六十六名を数えた。熊本県ではこの白川流域で甚大な被害をもたらした今回の水害を特に白川大水害または六・二六水害と呼ぶ』。なお、『白川ではこの水害の半月後七月十六日から十七日にかけても集中豪雨があり、仮橋を架けたばかりの国道二百六十六号代継橋や明午橋、白川橋、泰平橋が再び流失したほか床上・床下浸水の被害を受けている。またこの水害を契機に建築された白川沿いの住宅が、その後の白川治水事業を困難にする要因ともなった』とある（下線やぶちゃん）。

「よな」前注の「ヨナ」関連の下線部を参照のこと。

「菊池」当時の熊本県菊池郡。現在の熊本県の北部に位置する菊池市の一部。但し、ここも同じくこの時、水害を蒙っている。同じく、ウィキの「昭和２８年西日本水害」から引く（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した）。『菊池川流域では山鹿の一四五五・三ミリをはじめ』、『菊池郡菊池村立門（菊池市）で八三〇・二ミリ、菊池郡隈府町（菊池市）で五九九・四ミリなど』、『猛烈な雨が流域を襲った。特に山鹿では六月二十五日に一日雨量としても最大となる五二八ミリを記録したほか二十六日には四一八・五ミリ、二十七

日には二八二ミリという猛烈な雨となっている。このため』、『菊池川本流や支流の迫間川、合志川などが氾濫、菊池川の水位は最大で九メートルにも達した。玉名市、菊池村、隈府町、山鹿町などが浸水被害を受け、菊池川流域では死者七名、全半壊家屋五百七十二棟、浸水家屋一万五千三百三十五棟に上った。筑後川上流部の熊本県流域でも猛烈な豪雨が降ったことにより、筑後川（杖立川）の水位が六月二十六日十時に九州電力杖立取水堰地点で警戒水位を七メートル以上』も『上回る一二・五〇メートルに達した。これにより川沿いにある杖立温泉では全ての連絡手段が不通となり孤立、旅館などが流失・損壊するなど大きな被害となった』とある。しかしそれでも、ここから熊本に引いてあった水道導管は無傷であったということであろう。

「阿蘇ん大雨で流されち来た流木が、子飼橋の橋脚にせき止められ」子飼橋はＪＲ熊本駅の東北三・九キロメートルの白川が北に大きく蛇行した部分に架かる橋。先の注の波線部も参照。筑後川上流から流れて来た恐るべき多量の流木群が橋でせき止められてダム化し、河川が決壊したり、箸が押し流されたり、多量の浸水地域に流木が押し寄せた、その惨状は先のウィキの「昭和２８年西日本水害」や、そこにリンクされたこちらの動画（閲覧注意）からも当該地の様子が分かる。

「大江」現在の熊本県熊本市中央区大江。熊本市の都心南東部の白川南岸。前の注の子飼橋はこの地域の北西の域外の白川河岸（ここは既に東子飼町）に、その南詰がある。

「リューマチ」関節痛や関節変形を生じる関節リウマチ（Rheumatoid Arthritis：RA）であろう。病因は現在でも判然とはしていないが、概ね自己の免疫システムが誤認を起こし、主に手足の関節を侵すところの炎症性自己免疫疾患で、遺伝的素因も疑われる代表的な膠原病の一つである。しばしば血管・心臓・肺・皮膚・筋肉といった全身臓器にも障害が及ぶ（以上はウィキの「関節リウマチ」に拠る）。老婆は十一年前の水害体験が病因とするが、それは考えられない。

「十年以上前」私が推定する作品内時間は昭和三九（一九六四）年の九月上旬であるから、十一年前になる。

「白川」前の注の太線の下線部分を参照。

「唐黍（とうきび）」単子葉植物綱イネ目イネ科トウモロコシ属トウモロコシ *Zea mays* の別称であるが、ウィキの「トウモロコシ」によれば、典拠は示されていないが、昭和前期までは、『この「とうきび」が全国で一般に使われていた』とある。因みに我々が日常的に用いているトウモロコシ（「玉蜀黍」は当て字。現在の中文表記は分類も一目瞭然の「玉米」）の「トウ」は中国の国家「唐」、「モロコシ」は「唐土（もろこし）」から伝来した植物の謂いで、意識しないで使っているが「唐唐（からから）」の謂いの甚だしい畳語である。

「唐黍畠から犬が這い出して来る。彼の背後から、トラックがやって来て、彼を追い越す。道を横切ろうとする犬をいきなり轢（ひ）く。犬の胴体を轢き、トラックはちょっと速度を落し、また元の速度に戻って走り去る。犬はじっと横たわっている。突然口から赤い血がかたまって流れ出る。手足が痙攣（けいれん）して、ぐっと突っ張る。血のにおいがして、もう彼は歩けない。……」直前の五郎の心内語『〈おれは早く取戻さねばならぬ。何かを！〉』とともに、かの「猫の話」（昭和二三（一九四八）年九月号『文芸』掲載の「輪唱」中の一篇）が直ちにフラッシュ・バックする。リンク先は総て私の電子テクストで、「猫の話」単独のＰＤＦ縦書版はこちら、私の同作の高校教師時代の授業案（同ＰＤＦ縦書版も有り）も参照されたい。ともかくも美事なモンタージュである。」

そこには昔の面影は、全然なかった。かつては畠もあったし、樹も生えていた。家もあった。五郎がいた素人下宿は、一番奥で、その先は白川の河原になっていた。河原の水たまりから蚊がたくさん発生して、学生の彼をひどく悩ませた。

〈やはり洪水にやられたんだな〉

ここらは割に土地が低いので、河原からあふれ出た泥水が、ものすごい勢いで家を歪めたり、押流したりしたのだろう。

〈道を間違えたんじゃないか〉

その危懼（きく）はあった。だから何度も何度もふり返り、風物を確めながら、ここまで歩いて来

たのだ。ほっとひらけた風景は、たちまち彼を拒否した。家も何軒か建っている。プレハブ住宅もある。庭に向日葵(ひまわり)が何本も揺れている。

彼は一歩一歩、河原の方に歩く。途中でつき当った。護岸工事がほどこしてあり、河原には降りられない。気のせいか、川幅もずっと広くなった。護岸の上には、人が落っこちないように、コンクリートのガードがある。五郎はそこに腰をおろして、煙草を取出した。彼がいた下宿の場所も、向日葵が咲いているあたりだと思うが、はっきりは判らない。

「あの女将(おかみ)、まだ生きているだろうか？」

六師団付の軍人に嫁ぎ、離縁されて、ここに下宿屋を建てた。どこか色っぽい感じの女で、生きていたらもう五十五か六になっている筈だ。五郎は一番いい部屋を占領し、毎日ノートと教科書をかかえ、インク瓶をぶら下げて登校した。学校では水泳部に入り、二百米平泳を三分十秒台で泳いでいた。早い方ではなかったが、当時としてはそれでインターハイの予選ぐらいには出場出来た。水泳の練習が済んで風呂に入り、上ると腕や胸の皮膚がぴんと湯を弾(はじ)いた。クラス会などで大酒を飲んでも、宿酔をしない。要するに、若かったのだ。彼も三田村も西東も小城も。

五郎は女将から一度だけ誘惑されたことがある。元亭主の軍人が再婚して、披露宴の招待状が来た。そのやり口に腹を立てて、彼女は取乱した。今夜は眠れそうにないというので、彼は勧めた。

「催眠薬を上げようか」

女将は催眠薬を酒といっしょに飲み、彼を誘惑した。彼は拒否した。

「小母さん。あんたはいつか僕のことを、中途半端な人間だと言っただろう。無理をしないで生きて行けとも言った。お説の通り、おれは無理をしたくないんだ」

今にしてみれば、いくらか残酷で散文的な断り方だったと思う。しかし彼にも言い分はあった。級友の西東という男と、女将は関係を持っていたからだ。――

煙草は乾いた口に不味(まず)かった。いがらっぽく、すぐに吸口が唇に貼りつく。川から吹いて来る風は、泥のにおいがした。

西東はそのためかどうか、落第した。中傷の手紙が行き、西東は熊本に戻らず、私学に入

る予定で、東京に赴(おもむ)いた。女将は下宿をたたんで、西東を追っかける。私学に入る前に召集が来て、中国で戦死した。女将は場末のバーの女給になった。その頃再会した。

「あの手紙を書いたのは、あんたでしょ」

女将は酔って彼にからんだ。

「あのおかげで西東は、熊本に戻れず、結局戦死してしまったのよ」

「書きゃしないよ、そんなもの」

彼は驚いて抗弁した。

「君等を引裂いて、おれがどんな得をする?」

結局西東は、犯人が彼であるかないか、半信半疑で出征したという。彼は暗然とした。

〈あそこらの猫の額ぐらいの土地で、おれたちは何をじたばたしていたのか〉

おれの青春はひねこびて小さく、華やかそうに見えて、裏には悪夢のようなものがぎっしり積み重なっている。向日葵の方向を眺めながら、五郎は考えた。

同級に小城という男がいた。彼にこの下宿を紹介したのは、小城だ。紹介というより、慫慂(しょうよう)といった方が正しい。

五郎はそれに乗り、一番いい部屋をえらんだ。小城もその部屋を欲しがったが、ついに折れた。小城は言った。

「故郷(くに)から客が来た時、君の部屋を使わせて呉れ」

「どんな客だね?」

「身内のものだ」

と小城は答えたけれども、実際にやって来たのは、身内のものでなかった。小学校の女教師で、五郎の部屋で情事がおこなわれた。五郎がそのこまかい経緯(いきさつ)や関係を知る前に、小城はふっと他の下宿に移ってしまった。五郎はその女の顔を見たことがない。障子のはめガラス越しに、紫色の袴(はかま)を見ただけである。

「入る時はあんなに頼んでおきながら、おれにあいさつもなく転居した」

それが五郎には面白くなかった。信用出来ないという印象だけが、彼に残った。

〈信用出来ないのではなく、裏切られたという感じだったな〉

五郎は煙草を捨て、ぶらぶらと歩き出した。ここを見る意味はなくなっていた。

［やぶちゃん注：「プレハブ」〈prefab〉は〈prefabricated〉の略だが、和製英語。予め工場で主要部材を殆んど作っておいて、現場ではただそれを組み立てるだけの建築構法を言う。

『「あの女将（おかみ）、まだ生きているだろうか？」「生きていたらもう五十五か六になっている筈だ』五郎は現在、四十五歳で、当時は旧制高校で十六〜二十一（五郎は梅崎春生と同じく一年落第しているため。但し、春生は高校受験で一浪しており、入学時で既に十七）で、五つ六つ上であるから、その下宿屋の女将は二十一〜二十七の頃となろう。

「六師団」大日本帝国陸軍第六師団。明治五（一八七二）年に設置された熊本鎮台を母体に明治二一（一八八八）年に編成された師団で、熊本・大分・宮崎・鹿児島の九州南部出身の兵隊で編成され、衛戍地（えいじゆち）（大日本帝国陸軍の軍隊が永久に配備駐屯された地）を熊本とした師団である。総員約二万五千名。参照したウィキの「第6師団（日本軍）」によれば、太平洋戦争開戦後、昭和一七（一九四二）年十一月にソロモン諸島方面作戦担当であった第十七軍に編入され、『当初はガダルカナル島に派遣される予定であったが大本営はガダルカナル島からの撤退を決定、師団は』、昭和一八（一九四三）年初頭に『ソロモン諸島のブーゲンビル島（Bougainville）南部に進出』、同年十一月、『タロキナ地区に連合国軍が上陸し飛行場を建設したため』、第六師団を主力とした第十七軍は飛行場奪還を試みたが、昭和一九（一九四四）年三月の反攻を最後として組織的軍事力を失った。『その後、主戦場がサイパンからレイテ島へと移り、アメリカ軍主力の連合国軍は積極的攻勢には出なかったものの』、『ソロモン諸島の日本軍は兵站を絶たれ、長く兵器弾薬が欠乏し飢餓と疫病に苦し』、タロキナ攻防後の歩兵連隊現存数は四千九百二十三名（外、戦傷千七百八十七名）、終戦時には千六百五十四名になったという。昭和一九（一九四四）年十一月に『主力がオーストラリア軍に代わった連合国軍は攻勢に転じ、日本軍主力のこもるブイン（Buin）地区に迫ったが、壊滅寸前に』『終戦を迎えた』。同年九月、『オーストラリア軍タロキナ基地で降伏文書に調印、南部沖合いのファウロ島（Fauro）に収容され』たとある。生存率十五％。この女将の元旦那は「師団付の軍人」とある。この戦闘で生き残れたかどうか。

「学校では水泳部に入り、二百米平泳を三分十秒台で泳いでいた。早い方ではなかったが、当時としてはそれでインターハイの予選ぐらいには出場出来た」既注であるが再掲する。霜多正次氏の「学生時代の梅崎春生」によれば、『旧制の第五高等学校（熊本市）で、私は梅崎春生と同じクラスだった。そしていっしょに水泳部に入り、同じ平泳ぎをやり、タイムもふしぎに五分五分だった』と記されていると、江藤正顕氏の論文「梅崎春生『幻化』論――「幻化」と「火」をつなぐもの――」（ＰＤＦ）にある。

「西東」「さいとう」と読んでおく。

「小城」これは姓としては「おぎ」「おじろ」「おしろ」「こじょう」「こしろ」「こじろ」など多様な読みがあるので特定出来ない。但し、春生がルビを振らないところからは「おじろ」「こじょう」の孰れかか。この男、実際のモデルがいたら、実に面白い。次のパートの冒頭をご覧あれ。穿鑿してみる気もないが、実在していて末期の春生を見舞っていたりして、さても、これを読んだら、地団駄踏んだに違いない。そうして怒ろうにも既に、春生は白玉楼中の人となっていたのだから。一面、悪戯っ気の大いにある春生なればこそ、ちょっとやりかねない気もする。

「〈あそこらの猫の額ぐらいの土地で、おれたちは何をじたばたしていたのか〉／おれの青春はひねこびて小さく、華やかそうに見えて、裏には悪夢のようなものがぎっしり積み重なっている」……そんなもんだ……私も……同じだ……

「慫慂（しょうよう）」人が他の人に頻りに勧め、そうするように仕向けること。」

戦後小城は、進歩的な学者として、名前を挙げた。二、三年経って、彼にまとまった金を借りに来た。

「何に使うんだね？」

「家を建てたいんだ」

「まだあの人といっしょかね？」

「あの人って？」
「紫の袴をはいていた女さ」
「ああ」
小城はちょっと顔をあからめた。
「あれは今、ぼくの女房だ」
小城が家を建てるために、なぜおれが金を貸さねばならぬのかと、彼はいぶかった。
「金のことなら、お断りするよ」
五郎は言った。
「そんな金はない」
「そうかね」
小城は別にがっかりした風でもなかった。少壮学者らしく、顔は青白く、額にぶら下る髪を時々かき上げて、むしろ軒昂（けんこう）たる風情（ふぜい）もあった。
私大の教授もしていたし、どこからか金はつくったのだろう。建前の日に招待された。そこで小城の妻の顔を見た。紫の袴を見てから、二十年も経つ。へんてつもない中年の女で、五郎にはもう興味がなかった。それよりも建前の行事、夕暮の空に立つ柱や梁（はり）、その下で汲合う冷酒やかんたんな肴（さかな）、大工の話などの方が面白かった。この日以後、彼は小城と顔を合わせたことがない。
それから数年後、小城はある若い女が好きになった。ある進歩的な出版社から発行される雑誌の編集部につとめる女だ。その女といっしょになるために、小城は妻を捨てた。その話を彼は三田村から聞いた。
「そういう男なんだ。あいつは！」
三田村ははき捨てるように言った。
「あいつは損得になると、損の方を平気で捨ててしまうんだ。エゴイストだね」
五郎は何となく、向日葵（ひまわり）の方に歩いていた。向日葵は盛りが過ぎて、花びらが後退し、種子のかたまりが、妊婦の腹のようにせり出している。美しい感じ、炎（も）えている感じは、もうなくなっていた。

「何が何でも！」

終末的な力みだけで、枝が花を支えているように見えた。

［やぶちゃん注：「軒昂」奮い立って勢いがある様子。畳語。「軒」は「挙」と同義で「高く上がる」「高く上げる」の意。「昂」はもと「日が昇る」で、そこから「上へ上へ高く上がっていく」「感情や意気が激しく昂ぶる」、昂奮するという意味が生まれた。

『五郎は何となく、向日葵（ひまわり）の方に歩いていた。向日葵は盛りが過ぎて、花びらが後退し、種子のかたまりが、妊婦の腹のようにせり出している。美しい感じ、炎えている感じは、もうなくなっていた。／「何が何でも！」／終末的な力みだけで、枝が花を支えているように見えた』形容の「生」＝「性」のアナグラムと言い、映像と台詞の覚悟のマッチング、「終末的な力みだけで、枝が花を支えている」の表現が、普通の向日葵を異様な肉質のものにメタモルフォーゼさせてゆく。］

宿に戻った。番頭らしい男はさっきと同じ表情で、五郎を出迎えた。女中が案内した部屋は、貧しくよごれている。ふだんは布団部屋に使っているのではないか。埃のにおいから、彼はそう推定した。しかし彼は反対のことを、女中に言った。

「いい部屋だね」

彼は皮肉を言ったつもりではない。穴倉のようで自分にはかっこうの部屋に見えたのだ。女中は困った顔になり、返事をしなかった。

「あんまか指圧師を呼んで呉れないか」

「御食事前にですと？」

「そうだ」

「聞いち来ますけん」

女中が去ったあと、五郎は壁に背をもたせ、足を投げ出す。筋肉はまた痛みを取戻してい

た。それはもう怒りとはつながらない。ただの痛みとして、彼の背や肩にかぶさっている。

〈昨日今日とよく歩き廻ったからな。野良犬みたいに！〉

五郎はくたびれていた。昨日のことを考えていた。昨夜のあんまのことから運転手、そして少年のことを考えた。それからズクラのことなども。――少年は悪意をもって彼を遇したのではない。もてなしたのだ。もてなしたついでに、ちょっぴり親孝行をしただけのことだ。疲労の底で、五郎はそう思おうとしている。氷水を食べたあたりから、彼の気分は下降し始めていた。怒りによる上昇は、束の間に過ぎなかった。

〈真底くたびれたな〉

障子をあけて、女中が入って来た。手に宿帳を持っている。

「どうぞ、ここに――」

女中は言った。

「指圧はすぐ来ますばい」

偽名を書こうかと迷う。次の瞬間、彼は三田村のことを思い出した。本名でないと、返事が届かない。彼は本名を記入した。元の姿勢に戻る。

「ズクラ」

と発音してみた。あれはへんな魚だ。よその海で泳いでいると、ボラなのだが、吹上浜に来ると、ズクラになる。実に平気でズクラになる。

戻り道に買った洋酒のポケット瓶の栓をあけた。いきなり口に含む。ポケット瓶を持ち歩くのは、あの映画セールスマンの真似（まね）だ。真似だと気付いたのは、買ってからしばらく後である。彼はすこしいやな気がした。病院にそんな患者が一人いた。相手の動作や言葉を、すぐに真似するのだ。たしかあれはエコーラリイ（反射症状）だと看護婦が教えて呉れた。

〈しかしおれは、反射的に真似するんじゃなく、時間を隔てているからな〉

そう思っても、真似をしたことは、事実であった。五郎は落着かない表情で、もう一口あおった。栓をして残りは床の間に立てかける。胃がじんと熱くなる。

やがて指圧師がやって来た。若くて体格のいい女だ。彼はほっとした。昨夜のように陰々滅々なあんまでは、かなわない。女指圧師は入って来るなり言った。

「ひどか部屋ね。物置のごたる。お客さん。よう辛抱出来なさるね」
「仕方がないんだ」
五郎は答えた。
「おれはそんなことに、もう怒らないことにしている」
上衣を床の間に放り投げる。とたんにポケットから白い貝殻が二、三個、畳にころがり出た。彼はそれを横眼で見ながら、毛布の上に横になった。
妙なこり方をしている。そのことから、湯之浦温泉の話になった。女は話好きらしく、いろんなことを問いかけて来る。背中が揉(も)みほぐされると同時に、酔いが背に廻って来る。やはりくすぐったい。が、昨夜ほどではない。圧(お)し方が素直なのだろう。
「うん。飛行機や汽車に乗ったり、足でてくてく歩いたり――」
彼は身元調べをされるのが、いやであった。いい加減にあしらう口調になる。
「ここに来て、ズクラになった」
「ズクラ？」
「いや。何でもないんだ。おれの故郷の方言だよ」
「熊本は初めて？」
「うん。いや。昔いたことがある」
「いつ頃？」
「君がまだ生れる前さ」
「ああ。判った。あんたはそん時、兵隊だったとでしょう」
「うん。よく判るね」
彼はうそをついた。
「今日一日、市内のあちこちを歩き廻ったよ。町も変ったね」
「どぎゃん風(ふう)に？」
「何だか歯切れの悪いお菓子を食べているような気分だったな。ちょっと――」
彼は半身をひねりながら言った。
「言って置くけれど、無断でおれに乗らないで呉れよな」

「乗るもんですか。いやらしか」
女は邪慳(じゃけん)に彼の体を元に戻した。冗談を言ったと思ったらしい。
「乗せたかとなら、他んひとば捜しなっせ」
「そ、それはかん違いだよ」
五郎は弁明した。指圧されながらそう言われると、乗せたい気持がないでもなかった。
「乗るというのは、またがるという意味じゃない。上に立つということだ。湯之浦で、それをやられたんだ。ふと見ると、あんまの顔が天井に貼りついていた」
その時障子がたたかれて、別の女中が入って来た。盆の上に電報と電信為替が乗っている。
五郎は起きて、電報を開いた。
『明日そちらに行くから、宿屋で待機せよ。外出するな』
そんな意味の電文があった。差出人は三田村である。為替の金額は、二万円だ。五郎は二度三度、電文を読み返して思った。
〈はれものにさわるような文章だな〉
「よか部屋があきましたばい――」
老女中は言った。
「お移りになりますか？」
五郎はその問いを黙殺した。電文の意味を考えていた。二万円あれば、もちろん東京に戻れる。それなのに何故三田村は、ここに来ようとするのか。しかも外出しないで、宿で待てという。医者に相談したのか、それとも三田村の意志なのか。
〈御用だ。動くな。神妙にせよ〉
捕吏にすっかり周囲をかこまれたような気もする。眼を上げると、女中の姿は見えなかった。
「今日、子飼橋を見て来た」
彼はかすれた声で言った。
「ずいぶん変ったね。あの橋も」
「洪水のためですげな」

「そう。昔はもっと小さく、幅も狭かった。あちこちに馬糞(ばふん)が落ちているような橋だったよ」
「兵隊の頃？」
「兵隊服を着たおれの姿が、想像出来るかい。橋の上の――」
女の指の動きがとまった。
「出来っですたい。お客さんは将校じゃなかね。兵隊ばい」
にがい笑いがこみ上げて来た。女の指が脛(すね)の裏側を圧し始めた。
「どうしてお客さんの足や、びくびくふるえっとですか？」
「くすぐったいんだ。指圧慣れがしてないからね」
子飼橋のたもとに、中華ソバ屋があった。その主人は、足がびっこであった。ソバはうまかった。
〈あれは何が悲しかったんだろう？〉
学生の彼に悲しいことがあり、彼は悲しみのかたまりになって、熱いソバを食べていた。夜が更け、客は彼一人である。主人が店仕舞をしたがっているのは、その動作や表情で判った。だから彼も急いで食べ終ろうとするのだが、食べても食べてもソバは減らない。かえって殖えて来る傾きがあった。彼はついにあきらめて、店を出た。寒い夜だ。子飼橋にさしかかった時、左手の方遠くに、赤い火が見えた。阿蘇が爆発していることを、彼は新聞で知っていた。彼は立ちどまる。闇の彼方の彼方に、二分間置きに、パッと火花が上る。小さな火柱と、落下する火の点々が見える。そして闇が戻って来る。また二分経つと、音もなく火柱が立ち、点になって散る。彼は三十分ほど、爆発の繰り返しを眺めていた。悲しみはそれでも去らなかった。その気分は覚えているが、今五郎はその根源を忘れている。
「今日、子飼橋から、阿蘇が見えたよ」
五郎は低い声で言った。
「空気は澄んでいたし、雲もなかった。山の形も白い煙もはっきり見えた」
「よか天気でしたなあ。今日は」
女は五郎の体を表にした。腹這(ば)いからあおむけになったので、彼は女の顔や手の動きが見える。鼻の孔の形や色が、妙になまなましく感じられた。こんな角度から女の鼻孔を見るの

は、初めてだったので、彼は眼をそらした。
「明日、阿蘇に登ってみようかな」
思わずそんな言葉が口に出た。すると急にそれは彼の中で現実感を帯びた。さっき橋の上から眺めた時、眺めるだけの眼で、彼は山を眺めていたのだが。――
〈よし。登ってやる！〉
三田村の電報が、底にわだかまっている。気合としては昨夜の温泉で、あんまを呼ぶために、呼鈴を押した感じに似ていた。しかし呼鈴を押したばかりに、妙な段取りが完成した。
「そぎゃんですか。そぎゃんしまっせ。明日もよか天気ですけん」
「保証するのかい」
「保証しますたい」
女は笑いながら、彼の肋骨を一本一本押えた。スラックスに包まれた厚ぼったい膝が、彼の脇腹を自然と押す形になる。その感覚に自分をゆだねながら、彼は三田村のことを考えていた。
〈あいつは明日来るというが、何で来るのだろう。飛行機か、それとも汽車か〉
背中より肋（あばら）の方がくすぐったかった。
「ここの空港は、どこにあるんだね？」
「水前寺の先、健軍ちいうところですたい」
「健軍？　昔は陸軍の飛行場じゃなかったかな」
名前に覚えがある。彼は海軍暗号なので、健軍からの直接の通信はなかったが、電文に時にその名が出て来たような気がする。陸軍の特攻隊はここらを中継地にして、知覧に飛んだのだろう。今はそれが民間航空の空港になっている。
「朝八時半か九時に羽田を発つと、午前中に着くね」
「はい。熊本駅まで三十分ぐらいの距離ですけん」
三田村はああいう性格だから、やはり飛行機でやって来るだろう。
「友達が迎えに来るんだ。おそらく午前中にね。その前に登らなきゃ――」
「友達？」

女は立って足の方に廻り、彼の膝を曲げ、胸に押しつけたり伸ばしたりする作業を始めた。それはかなり刺戟的な運動であった。

「そんなら友達といっしょに登ればよかじゃないですか」

「そうは行かないんだ。あいつはすぐおれを、東京に持って行く」

「持っち行く？」

女は妙な顔をした。

「まっで荷物んごだんね」

「荷物だよ。おれは」

饒舌（じょうぜつ）になっている、と自分でも思う。女は彼の体をまた裏返しにした。

「足ん裏ば踏んじゃろか。サービスですたい」

五郎の足裏に、しめった女の足が乗った。初めはやわらかく控え目に、つづいて全体量をこめて、交互に動いた。女の厚ぼったい足に接して、彼は自分の蹠（あしうら）がスルメみたいに薄く、平たいことを感じる。それ故にこそ、なまなましい肉感が彼に迫って来た。

〈こんなものだ〉

彼は声にならないうめきを洩らしながら思う。渇仰（かつぎょう）に似た欲望が、しずかに彼の体を充たして来た。

〈こんなに厚みがあって、ゆるぎなく、したたかなもの――〉

「お客さん。足がえれえ弱っちょるね。もうすこし足ばきたえなっせ」

「だから明日は山に登るんだ」

「ちゅうばってん、阿蘇は頂上まで、バスが行くとですよ」

女は足から降りた。

「そんなにかんたんに行けるのか。では、火口を一廻りする」

五郎は正座に戻り、女の顔を見た。

「君もいっしょに行かないか。どうせ昼は暇なんだろう」

「暇は暇ですばってん――」

女は彼の背後に廻った。頭の皮膚を押し始めた。佐土原あんまと同じやり口である。頭の

皮は動いても、頭蓋骨は動かない。皮と骨の間に漿液(しょうえき)か何かが、いっぱいつまっているらしい。それが皮をぶりぶり動かせるのだ。

「汽車の切符も弁当も、用意しておくよ」

女はしばらく黙っていた。すこし経って、

「悪かことば聞いてんよかね？」

「いいさ」

「お客さんはお金ば持ち逃げしたとでしょう」

五郎の眼はつり上った。自分でつり上げたのではなく、女の指の動きで、自然にそうなったのだ。

「よく判るね」

皮膚の動きが収まって、彼はやっと口をきいた。今度は女の指先があられのように、頭皮に当った。

「どうして判る？」

「かんですたい。月ん一度くらい、そぎゃん人にぶつかりますばい。特徴はみんな齢のわりに、足の甲が薄かですもん」

「そうか。拐帯者(かいたいしゃ)の足は薄いか。いい勉強になったな」

「そいで明日、同僚か上役の人が迎えに来っとでしょう。まっすぐ帰った方がよかね。阿蘇にゃ登らんで」

得意そうな、言いさとすような声を出した。彼はその声に、ふと憎しみを覚えた。

「だから登るんだよ」

「なして？」

「最後の見収めに。いや、最後はまずいね。他に何か言葉が――」

「しばし別れの――」

「うん。そうだ」

女の笑いに和そうと思ったが、声には出なかった。指のあられはやんだ。指圧はこれで終ったのだ。

五郎は上衣を引寄せ、紙幣とともに、鹿児島で買った時間表を取出した。

「九時半の準急があるな。これにしよう。切符売場で待っている」

［やぶちゃん注：「エコーラリイ（反射症状）」他の人の言葉・動作・表情を不随意に真似る病的な状態を指すエコプラクシア（Echopraxia）があり、病態としては、統合失調症や老人性認知症などにしばしば見られる。そのエコプラクシア一種で、他者が話した言語を繰り返して発声する言葉の反復行動や病的様態をエコラリア（Echolalia）、「反響言語」と称するものがあり、ここはそれを指している。以下、ウィキの「反響言語」から引くと、これは健常児や成人でも普通に見られるが、自閉症や発達障害初期、統合失調症・アスペルガー症候群・アルツハイマー病、脳卒中の予後などの症状として見られる（但し、多くの場合はこの現象は収まっていく）。『例えば、母親から「晩御飯に何を食べたい?」と訊かれた子が「晩御飯に何を食べたい?」と鸚鵡返しに答えることを即時性反響言語（即時エコラリア）という』。『これに対し、自閉症の児童がテレビＣＭの気に入ったフレーズや親からの叱責の言葉などを、時間が経ってからも状況に関わらず繰り返し話すことを遅延性反響言語（遅延エコラリア）という。後者には、肯定的な気持ちを表したり、自らの行動を制御するなど』七種類の類型があるとする。『D.M.Ricks の研究によれば』、三〜五歳の『自閉症児は録音された自らの発声のみを模倣し、大人や他の自閉症児の発声は無視する傾向がある』。『精神科医レオ・カナーは、「周囲からは意味不明に思える言語仕様であっても、本人にとってはその言葉を覚えたときの特定の事物や場面と結びついており、聴き手がその個人的な体験にたどりつければ、なぜその言葉を選ぶのか理解することができる」と述べている』。何故、このエコラリア「反響言語」を引いたかというと、以前にも述べたが、私はこのシーンの直前の「ズクラ」のように、梅崎春生の作品に登場する人物（殆んどが春生自身がモデルと見られるキャラクター）には特定の単語（外来語やカタカナ表記のそれが多い）に対する、奇妙な拘りやそれを繰り返し口に出す、まさに反響言語行動、エコラリア的反応が有意に多いからである。私は健常者でもしばしば生ずる一種のゲシュタルト崩壊（特定の漢字や文字列を見たり、聴いたりしているうちに、それらの部分がバラバラに認知され、その集合体である当

該漢字や文章が、何故、そう読み、何故、そういう意味になるのか、という疑義が湧いてきて強い違和感を抱く例がそれ。因みに最近の私の語注の傾向にはこのゲシュタルト崩壊的焦燥に駆られたものがあるように自身で感じていることを告白しておく）を想起していたが、もしかすると、このエコラリアの観点からそれらを解明出来るかも知れないと強く感じたからである。

「陰々滅々」薄暗く陰気で、気が滅入るようなさま。

「邪慳（じゃけん）」「邪険」とも書く。もとは、仏教で因果の理法を否定する誤った邪（よこしま）な考え或は正しくない見解の意の「邪見」で、「意地が悪く、人に対して思いやりのないさま」「薄情」の意である。現行では動詞化して「邪慳にする」で「退け者にする」「意地悪する」を「邪慳する」、或いは受身形「邪慳にされる」で用いることが殆んどである。文字通り「邪」は「よこしま」、「慳」は心が誤った方向に向かって堅くなって凝り固まってしまい、善悪の区別が出来なくなった状態を指す。

「子飼橋のたもとに、中華ソバ屋があった」これもモデルがありそうである。哀しいかな、私は修学旅行の引率でただ一度しか熊本には足を下ろしたことがない。もし、御存じの方がおられれば、御教授下さるとありがたい。

「〈あれは何が悲しかったんだろう？〉」「学生の彼に悲しいことがあり、彼は悲しみのかたまりになって、熱いソバを食べていた」「彼も急いで食べ終ろうとするのだが、食べても食べてもソバは減らない。かえって殖えて来る傾きがあった。彼はついにあきらめて、店を出た。寒い夜だ。子飼橋にさしかかった時、左手の方遠くに、赤い火が見えた。阿蘇が爆発している」「彼は立ちどまる。闇の彼方の彼方に、二分間置きに、バッと火花が上る。小さな火柱と、落下する火の点々が見える。そして闇が戻って来る。また二分経つと、音もなく火柱が立ち、点になって散る。彼は三十分ほど、爆発の繰り返しを眺めていた。悲しみはそれでも去らなかった。その気分は覚えているが、今五郎はその根源を忘れている」最早、五郎も思い出せない、例の「翳を引いている」「過去」の一つである。それだけにやけに気になる。

「阿蘇が爆発していることを、彼は新聞で知っていた」梅崎春生の事蹟に合わせて調べると

（久住五郎は春生より五歳若く設定しており、その年齢で検証する意味はないと私は判断した）、春生が熊本五高に入学した昭和五（一九三二）年に『空振のため阿蘇山測候所窓ガラス破損』、十二月十八日、火口付近で負傷者十三名とあり、翌昭和八年には『第二、第一火口の活動活発化。直径』一メートル『近い赤熱噴石が高さ、水平距離とも数百』メートルも飛散したとある。作品内の季節からは前者がしっくりし、激しい火炎の立ち上るところからは後者で、春生の両方の記憶が原景なのかも知れない。

「しかし呼鈴を押したばかりに、妙な段取りが完成した」春生の時系列のパッチ・ワークでやや見えにくくなっているが、かの湯之浦の爺さんの按摩に憤激して、その怒りの勢いのままに、五郎はこの日、一気に熊本まで来てしまったのである。

『「水前寺の先、健軍ちいうところですたい」／「健軍？　昔は陸軍の飛行場じゃなかったかな」／名前に覚えがある。彼は海軍暗号なので、健軍からの直接の通信はなかったが、電文に時にその名が出て来たような気がする。陸軍の特攻隊はここらを中継地にして、知覧に飛んだのだろう。今はそれが民間航空の空港になっている』「水前寺」は水前寺公園（ＪＲ熊本駅から真西に六キロメートル強）で知られる熊本県熊本市中央区の町名で、「健軍」は「けんぐん」と読み、熊本市東部の旧町名で、現在は熊本市東区内。水前寺町の東に接する。現行でも汎用地名として概ね、健軍商店街周辺の東区若葉一丁目・新生二丁目・健軍三丁目と東本町の一部を指し、健軍本町という町名も現存する。戦中まではここに陸軍の健軍飛行場（太平洋戦争が始まった昭和一六（一九三一）年に三菱重工業熊本航空機製作所が建設された際に作られたもので旧陸軍によって軍用飛行場としても利用されていた）があり、戦後は、熊本空港として昭和三五（一九六〇）年の四月に跡地に千二百メートル滑走路で開港した。この後の昭和四六（一九七一）年四月の現熊本空港の開港に伴い、廃港となった（現在の熊本空港からは西南西約八キロ附近）。この健軍飛行場部分は主に佐伯邦昭氏のサイト「インターネット航空雑誌ヒコーキ」の「航空歴史館」のこちらの記載や、「とりさん」氏のブログ「空港探索・2」の「旧熊本空港（旧陸軍健軍飛行場）跡地」を参照させて頂いた）。

「渇仰（かつごう）」もとは仏教用語で、喉の渇（かわ）いた者が水を切望する如く、仏を仰ぎ慕うの意で、深く仏を信ずることを指し、そこから広く、対象を心から憧れて慕うことを指すようになった。

「漿液（しょうえき）」医学で言った場合は体液や体内外への分泌液の性質を表わす語で、粘性の低いさらさらした液体を指す。主に消化・排泄・呼吸に関与するところの唾液・胃液などの消化液から、漿膜（腹膜・胸膜・心膜などの身体内面や内臓器官の表面を蔽っている薄い半透明の膜で、表面は滑らかで漿液を分泌する細胞から構成されている）からの分泌液など全般を指す。但し、頭皮の下はと頭蓋骨であって、ここで五郎が言うような漿膜のような部分は存在しない。これは所謂、脳漿（のうしょう）、頭蓋骨内部で脳を満たしているところの脳脊髄液と勘違いした表現のように思われる。

「拐帯者（かいたいしゃ）」人から預かった金品を持ち逃げした者。もしかすると、この指圧師の女性は五郎を横領した中年サラリーマンが横領したはいいが、結局、罪の意識に苛まれて、阿蘇に飛び込んで自殺でもしようと思っている、と考えているのではあるまいか、と私は思ったりする。拐帯――横領――様子のおかしい中年男――阿蘇――これだけの揃い踏みなら、私でもそう考えるのである。読者の意識の中にも、そうした噴火口への飛び込み自殺のイメージが潜在的に浮かぶように仕組まれているように私には思われる。それが本作の最後のクライマックスの伏線となるかのように――である。]

火

九時三十四分の準急。ぎりぎりまで待ったが、女は来なかった。五郎は風呂敷包みを提げ、決然と改札口を通った。座席はわりにすいていた。汽車は動き出した。

〈やはり来なかったな〉

弁当二人分が入った包みを網棚に乗せながら、五郎は思った。失望や落胆はなかった。来ないだろうという予想は、今朝からあった。ぱっとしない中年男と山登りして、面白かろう筈はない。

〈しかも拐帯者と来ているからな〉

昨日の指圧の後味は悪くなかった。自分が自分でない男に間違えられた。つまり本当の自分は消滅した。彼は自分が透明人間になったような気分で、夜の盛り場を歩き廻り、パチンコをやったり、ビヤホールに入ったりした。街の風景は、昼間と違って、違和感はなかった。そして宿に戻る。部屋は上等の方にかわっていた。ぐっすり眠った。

今朝眠が覚めた時、また声にならない声を聞いた。幻聴とまでは行かないが、それに近かった。

「化けおおせたことが、そんなに嬉しいのか？」

彼は顔を洗い、むっとした顔で朝食をとった。食べながら、女中に弁当を二人分つくることを命じた。阿蘇に登るのももの憂(う)い。計画を中止して、ここでじっと待とうか。そうしたいのだが、女指圧師が駅で待っているかも知れない。おそらく来ないだろうと思うが、約束した以上、駅まで行かねばならぬ。

駅まで行った。とうとうすっぽかされたと判った時、よほど宿屋にこのまま戻ろうかと考えた。が、ついに決然と乗ってしまった。坐して迎えを待つのは、やはりいやだったのである。

彼は窓ぎわに腰をおろし、外の景色を眺めていた。しばらく平野を走り、しだいに高地へ登って行く。右側に時々白川が見える。大体白川に沿って汽車は走っているらしい。発電所が見え、大きな滝が見え、火山研究所の建物が見える。天気は昨日につづいて好かった。風もない。阿蘇中岳の火口から、白い煙が垂直に上っている。

昨夜の一時的の躁状態（と言えるかどうか）の反動で、五郎の気分は重く淀(よど)んでいた。彼は脱出した病院のことを考えていた。電信柱もチンドン屋も大正エビも、相も変らずベッドに寝そべっているだろう。いなくなった五郎のことなど、もう忘れたかも知れない。彼は今一番興味をもって思い出せるのは、診察室や廊下で顔を合わせるエコーラリイの患者である。その男はまだ三十にならぬ青年だ。病人は多少とも卑屈になり、おどおどした態度を示すものだが、その青年はその気配は微塵(みじん)も見せなかった。昂然として廊下をまっすぐ歩くのだ。

〈あれはうらやましいな。無責任で〉

医師や看護婦から、病状の質問を受ける。たとえば、

「昨夜はよく眠れたかね」

すると青年はすぐ言い返す。

「昨夜はよく眠れたかね」

何を訊ねても、同じ言葉を返すだけだ。壁を相手にして、ピンポンをやる具合に、同じ球がすぐに戻って来るのである。動作も同じだ。そっくり相手の動作を真似る。

答弁するということは、責任をもってしゃべることだ。その青年は答弁をしない。責任を相手に投げ返すだけだ。すべての責任から逃れている。エコーラリイというのは、病気の本体ではない。症状なのである。その症状がちょっとうらやましい気がするのだ。

一時間余りで、阿蘇駅に着いた。

駅前はごたごたしている。土産物屋や宿屋や、歓迎と書いた布のアーチまで立っている。阿蘇駅が坊中と言っていた時は、もっと素朴で、登山口らしい趣きがあった。

〈なぜおれは阿蘇に登るのか？〉

〈登らなくてはならないのか？〉

五郎はその理由を忘れている。確かにあった筈だが、どうしても思い出せない。睡眠療法を受けると、記憶力がだめになるのだ。それは療法を受ける前に、医師に告げられていた。

バスは八割ぐらいの混み方であった。彼は後部の座席に腰をおろす。バスガールが説明を始める。うねった道がだんだん高くなり、景色が開けて来る。放牧の牛の姿が、ところどころに見える。

草千里というところで、ちょっと停車した。

〈あれは映画セールスマンじゃないか〉

そう気がついたのは、そこを発車してしばらく経ってからである。その丹尾らしい男は、前から三番目の席に坐っていた。坊中からいっしょだったのか、草千里から乗って来たのか、よく判らない。うつむき加減の姿勢で、時々頭を立てて、景色をきょろきょろ見廻す。黒眼鏡をかけている。五郎は視線を網棚に移した。見覚えのある小型トランクが、そこに乗っていた。

〈なぜ丹尾が阿蘇へ――〉

彼はいぶかった。しばらくして思い出した。鹿児島から枕崎へのハイヤーの中で、丹尾がそんなことを言っていた。すると丹尾は鹿児島での商取引は済ませたのか。五郎はじっと丹尾の様子を眺めていた。丹尾は洋酒のポケット瓶を取出し、一口ぐっと飲んで、またポケットにしまう。貧乏ゆすりをしている。何だか落着きがない。――

［やぶちゃん注：「阿蘇中岳」熊本県の阿蘇山を構成する山の一つで、中央火口丘群のほぼ中央に位置し、最も活発な活動をしている標高千五百六メートルのピークである。外輪山と数個の中央火口丘から成る阿蘇山の内、カルデラ内部に出来た中央火口丘群の中核を成す、ほぼ東西に一列に並んだ五つのピークを「阿蘇五岳」と呼ぶが、この中岳はその中の最高峰で中岳の少し東に位置する標高一五九二・三メートルの高岳（たかだけ）に次ぐ（五岳の他は、最も東の根子岳（ねこだけ）（一四〇八メートル）と、最西に南北にある烏帽子岳（えぼしだけ）（一三三七メートル）・杵島岳（きしまだけ）（一二七〇メートル）で、それ以外にも往生岳（一二三五メートル）などの千メートル級の峰が連なる）。

「昂然」「こうぜん」は、意気盛んなさま、自信に満ちて誇らしげなさま。

「阿蘇駅」「阿蘇駅が坊中と言っていた時は、もっと素朴で、登山口らしい趣きがあった」大分県大分市の大分駅から熊本県熊本市西区の熊本駅に至る豊肥（ほうひ）本線の阿蘇駅は、この当時は熊本県阿蘇郡阿蘇町であった（現在は阿蘇市黒川）。大正七（一九一八）年一月二十五日に「坊中駅（ぼうちゅう）」として鉄道院が開設したが、昭和三六（一九六一）年三月二十日に阿蘇駅に改称している（ウィキの「阿蘇駅」に拠る）。五郎は先に「学生時代、二度阿蘇に登ったことがある」と述べており、五郎より五つ年上になる梅崎春生の熊本五高時代も、ここは「坊中」という名の駅であったのである。

「草千里」烏帽子岳の北麓に広がる直径約一キロメートルの草原地帯。もと二重式火口の跡で中央には大きな池があり、前には噴煙を上げる中岳が聳える。放牧馬が草を食み、阿蘇でも最も知られるロケーションである。御多分に洩れず、ただ一度、二十九年も前、修学旅行の引率で行っただけなのだが、担任していた女生徒の後ろ姿をここで写真に撮ったら、エミ

リー・ブロンテの「嵐が丘」のワン・シーンのように見え、とても気に入ったのを思い出す。」

バスの終点でぞろぞろ降りた。かなり広い待合所がある。そこからケーブルカーが出る。壁にかかった大きな時間表の前に立ち、丹尾は見上げていた。五郎は近づいて、うしろから肩をたたいた。丹尾はぎょっとして振返った。

「あ！」

丹尾は黒眼鏡を外(はず)、とんきょうな声を立てた。丹尾の体から酒のにおいがぷんぷんただよっている。五郎は言った。

「また逢ったね」

「あんた、まだ生きてたんですか？」

君はまだ生きていたのか、と彼は反問しようと思ったがやめた。

「生きているよ。おれに死ぬ理由はない」

「では枕崎でぼくをすっぽかして、どこに行ったんです？」

「坊津に行ったよ」

「おかしいな」

丹尾は首をかしげた。丹尾の顔は疲労のためか、酔いのせいか、四日前にくらべると、すこし憔悴し荒んでいた。

「坊津の宿屋に電話したんですよ。するといなかった」

「電話のあとに到着したんだ。面倒だから、君んとこに連絡しなかった」

丹尾は返事をしないで、彼の顔をじっと見ていた。少し経って、かすれた声で言った。

「散髪しましたね。しかしあんたはなぜ東京から、枕崎くんだりまでやって来たんです」

「君には関係ないことだよ」

以前にも同じ質問を受け、同じ答えをしたような気がする。

「君はケーブルカーに乗るんだろ」

「どうしようかと、今考えているところです」
丹尾はトランクを下に置いた。
「来る時の飛行機のことを考えていたんですよ。何だか乗りたくない気がする」
「ケーブルが切れて墜(お)ちることかね？」
五郎は言った。
「君には覚悟が出来てたんじゃなかったのか。いつでも死ねるという――」
「そ、そりゃ出来てますよ」
丹尾は憤然と言った。自尊心を傷つけられたらしく、顔に赤みがさした。
「じゃケーブルに乗りましょう」
ケーブルカーに乗り込む時、丹尾はたしかに力んでいた。必要以上に肩や手に力を入れ、トランクを抱いたまま、眼をつむっている。ケーブルカーの下の土地には、もう緑は見えず、一面茶褐色の岩や石だけである。
終点についた。丹尾は全身から力を抜き、彼といっしょに降りた。火口はすぐである。火口壁の近くに立った時、さすがに五郎も足がすくんだ。
火口壁はほとんど垂直に、あるいは急斜面になっていた。色は茶褐、緑青、黄土などが、微妙に混り合い、深く火口に達している。眼がくるめくほどの高さだ。風がないので、白い煙やガスがまっすぐに立ち昇っている。たぎり立つ熱泥が見える。眺めていると、体ごと引込まれそうだ。丹尾はひとりごとのように言った。
「自殺者にはあつらえ向きの場所だ」
五郎は黙っていた。
〈なぜこの男は、おれと自殺とを結びつけようとするのだろう〉
羽田を発つ時から、丹尾はそう決めてかかっていた。度度訂正をしたのに、その考えを捨てていない。それが彼には解(げ)せなかった。
「馬はどうです？」
馬子が馬をひいて近づいて来た。
「火口を一周しますよ」

五郎は手を振って断った。四、五歩後退しながら、丹尾に言った。
「弁当を食べないか？」
「弁当？」
いぶかしげに丹尾は反問した。
「弁当、持ってんですか？」
「持ってるよ。二人前」
彼は風呂敷をといた。中から折詰がふたつ出て来た。丹尾はあきらかに驚愕した。
「ぼくの分もつくって来たんですか？」
彼は返事に迷った。女指圧師のことをしゃべるのは、面倒であり、重苦しくもあった。
「そうだよ」
少し経って彼はうなずいた。
「ひとつは君の分だ」
「ど、どうしてぼくが――」
丹尾はどもった。どもって、絶句した。

[やぶちゃん注：「とんきょう」「頓狂」「頓興」などと書き、出し抜けで調子はずれであるさま、間が抜けて調子外れであるさまを言うが、私などは「素っ頓狂（すっとんきょう）」以外に単独で使ったことはない（「すっ」は接頭語で、漢字表記通り、「素（す）」に促音が添加されたもの。名詞・動詞・形容動詞に付いて、その意味を強める）。
「ケーブルカー」本邦では山岳の急斜面などを鋼索（ケーブル）が繋がれた車両を巻上機等で巻き上げて運転する「鋼索（こうさく）鉄道」を「ケーブルカー」と称し、ロープウェイやゴンドラリフトなど（「普通索道」というらしい）のことを「ケーブルカー」というのは現行では一般的ではないが、参照したウィキの「ケーブルカー」には『イギリス英語では、Cable car はロープウェイを指す』とある。ここは鋼索鉄道のケーブルカーではなく、阿蘇山の火口縁に架かって営業されているゴンドラ型の「阿蘇山ロープウェー」を指している。ウィキの「阿蘇山ロープウェー」によれば（言っておくと、この営業上の固有名詞表記は「ロープウェー」

でロープウェイではないので注意されたい)、営業開始は昭和三三（一九五八）年四月十日で、営業距離は八百五十八メートル、高低差は百八メートルある。『全世界で初の活火山に架けられたロープウェイ。阿蘇山中岳の西側から火口の縁までを登る』。現在の「阿蘇山ロープウェー」公式サイトによれば、「阿蘇山西駅」から「火口西駅」までの所要時間四分とある。但し、現在（二〇一六年一月八日）は残念ながら、噴火警戒レベルが２（火口周辺規制）であるため、運行休止中である。

「緑青」老婆心乍ら、「ろくしょう」と読む。ここは色名の緑青色であるから、くすんだ緑、淡い青緑のことである。

「熱泥」老婆心乍ら、「ねつでい」と読む。」

火口が見える小高い場所で、丹尾はトランクに腰かけ、彼は平たい岩に腰をおろした。弁当を開き、丹尾はポケット瓶を出してあおった。そして瓶を彼に突出した。

「どうです。いっぱい」

「いや。おれも持っている」

彼はポケットから自分のを取出した。蓋に注いで二杯飲んだ。丹尾はその動作をじっと見ていた。自分の瓶の残りを飲み干した。そして視線を下に向けた。

「これ、駅弁じゃないね」

丹尾の言葉は、とたんにぞんざいになった。

「駅弁にしては、豪華過ぎる」

「君はずいぶん酔っぱらってるね」

「酔っちゃいけないかね」

「そりゃいいけどさ。この弁当は宿屋につくらせたんだ」

「どこの？」

「熊本」

五郎が食べ始めるのを見て、丹尾は安心したように箸をとる。ちらちらと景色を見ながら食べる。
「どうもいけないね」
丹尾は箸を置きながら言った。
「どうもあの穴を食べそうな気になる」
彼もさっきから同じような気がしていた。穴というのは、火口のことだ。あんまり雄大なので、ふと距離感がなくなり、弁当のおかずと同じ大きさに見えるのである。丹尾は景色に背を向け、口を開いた。
「ねえ。賭けをやりませんか？」
「賭け？」
「ええ。金の賭けですよ」
顔が赤黒く染まり、手がすこし慄えている。
「ぼくは火口を一周して来ます」
「どうぞ」
「それでだ」
弁当の残りをトランクにしまいながら、丹尾は言った。
「一周の途中に、ぼくが火口に飛び込むかどうか――」
「それを賭けるというのか」
「そうです」
五郎はめんくらって、ちょっと考えた。突然体の底から、笑いがこみ上げて来た。
「君は自分の生命を賭けようとするのか？」
「笑ってるね」
丹尾はふしぎそうに彼の顔を見た。
「あんたと知合ってから、声を立てて笑うのは、これが初めてだよ」
五郎は笑いやめた。しかし笑いは次々湧いて、彼の下腹を痙攣（けいれん）させた。
「しかし――」

彼は下腹を押えながら言った。
「賭けが成立するかなあ。君が死ぬ方におれが賭けるとする。すると君は飛び込まないで、戻って来るだろう」
「じゃ生きる方に賭けちゃどうです？」
「それでいいのか。君が飛び込むとする。君は賭け金を取れないことになるな」
「ええ。だからぼくが両賭け金を預って、出かける。ぼくが飛び込めば、賭け金も飛び込んで、パアとなる」
「なるほど」
なぜ丹尾がそんな賭けを提案したのか、彼にはよく判らなかった。わけを聞きたい気持も、別段なかった。ただなにものかが彼から離れ、丹尾に飛び移ったらしい。しかしそのことが笑いの原因ではない。笑いは笑いとして、独立に発生した。丹尾は言葉を継いだ。
「もしぼくが戻って来れば、賭け金の全部をあんたに差上げる」
彼は頬杖をつき、すこし考えて言った。
「賭けの金額は、いくらだね？」
「五万円でどうです？」
「五万？　そんなに持ってない」
「いくら持ってんですか？」
「二万円」
三田村から送って来た金である。今朝現金にしたばかりだ。
「二万円？」
丹尾はがっかりした表情を見せた。その瞬間、丹尾の中にある死への意志を、彼はありありと嗅ぎ取った。
〈こいつは賭け金を、飛び込むスプリングボードにするつもりだな〉
おめおめと一周して戻れば、丹尾の五万円は彼のものになる。セールスマンという職業で、五万円のただ取られは痛い筈であった。
「いいでしょう。二万円」

丹尾はあきらめるように言った。
「じゃ二万円、出しなさい」
「出すけれどね、おれはそれほど君を信用していないんだ」
「どういうことですか？」
「君に預けると、君は飛び込まないで――」
彼は根子岳の方を指した。
「あの山の方に逃げて行くかも知れない。するとおれは金を詐取されることになる」
「そんなに信用がないのかなあ」
「では君は、おれを信用しているのか？」
丹尾は五郎の顔を見て、黙り込んだ。五郎はしばらく風景を見ていた。彼等二人のすぐ傍を、見物人が通り、また写真を撮ったりしている。見物人たちは、ここで二人の男が何を相談しているのか、全然知らないのだ。笑いがまたこみ上げて来るのを、彼は感じた。
「よろしい。いい方法がある」
丹尾はトランクを開いて、鋏（はさみ）を取出した。そして内ポケットから、一万円紙幣を二枚つまみ出した。五郎の出した二枚の紙幣と重ねる。縦にまっ二つに切った。切り離した半分を、彼に戻した。彼は黙ってその動作を見て、受取った。
「これでいいでしょう。これであんたの二万円も、ぼくの二万円も、使いものにならなくなった」
残りの半分を丹尾は内ポケットにしまい、上衣をぱんぱんと叩いた。
「いっしょにつなぎ合わせれば、四万円として使える。そうでしょ。飛び込めばパアとなる。逃げ出しても、ぼくはこれを使えない」
「半分あれば、日本銀行に持って行くと、一枚として認められるんじゃなかったかな」
「冗談でしょう。半分が一枚に通用するなら、世のサラリーマンは自分の月給をじょきじょき切って二倍にして使うよ」
「それもそうだね。君が逃げ出すと、両方損だ」
丹尾はゆっくり立ち上った。トランクを持ち上げる。

「トランクも持って行くのかい？」
「ええ。何も持たないと、自殺者と間違えられる」
「だって自殺するんだろう」
「自殺するとは言いませんよ」
丹尾はきっとした眼で、五郎を見た。
「火口を一巡りして、自分がどんな気持になるか、知りたいだけですよ。二万円でそれが判れば、安いもんだ」
「そうか。そうか」
五郎は合点合点をした。
「ではここで待っているよ」
丹尾は彼に背を向け、歩き出した。火口の左に進路を取る。五郎は弁当の残りを食べながら、その後姿を見ていた。
〈あいつ、弁当の残りを詰めて行ったが、トランクもろとも飛び込むつもりかな〉
後姿がだんだん小さくなって行く。動悸がし始めたので、彼はあわてて弁当を捨て、小瓶の酒を飲む。掌に汗が滲んで来た。
五郎の視野の中で、もう丹尾の姿は豆粒ほどになっている。突然それが立ちどまる。火口をのぞいているらしい。また歩き出す。
五郎は小高い場所からかけ降りた。あいつが死ねるものかという気分と、死ぬかも知れないという危懼（きく）が交錯して、五郎をいらいらさせている。火口の縁（ふち）に、有料の望遠鏡がある。五郎はそれに取りついて、十円玉を入れる。もう丹尾は半分近くを廻っている。
無気味なほど鮮やかな火口壁が、いきなり眼に飛び込んで来た。五郎は用心深く仰角を上げる。二度三度左右に動かし、やっと丹尾の姿をとらえる。丹尾は歩いている。立ち止って、火口をのぞく。その真下に噴火口がある。五郎は望遠鏡を下方に移す。壁は垂直に火口から立っている。火口には熱海がぶくぶくと泡立っている。
〈あそこに飛び込めば、イチコロだな〉
眺めているのが苦痛になって来たので、彼は荒々しく望遠鏡を上げる。高岳や根子岳、外

輪山、その果てに遠くの山脈が重なり合っている。その上にすさまじい青さで、空がひろがっている。時間が来て、まっくらになる。五郎はまた十円玉を入れた。ふたたび視野に、丹尾の姿が戻って来た。

丹尾はトランクを下に置き、それに腰かけていた。ハンカチで汗を拭いている。拭き終ると、立ち上る。トランクを提げて歩き出す。くたびれたのか、足の動きが緩慢だ。ちょっとよろよろとした。石につまずいたのだろう。丹尾を見ているのか、自分を見ているのか、自分でも判らないような状態になって、五郎は胸の中で叫んでいる。

「しっかり歩け。元気出して歩け！」

もちろん丹尾の耳には届かない。また立ちどまる。汗を拭いて、深呼吸をする。そして火口をのぞき込む。……また歩き出す。……立ちどまる。火口をのぞく。のぞく時間が、だんだん長くなって行くようだ。そしてふらふらと歩き出す。――

［やぶちゃん注：「詐取」老婆心乍ら、「さしゅ」と読む。金品を騙（だま）し取ること。

「根子岳」既に注した通り、「ねこだけ」と読み、彼らのいる中岳の、ほぼ西の稜線状の先、直線で二・一キロメートル先にある。

「半分あれば、日本銀行に持って行くと、一枚として認められるんじゃなかったかな」言わずもがなであるが、交換は普通の銀行でも可能であるが、本来は日本銀行本店や支店の正統な正規業務である。「日本銀行」公式サイトの「日本銀行が行う損傷現金の引換えについて」によれば、「銀行券」の場合は以下の通りである（一部に存在する空隙を除去した）。

《引用開始》

表裏の両面が具備されている銀行券を対象とします。具体的な引換基準は以下のとおりです。

イ．券面の３分の２以上が残存するもの

額面価格の全額をもって引換えます。

ロ．券面の５分の２以上３分の２未満が残存するもの

額面価格の半額をもって引換えます。額面価格の半額に一円未満の端数がある場合には、こ

れを切り捨てます。

なお、銀行券の紙片が2以上ある場合において、当該各紙片が同一の銀行券の紙片であると認められるときは、当該各紙片の面積を合計した面積をその券面の残存面積として、上記の基準を適用します。

《引用終了》

私はもうじき五十九になるが、一度だけ、一万円札一枚を交換して貰ったことがある。独身の三十の頃に酔って帰って、飼っているビーグル犬の「アリス」（今の「アリス」の先代）を抱いて寝たら、翌日、目覚めて見ると、アリスが財布から引っ張り出した一万円札をテツテ的に噛みしゃぶっていた。彼女の歯形だらけ、涎れでぐじょぐじょになって、しかも三つの塊りになってしまったそれを、一応は平たくのばしては見たが、札とは思えない形状に絶望的に変容していた。それでも惜しくなり、銀行に持って行って恐る恐る、「……あのぅ……犬に噛み破られて……」と窓口のお姉さんに差し出した。お姉さんは、吹き出しそうになるのをこらえながら、「しばらくお待ち下さい」と言って奥へと行き、暫くすると、「殆んど完全に残っているのが確認出来ました♡」と笑顔で言いながら、綺麗なピン札の一万円札をくれた。そのお姉さんの顔が観音さまのように見えたのを私は、もう二十八年も経つのに、今も忘れずに、いる。

「高岳」既に注した通り、「たかだけ」と読み、中岳の、ほぼ東、直線で六百三十メートルほど、稜線沿いに計測すると九百三十メートルほどの距離に位置する阿蘇五岳の最高峰。中岳より八六・三メートル高い。

「外輪山」阿蘇山の外輪山は、南北約二十五キロメートル・東西約十八キロメートル・総面積三百八十平方キロメートルに及ぶ、世界最大級の広大なカルデラ地形を成している（以上、ここまでの阿蘇山のデータは殆んどウィキの「阿蘇山」に拠った）。

※　※　※

さて、私の注を読んでくれた読者の中には、この前の「半分あれば、日本銀行に持って行くと、一枚として認められるんじゃなかったかな」の注の、アリス噛み破りの私の体験談の附話を、せっかくの厳粛な「幻化」のコーダに相応しくない、不要な、不謹慎な、お茶らけ

た注だ、と憤慨した方もいるかも知れぬ。

しかし、私はそれでいいと思っている。そこで笑ってもらっていいと思っている。

なぜ？

だって五郎自身が笑い、そして言っているではないか。「笑いは笑いとして、独立に発生」するものだ、と。

問題は、もう一度、そこで、五郎が笑いながら、何と言ったかを思い出してもらわなければならない。笑うことが問題なのではない。笑いのために〈それ〉に気がつかないことが問題なのだ。

彼は丹尾に対して初めて声を立てて笑いながら、「なぜ丹尾がそんな賭けを提案したのか、彼にはよく判らなかった。わけを聞きたい気持も、別段なかった」と内心を述べるのだが、その後を見よ！

「ただなにものかが彼から離れ、丹尾に飛び移ったらしい。」

そうして五郎は、今までにない、剃刀のような冴え切った真面目さで、

「その瞬間、丹尾の中にある死への意志を、彼はありありと嗅ぎ取った。」

――しかもさらに、

〈こいつは賭け金を、飛び込むスプリングボードにするつもりだな〉

と見抜くのである（因みに、この後の「おめおめと一周して戻れば、丹尾の五万円は彼のものになる。セールスマンという職業で、五万円のただ取られは痛い筈であった」という箇所は、またしても梅崎得意の自己韜晦的な滑稽シーンである。続くところの、「自殺」に二万円ばかしの金を賭けるのに信用不信用の論議をする男二人と周囲の観光客のモンタージュ

の対位法的手法も同じような感じではあるが、映像的にはここは寧ろ、「笑いがまたこみ上げて来るのを、彼は感じた」と五郎が言っても、最早、笑っている読者は殆んどいないのではないかと私は思う)。

丹尾「そんなに信用がないのかなあ」

五郎「では君は、おれを信用しているのか?」

読者のあなたに私が問おう。

「では君は、私を信用しているのか?」

基! 違う!

「では君は、君を信用しているのか?」

或いは

「ではおれは、おれを信用しているのか?」

だ!

この直後に丹尾は「よろしい。いい方法がある」と言って、トランクを開き、鋏を取り出し、自分の内ポケットから一万円札二枚摘まみ出すと、五郎の出した二枚と重ねて縦に真っ二つに切断、切り離した半分を五郎に渡す。五郎は黙ってその動作を見続け、そうしてその半截した四枚の一万円札の半分の束を受取る。

「これでいいでしょう。これであんたの二万円も、ぼくの二万円も、使いものにならなくなった」

「いっしょにつなぎ合わせれば、四万円として使える。そうでしょ。飛び込めばパアとなる。逃げ出しても、ぼくはこれを使えない」

（ここに、先に注した滑稽の会話を挟んで、五郎の「君が逃げ出すと、両方損だ」とか、丹尾「何も持たないと、自殺者と間違えられる」／五郎「だって自殺するんだろう」／丹尾「自殺するとは言いませんよ」「火口を一巡りして、自分がどんな気持になるか、知りたいだけですよ。二万円でそれが判れば、安いもんだ」という何ともけったいな掛け合いの後、五郎は「そうか。そうか」と合点合点を二度も繰り返し、「ではここで待っているよ」と気軽に言い放ち、丹尾が火口を時計回りに進路を取って歩き出すのを、五郎は平然と「弁当の残りを食べながら、その後姿を見」つつ、五郎は『あいつ、弁当の残りを詰めて行ったが』（食べ残しをトランクに入れたまんま）、『トランクもろとも飛び込むつもりかな』なんどと思うという、これまた、落語のようなシークエンスが続くが、これも梅崎の確信犯である。

梅崎春生は真面目なことを真面目に描いても誰もそれが真面目だと気づかないことをよく知っている作家なのだ。

彼が滑稽な手法を用いる時は、一緒になって笑っているだけでは、春生の真意を見逃す虞れがあることを胆に銘じておくがよい。

梅崎春生はそれが表面的な受け狙いと誤解されることをも百も承知であった。そのつもりではないのに、である。さればこそそれがまた鏡返しとなって作家梅崎春生の精神を蝕む強烈なストレスの一因ともなったのではないかと私は密かに考えている。

――「丹尾の後姿がだんだん小さくなって行」く

――「動悸がし始め」る

――「掌に汗が滲んで来」る

――「五郎の視野の中で、もう丹尾の姿は豆粒ほどになっている」

――「突然それが立ちどまる」

――「火口をのぞいているらしい」

――「また歩き出す」

――「五郎は小高い場所からかけ降り」る

――『あいつが死ねるものか』
という気持ちと
――『死ぬかも知れない』
「という危懼が交錯」して「五郎をいらいらさせ」る

――五郎は火口の縁に設置された有料の望遠鏡に飛びつく。
――「十円玉を入れる。」
――「もう丹尾は」、中岳の火口を「半分近く」も「廻っている」

さても以下、私得意のシナリオ風に一部に翻案を加えて示したい。この原作のコーダは望遠鏡の画面効果が慄っとするほど素晴らしい。

＊　＊　＊

○画面真黒。（擬音の下の「○」「●」は望遠鏡の「開」「閉」を示す。ＳＥ（サウンド・エフェクト）は中岳の火口からの重低音の微かな地鳴りのみ）

「カシャッ！」○

○阿蘇中岳火口（以下、望遠鏡の見た目のレンズ内映像）
――無気味なほど鮮やかな火口壁。（ゆっくりとレンズ画面、仰いでゆく。二、三度、画面、左右にパン。一度、丹尾の姿を過ぎ、また戻って、丹尾を画面中央に捉える）
――丹尾、火口の縁ぎりぎりを歩いている。
――丹尾、立ち止って、火口を覗く。
――真下に噴火口。（画面、ティルト・ダウン）

――垂直に火口から切り立っている壁。（さらにゆっくりティルト・ダウン）

――火口。ぶくぶくと泡立っている熱海。

（オフで）五郎「あそこに飛び込めば、イチコロだな。」（レンズ画面、素早くティルト・アップし、左へパン）

――高岳。（左へパン）

――根子岳。（左へ急速にパン）

――外輪山。

――その果てに遠く重なり合っている山脈群と、その上の凄まじい青さで広がっている空。

（画面、部分ハレーションを起こす）

「カシャッ！」●

（画面は真黒。オフで、十円玉を入れる音）

「カシャッ！」○

――前の景色から右に急速にパンし、丹尾を一度過ぎ、右へゆっくり戻って、レンズ画面中央に再び、丹尾の姿を捉える。

――丹尾、トランクを下に置き、それに腰かけている。（トランクに陽光が反射してハレーションよろしく）

――ハンカチで汗を拭う丹尾。拭き終ると、立ち上る。

――トランクを提げて歩き出すが、足の動きがおぼつかない。（ハレーション終り）

――丹尾、石に躓（つまず）いて、ちょっとよろめく。

★この直後――五郎は、こう、感ずる――（以下、次の最初の『「カシャッ！」●』まではあなたの映像でよろしく）

★「丹尾を見ているのか、自分を見ているのか、自分でも判らないような状態になって、五郎は胸の中で叫んでいる。」

『しっかり歩け。元気出して歩け！』

そうして――実際に――五郎は叫ぶ！

「しっかり歩け。元気出して歩け！」

――丹尾の耳には届かないけれど――それでもなおも――五郎は叫ぶ！

「しっかり歩け。元気出して歩け！」

「カシャッ！」●

（画面は真黒。オフで、十円玉を入れる音）

「カシャッ！」○

――画面中央に、丹尾。

――また立ちどまり、汗を拭いて、深呼吸をし、そして、火口を覗き込む、丹尾。

――また歩き出す、丹尾。

――立ちどまる、丹尾。

――火口をのぞく、丹尾。覗く時間が、だんだん長くなって行く。

――そして再び、ふらふらと歩き出す丹尾。

「しっかり歩け。元気出して歩け！」

「カシャッ！」●

（画面は真黒。オフで、十円玉を入れる音）

「カシャッ！」○

――レンズ画面中央に、今まで同様、トランクを片手に火口の縁を歩いている丹尾と同じ服の男。

――しかしその男は――「丹尾」――ではない。

――それはその望遠鏡を覗いているはずの――「久住五郎」である……

（エンド・タイトル）

＊　＊　＊

ここまで奇特にもお付き合い戴けた読者は私が何を言いたいか、最早、お解かりであろう。

「ただなにものかが彼から離れ、丹尾に飛び移ったらしい」と五郎が言うのを待つ前に、既にして我々は、この一ヶ月前に妻子を交通事故で亡くし、生きる望みを失ってアルコール依存症に罹り、漠然と自死を考えている丹尾章次は、久住五郎のトリック・スター、分身であるどころか、

――丹尾と五郎が持つ両断された一万円札が総て一万円として機能せず、半分の価値しか持たないように

――坊津の密貿易のかつての密貿易で用いられたに違いない、割符の符牒（それは五郎や「桜島」の村上二曹や梅崎春生自身が拘わった暗号と符合する）のように

――合してこそ一つの意味ある存在になるもの

であったのである。

丹尾と五郎は、一体となって初めて、自分の惨めな「生」（私は「生」は本質的に如何なる場合も惨めであると考えている）とは何かを「感ずる」ことが出来る／出来た

である（完了形にしたのは私のシナリオの最後を受ける）。既に山本健吉氏の引用として注したが、底本別巻の弟梅崎栄幸氏の「兄、春生のこと」にも、梅崎春生は「丹尾鷹一」というペン・ネームを昭和一八（一九四三）年前後に用いていたという内容の記載を見出せた。更に調べると、国立国会図書館の書誌情報に、赤塚書房昭和一七（一九四二）年後期版の「新進小説選集」に前に注で出した小説「防波堤」（全集未掲載で私も未読）の内容記載があり、その作者は『丹尾鷹一』とある。

その感得――私の言っているのは「感ずる」ことである。糞のような、限界とマヤカシだらけのショボ臭い「人智」による「認識」などではない。寧ろ、私の謂いは超個人的であるところの「禪機」の結果の「悟達」（それもそれなりに胡散臭いものではあることは自明であるが）のようなものと考えて戴いても全く構わぬ――するところの「惨めな生」とは同時に「惨めな性」であり、「惨めな生」を「肉として感ずる」ことは、本当の意味で「惨めな死」を「肉として知る」ことと同義である（寧ろ、私は「惨めでない生」「惨めでない死」自体が「桜島」の村上二曹が言うように否定的あり、想定することが出来ないとも言っておく）。

私は既に「桜島」の最後の注で、「桜島」と本「幻化」の連関性についての独自の考察を既に述べたが、そこでも一部述べたように、明らかに、

「桜島」の〈枕崎の哀れな耳のない妓（おんな）〉――「幻化」の〈ダチュラの女〉

「桜島」の主たる共演者〈吉良「鬼」兵曹長〉――「幻化」の主たる共演者〈丹尾章次〉
「桜島」の〈美しき滅亡を語り、グラマンの機銃掃射で撃ち殺されてしまう兵〉――「幻化」の〈酒を呑んで泳いで溺死した、或いは、自死したのかも知れないと五郎が思う「福」兵長〉の対(つい)関係を無視することは到底出来ない。そうしてこれは私には直ちに、

梅崎春生＝｛枕崎の妓女,村上二曹,ダチュラの女,久住五郎｝
梅崎春生＝｛吉良兵曹長,村上二曹,丹尾章次,久住五郎｝
梅崎春生＝｛美しき滅亡を語る惨めに撃ち殺される兵,村上二曹,福兵長,久住五郎｝

という全集合以外の何ものでもない、と感ぜられてならないのである。

福兵長と久住五郎の重層性はあまりにもはっきりと記されているので敢えて注はしなかったが、五郎に福の死の記憶が蘇り、棺桶の中で沢山の香り高いダチュラの花に包まれた福の遺骸が思い出された後、〈ダチュラの女〉がダチュラの花を五郎に与え、五郎が密貿易屋敷に泊まると、五郎の寝た部屋に活けられたそのダチュラの花の香が充満するシーン、『淡い燈の光だけになった。ダチエラの匂いは、まだただよっている。彼は掛布団を顎まで引き上げる。女のことを思い出していた。熱い軀(からだ)や紅い唇、切ないあえぎなどを。』『五郎の体は宙に浮いて、ただよい始めた。ゆるやかに、ゆるやかに、波打際の方に。――五郎は福の体になっている。すっかり福になって、しずかに流れている。そう感じたのも束の間で、次の瞬間に五郎は眠りに入っていた』というすこぶる印象的なシーンを出せば、こと足りる。

彼らは皆、作者「梅崎春生」という「一箇の人間」の中では――少なくとも、この「幻化」のラストにあっては――完全に一体となってこそ初めて――この人間という「惨めな生き物」の、惨めな／しかし確かな「生」と惨めな／しかし確かな「死」とが朧げながらも見え始める――ものであったに相違ない

と信じられた、と私には思われるのである。

本作が書かれた昭和四〇（一九六五）年――本篇の熊本の旧女郎屋を訪ねる五郎のシークエンスにも何やらんプンプンするところの、学生運動の新左翼内の内ゲバの始まり――忌まわしい「大東亜戦争」を辛くも生き延びた村上二曹や久住五郎や梅崎春生は、あの若者たちのおぞましい殺し合いを、これ、どんな目で見ただろう？　なお、本作の冒頭注で紹介した、本作発表の六年後、四十四年も前の中学三年の私が見、最初の梅崎春生体験となった、TVドラマ化された「幻化」（NHK／昭和四六（一九七一）年八月七日／九十分ドラマ／脚本・早坂暁／演出・岡崎栄／撮影・野口篤太郎）の冒頭では（「NHKアーカイブス」公式サイトのここに三分半だけあるが、そこにそのシーンはある）、病院を脱走した直後の久住五郎（演／高橋幸治）を俯瞰ショットのスローモーションで撮っているが、画面上半分の歩道を左へと逃げ走る五郎とは反対に、画面下半分の車道レーンを、赤旗を先頭にしたデモ隊が右へ向かうさまが描かれている。ご覧あれ。因みに、翌一九七二年二月十九日から二月二十八日には、あの連合赤軍の「あさま山荘事件」が起きている。

「桜島」の最後の注の終りでも述べた通り、虚構としての糜爛した繁栄の文化の蔓延する戦後世界を、致命的な「死」のトラウマというスティグマを十字架として背負って「影」のように生きることを決意した孤独な魂は、当然、擦り切れざるを得ない（「虚構としての」「文化」というのは、どこぞの戦後の糞評論家の言葉を引いたのではない。梅崎春生の、昭和二〇（一九四五）年七月二十三日に桜島の海軍秘密基地で書いた日記に出てくる言葉である。詳しくは「桜島」の最後の私の注を参照のこと）。

――魂が擦り切れれば……自己同一性が失われる……

――致命的にアイデンティティを見失えば……今の社会では「精神疾患」のレッテルを貼られるしかない……

――それこそがこの「幻化」の主人公たる「久住五郎」に他ならぬ

のである。

――昭和二十年十二月に突如、小説中のキャラクターとして登場した小説「桜島」の「村上兵曹」

はそれより後、

――二十年の間、「〈戦後の文学〉」という〈小説〉の主要登場人物の一人である「〈小説家梅崎春生〉」となって示現し続けた

末、

――昭和四十年二月、小説「幻化」の、精神を病んだ主人公「久住五郎」という本地（ほんぢ）となって顕現した

のであった。

「幻化」とは、人間という惨めな生き物の「惨めな／しかし確かな生」を摑まんがために、梅崎春生が自身の総ての小説上のキャラクターをオール・スター・キャスティグして、過去の、作家「梅崎春生」を「死」滅させ、第二の「生」を探求すべく放った――第二の新生「梅崎春生」――まことの自分の霊肉の融合した肉感の実感を伴った「生」の再生のため――丹尾や五郎と同様――命を賭けて放った――新生の第一作であったのである。

「しっかり歩け。元気出して歩け！」

と、五郎が丹尾に叫ぶように――五郎が五郎に叫ぶように――春生自身が、春生自身に、叫んでいる……

――昭和四〇（一九六五）年七月十九日――

――『……小説「桜島」や「日の果て」で知られる作家の梅崎春生さんが、肝硬変のため、本夕刻、亡くなられました。五十歳でした。……』……」